

コロニア文学



7

JULHO - 1968

コロニア文学

第七号

- ◆表紙…沖中 正雄 ◆目次…高橋吉左エ門
◆扉…関口 俊吾 ◆カット…田中 重人

創作

- 女郎ジュリア (35枚) …… 鈴木 順雄
登(あしおと)音(16枚) …… いこま 正
有田家 万才 (37枚) …… 山口 道夫

詩

- 道路について ……横田 恭平
言葉を連ねるほど… 狩海 亘
世 代 …… 可児 三平
悪(あくりよう)霊… 藤田 勇
失われた時 …… 佐藤 博三
REV OIR …… 瀬古 義信
火 …… 小野 政子
種を蒔こう…… 良 一郎
影 法 師 …… 芳賀 裸人
花、奥津城…… 二葉 史郎

特集・私の終戦

勝ち組になりそこねた男の終戦記録 ……

松村俊明

随筆

文学と生活 …… 三瀬喜代志

ハンモック …… 長田三千枝

心の底に残る唄 …… さわ・たけお

春 浅し …… 鹿毛 至

俳句・川柳★短歌★

山の孤独 …… 陣内 しのぶ

幻想無限 …… 川原比露思

● 白き枯葉 …… 小笠原正好

薄ら 日 …… 南条由喜夫

● 夜の海 …… 貞野 雅子

十 (じゅうねん) 年 …… 瀬崎 涛声

昭和 元 禄 …… 川下 白舟

偽 飾 …… 坪井柳念坊

● ドラセーナ川柳二五人集

十年の空白 …… 鈴木 光威

● スバル・七曜全伯俳句大会

皇太子夫妻を迎えて …… 石川 芳園

評論

無限そして実存(詩) ……………横田 恭平
作品『井戸』に寄せて(文学) …… 宮尾 進
近代絵画に学ぶ(美術) ……………高岡 由也

クリチーバ文章会

邂逅 ……………まや・あきら
魚(うお) ……………いこま 正
痣(あざ) ……………真木 研一
道具 ……………田本 久子

《コロニア・新刊紹介》

歌集「墾の灯」……………東野 暁風
句集「雪達磨」……………山田 空外
歌集「白き州道」……………瀬崎 涛声

特集・『コロノ時代の思い出』

儀 務 農 年……………勝山 呉泉

私の好きな作中の人物

◆わが名はバザーロフ ……………安井 新
◆能勢広行という男 ……………春日 健次郎
◆『芦刈』のふたり……………妹尾 三郎

創作

残り香(27枚)	伊那 宏
禁煙(18枚)	蓼科冨智雄
梔子の花(35枚)	福村 琳
転(てんぼう)逢(30枚)	旧作・再録……古野 菊生

地方文学会の動静

◆グワイラ地方	八幡 与三
◆アリアンサ地方	堀江 一声
◆ドラセーナ吟社	坪井柳念坊
◆「詩」合評記	横田 生

お勧め ◆お願い

第一回・コロナ文学賞『移植』	川原 奈美
◆コロナ文学・作品募集	
◆パウリスタ文学賞・作品募集	
◆新入会員名簿	
◆後記	武 本 生

コロニア文学

第 7 号

1968年・7月



Grêmio Literário "Colônia"

SÃO PAULO

コロニア文学
第 7 号

1968年・7月

創作



女郎・ジュリア

(35枚)

鈴木順雄

もう三年ほど前になるが、仏教のある一派の僧が、サンパウロの花街で乱暴して、警察に留置されたことがあるのを、覚えている人もあるかと思う。

その後、彼は、宗門を追われたが、サンパウロで、仏教ともキリスト教ともつかぬ新興宗教を始めた。信者には娼婦が多く、なかなか繁昌したが、無許可で伝道したため、また警察につかまり、取調べの際、言動に不審があつたので、精神病医の鑑定にまわされ、麻痺性痴呆（俗に言う脳梅毒）の診断を受けて不起訴になった。

ここに紹介するのは、彼の自筆の自供書（原文も日本語）である。この病の患者特有の大きな言葉遣いや、つじつまの合合わせもあるが、事件の記述はおおむね正確で、おもしろい史料かとも思うので、こんなものが、文学になるかならぬかは知らぬが、とにかく投稿する。

第一章

ジュリアは女郎でございました。

姓は、なにがしとかいう、やたらに喉音と口蓋音の多いスラブ人の名前でございました。いつぞや、ホテルの番頭に身分証明書を求められた時、一目それを見て、彼が、

「なんて、へんてこな名前だろう。え」

と申した事でございます。室へ入って、着物を脱ぎながら、私がそれをただしますと、彼女は、もう一度、なんとかと申しました。なんでも、父母はポーランド人だそうで、家族は、今も、クリチーバの近くに住んでおります。

私が彼女と知り合うようになったいきさつは、こうでございました。

ある日、私は、法事に呼ばれて、お酒を少しいただきまして。酒を飲みすぎると、いささかしまりが無くなるのか、私の欠点でございます。私は、車を、ボン・レチーロのホテル街へ向けました。

そこは、何回かの都市計画からも取り残された古い家ばかりがあり、これまたついに取り残された、古い何やらの木が、二、三本樹っていて、なかなか風情のある所でございます。そこに、一軒の私娼窟がございまして、それが私の行きつけでございました。

所が、妙なことに、その日は、件の家が見当りません。二、三

度、往き来して、ようやく分ったことは、そこが、スタンド・バーらしきものになっていることでした。そう言えば、この数か月の間に、何回かやかましく取り締りのあったことは、私も聞いておりました。照明も、しかじかのルクスとか定っているのでございましょう。とつてつけたように心細い裸電球が光っており、白木のカウンターに、一目でそれと分る女が二人いて、棚には、本気か嘘か、酒びんが十数本並んでいました。

こんなありさまですから、私が、スタンドバーは世をしのぶ仮の姿で、誠真実は、もとの商売をやっているのだと思ったのも無理はございません。

私は、カウンターの女の一人に、声をかけました。

「赤ちゃん作るかい」

案の定、彼女は答えました。

「いいわ、四コントよ」

「どこだい」

「奥よ」

女は、カウンターを回って、私を押しこむように奥へつれて行きました。そこは、もと、女たちの室があった所ですが、その時はベニヤではった安ぶしんのしきりは全部取り払ってあって、テーブルが一つと、いすが少々置いてあるだけでした。

女は、つき当りの扉に耳を当てました。

「ちよつて待つてね。今、お客さんだから」

女は、私をいすにすわらせました。そうして、コップに何やら

赤いものをついで、たてつづけに二はい飲みました。

私は、いささかじれて来て、扉をたたきました。

何の返事もございません。ノブを回して、扉を開けますと、向う側はコンクリートのたたきになっていまして、洗濯場と便所があるだけでございました

私は、ふりかえって、女を見ました。

女は、カウンターのもう一人の女に、指で合図をしました。その女は、及び腰で、街路の誰かに合図を伝えました。警官が、すぐ、戸口から入ってきました。

「一体、何だって言うんだ」

警官は、いきなり、私をどなりつけました。

その調子で、私は、奴らがぐるだということが分かりました。

「この日本人がお金を払わないのよ」

「俺は何も飲んでないぞ」

「テーブルについてるじゃないの」

警官は、もう一度、大きな声を出しました。

「ここはボアツテだ。女の分も払わなくちゃならん」

「二十コントよ」

女は言いました。

この時、私は気がつききました。相手が、カーキ色の制服を着た交通局の方の警官であることにです。

「なるほど、君は、女郎屋の交通整理もするとうわけだね」

私は一つかましてやりました。相手は、いささか狼狽したようで

す。

「よし、それなら、市警を呼ぼう」

市警とは、ふつうの警官のことです。

こうなつてはいささか面倒です。私は、警官の股ぐらを蹴上げました。女のほつぺたを顔がひん曲るほどなぐりつけてやりました。そして、一もくさんにそこを飛び出しました。

私が、自動車を置いてきたことに気が付いたのは百メートルほど走ってからのことです。二時間後、おそるおそるもとの所へ行って見た時には、自動車はありませんでした。

翌朝の新聞には、私の写真が大きく出ました。寺の方からは、各方面に手を回して、私を不起訴にしてくれましたが、こうなつては私も、寺を出るほかは無くなりました。後で聞けば、私娼窟は、とうの昔に人に売られ、今は、表向きはボアツテ、内実は女郎の溜り場で、むく鳥と見れば、こういう悪どいこともやるのだそうでございます。

この時の女が、ほかならぬジュリアでございました。

第二章

男というものは、さなきだにつぶしのきかないものでございますが、それが坊主となると、なおさらでございます。私の場合は、寺の大学を出て、すぐブラジルへ渡ったことでもあり、こちらへ来ましても、独り身で五年を通し、まだ三十にもならない身の上

でありましたが、それでも、おいそれと転業のきくものではないと思います。そういうわけで、私はいささかの貯えと、退職金のあ
るのをよいことに、二、三か月の間はぶらぶらしていました。

それは、夏の終りのある日曜日で、かなしいほどに晴れた日
でした。午すぎから映画を見て、その帰りでしたが、又しても、足
が、ボン・レチーロの方へ向いてしまったのも浅ましいことでご
ざいます。もう、とうに日は落ちていましたが、まだ、日の名残
りが空にあって、日本の秋を思わせるような夕方でした。私が、例
のバーのある街路へ、角を曲りますと、急に、少しばかり物凄い
風が吹いてきて、木の葉をうちならしました。

毎年、この風が吹きますと、私は、いつも何やらの物語の頭の
文句を思い出すのでございます。「野分きだちて」というのがそれ
ですが、その言葉を口にしますと、この風にまつわるさまざまの
思い出が私をさいなんで、心が悩ましくなるのでした。しばらく
の間、私は、その風が耳たばを音を立てて吹きすぎて行くのを、
じっとやりすごしておりました。

その時でした。道の向う側に、一人の女郎が、一度は風に向っ
ておとがいを上げ、次には、風を背にして、黒い髪の乱れを気に
しながら、もすそを両手でおさえているのが見えました。

ジュリアでした。

その姿が、あまりに人々(ママ)しかかったので、私は、つい声を
かける気になったのです。

ジュリアは、一瞬びつくりしたようでしたが、やがて笑いなが

ら、しゃがれ声で、アメリカ人のするように……、

「ハイ」

とあいさつしました。

「どうしているの、お坊さん。」

「くびさ。お前のおかげだね」

彼女は、ちよつとまじめを顔になりました。

「それで、どうするつもり。」

「まず、赤ちゃんを作ろうよ」

彼女は笑い出しました。二人は、手をとって、ホテルへ入りました。

私は、ジュリアのおとくいとなったのでございます。

こうして、何回も逢っておりますうちに、いくら商売とはいえ、やはり、ある種の愛情といって悪ければ、一体感というようなものが湧いてくるのは妙でございます。おまけに私がこうなったのは、彼女のせいなのだという、「後ろ目いたい」気持がジュリアにはあったようでございます。そう考えるとところを見ると、もともと、彼女は、心のやさしさというものを持った女にちがございません。

こんなことがございました。

彼女の客に、なにがしという日本人の売卜者がおりました。ジュリアは、その男に、私の話をしたらしいのでございます。彼は、私の年をきき、名刺を見て、字劃を勘定した結果、生れはよく、若年の運勢はよろしいが、色情に溺れて、ついには罪を犯す

にいたると判断しました。もつとも、こんなことは、誰でも、新聞を読んだ人なら、すぐ、分ることでございますが。

彼女は、大いに心配して、何か、よい方法がないものかと、相談いたしました。その男は、生年月日と言うものは、動かすことのできないものだから、これは天命と知るべきであるが、人の名前は、人間の意志できまるものなのだから、これを適当にあんばいすれば、運命を変えることができるかと説きました。

そこで、ジュリアが私のためにしてくれたことは、世にもいとしいこととございました。ある夜、彼女は、私の名刺をハンドバッグから取り出すと、裏をかえました。そこには、何やら、劃の計算をした数字があつて、一代幸運改名証と書いた下に、私の新しい名前が書いてありました。

女は言いました。

「今日から変えなさいね。そうすると、何もかもよくなるので、これ、なんて読むの」

私は、ジュリアをだきしめながら、新しい名前の読み方を教えてやりました。このイカサマのために、彼女が払った金は十セントでございます。

「どうして泣いてるの」

女は、ふしぎそうに、少しはなれて、私の顔をのぞきこみました。

第三章

私どもが会ってから、始めてのパスコアが参りました。さすがのボン・レチーロの女どもも、この夜ばかりは、罪の深さが身にしみるとみえて、たたずむ数も、まばらでした。しかし、こんな夜こそ、一つもててやろうというふとどきな客が、黒白とりまぜて、やはり十数人ばかり、街角にたむろしておりました。

ジュリアは、いつもの所におりました。

ちようど、黒人の背の高い男と、仏頂面で商談をすすめていましたが、私をみとめると体一ぱいで笑いながら、犬ころのように、かけ出してきました。二人は、きまったことのように、いつものホテルへ歩き出しました。室へ入って、鍵をしめてしまうと、何かホツとして、二人の口がほぐれるのも、いつものことでございます。

「今日もこんなことしていいのかい。」

「どうして」

「大罪だよ。」

「ああ、そのこと。」

「お前、カトリコだろう。」

「洗礼は受けたわ。」

「ミサへ行かないのかい。」

「あんなの……、それ、何とか言った……。」

「スーペル・レティソンか。」

「それよ。」

彼女は明りを消しました。その夜はいつになく静かで、こわれたネオン管が、油のはじけるような音を立てているのが聞えるだけでした。

ジュリアが言いました。

「ねえ、地獄ってあると思う。」

返事の代りに私は申しました。

「かしこにては、そのうじ尽きず、火も消えぬなり。」

「よしてよ。」

彼女は、乱暴にしがみつきました。

その夜は、ジュリアは、したたかに、私をさいなみました。私どもが眠ったのは、ようやく二時頃でございます。

それから、どのくらい経ちましたろうか、私は、何か身に寒さを感じて、目を開きました。ジュリアは、寝床の上にすわって暗闇を見つめていました。

それが何であるか、私は知っておりました。誰でも、夜中に、ふと目をさました時は、ふだんは感じない深い不安を感じるものがございます。それは、底なしのくらやみ、ふちなしのひろごりの中に、独りおきざりにされたような気がして、そこでは、昼間、あれほど頼りにしていたもの、国も、父母も、友も、つれあいも、何一つとして頼りにならないということが分るのでございます。

私どもは、誰でも、子供の時、よくそういう目に合って泣くのでございます。でも、大人になると、これは一人でがまんしなく

てはなりません。しばらくじっとしていれば、やがて、それは消えてしまうものでございますから。

私は、立って電燈をつけました。

ジュリアは、しばらく、私の顔を見ていましたが、やがて、そつと手をさしのべました。

私は言いました。

「何を考えてたの。」

「そこにては、そのうじ尽きず、火も消えぬなり。」

「よしなよ。悪かったな。」

彼女は淋しくほほえみました。

「本当のことよ。うまいこと言うわ。私、夢を見ていたの。」

私は、ジュリアをだいて、やさしく *Clitoris* を愛撫してやりました。ちょうど、ポリネシアの土人が、むずかる我子をそうするという、その時のように。

第四章

あくる朝、ジュリアと私は、リベルダーデ広場にある小さな教会に参りました。この教会は、どんな縁起があるのか存じませんが、黒人のよくまいる寺で、いつも、ろうそくがかまの火のように燃えております。

ジュリアは、ひざまづいて、うやうやしく祈りをささげていましたが、やがて立って、ろうそくを二本買いました。

「さあ、これに火をつけて立てるのよ。」

「何のために。」

「煉獄の魂のために。私たちの魂のためにもなるわ。」

私はからかいました。

「こっちでろうそくを燃やした分だけ、神様が向うの火を節約するというわけだね。」

女は、存外まじめで、

「そうよ。」

と言いながら、いくらかのすきまを見つけ、ろうそくの束をさしこみました。

「あなたもそうなさい。」

女はそう申しましたが、私のろうそくを立てる所はどこにもありません。私は、火の中へ、そのろうそくを放りこんでやりました。たちまち、ろうはとけて、まっ黒なすすを上げながら燃え出しました。

「これなら、何もろうそくでなくても、薪でもよさそうなものだがね。神様は、ろうそくじゃなければ、受けつけないというわけか。」

ジュリアは、もう取り合わずに、じつと頭をたれていました。

私は、熱さと脂のにおいにかまんできず、表へ飛び出しました。しばらくしますと、ジュリアが、ほおをまっかにしながら、出てまいりました。私たちは、もとのホテルへ向けて歩き出しました。

「私、前に、赤ちゃんをおろしたのよ。」

ジュリアは言いました。

「赤ん坊は罪を犯さないけど、洗礼を受けていないから、天国へは行けないわ。」

「じゃあ、地獄へ行くわけ？」

「ええ、地獄のふちの、あまり熱くないぬるい所だって聞いたことがある。」

私は、吹き出しそうになりましたが、ようやくそれをこらえました。私は、ジュリアがいとおしくりました。そうして、この女の魂の救いのために、いくらかの手伝いをしてやろうと思うようにすらなったのでございます。

「君たちの魂はどうなるんだい。」

「分らないわ。でも、マリア・マグダレーナ様だって、イエス様にたすけてもらったわ。」

「マリア何だって。」

「マグダレーナ様。私たちの商売をしていなきったのよ。でも、イエス様が一ばん愛された方で、なくなられて、もう一度生き返られた時、一ばん先に姿をお見せになったのはマグダレーナ様だよ。」

この言葉が私の想像力に火をつけました。

私は、古本屋で、日語訳新約聖書をもとめて、マグダラのマリアという女人の記事を読みあさりしました。残念なことには、マグダラのマリアが、売春婦であったという直接の証拠は、ついどこにも見つかりませんでした。

彼女が、誰かからきいた話は、福音書の中にある多くの罪を赦してもらった女のご様子でしょう。しかし、この女が、マグダラのマリアであると推定されていることも事実らしいございました。私の考えでは、おそらく、福音書の記者が、同じ話を取りちがえて、いろいろに書いたのではないかと思われます。

しかし、文献学も、神学も、私には、いささかの興味もございません。私には、ジュリアの魂のなぐさめという、ごく実用的な目的があるばかりでした。そして、イエスの愛の全きことは、たしかに、マリア・マグダレーナの話を通して、もつともよく語られているのでした。

ある所では、彼女は、イエスの足を涙でぬらし、その黒髪でぬぐい、香油を塗って、

「この女は、多く愛したから、多く赦されているのである。」
と言われた罪ある女として記されています。

また、ある所では、イエスの足もとにあつて、夢見るようにイエスの話に聞き入っている女として記されています。

姉のマルタは接待のことに心が乱れて、

「主よ、妹が私だけに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか。私の手伝いをするように妹におっしゃって下さい。」

と言いました。

イエスは、

「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわず

らっている。しかし、無くてはならぬものは多くはない。いや、一
つだけである。」

と答えました。

また、ある所では、イエスの頭に王侯の香油ナルダを注ぎ、イ
エスをして、

「全世界のどこでも、福音の宣べ伝えられる所では、この女の
した事も記念として語られるであろう。」

と言わしめた美しい女として記されています。

そうして、ジュリアの申しました通り、正に、間違いなく、イ
エスは、よみがえって、まっ先にマグダラのマリアにその姿を見
せたのでした。

第五章

私は、これらのことどもを、ジュリアに話してやりました。聖
書なぞを読んだことのない彼女は、喜んでこの話に聞き入りまし
た。

中でも、彼女を喜ばせたのは、イエスがマリアの前に現れた時
のことでございます。

マリアは墓の前で泣いていました。

そうすると、イエスが現れて、

「女よ、なぜ泣いているのか、だれを捜しているのか。」

と言いました。マリアは、それが、園の番人だと思っていました。

イエスは呼びかけました。

「マリアよ」

マリアはふり返って、それが先生と分ると、

「ラボニ」

と言いました。

ジュリアは、ここの所を何回も何回もくり返させて、自分でも、

「マリアよ」

と呼び、

「ラボニ」

と答えて、夢を見るような顔をするのでございました。

その日から、ジュリアは、マリア・マグダレーナを拝みつけの聖人として、毎朝、毎晩熱心にお祈りをするようになりました。

私は、図書館の子供向けの本から、一枚の絵をやぶってきました。それは、ジュリアに与えました。それは、イエスの言葉に聞き入るマリアの絵でございました。

さらに、私は、ジュリアの幸せを、なおも完全にするための祈りの文をこしらえました。

それは、次のようなものでございます。

「あえかにゆかしき、サンタ・マリア・マグダレーナ。御身を、主はこよなくいつくしみたまひ、その罪を赦し、汝多く愛したれば多く赦さるべきなりとのたまひき。御身もまた、たぐいなく主を慕いまつりて、おみ足に香ぐわしき油を塗り、その黒髪にてそをぬぐえり。主は、そしるともがらをたしなめたまひ、この女の

したることは、福音の宣べ伝えらるる所、世界のはてまで語り伝えらるべしとのたまいたり。ああ、サンタ・マリア・マグダレーナ。御身、主のもとにありて、我が罪の赦しと、救いのために祈りたまえ」(仮名遣い原文のまま)

私は、この祈りの文を、ある日本語新聞のポルトゲスの係りに頼んで、せいぜい重々しいポルトゲスにこしらえ上げてもらいました。

その文は、やたらに v o s とかいう言葉の入った、申し分なくおごそかな文で、私もジュリアも、しごく満足しました。

そうして、最後に、画竜点睛の意味で、私は、マリア・マグダレーナ大聖人の称名を考えついたのでございます。

ご承知のように、私は坊主でございました。

そして、若く生いきな坊主として、かねがね、

「南無阿弥陀仏」

という称名を、なぜに、日に千べん、万べんとしなくてはならないかふしぎに思っていました。信仰さえあれば、一度で充分ではないかとも思ってみました。この疑いを、私は、ある時、熱心な念仏の行者として知られていた、高名な法学者にきいたことがございます。

その人は、ちよつと考えて、こう言いました。

「君の言うことは、一応もつともだけけれど、まだ 念仏を自分のこととしては考えていないのだ。私の場合は、阿弥陀さまの救いにあずかろうとして、一心にその名を称える。たしかに救いにあ

ずかったという感じを持てば、ますます有り難く、その名を称えずにはいられない。それだけの話だ」

私は、大いに感心しました。けれども、またしばらくするうちに、これと同じような体験は、

「南無妙法蓮華経」

と唱題する人にもあることに気がつきました。

こう考えますと、法悦境に入りますには、「阿弥陀仏」でも、「妙法蓮華経」でも、どちらでもよろしいので、実は、「南無」という字と、くりかえしこそが、肝心なのだという、ごく論理的な結論に達したのでございます。

まことにけしからん神学でございますが、実用的にはまちがっておりますまい。

私がジュリアに与えた称名は、

「南無サンタ・マリア・マグダレーナ」

と言うものでございました。

ジュリアはたずねました。

「ナムってなあに」

「身も心もささげるということだよ」

第六章

翌朝、ジュリアが、御絵に向って、まず祈りの言葉をとなえているのを、私は、ベッドで、うつらうつらしながら、聞いており

ました。申しおくれましたが、私は、このころはジュリアがおりますホテルの室に、泊りこむようになっていたのでございます。

それが終わりますと、彼女は、

「ナム・サンタ・マリア・マグダレーナ」

と称え始めました。この称名が、一千回というのが、私の指示でございます。称名は、二分間ばかり、おずおずと続きました。それはつぶやくような声でございました。

ところが、その頃から、ジュリアの声に、奇妙な変化が起りました。称名の声はだんだんと高くなり、速くなり、切迫してきました。

そのうちに、言葉がとだえたかと思うと、ドタリと音がして、そのあとは、すすり泣きと、うわごとが聞えてきました。

私はびっくりして飛び起きました。彼女は床にひれふして、何かわけのわからないことを言っています。私は、急いで水を飲ませてやりました。

彼女は、もう一度起き上ると、熱心に称名を始めました。

ジュリアは、こうして、何回か打ち倒れたのち、コンタツをくりおりました。

「どうしたんだい。」

どんなことかは、大がい知っておりましたが、私はたずねました。

ジュリアは答えました。

「御絵を見ながらお祈りしていたら、だんだんまわりが暗くなっ

てきて、マリアとイエス様のほか

は、何もいなくなってしまうたの。そのうちに、

私がマリアに、マリアが私になつてしまったわ。

イエス様は、やさしい目で私を見て、マリアよっ

ておっしゃったの。私ラボニつて言ったのよ。」

こうして、私の実用的な神学は、みごとに効果をあげたのでございませぬ。

この頃から、ジュリアは、めだつて美しくなってきました。

もともと、彼女は、マリアと言うより、マルタと言いたい、よくはった腰と、豊かな胸を持った、丸顔の、やさしい顔付きの女でしたが、こういう稼業をしているうちに、目だけは、妙にすわつて、老婆のそれのようになっていました。およそ、女郎の体の中で、一ばん早くひからびるのは目でございますが、今や、彼女の目の中には、もう一度うるおいがもどり、やさしいようすになつてまいりました。

客はふえ、みいりは、急によくなってきました。彼女は、その一人々々を愛し、男たちの話をやさしきいてやり、金のことも、時間のこと何も言いませんでした。それでも彼らは、相場の何倍かの金を置き、けつこう早やばやと帰つてしまふのでした。

彼女の室は、贈物であふれてきました。また、その一つ一つの贈主の名を、彼女はおぼえているのでした。そのことで、いつか、私がやきもちを焼いたことがあります。

彼女は言いました。

「でも、イエス様は、多く愛したから、多く赦されたとおっしゃったじゃないの。」

これは、邪悪な神学だと思いましたが、私は、あえて、何とも申しませんでした。彼女は、私のことも、申し分なく愛してくれましたのですから。

ジュリアの繁昌は、ボン・レチーロの女郎どもに伝わりました。いつのまにか、子どもの室には、いつも十数人の女郎がまいて、マグダレーナ大聖人様の御名を声高に称えるようになりました。

ホテルの主人には、月々、百コントの金をやって、黙らせました。もう、この頃には、マグダレーナ様に上るおさい銭で、私のふところも、相当に温くなっていたのでございます。

第七章

いよいよ、仏教暦の、サンタ・マリア・マグダレーナ様の大祝日の日が参りました。

この日、子どもホテルには、朝から、女郎どものおまいりがひきもきりませんでした。

宵ともなつて、いつも、ジュリアが祈りと称名をいたしますころになりますと、およそ、五百名ほどのボン・レチーロの子どもが子ども室に集りました。もちろん、全部が入りきれぬわけはございません。廊下にも、戸外にも、女どもは、被女らのせいっぱいの清潔な服を着て、手に手に花を持って、ひしめきあいまし

た。

ジュリアは、「主の祈り」と、「めでたし」を一度ずつとなえました。何と申しましても、彼女はやはり、キリスト教徒だったのでございます。

つぎに、「マリア・マグダレーナへの祈り」を称え了りますと、ジュリアはコンタツをとり出しました。女どもも、みなコンタツを手にしました。

やがて、

「ナム・サンタ・マリア・マグダレーナ」の御名が、ジュリアの口から、静かに称えられ、しだいしだいに、集った女どもに伝わり五百人の大称名となりました。

全く、それは、異さまとも、有り難いともいえる景色でございました。

称名は、時を経るに従って、「南無」のナと、「マグダレーナの」のナが重って、人の耳には、

「ナム・サンタ・マリア・マグダレー、ナム・サンタ・マリア・マグダレー」と聞えるのでございます。この、念仏にも唱題にも似た、単調な、音楽的な、異教的な響きは、はてしもなく続いて、そのうち、法悦に入った女どもが、あるいは叫び、あるいは告白し、あるいは地面を転げ回るといふ大へんな騒ぎになりました。黒山のような人々がホテルを取りかこみ、交通は中断されました。

サイレンの音が聞えてきました、警察の車がやってきました。警官は、女どもを押しわけ、ふみつけ、私の所にやってきました。

「何の騒ぎだ。これは」

「集会です。宗教的集会です。」

「無届けの集会は禁止されている。」

「私が呼んだんではないですよ。」

「とにかく、解散するように言いたまえ。」

「私が呼んだんじゃないんです。言っても帰りますまい。」

警官は、私の手をつかみました。

ジュリアは、まっかになつて立ち上ろうとしましたが、とたんに胸をおさえて床にくずおれてしまいました。みる間に、その顔は土色になりました。私は、彼女をだき上げてベッドに横たえましました。

それが何であるか私にはすぐ分かりました。女たちにも、すぐ分つたらしうございます。女郎にはよくあることでした。梅毒性の血栓で心臓をやられたです。怒った拍子に、発作がきたにちがいありません。

私は、ひざまずいて、マグダレーナ様の御名を称え始めました。女どもも、私の称名に和し始めました。

こうして、ジュリアは、サンタ・マリア・マグダレーナ様の大称名の中を、ボン・レチーロの安ホテルの窓が、ようやくネオンで輝くところに、くたばったのです。

ジュリアはくたばりました。

その魂は、天国にもぐりこみましたか、はたまた、地獄に蹴りこまれましたか、そもそも、魂なんぞと言うものの、ありますも

のかないものか、全て、私の知ったことではございません。

なぜとならば、天国と云うもの、もしありとして、親鸞上人もおっしゃる通り、余の行を積んでかそこへ行ける身が、マリア・マグダレーナ大聖人様の尊き御名を称えて、地獄へ墜ちたとても申しますなら、それは、何とそしられても、言い分けることもできません。

しかし、考えてもごらんをさい。つまりは相手は女郎ではございませんか。とてものごことに、地獄はついのすみかでございますよ。父なる愛の神のひとり子の十字架の御あがないがまことならば、マグダレーナ大聖人様のあずかったお救いも、いささかの疑いもございませんまい。大聖人様のお救いまことならば、私の教えが、いかにございましょうともジュリアの往生は、決定(けつじょう)いたしましたものと思つてようございましょう。

もし、右の事どもが、なべて、空しいしれごとにありましたも、ジュリアの美しい死顔に、幸わせな笑みの浮んでおりましたことは、ボン・レチーロの女郎どもの、こぞつて申し伝えたことでございます。

(完)

お願い

地方に在住される本会々員の方々に、『地方での文学活動』に関する通信をお願いします。歌会・句会のようす。文学関係者の動静などお知らせください。

◆枚数 原稿紙(20×20) 一〜三枚

◆宛名 「コロニア文学会」編集部

私の好きな作中人物

『わが名はバザーロフ』

安井 新

その頃ぼくは名前を訊ねられるとバザーロフと答えるのを常とした。まさか勤め先でそうすることはなかったが、例えば、バルのバルコンなどで隣り合ったりする相手にはそんなふうに乗った。バザーロフはいうまでもなくツルゲーネフの「父と子」にでてくるニヒリストの名である。バザーロフは凡るものに対して投げやりで無感動だが、それは価値観が崩壊しているためである。それがひとりよがりの観念肥大症に過なかつたことは、やがてバザーロフも恋愛感情に囚われ、失恋の重みによるめくここで露呈してしまいが、しかし素早く立ち直って無感動に終始しようとするあたりは、さわやかである。決闘の場面の冷静さなども見事で、

当時のぼくにはいたく気に入った。バザーロフが片端から嘲笑で片付けてしまう、この世の富貴、地位、名声などを、ぼくは初めから持っていない。持っていないばかりか、持つことの可能性にさえ、ぼくはたいへん縁遠い。魯鈍で虚弱で醜いぼくにバザーロフの否定の思想はこの上ない慰めと思われたのである。バザーロフ流の価値否定で行けば、当時ぼくの住んでいた半地下室もマルチネリ・ビルの快適なアパルタメントも似たようなもののはずなので向上のための律気な努力も不必要となり、つまり一切の克苦、勉強はドツチデモイイことになるはずだからこんな気楽さはないのである。

しかしツルゲーネフの偉かった所はこのニヒリストに恋愛をさせ失恋をさせた点で、これによってバザーロフは唯の観念の化物でもデクノボオでもなくなる。ここらで魯鈍で虚弱で醜いぼくにも、やがて好もしいひとが出現し、分厚いラブ・レターを差し出す仕儀となる。その好もしいひとは「父と子」のヒロインアンナ・セルゲエフナにおさおさ退けをとらない麗人であった。とぼくは信じるが、どうした間違いでか、バザーロフの場合とは逆にぼくのラブ・レターは効を奏してしまふ。こうなれば家もすこしは増しなのに借り替えねばならず、食い扶持も二人前稼がねばならず、ぼくのニヒリズムは他愛なく終焉して、もう、バザーロフと名乗ったりすることもなくなる。要するに、ぼくはほとんどバザーロフになりかけて、そうしてなりそこねたのである。



いこま 正

創 作

足 あしおと 音

(16枚)

今もなお、私の脳裏に、庭園のように、鮮かなイメージを持つ、その町の名は、……………P市……。と言います。

…P市…。その町は、幼年期から、少年期にかけて、伸び伸びと、私を育て呉れた可！。私の心の故郷として、生涯私の胸に、温かい思いを、その都度、湧き立たせて呉れる町！。眼をつむると、あの公園や此の町角、家屋のあり方や、並木のたたずまいなどその頃と、寸分違わぬ色彩と、形態とをもって、明かに蘇って来るのです。今も、私が踏んで歩いた、あの舗石の音が、甘く哀しい旋律を、私の記憶の中に、たたんで居るのです。

私はその町で、小学から中学に進み、中学の頃は学校をさばつて、マチネにしけ込んだり、二、三人集れば、女学生に、口笛を

吹くような、不良を気取ったり、したものでした。

私の家は、もと飛行場のあった、町の高台にあって、飛行場のまえは、あの珈琲大不況の時代に、塹壕のような、長い溝を掘って、時の政府が、山なす過剰珈琲を焼き棄てた、珈琲焼却場でもあったのです。私は毎日、学校へ通うのにも、その高台から、七百米程を、一気に駆けおりるのでした。何時からか、そんな習慣になって居て、日課の中に繰り込まれて居たようでした。

聖州奥地のその町は、季節には鈍感を気候でしたけれど、春から秋にかけて、街路は、様々な街路樹の花に飾られて、大陸的な、情緒豊かな町でした。

未だ、春早い朝でした。学友と行き合った私は、一人で駆けおりのわけにも行かず、話しながらその坂を下りました。その時、坂の中程の、古風を建物の露台で、日頃見馴れぬ、一家族を見出しました。その人達は、未だ住み馴れぬ様子で、どこかその家のもつ雰囲気とは、馴染まないものを、持って居ました。そう私に見えたのは、幼い頃から住み馴れて、毎日駆け下だり、駆け上って居る坂の、町並の家々は、何処にどんな人種が住んで居るか、知りつくして居たからです。私は友達に遅れて、その家の方へ眼を移しました。若い母親と、娘らしいのが、露台に出て居て、十二、四才のその少女は、艶の良い、真黒な猫を抱いて居ました。栗色の髪が波うって、瞳は深く大きくて、その奥の色は、濃い藍色に屋耀いて居ました。痩せた、細いうなじを、少しかしげて、私達の方を、真直に見て、微笑して居ました。少し厚目の唇を、重た

く閉じた、いったいに、哀れな面影を、どことなく漂わせて居ました。

母親の方は又、三十をいくつも越さぬような、気高い程に頬の冴えた、柔和な瞳の持ち主で、深く衿を抉り抜いた、青味勝の服の良く似合う、胸には三重の、真珠の首飾りを、しつとりと肌に合せて、静かな微笑を湛えて、私達を見送って居ました。多くの北伯人を見馴れて居る眼に、こんな美しい母娘が

此の世に居る……と言うことが、不思議でさえありました。

私は、温いものを、胸一杯吸い取ったようで、歩調が、ひとりではぶむのでした。私の胸に、猫を抱いて、私をじつと見送って居た、少女の面影が、深く残りしました。

私は其の伊太利亜系の学友に訊ねました。

「住む人でも替ったのかい？」

彼は分別ぶった口調で、答えました。

「そうらしい。なんでも、ユーゴースラビア移民で、父親は何かの技師らしいが……末だ言葉が不充分で、困って居るらしいんだ」困って居る……と、言うひとことに、私も分別ぶって、こだわったものでした。ユーゴースラビア……。

それは、私の胸に画いた地図の上には、仲々出て来ない、非常に高雅な国柄のような、イメージが、心を占めて居ました。

それからの毎日は、その少女を見ることが、なんとなく嬉しく、心頼みにされるようになりました。良く気を付けて見ますと、きまって、私の通学時間に、母親らしいその人と、時には少女一人

で、そしてこれも又、きまって、あの艶の良い黒猫を抱いて居るのでした。置物のような、その猫の眼だけが、少女の瞳のように潤っていました。

中原淳一が画く絵のように、細い首を、重たげにかしげた様子で、腺病質な娘のように、大きな深い眼差しが、私の方を、じつと眺めて居るのです。私は今も、その瞳の色や、長い睫の一本一本を、数えて見せる事の、出来そうな程、鮮明を記憶を持って居ます。

十五才の私は、日に一度少女の瞳と、見交す事によって、その日一日、生き甲斐を見出したかのようにでした。一月もすると、私と少女は、もうすっかり顔見知りになり、なったかのようにでした。二人の視線の合った時、私はかすかに、笑って見せますと、少女はすぐに応じて、猫への頬ずりに事寄せ、まぎらわすように、私の微笑に答えて呉れるのでした。

或る朝、私は少しはや目に家を出ました。その大通りの並木は、市街の年齢を語るにふさわしい、ジャカラランダの巨木が占めて居ました。三米程の高さで剪定され、それから上は、握り太の枝を、箒のように、垂直に空へ伸ばして、夥しい紫の花を、むらがるように付けて居ました。少女の住居の庭には、太い偽アカシヤの木が、一本ありました。その他には、年中宝冠の花が、咲いて居ました。偽アカシヤも、初夏の頃は、重々しい花房を垂れて、美しい、金色の花を開くのです。その頃はまだ、花はありませんでした。

私はその家の前に、さしかかった時、表のガラス戸の開く音がして、急ぎ足に少女が出て出ました。恰も、私の何時もの時間と、それだけの喰い違いのあったかのような、少女の慌て方でした。その時、片腕の猫が、するりと、少女の腕をすべり抜けて、ひと跳びに、私の胸の高さの、コンクリート塀に、馳け登って来ました。少女は此の時、高い声を発しました。それは、一オクターブ程、調子の狂った、

：而し其れは、言葉ではなかったようでした……。ユーゴースラビア、と、私達の耳に、不可解な国の言葉として、奇妙に響いただけでした。

私は鞆を投げ、両手を拵げて、馳け登って来た猫を、しっかりと、抱きかかえました。私は、確にそう思ったのでした、が、猫は、私の肩越しに、一躍ジャカラランダに跳び移り、猿のように、天辺に馳け登りました。追い馳けて来た少女は、薄い胸で、塀に取り付き、じつと、猫の居る枝を、見上げました。私はおかしさに、声を出して笑いながら、少女の方を見遣りました。少女の眼は、一杯に見開かれて、吸われるような視線を、樹上の猫に、送って居るのでした。それはそれは真剣を眼差しで、：魂を奪われる：、と言う形容の、そのまま当て嵌る、心を宙にした、眺め方でした。私は、取り付く島もなく、はしたなくも、大きな笑い声などを、洩したことを、後悔しました。

ジャカラランダの並木の花が、百日紅の並木の花に、咲き替る頃、私は一か日程の旅をしました。旅から帰った私は、胸躍らせなが

ら、少女の家の前を通りました。その日、家の扉は固く閉り、庭はやや、荒れて見えました。私は、不審を抱きながら、次の日もそこを通りました。やはり昨日のままの、固い扉と、やや荒れた庭でした。

三日目に、私は例の、伊太利亜系の学友を待ちました。だが私は、その少女の事を、明らさまに訊ねるのが、ひどく恥かしかったので、遠回しにしか、訊ねる事が出来ませんでした。

「おや！？　・此の家又閉つとるようだな！」

と、そんな、とぼけた顔をしながら、その実、胸のうちには、焼けるような、苛立しさを堪えて、気の永い彼が、なんと答えるか、待ったのでした。

「僕の家、一軒置いて隣が此の家の家主でね」

そう言い出してから、小首をかしげ、不審そうな、様子を見せました。

「気の毒な事にね、奥さんが事故死したんだ：二十日程前の事だが：」

「：！？　：！」

不意に痛棒を喰ったような、驚きでした。その時の私は、足腰が顫えて居たのを、覚えて居ます。

「不思議なのは、運転手が警笛を鳴し、附近の人達も、それを聞いたと言うのだが：。奥さんは平気で、背を向けて、車の方へ身を寄せて行った、と言うんだ、何か、こう、警笛が耳に、這入らなかった、様子だつてさ：。それで、自殺だ、と言う説もあるん

だ……」

「……自殺？ ……。まさか君、それで、その不埒な運転手はどうなった……」

私は憎悪と昂奮で、どもりながらきき返しました。而し、学友は、あっさりと言いました。

「どうなるものか……止むを得ません。此方が悪いのです……と、主人が言うのだもの、おかまいなしさ」

「……………」

「移住したばかりで、近所の交際もなし、同情がなかったな……」私の耳に、終りの方の言葉は届いて居ませんでした。胸に嵐の吹き抜ける、空洞が出来たようでした。……あんなに若くて、きれいな夫人が……。そんな事があり得るだろうか？ それに、見た事もない「夫」と言う人の、意気地のない言い方が腹立たしくさえありました。私はもう、とぼけて居るわけには、行きませんでした。怒りとも、哀惜ともつかないものが、胸の一角につかえて居て、私は涙を一杯溜めて、学友を見返りました。

「残った家族は、早々にどこかへ引き揚げたのだが、……国へ帰ったかな……」

彼にも、それから先は、不明なものでした。……国へ帰った……私は翼を失った鳥のように、深い溜息をつきました。

その日から長い間、あの真珠色の肌に、吸い込まれるように、しつとりと巻いた、三重の首飾りの、淡い光りが、大きく深かい少女の瞳と、二重写しのように、私の記憶の中に、哀愁を湛えて、

居据って居ました。

一年経ちました。

あの長い坂道は、私にはもう、意味のない遠さでしかありませんでした。

再び相見ることのない少女は、渦のように、胸底に蟠り、私は懊悩の果て、中学も放棄しようかと、思った程でした。それでも、三か月、五か月と経つうち、時おり、嵐のように胸底を襲う程度になり、いつしか、遠い日の夢のように、薄れて居ました。

或る日、ペローバの香の新しい、板家の多く建ち並んだ、市街はずれを歩いて居ました。それは目的のない、散歩と言うには、ふさわしくない、私のいつもの歩み方でした。季節は秋の初めで、街路樹の鳳凰花も衰えて、火焰樹の花が、真赤に咲きのぼって居ました。その色は、季節の涼しさを、感じさせて呉れました。

私はその町の、まだ舗装されて居ない、砂地の町角の、バンガローの庭先に、彼の少女を、見出したのでした。新しい平家ながら、私のイメージの、高雅な位置を占めて居る、：ユーゴースラビア：の少女の住む家にしては、ひどく雰囲気のない、まずしくさえ感じられる、住居でした。

私は、気付かずに行き過ぎたのですけれど、ちらとふれた眼の隅に、あの大きな瞳を、更に大きく見開いた瞳の動きに気付き、何気なくふり返りました。

「…おゝ！…」

私は、驚愕に近い声を、挙げました。やはり、例の少女でした。黒い猫は抱いて居ませんでした。紅いバラの花を、一本手折って持って居ました。少女は、こくりと首をかしげて笑いました。一年前の、優雅な気品は、地に落ちたような、佗びしさに替って居ました。少女は窶れて、一そう悲し気な笑顔を見せました。私は、つかつかと庭に這入りました。それは、自分ながら、以外な程、柵のとれた、私達の、歩み寄りでした。一年の歳月は、私を大人に近かずけて居ました。此の国の風習に慣れて、年頃になれば、女友達を持つ事に、恥らいを感じて、居ませんでした。

「…やっぱり、貴女でしたね！…」

私は、少女の瞳を、近々と眺めながら、手を差し出しました。重い唇が開かれて、白い歯の奥から、言葉が出よう、と、した時でした。

「お！ おい、その娘に悪戯してはいかん！」

咎める声といっしょに、赤い無精髯を、ざらざらに伸した、背の高い男が出て来ました。殆ど叱責するような、鋭い声でした。私は、その言葉のもつ意味が、不本意でなりませんでした。無精に腹立たしかったのは、多分に少年の潔癖からでしょうか？。

「僕、…そんな不良じゃありません！」

ーかっーとした、腹立ちのまま、きっぱり言い切ると、私は、少女の手を振り放して、町の通りへ、馳けるように、出ました。少女の眼に、その時、当惑の波が、大きく拡がるようでした。私の手に、今少女から渡された、紅い薔薇がありました。私は、乱暴

にそれを振りながら、不遜に肩を聳やかして歩きました。一年抱き続けて来た夢が、あの一言で、くしゃくやに踏みにじられたような腹立たしさでした。

私が町角までさしかかった時、後ろから、歩巾の広い足音がして、誰れか追い鎚るように縦いて来ました。

「君…、失礼しましたよ君！…」

追いついた男は、私の肩を叩きました。私はその時、腹立ちでもう、眼に涙が溜って居ましたので、男の方を、振り返りませんでした。男の強い発音が、急にしんみりと、沈みました。

「君！…立腹したかも知れませんが…あの娘、実は…オシなんですよ…」

「！？…」

私は思わず、男の顔を見上げて居ました。男は立ち止り、それから一寸、述懐するように、声を落しました。その声はむしろ悲しい響きすらありました。

「…あの娘の母親もオシでしたが…、私ね…」

男は、悲しい笑顔を作り、あと言葉が続かないように、言い淀みました。私は、その後の言葉を待ちましたが、男は、急にきびしい表情を作ると、何も言わずに、大股に町角を曲って、行きました。

呆然自失しそうな、私の驚きもよそに、すたすたと……。

(完)

創作

有田家万才 (37枚)

山口道夫

A

俺には何か、予感と云うか、そんなものがあるらしい。と云うのは前夜に見た夢が翌日事実となって現われるからである。勿論凡ての夢がそうであるわけではないが醒めても鮮に心に残る夢は、実現する可能性がある。と云うわけだ。だから昨夜天から黄金の紙切れが舞い落ちた夢を見たおかげで今日は何となく朝から浮わっていた気持だった。果せる哉、夕方になって隣に住んでいるNさんが手紙を持ってやって来た時には、ドキンと一瞬胸が鳴った。(此処へ引越して来てからNさんの郵便を利用して)差出人は佐藤妙子。知らない名前だ。封を切り中味を出したら、

「お前、手が震えているぞ。どうしたのだ。」

とNさんが俺の肩をドンと叩いたので危く手紙を落とす所だったが手紙は落ちずに同封されていた写真が一枚ビラリと落ちた。慌てて拾おうと身をかがめたら心臓がドキドキして、血がスーと頭に上るのが判った。矢張りそうだ。待望の花嫁候補者の写真である。額が広く眼が細く小鼻が張っている。美人ではないが醜女でもない。細かいきれいな字で、会社勤めをしているが海外の広い

天地で生活したい事、県庁の外事課であなたの申し込み書を見て文通交際をしてみたい等々が書いてある。年令二十八才と云うのは一寸気に入らないが俺も三十三才、若いと云う方でもない。文通交際は今度で三人目である。二十九才の時に県庁に結婚申し込み書を出し、直ぐ文通が始まったのが最初の女で、これは顔も良くないし身体も小さいので俺の方から断った。次の女は年も若いし、顔も好く身長もあり、大いに乗気になって文通を始めたが、三回目から返事が来なくなり、何度か続け様に出した手紙も梨の礫、指折り数え、待つて待つて、やっと三ヶ月目に結婚を前提とした文通には応じ兼ねるとの母親からの返信で、アツサリ蹴られた。其の後県庁にも何度か催促の手紙を出したが、現在適当な女性が居ないから当分は見込みなし。そちらで探したらどうか、と云う様な返事でガツカリした。Nさんに頼んで、二世の娘を二、三当つてみたが、日本語がさっぱり話せないのが多く、これは、と思う様な娘は、むこうで相手にして呉れない。親にしてみれば、財産もなく、将来性も判らない馬の骨などに大切な娘はやれぬと云う所だろう。もさもさしている中に三十三才にもなつて仕舞い、此の頃は半ば自棄糞になって、二、三週間も髭も剃らずに過す様な始末だったから、全くこの手紙は天からの授かりものみたいな気がした。Nさんが帰つて、夕飯の支度を始めたが浮々として、流行歌が独りでに出る。石油を薪にブツかけたので景気よくボーボー燃える。早速今晚は返事を書かなければならない。さアて何と書いたら良いものだろうか。戸口に出て写真を眺め、もう一度

手紙を読み返して見る。

履歴書があつて、生年月日、勤務所、長女、体重、家族の構成等が書いてある。俺もこの様な事を書けば良いだろう。それから……と、何を書いたら良いか。昔から勉強嫌いで、学校には弁当を食べるの丈が楽しみで行っていた様な俺だから、物を読んだり書いたりには本当に困る。渡伯する時に友人が餞別に呉れた現代手紙文集があるのを思い出した。戸口はまだ手紙の字が見える位明るいのが、室内はもう闇い。カンテラを取り、フオゴンで火を点け様としたら、何と、鍋から黄色い煙が出ている。チェツ、今夜は焦げ飯だ！！

B

お便り誠に嬉しく拝見いたしました。遠いブラジルで、お一人で奮闘の様子、さぞかし大変な事と、お察しいたします。御存知の様に、日本は人口ばかり多く土地が狭くて、若者達の伸びる場所がありません。私は都会のゴミゴミとした、希望の少ない又嫉妬と阿諛と虚栄に満ちたB・G生活に疲れ果てて、何かで読んだ広い、自由に自分の力を発揮する事が出来るブラジルの天地に、憧れを持つ様になりました。それに先月、県庁主催のブラジル事情講演会に出席いたしました。益々油を注がれた様になり、どうしてもブラジルに行き度くなりました。それで前便で申し上げました様に、あなたに文通をお願いする様になったのでございます。

これから私は知り度いことを沢山書きますから、お忙しいでしょうけれども、どうかお返事下さいます様お願いいたします。

実は突然あの様な手紙を差し上げまして、お返事が載けるかどうか、心配いたして居りましたのです

が、快くご承諾を得まして大変喜んで居ります。何だか年令も、身体条件も合う様な気がして、暖い気持ちになって居ります。若し、ご縁がありましたなら、あなたのお側にいけるのではないかと思います。どうぞ、そちらの事情を詳しくお知らせ下さいませ。では御元気でお過ごし下さいます様。

妙子

C

「おい、お安くないぞ。」

Nさんがやって来た。丁度夕食をしたばかりで、散らかったメーザの上に、青色の簡易封筒が置かれた。見た丈で胸がドキンとする。妙子からだとすぐ判ったからだ。最初の返事原稿は、無理矢理にNさんに頼んでしまった。Nさんは、「とんだシラノだなア」と苦笑したが、引受けて呉れた。シラノとは何だろうと思つて聞いてみたら、ベルジェラックだと云う。益々判らなかつたが、そのままにしておいた。原稿を頼んだり、手紙を配達して貰ったり世話ばかりかけて済まないと思う。手紙を読んでいく中に、胸がキューとして来た。こりや本物だぞ!!!、判らぬ字がある。

「これ、何て読むんです?」

「あ、これは、シットと、アユと、キョエイに　みちたB・G生活、つまり、B・Gと云うのは、仲間同志が嫉妬し合い、上役にはおべっかを使い　みえばかり張っていると云う事だ。うまく返事を　書けよ。」

寢床に入ってから又手紙を読んだ。身体の条件も合う様で暖い気持ちになりますと云うのは、どうゆう意味だろう?　ご縁があったらお側へいかれる様な気がしますとは嬉しいじゃないか。妙子と云うのは良い名前だ。妙子。妙子と、写真を見ながら呼んで見る。これで俺の嫁さんが出来るかと思うと、大声で何か叫んでみたい様な気がする。手紙と写真を枕の下に仕舞う。素晴らしい夢が見られるかも知れない。サントスに出迎えにいく夢が……。

D

計算していた通りの日数で、彼から返事が来た。

字が物凄く下手だけれど気にすまい。トマトを植えているのだが、私には、どんな仕事か見当もつかない。何でもいい。早く日本から出て行き度い。

今日は雪ちゃんがお見合いをする日なので、叔母は朝から大騒ぎである。私にも、あんなに騒いで呉れる母がいたら、この年まで独身でいる事もなかったろうと淋しく思う。雪ちゃんは、まだ十九才だけれど、色白で可愛い顔をしているので、昨年あたりから

何度か縁談が持ち込まれていたのを知っている。

今度の相手は、とても条件も良いし、と叔母達は満足で、本人も気に入っているらしい。今日のお見合いも形式的なもので、話は決まったも同然だと云う事である。叔母は、

「妙ちゃんの方を先にしなくてはいけなだけで、これも縁ものでねエ。」

と気兼ね相に云って呉れたが、私は第一居候の身の上である。今でこそ叔父の仕事が順調にいつているが、四、五年前までは、その日暮しで、私の貰って来た僅かな月給は全額、家計費に入れられていた。

小さい時から育てられたのだから当たり前だと思う。

三年程前から、食費丈入れて今では私名儀の預金が少しはあるが、着物や化粧品等にお金をパツパと使う気になれない性格になったのも、やむを得ない事だろう。それに美人でもなし、特別な技術も持たぬ、そして、オールドミスの私に、良い縁談があり様筈がない。喜んでゐる叔母達を眺めると、羨しさや淋しさが胸に満ちて来る。会社でも、口の悪い連中が、私を、オバサンと陰で呼んでいる事も知っている。努めて、そんな事を気にしない様に振舞ってはいるけれど、会社の若い人達の結婚の話を目にすると、何となく妬ましく、口では、おめでとう、と云うけれど、浮き浮きとして笑っている顔を見ると、癩にさわって、つい新入りの女の子にひどい言葉で当たったりして仕舞う。すぐにしまったとは思ふけれど何とも後味の悪いものである。たまには小説にでもあ

る様な素晴らしい、否そんなに素晴らしくなくても良いが、男性が現われ、一緒に手を組んで、本町通りを歩けたら……と考える事もあるけれど物凄い混雑の中を、身をかがめて、ゴソゴソ歩く疲れ果てた顔、顔の仲間入りをしている自分を思うと、そんな甘い希望等は、一辺に飛んでしまう。毎日、こんな生活が続いて、年月が経っていく。将来は？ 何時になったら結婚出来るのか？

もうすぐ三十才になってしまう。オバサン！！ 昼休みに同僚と談笑している時でも、フト、相手の言葉が、笑いが、自分の事を指しているのではないかと気になる事がある。劣等感に違いない。然し女は、否私は、何故こんなに結婚したいのかしら、結婚とは何なのだろうか？ 私には判らない。でも雪ちゃんは、今日の相手と結婚するんだらう。雪ちゃんは出ていっても跡には叔父と叔母の二人の生活が残る。然し私は独りだ。

家に居ても、会社に居ても独りだ。独りポッチだ。

私も相手が欲しい。何時も一緒に居て、何でも話し合えて、独りポッチの私を暖い愛で包んで呉れる相手が欲しい。私は何故、オバサンと云われて腹が立ち、淋しく思い、又恥かしい気がするのか？ それは結婚していないからではないか。どうしても結婚しなければならぬ。だが相手は？ こんなに世間には男が沢山居るのに何故私には相手となる男性が現れないのか。どうしたら相手が見附かるのか。淋しい道に迷い込んで帰り途が判らない様な、愚図愚図していたら日が暮れてしまい、愈々途が判らなくなるとい様な不安と焦躁が、何時も付き纏っている生活。こんな生活

から早く脱出したい。だがどうしたら脱出出来るか？ 消える事が出来るなら、消えてしまいたいと思う。そんな或日、通りかかった県庁の前に在った「ブラジル講演会」の文字が天啓の様に私の目に映った。そうだ。ブラジルに行こう。

而もこれには大義名分がある。政府が渡航費を貸して呉れる、自由の大陸の開拓、これなら卑屈にならずに、逃げるのではなく大手を振って日本から、この嫌らしい生活から脱出する事が出来るではないか。

私はすっかり、この魅力にとりつかれて仕舞った。

そして種々調べていく中に、天に飛上る位嬉しい事柄を発見した。それは在伯する多数の青年が嫁を求めて居り、その中の誰かと結婚して花嫁移民となる事丈が、独身女性に与えられた、費用のかららない唯一の渡航方法であると云う事だった。ブラジル渡航と結婚とを同時に叶えて呉れる花嫁移民！！ 何と快い言葉の響きよ。私は有頂天になった。良く婦人雑誌に娘達の座談会が出ている。背が高く、愛情があつて等と希望条件が述べられている。私だって、ハンサムで優しく、生活能力があつて愛情豊かな男性が希ましい。然し私は、そんな贅沢な事を云つては居られない。希望が充分に満され、なんて夢にでもない事ではないか。だから私は、彼と文通を始めてから、勿論彼の手紙を通して丈、彼と云う人物を判断するしか方法がないわけだけれど、出来る丈良い点を探り、欠点には目を閉じる事にした。欠点のない人間などは居ないのだから……。私はどうしてもブラジルにいき度い。彼を結婚

の相手と決めて仕舞うのはまだ不安だけれど、月収五万弗以上と云うから、生活能力はある様だし、頼りになり相を人に思える。もつと詳しく、彼の事を知り度い。今晚又手紙を書く事にしよう。

E

近頃雨がよく降るので仕事に追われ通しだ。晴間をみて、消毒をしなければならぬし、芽も摘み、支柱に結えてやらなければならぬ。出荷の作業は夜になり、その合間に妙子に手紙を書くと言うわけだ。

毎週三回宛、書いて呉れ、自分も書くからと云って来たが、まさか？　と思っていたら本当にどんどん、やって来た。番号までついている。Nさんも呆れて、こんな郵便配達はお断りだと、アゴを出したのには閉口した。手紙を貰うのは嬉しいし、又定期に来ない時には心配もするが、書くのは辛い。第一そんなに書く事なんかありはしない。土地の事情も作物の話も、又天候の具合も、一度書いてしまえば終わりだ。だから妙子から質問して来た事丈の返事を書いて出したら、こんな事務的な手紙は気に入りません。と来た。弱って仕舞うよ。何かの花が咲いていて、日夜の晩はどうかかなんてのは、俺には書けない。

よくあんな良い手紙が毎回書けるものだと感心する。然し不思議なもので、近頃は何をすることも、考えるにも、妙子が一緒の様な気がして楽しい。早く入籍する様にと、何度も書いてやったから、

もう手続きが始まっているだろう。一口も早く大好きなあなたの側に行き度いなどと書いてあるのを読むと、一面の花盛りの中に、フワリと浮き上った様な気がする。

何とも云えぬ嬉しさに満ちた気持だ。手続きが始まれば、遅くても五ヶ月以内に渡航許可が下り相だから、俺も少しは家の壁を直したり、家具も揃えなければなるまい。ボヤボヤしては居られない。向い合ってトマテの手入れをしているジョゼが、「お前、さつきから、タエコ、タエコ、と、独り言を云っているが、何のことだ」と訊いたので、「ナーダ」と答えたが、顔が赤くなつたのが判つた。

F

叔母と一緒に役所に行き、入籍屈を出して来た。

何か複雑な気持で、抄本を眺める。下段に、夫、有田敬三、妻、妙子、と書かれてあるのを見た時、急にもうとり返しはつかないのだ、と云う思いが胸をかすめた。何故こんな、とんでもない感情が起こつたのか判らない。今では彼から来る手紙が待遠しくて堪らない私であり「あなたを愛しています」とか「必ずあなたを幸福にします」と書かれてあるのを読むと独りでに涙が出て来る私なのに！！ 私は前に、雪ちゃんに、この涙の話をした事がある。

「そうよ。私も登さんに愛の言葉を聞かされると、ポーと、して仕舞うのよ。涙が出る事だつて何度もあるわ。でも変ねエ。姉さ

ん(私の事)は、其の人とは一度も逢っていないんでしょう。話をした事もないんでしょう。それなのに、どうしても、そんなになるのかしら」

私は一寸癪にさわって、彼から来た手紙の束を見せてやった。

「雪ちゃん。見て御覧。私達はこんなに沢山話合っているのよ。好きになっても当り前でしょう。」

「まあ、そんなに手紙が来たの、その人も、きっと姉さんが大好きなのね。」

と目をパチパチさせて云った。私も、そう思う。

彼は私が要求した通り、週三回手紙を寄越している。多分昼間の疲れで、眠たいのだろうか、同じ字が続けてあったり、妙に字が離ればなれになっていたり行が飛んでいたたりする事が何度もあった。初めは、人を馬鹿にしていると思っただが、何回かの後には、こんなに努力して約束を守る彼は、誠実な人に違いないと思う様になった。最後に必ず、(僕は、あなたを愛しています)と書いてある。キザな言葉の様であるけれど、私は今迄誰からも、この様な言葉を一度も受けた事がない。二十八才の今日まで……。

字の下手な事も、乱れた文章も、少しも気にならなくなった。愛の神秘とでも云うのか、私の心は、まだ一度も見た事のない彼に、グングン引き寄せられていく様になり、彼が恋しく、一刻も早く彼の所にいき度く思う。それなのに何故抄本を見た時に、こんな矛盾した感情に打たれたのか？ 実質的には何も知っていない男性に対する処女の防禦本能であろうか、それとも功利から出発し

たこの結婚への良心の不信感？ 否、そんな馬鹿な、と私は直ぐ
気を取直した。

「ねエ叔母さん。私もこれでやっと片附きますわ。叔母さん達に
は本当にお世話になりました。お礼の申し様がありませんわ。」

「何だね、妙ちゃん。そんな事云って……でも本当に良かった。
もう安心よ。有田家の人間になったんだから。私も妙ちゃんの事、
何時も気になっていたのよ。雪子が縁附いてからは特にそうだっ
た。矢張り娘と姪だから、と、世間から思われる でしょう。何
も私は、わけへだてをした積りはないけれど、他人はそうは思わ
ないものねエ。でも、もう大丈夫、亡くなった姉さんにもこれで、
申し

訳が立つと云うものさ」

母の事を云われて私は涙ぐんだ。戦争で父を失い、叔母の家で
母を亡くしたのは、私が七才の時だった。

全体としては、今では、かすかな記憶しかないが、
緩い胸に顔を寄せて眠った楽しい思い出がある様に思う。(妙子の
事、宜しくお願いするわ)と最後に言葉を残したと云う母の様子
を叔母はよく私に聞かせた。私の心に住んでいる母は、叔母の言
葉を通して生きている丈だった。貧しい戦後の生活の辛さを味わ
える限り味わって母は死んでいったのである。

「本当に、何とお礼を云って良いか判りませんわ。小さい時から
……。」

「まあ、そんな事より、今晚は雪子達も呼んでご馳走しましよ

う。お目出度い日だから」私は又目を拭った。叔母は本当に良い人だと思う。

今迄は、何辺か恨めしく、母さえ生きていたら、こんな思いはしないものをと、口惜しく思った事もあるが、他人の冷たさは格別である事は、働きに出てから直ぐ身に泌みて悟った。貧しい、内気な親無し子は、事務所でも余り歓迎されなかった。独りで本を読むのが、唯一の楽しみになったのは、心を開いて共に語り合う友達も作り得なかったからであろう。でも最近はその好きな読書も出来なくなった。

彼に手紙を書かなければならないし、又ボンヤリ、それからそれへと彼の事を考えていると時間など幾らあっても足りない位だった。今の私にとっては彼は、何物にも代え難い存在に思われる。彼の大きな愛が私を包んで、暖く見守って居る事を感じて、有頂天になっている、こんな私の気持を彼に伝える為に只、私は書き続けた。思えば、今日の涙は、叔母の親切な心に感謝したと云う丈ではなく、兎にも角にも、彼との結婚に迄実らせた私のいじらし
いまで

の懸命な努力に対しても流さるべきものであったと云えよう。私は(今日入籍が済んで、嬉しくて嬉しくて涙が正りませんでした。この涙を、みんな、あなたに吸わせて上げたい)と手紙に書いた。

これは日本から送る最後の手紙です。今日午後神戸を出港いたしますので、慌しい気持ちを押えてこの手紙を書いています。もう四十日もすれば、憧れのブラジルに着き、恋しいあなたの胸に抱かれるかと思うと、此の上ない幸福に身も心も震える様です。あなたと二人きりの新らしい、楽しい生活がすぐ始められるのです。私は真白な花嫁衣装を作りました。

サントスに着いたら直ぐ、神父さんをお願いして、教会で二人丈の結婚式を挙げましょう。静かな、厳かな、私達二人丈の結婚式！！　どんなにか、ロマンチックな、楽しい思い出になることでしょう。十年も経ったら、私達の子供達に、その様子を話して聞かせるのです。何と楽しい事かしら。どうか時間に遅れない様に迎えに来て下さいね。写真ではない、本当の、あなたのお顔が見られる、お言葉が聞かれる、手が握り合える、何と素晴らしい事でしょう。もうすぐです。どうぞ逢う日まで、お元気で。百万のキッスを送ります。

妙子

H

「妙子です。どうぞ宜しくお腹いいたします」と、挨拶したその笑顔が、眩しく感じられて、一寸視線のやり場に困った。胸が早鐘を打つ様で、耳の後が熱くなった。返事の言葉が、はつきり口から出ず、モタモタしたのは、我乍ら調子が悪かった。もう手

を握り合って、狭いクレーンと船の間を歩いている連中もいる。久し振りに見る日本船が、なつかしく美しく思われた。

「疲れたでしょう」

「いいえ、そうでもありませんわ。船の中では何もする事がないのですもの。天気の良い日は、本当に気持が良かったですわ。それに今日の、日の出はとても素暗しかったわ。私達、今日はサントスに着くと云うので、寝ていられなくて、早くから甲板に出ていましたの。日の出る時の雲の美しさは何とも云えませんが、紅く、金色に輝いて、それが海の水に映って、とてもきれいでした。」

「そうですか。それは良かったですね」

もう少しうまい言葉が、云え相なものだと考えたが、アがるばかりである。逢ったら、これも語ろうあれも話そうと考えていたのに、すっかり忘れてしまって、何の話をしたら良いのか、気持ばかり焦って、言葉が出ない。それでも税関の荷物検査後の跡始末は、堂々とやった。荷物の整理がうまく出来ないで、ウロウロしていた婿さんも居たが、俺は金槌と釘を用意していたので、箱は、キッチンと釘付けるし、縄で縛るものは、しっかり掛けて、サンパウロ迄送る手筈をした。尤もブラジル人との交渉は、県人会の事務員がして呉れたのだが……。都会と云う所は、神経の疲れる所だ。ホテルの室に入って、ホツとした。壁の汚れが、何か佗しげな安宿風景だ。

妙子は室の中を見廻している。俺は余程、ブラジル人経営の、

もつと立派なホテルに泊ろうかと思った。どんなに高く払わされるかと云う不安はあったが、待ちに待った妙子との第一夜なのであるから、その位の見栄を張っても良いと思ったのだが、様子が判らず、言葉が第一不通だ。何か恥でも搔いて、

妙子に軽蔑されては堪らない。まずは安全第一と、数年前一度泊った事のある、この安宿にしたのだが、これは、チト拙かったかな。

「此処は、サンパウロに来た時何時も泊るので慣れているからと思っただけけれど……もつと上等のホテルにすれば良かったね。」

「いえ、そんな事、構やしませんわ。ここ、洋服箆笥があるのですね。中を見てもいいかしら。」

狭い部屋で、道具もないのだから、真中にデンと据っている寝台の白いカバーが嫌でも目に入る。俺は右側に寝るのか、左側にするのか、とボンヤリ考える。妙子の方を見ると、タンスの鏡を見て髪を梳っていた。黒い髪の下に白い襟が浮いて見える。髪の毛がユラユラと揺れる。突然何か突き上げる様な気持が胸に迫って来た。そうだ、キッスをしよう。俺達は夫婦で、この室には誰も他には居ない。何も遠慮する事はない。映画で見た通りやれば良いのだ。

俺は、ゴクンと唾を呑み込んで、かすれた声で、(妙子)と呼んだ。振り向く彼女の首を抱えて唇を押し付けた。彼女は、アツと小さな声を上げて顔を反ける様にしたが、俺は強引に唇を吸った。すぐ目の前に、妙子の閉じた目と、薄い眉毛と、キメの荒い皮膚が

大寫しに見えた。少し塩辛い、カサカサした唇だった。こんな、キッスなんて何が甘くて、楽しいものなのか、つまらない、と思いい乍ら、生れて始めてのキッス、息苦しくなるまで、妙子の唇を吸っていた。

I

(ねエ)と、小さな声で妙子が云った。俺は煙草を吸い乍ら窓の下を眺めていた。人通りもあり、車も走っていたが、少し薄闇く汚らしく、大都会の裏町と云う感じだった。散歩に行き度いとも思わなかった。幾らか歩けば、日本人街と云われている所へ行かれる事は知ってはいたが、勝手の判らない所を、それも夜、歩き回るのは何だか気が進まなかった。

俺は先刻キッスをしてから、何だか自信が着いたみたいに気が楽になった。何だっと思いついてやればいいんだ。大した事はない。はしない。

「ねエ、寝る前に、少しお話があるの」

「え、なーに？」

さり気なく返事はしたものの、もう胸がドキドキして来た。何を云い出すのだろうか。安堵感が一辺にケシ飛んだ。

「あの……。一寸云い憎いけれど……。」

俺は益々不安になって来た。サントスに着いた花嫁が、初めて逢った夫に失望して、結婚を解消するとか、失踪して、女給になっ

たとか、新聞によく出ているのを思い出した。何故急に、こんな事を思い出したのか、後で考えると、俺は文通を始めて以来絶え間なしに、妙子に劣等感を持っていたらしい。

俺より教育があり、都会人で、文学が趣味で、常識があつて、と並べると、勉強嫌いの、田舎ツペの、大食が趣味と云う俺は、まるで何の取柄もないみたいだ。此の女を取り逃したら大変だと、一生懸命手紙を書いたものの、何時断わられるかと、心配で心配で堪らなかった。いい具合に、彼女の方からノボせて呉れたから助かった様なものの、どうしてこんなに好かれたのかと、不思議に思う事もあった。然し今日一日、一緒に居て実際に俺を観察して、どう思つたらうか。ガツカリしたのではないだらうか。

あんなキツスなんかするのではなかった。気を悪くしているのかも知れない。百年の恋も一度で醒めるという事があるそうだ。どうしよう。……それとも過去の恋愛事件の告白でもあるのか。それなら何でもない。そんな昔の事、俺の知った事じゃない……。永い時間が経つた様な気がした。然し実際は一分も経つていなかったらう。重苦しい気持ちに堪えられないで「何だね」と促した。

「あのウ。あのことなんですけれど……。私達の家に着いてからにしましょうよ。何だか、こんな所では落着かないわ。ねエ。そうしましょうよ。隣に誰か居る様だし」

なアんだ。そんな事かと、俺は妄堵の息を吐いた。

顔色が少し変っていたかも知れない。胸がまだ、ドキドキしてい

る。

「君が、そういうなら、それでいいよ」

「では休みましょう。疲れたでしょうから」

俺は此の時は、本当にその積りだった。今迄女性との経験は一度もなかったし、他人からも真面目で良い青年だと云われて、意識的にも、そんな事から遠ざかろうとする気持が強かったので、現在目の前に居る自分の妻として、何のやましさもなく自由に出来る女性に対してでも何か遠慮めいた、労りの気持と未知の事柄に対する尻込みの感情が混って、それ程情欲が燃えていたわけではなかったのである。

然し一緒に床に入って、足が、手が妙子の肉体に触れ、その度にピクリと緊張する彼女の反応の気配を感じ、快い脂粉の香と、何とも云えない女の体臭が鼻に伝わって来ると、肉体も心も昂って来るのを制止出来ない様に感じて来た。約束は守らなければならぬ、と思う。然し何故妙子はあんな事を云い出したのか？ 羞恥心丈からだろうか。それとも、もっと俺を観察する為に時を稼ごうと云うのではないのか。船の中で種々ブラジル生活の實際を聞いて、俺と結ばれ、此の地で生活するのに、二の足を踏んでいるのではないか。何時でも俺をち逃げ出せる態勢を取る為に肉体の交りを避けるのではないのか。

考えている中に、益々不安になって来た。逃がしてはならぬ。やつと掴んだこの幸福を手離れたら又何時結婚出来るか判らない。何が何でも逃がしてはならぬ。それならどうすれば良いのだ。俺は

息苦しくなってきた。どうする。そうだ！！俺の印を妙子の肉体に付ける事だ。この女は俺のものだと、印を付ける事だ！！
そうすれば何も心配する事はありはしない。血が逆流する様に騒ぎ、心臓がドンドン鳴る。

俺は薄目を開けて妙子の顔を見た。スタンドの光で、彼女は真直ぐ上を向いて目を閉じているのが見える。

勿論眠っていないのは判っている。白々しい様なその横顔を見てみると、急に両手で掻き毟ってやり度い様な兇暴性に駆られて、
(印を付ける)と心の中で大声を上げ乍ら、毛布をはねのけた。

J

雪ちゃん。お手紙有難度う。相変らず元気で幸福そうね。この冬休みは、二人でスキーですってね。

羨しいわ。私もあのスロープを、思い切り滑って見たい。どんなに気持が良いかしら。真白な雪野を、冷たい風を切って走るあの感触、忘れられないわ。

何も考えないで、前方だけを見詰めて、滑りに滑り度いの。本当に良いわねエ、彼氏と一緒にのスキーなんて。私の居る此処は、勿論雪などは降らないし、シネマに行くにも、往復一時間も、馬車に乗って行かなければならないのよ。馬車なんて、雪ちゃんなんか想像もつかないでしょう。しつかり掴まっていなければ振り落とされる位、物凄く揺れるのよ、変な風に入ればならな

いので、一時間も乗っていたら身体中が痛くなり、下りてもフラフラする位、とても、ロマンチックなんて云う代物じゃないの。手に汗を握り通しで、お尻の痛い事、一度でゴリゴリと云うわけ。隣のNさんと云う人の家に一度招かれて、ご馳走になった事があるけれど、何だかニンニクの臭いがして、油濃くて食べられたものじゃないの。それにこの人達は在伯三十年とかで、全て考え方も違うし、話も合わないのよ。でもねエ音楽会は毎晩あるのよ。そちらは冬でも、此処は夏でしょう。夜になると家の裏の低地で、音楽が始ります。タン、タン、タンと高い調子の打器に、ウツ、ウツ、ウツと、バスの弦が入り、オイ、オイ、オイと、ピアノの伴奏が付き、それに虫の混声合唱が加わると云うわけ。蛙が鳴くのだそうですが、気味が悪いわねエ、蛙なんて。

でも、夕陽は流石に壮大で、美しく、大陸ならではの景色ですが、日の出は、残念乍ら見られないのよ。眠いから……（これは叔母さんには内緒よ）畑の仕事も少しは馴れました、と云い度い所ですが、実はやってはいないの。有田が（畑には出ないでいいよ）と云って呉れるので、いい気になって、さぼっているわけ。有田は、一寸変な人よ。何だか私に遠慮しているみたい。登さんは良いわね。インテリだから。有田は働く丈なのよ。そして私の云いなりになるけれど、こんなの、何だか物足りない感じ。

ほら、（愚鈍の誠実）と云うのがあるでしょ。あれなのよ。ムシヤクシヤして、時には突掛ってやる事があるのだけれど、のれんに腕押しみたいで、独りポツチみたいなの淋しい気持がするものなの

よ。

こんな気持、雪ちゃんに判るかしら。まるで泥沼に、ズブズブと沈んで仕舞う様な気持、何の支えもないこの孤独さ……。

ペンが走り過ぎた様だわ。

家に今二人の真黒な、鼻の拵った小僧が働いているのよ。私は何と云われても言葉が判らないから、

つい首を振って、ニヤニヤして仕舞うでしょう。すると真白な歯を剥き出してケラケラ笑うの。とても強烈な印象だわ。笑っても日本人みたいに、目が細くならないのよ。………急に暗くなつた。先刻、ランプの芯を出し過ぎたらしい。ホヤが真黒になっている。ランプは、本当に好かない。暗いし、風が吹けば消えるし、油煙は出るし始末が悪い。今更ホヤを洗うのも億劫なので、手紙書きは切り上げ様と思う。先刻まで有田は、新聞を読み乍ら居眠りをしていたが、何時の間にか寝室に行つたらしい。私自身が望んでブラジルへ、有田の所へ、来たのだから、何か月も経たないのに泣事を云っても始らないわけだけれど、あんなに憧れ慕い続け、幸福を確信し、喜びに溢れて着いたブラジルで、私を待っていたのはこんな現実であり、有田であつたとは！！私が日本に居て育て上げた、彼への巨大な愛情は、伯国に移し代えれば萎れる、宙に浮いた、根無しの大木に過ぎなかつたのか。日本で想像していたブラジルの生活が、実際この様なものであるうとは誰が信じられ様。私は、予想はしなかつたが、泥の俣の壁、天井のない屋根の家、掃いても掃いても埃が立つ土間にも我慢する。シネ

マを見なくても、電気がなくても生きていける。けれども話相手にもならない、働く丈の、デクの棒相手の毎日の生活には堪え難い。そして愛情の伴わない、夜毎の執拗な交りにも……。

私は憤りと憎しみを以て、あの偽わられた、裏切りの初夜を思い起す。私が、どんなにか恥かしい思いに堪えて口にした最初の願いが、あつさりと受け入れられ、その言葉がまだ私の胸に十分な感動を以て浸み込んで来ない中に、乱暴にも破られ、踏み汚されて仕舞ったのだった。まるで物の化にでも憑かれた様に、突然彼は起き上り、私のパンティを引き篋り、のしかかって来た。事の意外と彼の権幕に驚き、怖れ、抵抗する意志も湧き立たぬ中に、下腰部に刺戟感を覚え、彼の荒々しい息吹が私の右の耳の所で熱気を吐くのを感じ、羞恥に満ちて目をしっかりと閉じた。忽ち、何とも名状し難い男の臭いが鼻を衝き、息苦しさ（ウム）と呻いた瞬間、かすかな痛みが下腹部を突き抜け、彼の身体が、力を失い重たく、のしかかって来た、あの時の事を。

結婚とはどう云う事か？　こんな事が何故神聖であるのか？

楽しいのか？　考えれば考える程私の頭は混乱するばかりだ。実際私は、ブラジルに来てから、まるで自分自身ではなくなった様な気がする。

私は、自分が考えていたより遥かに無智であり、無能であり、且又、何とも情無い存在である事を思わされて、竦然とする。どうしたら、この状態から脱出する事が出来るのか、考えもつかない。日本は、私が好んで、喜んで棄てて来た所である。今更帰れ

もしないし、帰る手段もない。独りポツチの淋しさを、緩く抱擁して呉れる人、共に喜び、生き、希望を持ち合える人として、有田を期待していたのに、彼は、そんな私を置去りにして、自分独りのコースを側目も振らずに快走しているかの様だ。私には追い付けそうもない、この拡がった距離……………。

誰も私の悩みなんか知りはしない。知っても呉れない。この私の深い孤独の淋しさを…………。幸福とは、どう云う事だろう。私にあんなにも求めた幸福は、何処に行って仕舞ったのか。私の心は、重く疲れ果てているみたいだ。否肉体さえも蝕まれている様だ。食欲もなく、食べもしないのに吐気を催したりする。

有田の体臭が嫌わしい。けれども、彼の側にしか、私の居る場所はないのだ。

有田の鼾声が高く聞えて来た。私も、ソーツと静かに床に入ろう。今夜は、彼に煩わされないうで、眠られるかも知れない。昼の疲れで、良く寝入っているらしいから。

K

女って、案外、頑固なものだと思う。尤もこれも忍従の裏返しみたいなものかも知れない。何も焦る事はない。ゆっくり仕込めば、いいのだ。妙子の料理の下手なものには驚いた。胡瓜はいいが、茄子も一緒に、四角く切って、その俣塩を振って来たのには呆れた。然し俺は、平然と喰ってやった。俺は、サンパウロでの初夜

の翌朝、少し気が答めたので、何とか弁解し様と思ったが、巧い言葉も浮かばず、妙子も、黙り切って怒っている様なのでつい云いそびれて仕舞った。然し俺の思った通り、逃げもせず我家まで従って来た。矢張り押しの一手法だ。俺は嬉しくなった。俺は結婚したんだ。妙子は逃げはしない。死ぬまで俺の妻だ。俺は妙子を幸福にしてやろうと思う。だから、彼女の望む通り、掃除でも、洗濯でも、何でもしてやる。水も汲んでやるし、風呂の焚きつけもやる。こんな事は何でもありやしない。

今まで皆、俺一人でやって来た事じゃないか。妙子は、少し悲しそうに、シヨンボリしているけれど、日本の都会から、こんなブラジルの田舎に来たのだから淋しいのだろう。いまに、この生活になれたら、元気になって、喋り出す様になると思っている。それに近頃は、夜の事も、いくらか熱ぼくなって来た様に思う。これも馴れたからに違いない。其の中に子供も産れるだろう。六人位、欲しいものだ。男四人、女二人、そして益々張切って、幸福に、このブラジルの天地に活躍するのだ。俺は嬉しくて仕方がない。

大声を上げて叫び度い。有田家万才、と。

(了)

歌集「墾の灯」 東野暁風著

一九六八年五月、東野暁風歌集刊行会によって、一九六七年五月逝去した東野氏の歌集「墾の灯」が刊行された。

本書は、四六判、本文百九〇ページ、一ページ六首組み、総歌数約一千百首、印刷は、パウリスタ印刷株式会社、発行所サンパウロ州プ・プルデンテ市、郵函七七九である。巻頭に故人の肖像及び筆跡を掲げ、序文をパウリスタ新聞社々長蛭田徳弥氏及び、選歌者行方正治郎氏（パウリスタ新聞歌壇選者）が書いている。また巻末には、著者略歴、世話人岩佐静雄氏及び刊行会のあと書きが付けてある。

略歴によると、暁風氏（本名福寿）は、群馬県の出身、一九二二年の渡伯、農業、日語教師などを経て、パ新聞社ソロ線総代理人となり一九六七年五月二二口逝去（享年六十五才）となっている。

渡伯するまでは俳句に親しみ、渡伯後短歌に転じた。

しかし、椰子樹会員となって、本格的に短歌と取り組んだのは一九四六年で、約二十年間は独り作歌を楽しんで来た如くである。椰子樹参加後は、めきめきと力倆をあげ、写実に根ざし、しかも秀れた作品を続々と発表した。晩年には、日本のアララギ、林間などの誌友となり、日本の歌界でもユニークな存在をなしていた。

◆吹きぬける寂しさありて落陽を背負いでかえるつまずきやすし
◆対決の決意うながす夕べにて火焰樹の花踏みしだきゆく
◆わが身に小鳥一羽を住ましめて少年の日のかなしみをきく
手堅い写実を作風としてきたが、以上のような、多少動きのある
作品も晩年に至って作っている。そして、しみじみとした感懐を
覚えさせる歌集といえる。一読を乞う。

(赤)

私の好きな作中人物

“能勢広行という男”

春日健次郎

「人をよぶわよ！」

「かまわないよ。こういう場面を見られても、俺はすこしも困らないね。」

このとき彼はもう女の体のなかに入っていた。

これは、立原正秋作「鎌倉夫人」の終りに近い一節である。彼とは、能勢広行と云う、放落無頼の生活をし、手あたりばったり平然と女を犯し、それで居て一応一本筋が通っているらしい三十才の独身の青年である。はつきり云って現実に存在するであろうか、私にはどうていまねの出来ない行動だとか、読みながら考えるが。要するにパンチが利いているのである。立原正秋氏の他の作品には、他に「恋の巢」がやや、この「鎌倉夫人」に似たパン

チが利いている。読んでいて、もつとやれ、もつと常識外れな事をせよ、と思ひながら、一緒に読んでいる女房には「ひでえ主人公が出て来たものだ。」等と云つて見たりする。何の事はない、自分に出来ない事を平気でしてくれる主人公に対して、ひそかな声援を送っているのである。

だが、私が書くとなると、とうていこの様な主人公は書けないと考えるのです。きれいな事を並べて、ロマンチックな恋をし、不倫な事柄には横を向いて居たいと願うのは、私のずるい性質からか、思い切つて書いて恥しいと感ずるからか。丹羽文雄の「顔」の長男の様な主人公になつてしまふのです。

「顔」では、長男の嫁と正式には嫁にはなつていないのですが、舅との関係と云う、ものすごいものですが、それが決して、不潔に読ませない丹羽文雄には頭が下ります。

能勢広行は、別に仕事らしい仕事は持つて居りませんが、可成り贅沢に鎌倉で生活し、飲食も相当に高度なものを求めて居り、何所からその資金が出て来るのか不思議です。又彼をめぐる人々が又又ものすごく、ライオンを飼っていたり、ナポレオンやヘネシーが何時も戸棚にあつて、それを飲むにしても、少しも気取らずにブランデーグラスを取り出して、四分の一位を注ぎ、何も人に見せる為ではなく、それが彼等の生活に入り込んである風に、掌であたため香りを楽しむ。高価な生活をすれば、その金は何所から入り、それを生活に何分廻し、残りをレジャーに費うと云つた各所に辻褄を合せなければならぬ私には、無理な話か。

詩

道路について

(ふたたび)

横田 恭平

少年らの物思いを明日につないで
落日のかなたへはるかに見失われるひとすじの道路それよ思惟す
る人間らのつくれる

それよ

思惟する人間らの

情操そのもの

理念そのもの

それはある国家を通過し

それはある社会を通過し

それは断絶をもたない

それは究極をもたない

それはつねに新しく

また古く

しかもそれは、おのれに

「今」に還帰する

そして更に出発する

それはすでに文学であり

それは哲学である

私は根気よく

存在に於ける希求と思慕をうたって来たが

かえりみればどのうたも

道路のうたにすぎなかったように思う

主 体 性

おのれはじだらくになりはてた

友人裸人は

ブラジルへ流れついたとたんから今に至るまで

三十年間顔を洗ったことがないと誇るが

おのれもその「て」だ

おのれはすべてのことに

かかわらなくなった

それはひとにぎりの主体性をもつということか

も知れぬ

それはじだらくのせいかも知れぬ
たいへん荒っぽい部屋に住み

窓の外にサルビアが五六本

一年中赤い花を咲かしている。

サルビアの花にはいつも蜂鳥がぶんぶん

時は風よりも早く

そのあたりを過ぎ去るようだが

おのれはかわらない

荒っぽい部屋で、無限を

いや無をながめている

それからおのれの存在を少しばかり

鮮やかにするために、体操する

それからだれも書いたことのない

詩や小説を考える

ところで、ある小雨の降る日

くだものの袋を貼っていると変を物音をきいた

ふと見ると、隅の寝台の上に

いつ来たのか、黒いのがったやせ犬が

ぬくぬくと寝込んでいる

ずいぶん長い間そうしていたにちがいない

おのれは顔をしかめて箸で叩いた

残り惜しそうに

犬は雨の中へ走り出た

なんと思っただか、振り向いてわらった
旦那！ 旦那の主体性ってやつに
たんのうさしてもらいやしたよ、へへ

世 代

可 児 三 平

初秋の微風に

ユーカリの雄しべは

朝の公園に坐る若夫婦の

足許に散り敷く

青臭く、細く、

幼児は地面を這いまわる

グラウンドで、少年たちは蹴球

走り、蹴り、倒れ

ユーカリの雄しべを踏みにじる

土まみれ、汗まみれが育つ

そして自分にあるのは
喪うことだけ
帽子をかむり直し
ユーカーリの花を見上げる

失われた時

佐藤 博三

非有の時間はなんと迅速に走ったことか
巨大な水庄に地面はえぐりとられ
露呈した黒い岩肌はすでに疲れて
激流のひびきにやっと堪えている
ずたずたに切られた魚を食べて
飢えをいやしている男たちに
嵐はひねくれた形の楽器を捧げる
岩石は絶えず塩化カルシウムで愛撫されあらしいは飛沫となり
青錆いろの愛は風化する
誓いと血のりと神話は投げすてられ
永遠の時間は迅速に走り去ろうとする

火

小野 政子

円い炎を上げている。

程よく調節された

ガスフオゴンの火。

もし

抑制のバネが外れたら

この家を 吹きとぼし

生活の凡てを破壊するだろう。

恐ろしい力を内蔵し

しづかに燃えている。

プロパンガスと

わが胸の火。……………

影法師

芳賀裸人

利害得失を云々して

みな去ってゆく

最後の最後に残ったものは

自己というただ独りのもの

帰りゆく路上に斜陽を浴びて

やせた影法師が従いてくる

言葉を連ねれば連ねるほど

狩海 亘

言葉を連ねれば連ねるほど

そこに不在が証明される

そういう詩をぼくは書きたい

友達だけは信じようとした

若い独楽よ廻われひたすらに

独楽はいつか倒れる

で首よ打たれよ

雨水がひんやりと草の表に光っている

静かに待っております

ところが或る日ついに来てしまいました

あゝ あの苦悶

やたらとむやみとけばけばしきもののあるなり

負の方角から迫れナルスよ

今こそ戦の時

だが敵はどこにいるのか

見えない

あゝ この期におよんで敵がないとは

何たる不覚

何やら漠としたものしか

ぼくの周囲には出沒せず

確かなものはない

信じることは逃れることか

いいから君よ死んでしまえ

ぼくはひとりで立ち

ひとりで対決し

葬る

葬ったあとは不安でいられない

どうやって逃れるかこの恐怖から

あゝと欠伸をしてしまったからには

死んでもらいましよう

きっと明日からは別の時代が始まるのだけれど終戦の日の戦で射

ち落された若者のようにあと一日生きのびればよかったものをや
はり再会は実現しなかった
とても多くのことが次々と起ったが
脈絡のない波が頭上を過ぎただけだった

悪
霊

藤
田
勇

干からび
疲れ

襪ふかく

萌芽

するもの

何処にも
ない光
の中に

隠花の繁茂

四囲を

閉ざされ

凍る壁

の肌

を濡らし

屈折する

水の炎

空転する

核を

貫き

秃鷹は

刻折り

翳を抛げてはすぎた

REVOIR

良一郎

「どうです

詩、書いとられますか」

「詩を書きましようや、」

そうです

詩を書く事に ためらうのではありません

頭の中の

経済混乱が、解決出来れば

どこかに嘘のあるような自慰の

逃げ の中に

感受性の麻痺や

敢て詩性の没落などと

偉そうなことを言う

「自分」「彼」「私」みんな僕です

それで

どういう型でも

書ける人はドンドン書いて下さい

僕は、も、

焼けボックイの火の残っていそうなところに

残っていはせぬかと

手さぐりに、そこを探して春さきの砂ボコリを舞上げる

キチガイ風を吹きつけて

今にゼイタクな詩を書こうと思う

キツト

私の年令は

今一度

そこへ戻って来る

詩を書くということとは

今一つの生活をする事だから

種子を蒔こう

瀬古義信

広い広いこの国の沃土に

一粒選りにした種子を蒔こう

どんな小さな

粗悪な種子も

生え育つだけの力は持っている

良いものを収穫るために

種子を選ろう 土地を選ろう

智的ものもを

それよりも もっともっと

善たるもの、種子を選つて蒔こう

より良き 住みよい社会にするために

花

二葉史郎

若き日は

バラの花の好きな人だった

バラの花のように
明るく朗らかな人だった。
病みついてからは
カネーションを
そそとした小さな菊の花を
賞でていた人だった。

ああ今日は
どの花を持って
あの人の奥津城を訪れようか。

奥津城

丘の上の
奥津城に額づきて
涙にくれていようとも
決して嘲ってくれませぬ。

幾星霜を
苦しみも喜びも共にせし
愛しき人の面影を

こころの中に抱きしめ
秘めやかに独り囁くを
空しきことと

決して嘲ってくれますな。

わずらわしき

巷からさかり

丘の上の

愛しき人の奥津城を

訪れることが

私には最も楽しいんです。

評論

無限・無・そして実存

横田恭平

無題

高橋新吉

生きていることは滑稽なことだ

馬鹿者共

生きていることは滑稽なことだ

馬鹿者共

生きていることは滑稽なことだ

馬鹿者共

生きていることは滑稽なことだ

無限身

高橋新吉

此の身無限にあり

万物無限なり

我一身にあらず

無限身

なんの因果か、自己の内面を見つめる癖があつて、その揚句無限というような途方もないものに取組み、あたらし人生を思いつめ考えつめてくらししてきた高橋新吉の詩である。高橋は深く仏教に帰依し、その詩も仏教臭いのが多いが、冒頭の詩はまだ虚無感にあがいている頃の詩であろう。

「有限の本質は無限である」とは昔から哲学者が唱える言葉だが、一般にはピンと来ないだろう。特に現代のようにいつもぎりの切迫した精神だけを持合せている時代では、気持の上で承服出来ぬ。

ところで、「有は無に等しい」と断定した場合、万人が首肯するだろう。

現代はそういう時代なのだ。各自がもつ、あの骨を噛む虚無感というものを、実質的に言い当てられた気がするのだ。第二次世界大戦の惨禍を通過し、さらに第三次大戦の人類否生物破滅の危機を感じている現代人には、もはや「有限の本質は無限である」などと、悠長めいたことは考えられないのである。

ところがよく考えてみると、有限の本質はやはり無限であり、それはまた「有は無なり」と同じ意味をもつ言葉である。

無限をつかんだ、把握したなどと考えるときは、まだこの実体のないものを「もの」のようにながめているにすぎない。本当に無限のなかに入つて了うと、その感覚は「無」である。

長い間詩などつくり思索をつづけていると、年齢と相俟つてそれを感覚するようになる。即ち、無限あるいは無限大というもの

は、自己がその中に在るといふ自覚をもったときにそれは無に等しい。いや無そのものだと断定できる。これは主観の問題である。

この無は有と相対的の無ではない。

有をも包含する絶対無とも称すべきものか。前回コロナ文学に書いた「詩について」の中に、自分の詩法として「無を有に隣らしめる」と述べたように思うが、これは作詩の便宜上の方法として書いたものである。

つまり自分の考える無というものは、永遠或いは無限大を通過した無である。

永い間生の意味を追求しながら詩作をつづけ、最後に得たものがどん底もどん底、底なしの無であったことはなんたる皮肉であろう。しかし、その結果把握し得たものは、しっかりと足で踏み得る現実であり、そして現実の美しさであったことを思えば、詩を作ってきたこともまた無益でなかったと信ずるものである。

さて無に立脚する思想を実存思想と呼ぶとすれば、自分の考えるところも正しくその系列に含まれるものであろう。この思想は、人間を、現実と共に動く、創造性ある一つの主体として認めるものである。

数年前、ライフ誌が実存思想特集号を発行したことがある。勿論サルトルに就て多く語られたが、実存思想は一つの世界的思想であるとして記述してあった。現代のインテリで、マルクス主義者か実存思想の持主でないものは少いだらう。ただ唯物主義はあまりに公式的且つ環境中心的で、主体性を無視する場合があるので、

自由と、そしてその負わしめる責任とを愛する人々は、概ね実存思想にはしる。人間性即ち主体性となし、理性を發揮し情操を涵養し、社会からすべての不合理を芟除して、理想的の世界をつくろうとする。勿論、人類愛こそ社会的行為の基盤となるべきものである。

実存思想の内容とするものは、その人によってみな異なる。自分の思想の内容もまた他と異なるだろう。だが「実存だけがおのれにある」という根本的の考え方は同じである。即ち、「いま」「自己」というものを見つめ、自己を展開して社会に及ぼすということである。実存思想の所有者に課せられる運命はない。運命はおのれ自身がつくる。

人間のあり方は人間が決定する。マルクス主義は、環境が人間を拘束するとなすが、概述のごとく実存思想は自己を自由を主体として自覚するものである。

実存思想はその根底を無に置くがゆえに、これを虚無思想と見做す人がある。詩人では、小野十三郎などその一人だと思うが、こういう見方はひが目である。実存思想は社会の不合理を否定し抵抗こそすれ、虚無主義者のように、社会の一般普遍的標準を否定するものではない。

大抵現代にあつては、詩に志すぐらいの人はみな虚無感に苛まれており、骨を削る孤独感をもつ筈である。自己とは何であるか。他とは何であるか。

有が無に等しいならば、自己の存在に就で何の意義があるか。い

かなる価値があるか。科学は、地球も太陽もついには消滅して
うことを教えているのではないか。こういう悪夢につきつぎに襲
れて、人はみな一度は虚無の昏い深淵に落ち込む。この深淵から
這いあがったのが実存思想である。

詩

悲鳴

大浦文雄

生きることが
おゝそんなに苦しいか
けたたましくも
わらいころげる
わが心よ、こたえよ

暗い日の自我像(七)

大浦文雄

日常生活は私の前に
大きな無為の白紙と去ってたれる
終日私はそこに
死という字を
狂人という字を

いくつもいくつも書きなぐる

そのあとで時折

泣きつかれた表情で

愛という字を

一劃一劃

ていねいに書くのだ

以上二篇を、大浦文雄著詩集「スザノ」から引用する。ブラジル第一の文化村福博村の村長として、その社会理念の実践に挺身するこの詩人にも、若い日にこういう傷心の詩があった。なまじ恋愛詩などよりずっと心にひびくではないか。

詩

円盤の行衛

横田恭平

投擲は、その一瞬に

生命の最も純粹な

最も華麗な燃焼を賭ける

とにかく

あのしつかりと円盤に嵌った鉄環に

指先から血を通わせたかったのだ

恒等式を考えていた

生と死、有と無

無限大と無限小

はた善と悪とは

だれがそれを哲に識別し得るか

ひとみな花やぎてあれ

懐疑の雲は頭上にあつた

思のおちぶれて

草はらにゆき、円盤を投げた

なだらかに空に描き

擲つて地に誌した

白日の下にちからを愛し

なお漂茫と逝かしめんと

いま折々夢みるのだ

実に不思議ではないか

夢に投擲する円盤は

なめらかな拋物線を描いて揚がり

なんたる愉快

その頂きでどこまでも平らに

ひらひら、ひらひら

樹木を越え、野を越え

その墜つるところを知らないのだ

思えば

すでに永遠を欲していない

わづかに、来り去る刹那々々を真剣

に生きんとする

小市民としての祈念をもつ

この沈静の境涯に在って

はたしていかなる穎気を象って

かかる奇蹟を夢みるのであろう

この詩は自分の近年の作であるが、若い日には読んで判る通り、前者とはちがった生き方、ちがったかたちに於てだが、やはり愚かにも客観的には解決不能のこの問題と取組んでいたのである。

さて虚無の深淵から這いあがった男は、あらためて自分の魂と身体を見つめる。それはやがて宇宙の彼方へ消散するだろう。だが現実には実存している。そして自然は、環境はここに儼然として実在しているではないか。

しかも吾々人類は、祖先の努力と、祖先から承けついで叡智によつて、自然をドミナしている。吾々にはさらに完全なるものとなり得る、なにか貴重な本質的なものがあることは疑いない。

それは一人一人にちがうものかも知れぬ。吾々はその本質的のものも追求し、吾々の生の意味、価値を発見しよう。

端的に云えば「先づやってみよう」ということである。

存在は本質に先立つ。そして実存ということは、存在し、行為

することである。自己の理性に従って、信ずるところを實踐することである。吾々はこの実践によつて、吾々のもつ本質的内容を具体的に現わしてゆかねばならぬ。しかも自己を社会の中の一箇の個として認識して行為すること、また主体の自由を尊べばこそ、自己の行為に就ては絶対的に責任を負わねばならぬことは自明の理である。

実存思想をもつ人間の魂は孤独である。宇宙にただひとつ存在するよるべないもの、それは寂寥の精神と呼ぶべきであろう。それゆえにこそ彼等は他を愛し、社会を愛す。愛こそ社会的実践の基盤となるものである。

自分は農夫なので、年中草本や樹木に接している。これらの植物こそ、実存思想の所有者であると思う。彼等が「現実」を最善に生きるために、孜孜として努めるすがたを見ると、頭が下がる。彼等は決して退嬰的ではないのだ。つねに環境に順応し、自然をドミナしようとして試みる。肯定し、しかして抵抗する。決然として質的の飛躍を遂げる。なぜにかくも多くの植物が地上に現われたかということを考えよう。

詩

マモンの詩

拙著「感情、粗く憔悴せる」より

真摯なる態度で

新山に自生する一本のマモン

その巨大な果実は

どれ程私の家庭を湿したとか

私は親愛と感謝の念を以て

この植物の全霊に対す

マモンよ

風貌特異なる熱帯植物よ

君が分厚の潤葉と

累々と幹に実を成らすそのふりと

独創の気概に益る、生命の力を讃え

よう

私もまた一個の生物として

他の容喙を赦るさざる独創の力で仕

上げて来た

私は私の祖先の鏤骨の努力を知る

私は私の子孫のなおも受難すべきこ

とを知る

一個の植物としてその稟性に従い

環境に順応して生存と繁殖の方式を

改良し

向上せんとする意図をもつマモン

よ

私の感情は君の感情に投合する

私は君を諒解し君の決意を讃嘆する

私は実に君の呼吸をさえ呼吸する

すなわち礼節を以て両の掌に

君が秘法の果实

多汁豊美なる一個を受取る

君が期待する輝かしい永劫の未来を

含める重量を

仏教は、何万年何億年後にも真理であると云われる。それは地上にあらわれるすべての哲学、思想を包含するという事かも知れぬ。まさしく実践によつて自己を顕現しようとする実存思想をも包含していると思われる。

先日、芳賀裸人兄から拝借して読んだ秋野孝道師の従容録講話の中にある話だが、非常に興味のある仏陀の逸話なので、ここに引用してみる。

あるとき仏陀が法を説くために高座へのぼった。仏陀の徳を慕う大衆が、座をめぐつて犇々と詰めかけ、仏陀が口を開くのを待っている。だがこの高德の人は端座して大衆を見渡すばかりで、一向に口を開かぬ。大衆が困惑しているとき、仏陀の真意を悟つた文珠が白槌して、「諦観法王法王如是」と讃したという。そし

て仏陀はそのまま座を下ったとのことである。

考えるに、仏陀は無言の説法をしたのである。即ち、現身を以て法を示したのである。曹洞禅では、この無言の説法をやる和尚が多いそうだ。

さて私は仏教を説くためにこの逸話を書くのではないが、従容録にはこの無言の説法の意味を判りやすく解釈してない。これは文章で説くことも、口で語ることも出来ない、実に高遠な意味をもつものであるからだろうか。

自分はだれでも考え至ることが出来ると思う。それは勿論その人の受取り方にも依るが、仏陀は恐らく、この現身こそ無限即ち永遠なるものの象徴であると教えたのであろう。あるいはまた、諸慾につながるこの現身が、とうとい仏性の住むところであると示したのであろう。そのいずれにせよ、実存的の意味をもつものと考ええる。自分は高座から大衆をうちながめる仏陀の、世にもけだかい慈愛の眼差を想像するのである。

以上あまり一般では興味もなさそうなことを長々と述べたが、自分は詩を作ることを本分とするので、この実的思想を体系づけて一つの哲学として完成することよりも、自分の構築する美学に結びつけて研究してみたい気持をもっている。『詩集』『感情、粗く憔悴せる』中の少年篇「晴夜」以後、ほと要するに、人生は冒頭の高橋新吉のんど一貫した態度で作詩をつづけているので、この仕事は容易であるかとも思われる。いずれ「コロニア文学」の貴重な紙画を拝借したいと思う。

要するに、人生は冒頭の高橋新吉の詩のように、滑稽で悲惨であるかも知れない。だがまた雲がはしるように壮麗で諧謔に富むものかも知れない。それは各自の心の持ち方に依るだろう。

評論 コロニア文学

作品「井戸」に寄せて

宮尾 進

コロニア文学とは、まず何よりもコロニアのにおいのするものであるべきだろう。ここでコロニアとは何であるかはあえて云うまい。それは理屈よりもまず肌で感ずべきものだからである。

最近、ロスアンジェルズで発刊されている「南加文芸」誌を数号読む機会があった。そこに掲載されている同じ邦人の筆になる作品は、われわれコロニア文学の作品と共通した多くのものを持っている。それ故に、それぞれの作品は、親和感、親近感を抱かせるものであり、いわば、文学的価値とは別の要素にひかれ、時には身につまされて、読まされてしまうものがほとんどである。

この「南加文芸」の作品にしる、「コロニア文学」の作品にしる、同じ移民社会を背景とした、日系人の筆になる作品であるが故に、われわれは共通の場に立って、何よりもまず、親和感をもって、こ

これらの作品を受入れるわけであるが、しかし、私がいいたいののは、当然のことながら文学作品として評価する場合には、この親和感と文学的価値とは、厳然と区別しなければならぬということである。

コロニア文学がコロニアの文学に終わってしまったてはならないのである。われわれの移民としての体験が、たくみに代弁されていることからくる親近感だけをもって作品の価値を評価したのでは、コロニアの文学ではあり得ても、普遍的価値をもつべき本来の真の文学ではあり得ないのである。

われわれの最終の目的とするところは、コロニア文学であるとともに、コロニアという名辞を取り去った文学としても価値あるものたらしめなければならない。

本年度のパウリスタ文学賞入選作「井戸」は、発表されて以来、こん日まで多くの反響を呼び、コロニアではめずらしく、いろいろの批評が聞かれた。

そして、それらの評言のほとんどは、親近感に満ちたものであり、作品の価値をあげつらうものは皆無に近いものであった。

なるほど、この植民地の井戸掘りの話は、その中に、開拓期の植民地の状況をたくみに描き出している。「パウリスタ文学」の諸選者のことばをかりれば、「単なる井戸掘り日記をぐいぐいとひきつけて読ませる筆力」(尾関)を作者はもっており、「井戸掘りの話を通して開拓者としての生活、喜びや失望がよく描かれている」

(尾関)、「艶めいた色どりなどはないがその構築的な筆づかいはこの作品にぴったりしていて力感に溢れてもいる」(武本)「移住地の状況も適当に点綴され」(古野)ていて、開拓という共通の体験を有するわれわれコロニア人の共感を深く呼ぶものである。そうした共感とともに、「一種のスリル(水がいまでるか)にひかれて、一気に読むことが出来る」(木村)作品である。

ほんの二、三のことばづかいの誤り、あいまいさ、(例えば「井戸杵がぎこちない音をたててあげさげされた」、「布製の靴をひっかけて、まくりあげたズボンから出ている脛にあたる、七月末の夕風…」といったような)を除けば、コロニアで生まれた作品としては、まさに最上級に近いものであり、こうした作品がうまれたことは、コロニアにとって大きな収穫であったといっても、決していいすぎではないであろう。

われわれはこの作品を大いなる親和感をもって読むことが出来るのであるが、しかし、単に親和感にひかれて読めるばかりでなく、作品としても、完全に近いまとまりを見せており、あげつらうべき点を備えていない。発表されて以来、この作品に対する批判ともいえるものが、もっぱら、井戸掘りの技術的な面に向けられている(パウリスタ新聞三月七日号文芸欄参照)のを見ても、この作品が表現技術において、欠点らしいものを備えていないためのものであることを実証するとともに、いかに共通の体験に対する親近感がこの作品によせられているかを物語るものである。

では、この外品の、コロニアという冠辞を取り去った文学としての価値はどうか。はたして、これまでの好意ある評価と同様に高く評価し得るものであるだろうか。

その前に、この作品を通しての作者のねらいは、はたして何であつたのだろうか。

井戸掘りの話を通して開拓初期の植民地の生活の困難さというものがある。井戸掘りという作業を、それも遂に徒労に終わった七十数メートルという途方もない井戸掘り作業を描くことによって、象徴的に描き出しており、その限りにおいて、作者は十分に目的を達しているといえるだろう。

しかしながら、開拓地の状況、井戸掘りの困難な作業に共感を覚えつつ、しかも、水がいつ出るかという「一種のスリル」に似たものにひかれながら、一いきに読み終つて、「ぐいぐいとひきつけて読ませる」作者の筆力になるほど感心はさせられるが、何か心ゆくまでのあの読後の満足感、感銘を覚えることができないのはなぜか。水がいま出るが、という期待がついに裏切られたためのものであるだろうか。そうではあるまい。

「惜しいことにはただこれだけのことというものたりなさが残る」と選者の一人、尾関氏もいつているが、そこに描かれた開拓地の状況に共感を覚えつつも、ふと、何ものかを裏切られた、まさにもものたりをさをこの作品からうけけないわけにはいかないのである。

同じ選者、古野氏も、「掘られた井戸の深さほどにこの作品の底は深いものではない」と述べているが、では、いったいこのものたりなさの原因である底の浅さはどこにあるのか。

この作品は一見、主人公元二の井戸掘りという作業を通して、人間の執念というものを追求しているかの如くに思われるのだが、それはとりもなおさず七十数メートルという深い井戸を掘りさげる作業が描写されていることからくる錯覚であり、その実は、パ文学賞選者がおしなべてふれているような「人間の執念」はどこにも描かれていないのである。この作者は主人公の内側にたちいたって、人間の何かを描こうとしたのではなく、「苦労して掘ったが、ついに水の出なかった井戸掘りの記録」を、たくみな表現で述べたにすぎないのである。読後のものたりなさはまさにこの人間追求の何かがあるということが裏切られたことからくるものにほかならない。

七十数メートルという気も遠くなるような深い井戸を二年の余もかけて掘り続けるという状況は、人間の執念を掘りさげてみるにはうってつけの素材であるにもかかわらず、そうした作業はまったくなされていらないのである。惜しむべきことといわざるを得ない。

コロニアの作家に一番欠けているものは、まさにこの一点―人間とは何かを追求することへの努力である。作家としての態度があまりにも安易である。

コロニアの作家がこの点に努力しない限り、コロニア文学は、コロニア人の共感の中にすがって生きて行く作品をしかうむことができないであろうし、コロニア文学はついにコロニアの文学に終ってしまうであろう。

絵画

近代絵画の歴史に学ぶ

(一)

高岡 由也

歴史的の或る事実について、その原因は何であったかということをきめるのは、むずかしい、と、いうのは、過去の多くの事実が後の一つの事実の原因になることもあり、逆に過去の一つの事実から後に多くの事実（結果）が生れることもあるし、また、いろいろな角度からの見方などもあって複雑だからである。でも、その、またはそれらの主なる諸原因は、すなおな考をもつてするなら限りある角度からでも、そう大したあやまちもおこさず、大体それなりに当を得たものをつかめると思う。

ここで私は一エカキとしての狭い角度からではあるが、絵画の歴史についてこれを試みてみたい。

よく近代絵画の発生は十四世紀から十六世紀にかけてイタリアを中心に発したルネサンスに比較されることがある。これはフランス語・再生の意、文芸復興期とも訳されている。

では、この場合、何が再び生れとのだろうか？。

これはギリシャ文化最も華やかだったころの、所謂ヘレニズム時代の再生をさすのである。

前一四八年、まだ共和国だったローマはマケドニヤをその属州として二年後、前一四六年にギリシャをこれに属させた。

そのころの、丁度ヘレニズム時代の絶頂、ここの美術は総じて写実的であった。

特に彫刻はその極致に達していた。近代の見解でこそ写実的なものを必ずしも優れたものとはしていないが、こうしたものは当時のローマ人にとっては一つのおどろきでもあり、あこがれでもあっただろう。

ローマが帝国になってから（前二七年）でも、再々ヘレニズム時代の文化そのもの、そのままの回復が、はかられているが、いずれも低級な摸倣におわったといわれている。

まだそのころ、バルバロスと呼ばれていた征服者・ローマ人には被征服者のもっていた段ちがいの文化は、そう急にはこなし切れなかったといえよう。

だが、この模倣期も過ぎると、歩みはのろかったけれど、流石に征服者である、ローマ人はギリシャ的のものを

多分にとりいれながらも何かそれと違ったものをつくりだしてい

く。これがグレゴ・ロマン文化である。単にロマン文化といわれることもある。

ギリシヤの美術は紀元前八世紀におこったとされている。但し、それ以前「プレ・ヘレニク美術」というのがあったといわれる。

絵画では前八世紀のものが残っているという。彫刻では前七世紀のものだそうだ（神像、木彫）。

彫刻は前七世紀に中古エジプトの影響をうけて発足した、それで初めは写実的なものではなかったのが、だんだんそうなってきた、ついに紀元前二・三世紀ごろには、その極致に達する。

絵画もこれほどではなかったがかなり写実的になっていく。明暗や遠近法（無論、後世パウロ・ウチエロによって体系づけられたようなものではなく幼稚なものではあったが）などで画面の立体化も生れている。

なぜ、ここの美術がレアリズムに傾いたかということ、これはギリシヤ人の気質に負うものだと思う。

当時としては、今から二千二百年以上も前のことである！、おどろくほどのここの自然科学の発達、天文・地理・医学など、ことに哲学の進歩、などを見てもわかるようにギリシヤ人は、いい意味での理屈ぽさを持っていたといえる。この理屈ぽさが彼等の美術をレアリズムに向けた主な原因であると私は考えている。聖パウロもこれに似た考えでもあったのか次のように云っている。

ユダヤ人は徴を請い、ギリシヤ人は智慧を求む。とコリント前

なお彫刻がより写実的になれたのも、その上に大理石という材料を得たからであろう。

ギリシヤの大理石は今では掘りつくされてなくなったが、その色といい、つやといい、やわらかさといい、くせの少ないことといい、世界無類の良質のもので、現在、最良のものといわれているイタリアのカララのそれでも、お話にならないくらい質がおちる。

美術にしる、工芸にしる、建築にしる、そのスタイルというものは大部それに使われる材料に条件づけられるものである。例えば、もし鉄筋コンクリートという材料がなかったとしたら、今口私たちに、あの高層建築・ビルディングのスタイルなどは絶対に見られなかったはず。

ところで、これは私個人の感じであり、意見であるが、ギリシヤの彫刻は木彫を基礎にしたせいかな大理石の作品でも皆木彫の味になっているのである。

こうなったのもこの大理石には、これも石灰岩の一種ではあるが、他のものちがいが、もろくてかけるといっておそれが殆どなく木に近い性質があったからであろうが。同時に次のようにもいえるのではあるまいか。

あれは木彫の味だったからこそ、あれだけの写実ができたのだ、と。

おもしろいことにブラジルが生んだ天才彫刻家といわれたアレジャジニョの作とされている石のもの（ペドラ・サボン）でも皆

木彫の味になっている。

この人の本領はやはり木彫だったと思う。

これを裏から見れば、石でも、特殊なものなら、木の味をだせるということになる。

また、これと反対のこともある。木でも石の味がだせるという。バイアあたりのイグレージャによく見うける木彫のエイヌ・ヴオト（E X V O T O）などは大概石の味になっているのも、その一例であるが、これは意識してされたものではなく素人が小刀などで、こつこつ、きざんだり、ひっかいたりしているうちに自然にそうなったもので、木彫独特の「刀の切れ味を見せる」といった技巧さえもないチャチなものだがほほえましくなるほど可愛いものが多い。

日本の古典木彫も右の味であるが、これは意識してつくられている。朝鮮、中国、インドの影響である。あちらのものは殆どといってもいいくらい石であった、物によつては、ふすふすに小さな孔のあいている石灰石なども使われた。こうした石の味が日本の木彫で真似られたのである。

そこへいくと現代の彫刻家や画家は、各材料の、それでなければ、どうしてもだせない持ち味といったものを追求している。でもを嫌うのである。

材料に対して考え方の進歩である、とでもいえよう。だが、この角度から作品の価値を批評することはできないし、してはならないことはいうまでもない。

さて、ローマ帝国も分れたり統一されたりして、ついに東と西に決定的な分裂を見た。紀元三九五年のことである。

その時ギリシヤは東ローマ帝国の一部であった。この帝国はその後一千年以上も永続きしたが（一四五三年に滅亡）、西ローマの方は早くも四七六年には滅亡してしまふ。

紀元後一世紀の内にすでにローマに伝っていたキリスト教は四世紀にもうローマの国教になっていたが五世紀になってもまだ美術に影響を及ぼしてはいなかった。政治的にも暗黒期であったし、その他種々の理由で文化の停滞が続くのである。

ようやく、六世紀に至って、東ヨーロッパに四世紀中に発生した所謂ビザンチン美術が目につくようになる。そのころからキリスト教的なものを主題にした美術が見られるのである。それ

までには主題的なものたとえばギリシヤ神話のものに限られていた。ビザンチン美術の発生の地はビザンチウム（今のスタンブール）である。

これは紀元前六六〇年ごろギリシヤのメカラ市民が建設したものだ。

紀元二三〇年、ローマ帝国の首府がここに移された。時の大帝はコンスタンチヌス、よって以後コンスタンチノーブルとよばれる。ビザンチン美術といい切れるものがあらわれるのは、やや、そのころからである。

これも元はギリシヤからでているのであるがグレゴ・ロマンの一つにはかぞえられていない。

そして独自の様式があいついで生れてくる。まず建築に、次い

で彫刻に、絵画に。

グレゴ・ロマン風のもものが全く地上に姿を消してからは、これはますますヨーロッパ各地に、西ヨーロッパにまでも、その根を張っていく。時間的には十四世紀のはじめころまで伸びるのである。

ビザンチンといえれば誰でも、すぐモザイクを思いだす、ほどそれほど、これが盛になった。これは絵の具（チンタ）こそ用いなのが立派に絵画の一つである。

これに平行してチンタで描く絵も、とくにアフレスコやテンペラなどが発達した。

ところがどれにもモザイク的な一貫したスタイルがあった。物と物との間を囲い太い線で区切る、それである。

この線は輪劃だけを意味するものではなかったが。

ともかく、こういうスタイルから少しずつ脱却することによってチマブーエ（一二四〇―一二二〇二）、ジョット（前者の弟子、一二六六―一三三七）、フラ・アンジエリコ（一二三八七―一四五五）などのあの大芸術が生れるのである。そこで、それらがビザンチンからルネサンスへの架け橋になる。

ルネサンスは元来ヘレニズム時代の再生を目ざしたものだけに、その美術は写実的にならざるをえなかった。

その時、彫刻ではヘレニズム時代のその水準に達し、ある意味でそれを乗りこえたのはミケランジェロたった一人だったが絵画ではヘレニズムのそれをしのぐもの（写実の大家の意味で）と

称される人を多く出ししている。

つまり、ルネサンスの絵画では昔に見られなかった写実ができるようになったのである。

こうなったのも、そのころから粉末絵の具を溶くのに（註・正確に言えば混ぜるであるが便宜上このコトバを使う）油が一般に使われだしたからだ、と私は考えている。

この「油」には従来の絵の具を溶かす材料（ヴェイクロ）とくらべて違うところがただ一つあった。

それは何よりも乾きが非常におそいという点である。

これなら、二日も前に塗った色と二日後のそれとでもぼかすこともできるし、パレットの上で迅速に色がつくれるし、それをそのまま塗っておいて一服してからでも次の色もつくれるし、時によつてはカンバスの上で色をまぜてもつくれるし、やりそこなったら簡単になおせるし、削りもきくし、何回でも絵の具の重ねもきくし、好きな時に休めるし、またつづけられるし、筆でもパレット・ナイフ（葡語・エスパトラ・デ・ジョエーリョ）でも描けるなどといったぐあいに、その時代の画家の夢であった写実をするには持つてこいの条件であった。から、この「油」は、堅牢ではないという欠点があったのにもかかわらず、従来の凡るヴェイクロを駆逐してしまう。

それでルネサンス以後の絵画の歴史とは油絵の歴史にすぎないともいえる。

僅かに刺身のつまのように水彩画が残されたが。

これ以前のヴェイクロにはいいものが沢山あった。私は、いつか、それについて何か書いてみたいと思っている。

従来の材料でかかれたものでは、持ち運べないもの・壁画、が多く、持ち運べるもの・カンバスや板にかかれたもの、は少なかつた。それが油絵が一般化すればするほど逆になっていき、大きなカンバスにかかれた壁画風のものや、ややこれに近い芝居のバツク、などを残したが、本当に壁画といえるものは、ついに見えなくなる。

そのころのヨーロッパには三つの大きな出来事があった。即ちルネサンス、プロテスタンチズム、新世界、両アメリカ大陸の発見（実は公認だったと考えられている）。

なにしろ、これは、中世紀二百年近くも続き前後九回、（少年軍もいれて、）にもわたった聖十字軍のためにおきた混乱さもようやうおさまり、各地に独立した国も増え、新興政治的勢力ブルジョアが抬頭したころだったので、その当然な結果であった。当時、イタリアでは小共和国が群立していた。

ルネサンスも、すでにそのころの封建制度の中に芽ばえていたブルジョアの文化運動の一つだったことは、いうまでもない。が、それでも美術家はまだメッセナを持たなければ、いいかえれば貴族の支持・擁護がなければ、生きていけなかったのである。

さらにこれの美術は総じて写実的ではあったが次第に形式に流れデカタンスのものになりながら、まずバロック様式からロココ様式を経て、ともかく十八世紀の末まで続くのである。この形式

化には一応うなずける理由はある。

その主なものとして私は当時の徒弟制度をあげたい。

師匠のがわから見ると、自分が或るスタイルを創りだしたのも苦心の観察の結果なのだが、こうした苦労は弟子にさせたくないという、いくらかの老婆心もあったかも知れないが、それよりも自分が創りだした型を、または自分がおぼえた型を弟子に教え込む方が利益になったのである。というのもも当時は大概の仕事は師匠とその弟子たち、と一緒にエキープでされたからである。

この場合、弟子の主観は、かえって邪魔になる。

今の、先生と生徒の関係と、昔の、師匠と弟子の関係は大分ちがう。当時の師匠は腕のいい職人であり請負師でもあった。弟子はその職人であり、助手であり、時によっては奴隷化された奉公人でもあった。

そのアトリエは現代の建築事務所のような組織であって有給のものも多くいたことと思える。そこには内弟子と外弟子もあったであろう。弟子でなくて通いの職人もあったと思える。ニューレインベルグのアルベルヒ・ジュラーのアトリエ（オフィシナというべきか）には少くとも四十人ぐらいの職人がいた形跡がある。渡りの職人もいたらしい。

これをまた弟子のがわから見ると、年期さえ明ければ有給の職人にもなれるし、うまくいけば何時かは独立して師匠のように請負師にもなれるという希望をもって、その家に住み込み奉公までしたのである。貧乏がそうさせた。束脩をだし、月謝を払って勉

強した弟子も相当いたらしい。外弟子が主だったようである。

後に独立できたのは大抵この人たちである。

半分奴隷だった内弟子からでも師匠まさり、所謂出藍の誉で、独立した人もないこともないが。というのも、この人たちは、例外は別として、貴族やブルジョア、特にこれから出ているからである。事実、そのころはブルジョアでなければ美術家として独立できなかったのである。これは今でも大した変りはないようだが、ともかくこんな徒弟制度だったから形式化は免かれなかったが、その代りある意味でおもしろい勉強が、絵画の上で、されているのに気がつく。明・暗をしっかりとつかむ。それである。

ここで一言いっておきたいことは明・暗と濃・淡の区別である。私たち日本人なら誰でも漢字のおかげで、これは何かちがったものがありそうだが、これは感じるのだが西洋人には殆どそれが無い。西洋のコトバにも強いていえば色の濃い・淡いに当はまるものがないでもないが実際には使われていない。

明・暗にも濃・淡にもクラーロ・イエスクーロという同じコトバが使われているので、これは同一のも のとして考えられているが、実はまるでちがうのである。

例えば、ここに白い物が日かげの中にあつたとする。これはどうみても白であるから、色としては淡い(クラーロ)のである。同時に、その日なたの中に黒いものがあつたとする。これはどうみても黒であるから色としては濃い(エスクーロ)のである。所が、明・暗では反対になる。日かげの白は色としてはクラーロな

のに暗く(エスクーロに)なり、日なたの黒は色としてはエスクーロなのに明るく(クラーロに)なる。

これを見てもわかるように、明・暗とは光と影の差だけをいい、濃・淡とは色彩のそれだけ、つまり色差だけをいうのである。明暗と濃淡、そのどれをとり、また、どこをどれだけ活かし、どれだけ犠牲にするか、などということ、同じ写実でも、その画風が変わってくる。だが当時のエカキたちは(ルネサンス期の大物もふくめて)、観念が一つだったせい、この前者だけをとったのである。そして明・暗にたいして敏感になるように自分たちの目を養っていく。

これを正確に見別けるために真黒い硝子、真青な硝子、硝子の裏を黒く塗って鏡にしたものなどが使われた。目の機械化だったともいえよう。

こうしたありかたでも廃類期に至る前にはかなりの数の師匠が生れてはいるのだが、大局的にはますます形式化され色彩感にとぼしく、あのルネサンス期の自由さもなく、個性もなく、いわば型どおりの冷たいものになっていった。十八世紀末の絵画がそれである。

十九世紀の初め、フランスに「写真」というものがあらわれた。一八二九年、画家ルイ・ダゲール発明、一八三九年、フランス政府これを買上げる。

これが科学者やメカニコなどによらず一画家によって発明されたのも決して偶然ではない。当時のエカキはこういうものを目的

とじていたからである。

まあ、これはコトバのあやで、少しナンセンスであるが、写実の「実」と写真の「真」をおきかえてみればうなずけることと思う。

明暗の正確さをつかむことが絵画の目的と考えていた当時の人にしてみれば、今でこそ写真みたいなものとは時には馬鹿にされるが、そういうものを真剣に、ここのコトバでいえば、オネスタメンテに、追求していった、のも無理もない。

話は変わるが、昔から「目だましエ」というのがあった。フランス語 *Trompe l'œil* .

いつから、こうよばれるようになったのかは詳かではないが十六世紀以後だと思える。だがこの描き方はギリシヤに古くから去つたらしい。

ついては、こんな話が伝わっている。昔、ギリシヤのあるところに二人の偉い画家がいたが、どちらがより上手かということ、いつも口論ばかりしていた。そこで日をきめて、ある広場に群衆の前で、おのおの作品を持ちより腕くらべをしよう、ということになった。約束の日、めいめい、幕をたらしした図板を小わきにかかえてそこへきて、ふたりとも図板をまずそこに用意されていた台の上にならべ第一の者が自分の図板から、さあつと幕をひきはらずと、そこには生き生きとした葡萄の房がかかれていた、その時、突然一羽の小鳥が飛んできてこれをつついたのである。割れるような拍手喝采の後、得々として次の者に「今度はあなたの番だ、早く、その幕をとって作品を見せてくれたまえ」といえ

ば「それはできない、この幕はかいたものだから」と答えられた。そこで第一の者は「わたしのは小鳥の目をだましたが、あなたのはエカキの私の目までだましたから、これはわたしの負である」と感心したという。

これは云うまでもなく作り話であるが、よく「目だましエ」とは何であったか、を説明している。

「目だましエ」は写實的絵画の一分派ではあるが、その極端なものでもいえよう。

これをするには特殊な技巧が要る。これに使う遠近法でも普通のそれと違ったいろいろの約束（コンヴェンション）があり、明暗のかき方にも亦いろいろの型があつて、むずかしいことは、むずかしいが、一応こういうことを全部おぼえてしまえば、なんてこともないのである。あとは型どおりに描いてさえいけばこと足りたからである。

私なども、こういうものを知っておくのも満ざら無駄でもあるまいと思つて勉強したのでその技巧全部を身につけていると自負しているのだが、芝居などの背景画以外には、これを応用していない。また、してはならないと思う。

壁画の一部分と劇場などの背景画に限り「目だましエ」は役にたつのである。

それなのに十七世紀から十九世紀の初めまでの普通の絵画も「目だましエ」になつていくのが多くあつた。

「写真」が発明されたのも十九世紀の初めだったことは前にも

云ったとおりだが、これを発明したダゲールは、なんと「目だましエ」専門とも云える、オペラの背景画々家だったのである。

これをただ偶然といえようか？。

十九世紀の初めといえばそろそろ、のちに健全期と称された初期の資本主義的な考え方が、つまり労力の機械化によって多量生産をなしコストの低下をはかるといふ考え方が、うまれていたはずである。

このような考え方と前記の当時の絵画の目的とでもいえるものにこたえて「写真」がうまれた、と私は解している。

これがでた当時は職画家は大して気にもとめていなかったが、だんだん発達して三十年もたつと、その先の見透しもつくようになり、そう安心しているわけにはいかなかった、すなわち一八七〇年ごろになると。

それまでにフランスには一七八九年・バスチーエの陥落を期として、国内的、対外的にさまざまな政変がねこっていくが、これは結局、封建制度が完全に崩壊してブルジョアの世界になったことを示しているにすぎないと思う。

フランスのブルジョアは少しでも封建的なおいのあるものをとりのぞいていった。美術の徒弟制度などは真先に槍玉にあげられて一般科学と同じく学校制にくり入れられる。

その先生として招かれたのが例の職人あがりの、請負仕事もメッセナも失なっていた師匠たちであった。ここからアカデミズムも生れる。

封建制を葬ったころのブルジョアには、あの貴族が持っていた芸術より以上のものは、ありえなかつたし、その趣味も低級なものだったのは当然である。

どうしてこれを抜き、追いこそうかと努力のすえがブルジョア文化・ロマンチズムである。一八五〇年ごろが一番華やかであった。

ユーゴー、バルザック、リスト、ショパンなどは、そのころの人。画家ではドラクロア（一七九九—一八六三）が代表的な存在であった。

ロマンチズムのおかげで一時はエカキも職業として復活したが、やがて、一八七〇年をこすころには、どうにもならなくなつていく。

「写真」が急に普及しはじめ彼らの日常のパンをうばうようになったからである。

こんな黒い小さな箱の機械でもエカキがそれまで考えていたエの目的に近いものが、しかも、正確に、迅速に、多量に、安価にできるのだからたまらない。

そこで良心的なエカキの中には一種の自己批判がはじまる。悲惨な自己批判でもあった。次の結論に達したが、そこにはブルジョア革命のスローガンの一つであった「自由」という言葉が生きてき生きたとして使われてくるのが目につく。

この機械にはないが我々人間だけに与えられたものは自由である、我々には物の形なり、色彩なりを強調（必ずしも強めること

を意味しない、弱めることも含む）する自由があると、まず叫ばれた。

それも「どう感じたか、に応じて、しなければ」というのが印象派であり、いや、「絵画構成の必要に応じて、しなければ」というのが表現派である。

前者は主観に重きをおき、後者は（これは随分おくれて一九一二年におこったのだが）客観に重きをおいたものといえよう。

それでも、まだ当時の画壇はアカデミクの世で、職人あがりの腕はあつたがあまり教養もないような人たちが多く巾を利かしていたので教養のある新興勢力ブルジョアにとっては、もう時代おくれなものになっていた。どこからかアンチ・アカデミクの声が生まれるのは当然なことであった。

印象派はこうして二・三のプロ画家を例外としてアマチュアーと見くびられていた人々によっておこされたのである。一八七四年のこと、一八六三年という説もあるが、一般にはこれが信じられている。（つづく）

原稿用紙

☆コロナ文学会、特製

文学作品執筆用、原稿用紙（20×20）

紙質優良、美麗、格安 百枚綴り一冊、ニコント二百。

◆本会宛御注文あれば直ちにお送りします。

（編集部）

短歌

山の孤独（30首）

陣内 しのぶ

時経れば消え行くものゝ儂さを噛みしめつついて果液煮つまる
木洩陽の斑に温む木の下に金魚を飼いて夏蘭けにけり
向き変えし風の背後に揺られたるままに揺れおり花ブリンコは
無為の日に相逢う怯え吊るしたる柿赤錆の色に熟れつつ
封印を剥ぎつつ惟う孵らざるもの温めし長き月日を
かまけたる月日の長し冬の灯に烙印のごと白し指の根
方位なきかそけさに冬の雷鳴るを聞きおり熱きアイロン持ちて
めくるごと鮮しさあれ唐突に躰の中にたつ一つ碎音
沼百合の群落果てしなく続き踵つどの顔も過去の関り
関りを断ちて惟えば煙のごと曖昧となる乱視の眼
淀みたる沼百合低く匂いたつ馳け抜けゆきしバスの後より
還るなきものばかりなる墓地に佇ち花密集すねずみもちの木
アガパンサス溶け入る空に覆われし丘の墓地わが手足も青む

さり気なく墓に背向けし刻に聞く造花の環の低く鳴れるを

墓地の坂緩く下りし刻のみを繋がりいたり逝きし人等に

うすら陽に背温みくる思いとも人声独りのときに甦りて

カーテンの僅かに揺れて来る朝常たどきなし夢の目醒めは

慟悸して事故の現場に在りし夢醒めるしばらくをガソリン匂う

溺れゆく如き眠りよ垂直に来る死をむしろ希いなどして

植えかえすつわぶきの葉の縮まりに刷くほどしばし冬の没りつ陽

紛れざる思いに掬う谷川の水とめどなし掌よりこぼれて

瀬の音に消さるる低き呟きを洩らして山の緑が眩し

瀬の音に誘われている思惟も亦繋がりにゆく踵の冷えに

還り来る人の声ともせせらぎの密けさは聞く谷深く来て

身のめぐり微かに揺らぐ斑陽の中をうんかの群移りゆく

未知よりもかそけきものの甦り来と足滑べりたる土の臭いき

渦巻きて霧の押しゆく山肌に立ちしばかりの虹うすれゆく

戻り来て街の灯りにかざしいる山の孤独のにおう指先

灯の下に山草の花萎ませて活きづき返る夜の眼は

一つの鍵長く手にあり湿りつつ夜のくだちに匂う夜香花

幻想無限

川原比露思

幻覚は落莫にひそみいる虫を放たむとすれ秋冽き日に

脱落にかかわるなげきクワレズマのいま散りし花の象をさがす

ふかき翳曳き合うごとく歩みいてこころ渴きのごとくうずけり

清浄とならむ連想愉しむに裸木は樹液を噴きしたたらす

よじれつつ芽ぐめる蔦も追憶もわが裡ふかく軋みてやまず

白き炎のごとき葉群を揉みあぐる風がしばらく音立てており

夜のネオンの驕りのごとき点滅が幻覚の中に拡がりやまず

あさ露のかすかにしたたり韻くときみじろぎやまぬ木の芽を見た

り

枯草にうす陽あたれる野を歩みわが独白も泡のごと消ゆ

木棉の花脈搏つごとき朝の陽に幻想ふいにすべてと替る

薄ら日

南条由喜夫

唐突に高鳴く鳥への哀憐は吾のみのものか木群の繁に
虚をつきて空にこぼせし鴉の声重き曇の下にききおり
地の冷えと空とのひまに黒ぐると葉群息するフイゲラ一樹
島とわが立つ岸の間にせめぎ合う水の鳴動そこごもる音
胸さわぎする吾の眼に魚のはら夜の灯にあわれ青透き光る
苑の芝濡らし去きしが薄ら日の空あそびゆくその雨の彩
夏木々の葉群とざして落葉みち湿りもつ葉を柔かく踏む
アラポンガ飼われ高鳴くその声の鋭どき中にこのリズム感

白き枯葉

小笠原正好

匂い持つ大樹の下に人間ら憩いあうとき土潤いぬ
みどり光る抱擁固く静まりて地底に張りし樹根の息吹き
己が血を舐めて醒めたる童心は風にまかせて舞わせやるべし
反応なき白き枯葉を敷き重ね三角形の黒き大木

夜の海

貞野雅子

海老赤くほされし浜に晴ればれと潮わたり来て風光るなり
その昔インジオ住みしという島の貝殻の山白く光れり

霧雨のけむる朝をいで船の汽笛聞こゆるとぎれとぎれに

夜の海に灯火一つかがやけばわれにしはしのやさしさ甦る

十年（30首）

瀬崎涛声

生き暑き夏とはなりぬ家路の藪にはさいかちなども茂りて

風邪の熱漸くおちし夕べにてさくさくと林檎の齒切れよき味

畑裾の一群の竹昏れはてて其処のみに涌くごとき虫の音

作事にていたみし庭のたはらぐみ漸く一果をむすびて赤む

躬を揉むが如くに風にあらがえる高草見えて昏れてゆく窓

いくたびも出できて庭に跼むのも無為の一日の我のなぐさみ

自生せるアスパラガス見れば蘇る茲に苦しみし農の十年

読み物に倦めば庭にゆき窓にゆき昏れ遅き今日の一日なりしか

墓参人混み合う中に掬摸おりてすりをはたらく怖しき世よ

散策のわれに伴うごとくにも夕月は移らう我がゆく方に

一団のくも屋上にはびこりて喚くがごとく雷鳴りはじむ

小さき渦うかべて川のみずほ逝く時のながれの具体のごとく

通学バスの椅子に落書きはなれど流石は学生性器図はなし

いづこなる野に野晒しとなれる子か既に十年在処を知らず

既存国イスラエル認めぬアラブ等のその頑蒙は神もすくえじ

処女等を見て怡しきは齢わかき日のみにあらず老のいまもまた

我の死と俱に廃れむこの書かと邦語辞典の背をなでていつ

道の上に墜ちころがれる木の青実ふむに惜しくて避けつつ歩む

不吉なるものに遭いたる心地して崖に見て過ぐしるき夕ばな

おのれ慾り籠る孤独の我にして人恋ふ時のありて出でゆく

たぎる湯を嚙み込む如きせつなさの時折おこる我が裡にして

蒟蒻好きの妻がまきたる蒟蒻玉生えそろいきて庭畑青む

歩みきし元日の庭一叢の葉びろさといもありてつゆけし

おもおもとアバカテ実り重々とくもる日多きこの十二月

ただたもち来し消極の生にしてまた一歳の馬齢かさぬる

すすけいし庭の小松も芽をふきてちかづく明治百年の新春

年変るとき近づきて我家への道草刈られ枯れくさ匂う

ともすれば燃えつきしごと甦り我が胸を焼くこれの悲しみ

借られゆきて帰り来らぬ我が本の中にまじれる新約聖書

明日あるは判らぬ老の命なり机上のものはととのえて寝む

川柳

昭和元禄(50句)

川下白舟

一滴の露黎明の陽を妊み

陽を拝む明治生れの手が拝む

鍬ダコは古いが俺の掌にある

餌あさる小鳥にも似て妻と吾

五月晴れ生れた孫は男の子

皇太子殿下来伯二句

一万里此所ブラジルの日本晴

皺の顔涙で濡らす今日の幸

此の世の花咲いて人増え墓も増え

落日や人は死ぬべく生れたり

残照に似たる余生をいつくしむ

ふるさとに残るは父の墓一つ

神様を信じて神に崇られる

ネクタイと背広嫌いな生れつき

交通税納めた帰り事故で死に

旅から帰って宿便排泄

百姓の余技で詩の屑川柳屑

忙中閑あれば花植え詩を創る

火の玉となって火の車押す

秒針に急かさされ時針ノロノロ歩く

ソロバンをはじけば百姓など出来ず

哀しからずや霊長臭きものを放る

戦場が墓場となって来る平和

原爆の下で手相を見て貰い

清濁二流濁にひしめく魚の群

亡母忌二句

生き抜いて死ねと亡母に教えられ

為す術も知らず解らぬ経を誦む

労働法知らぬ百姓の流す汗

働らけば食えると蟻に教えられ

作らねば食えず作れば損をする

錦着る夢だけ税金要らぬなり

労働祭百姓黙って只働らく

引込んだ杭で打たれずフラフラ

古池を海と思って住む蛙

音もなく崩れる塔を胸に積む

放し猫迷った所で子を増やし

死んでまだ極楽へ行く夢があり

教会と刑務所が出来町となる

フンドシを古いと嘲笑うミニサイヤ

冬將軍来いと裸木の無抵抗

常夏の国に白魔がしのび寄る

地球儀の日本を探す老眼鏡

群雀はさえずりタカは爪を研ぐ

めんどりも唄い昭和の世は栄え

俺が私が俺がと妻と老い

昭和元禄我が世の春を歌う鳩

昭和元禄虎もいつしか猫となる

昭和元禄俺に習えと眠る猫

昭和元禄何処かで明治の銃の音

昭和元禄此の世の花は咲き乱れ

昭和元禄柳芽をふく地球裏

偽飾

坪井柳念坊

貪欲の縮図はこれだ世界地図

日めくりの非情命を削り剥ぎ

二枚舌の演技うっかり拍手する

マニキュアほどこす原始のままの爪

領海を決めて魚に噛われる

脂粉遠くひたすら妻の座を守り

手も足も二つだ二枚舌の抗議

家計簿の赤字へそくりの憤死

浄財を集めた汚職の面構え

守銭奴にまだ無駄がある煙草の輪

ドラセーナ川柳25人集

やんわりと弱みをついで頼み事
和田 夢岳

退屈をさせぬも技術名司会
”

空腹にいても女の虚栄心
和田 光女

育て上げた十人十色の子が揃う
”

菊の花匂いはやはり祖国の香
真実 一朗

下手な句があつて上手な句が光り
”

同じ道同じ悩みで語り合い
草井吐詩朗

バリバリと裂く不履行の契約書
”

脛かじり学徒こしやくな政治デモ
高山伯山子

死の灰を越えて萌え立つ新日本
”

歳月は己が成功待ちもせず
村上 閑坊

ジョンソン忿怒を飲んで和平の手
”

燈着て一派一流和の集い

水野まる女

子にかけた願いつぎつぎ崩れ行く

”

今日も我人の流れに溶けて生き

仲松 道泉

盛り立てた山サイコロで打ちこわし

”

針を持つ術さえ知らず恋を知り

坂本 独歩

巖の松生きねばならぬ身の構え

”

足跡は我が理想には小さ過ぎ

中島 芳人

曲り角ばかり我が道見失い

”

本を積み上げて己れの城をつくる

山口振風

餌の味針の痛さでしかと知り

”

模造品かけて虚栄を満たす影

山口 輝女

増えて行く掟の縄にもがく群

”

裸でも笑顔で生きる道があり

岩田 太陽

儲けたい心と逆な怠惰心

”

死の線に立てば来るのは妻一人 河崎 天流

鞭の数一つ一つが智恵となり ”

子を背負い夫の十字架抱きしめて 河崎ちどり

お手盛りは民のかまどに知らぬ顔 ”

振り出しに戻る肩書邪魔になり 武田五百子

人の世に金は波紋の立て通し ”

肩書が浄財こっそり食べていた 富吉 剣磨

カアツと来た怒り年輪がなだめてる ”

百姓に挑む夫婦に詩の杖がある 金沢 風洋

抵当の牛蒡える草踏んで去る ”

片道の旅だ足跡残したい 上野 明星

ひたむきの恋は国境越えて遂げ ”

貧乏であつても明るい家庭の和 吉田 千秋

明日あつて今日を生き抜く人生苦 ”

出る杭を叩いてそれを高く見せ 石井 鳴子

燈がないから闇が存在する ”

生き抜いていつか自信の顔が出来 有坂 正南

俺だけでなかった悩みで気が晴れる ”

正確な秤が欲しい人の道 三分一防長子

辞書よりも便利な古老の生き字引き ”

子に夢が託し切れない長い髪 渡辺仙利坊

流し眼に応えてとんだ汚点がつき ”

軸

誤算のまま計算器にかける

つつましく心に拾う今日の幸 以上

推薦・坪井柳念坊

俳句

十年の空白

鈴木光威

鶏刎ねて血に染む空や労働祭

推理の酒場生温き掌が胡瓜揉む

落暉いまバツタの恋の青く果つ

心臓が春の灯に透き少女の弁

厄の暮イエスを直す釘打てり

主婦の弁まろし金魚はゆるやかに

真実を白く返して蟹の葬

愛の区の間端然と早り糞

梅雨を来し日雇牛肉(にく)を秤らるる

十年の空白秋の鶏を絞む

皇太子御夫婦をお迎えして

ブラジルの五月をよくぞ撰り給う

この目朝刊菊の御紋を輝かし

この目地球一回転の菊の晴れ

天高く万歳と涙噴射する

殿下

御声の朗朗と大陸の秋

天高く五指広げ振るみ掌太し

石川芳園

妃殿下

サンタカーザ御訪問

脂粉をきがんばせ白菊壺に流れ

一瞬の彼我の涙も爽やかに

世評

「レセベボン」と短かき賛辞も日短かき

移民は棄民であらざりしかな菊の晴れ

スバル文芸会主催

第五回スバル七曜全伯俳句大会

一九六八年四月十四日、マリリア市日伯会館で、全伯「スバル」七曜」大会が催された。これは、長谷川清水氏主宰「スバル文芸会」の主催した大会である。マリリア市々長、市会議長、副議長、日伯文化協会々長、などが出席して、祝辞を述べ、それぞれ勝盃を寄贈して、文学を奨励した。本会からも武本編集人出席、大いに文学交流をはかった。

大会投句者百四十名、出席者約百名、非常な盛会であった。近代俳句系全伯著名選者、日本の天狼、七曜系選者の選句が披講され、席題吟また賑やかに、華やかに句題が敷かれた。

高点句 五句 (兼題)

滅多打ちせし盆太鼓カバ―被す

天村

豊年や乳房たたいて児に与う

九十九

乙女らになき喉ぼとけ卒業歌

清水

頭より抜くピンぼろぼろと風邪に臥す

艶子

プール守りプールに泳ぐ刻もたず

清子

高点句 五句 (席題)

石(かすれ解読不能)に生きる路あり復活

清流

完(かすれ解読不能)晴れ男も嘘つけず

清水

大根引きし穴耳澄ます復活祭

光威

復活祭磔像何ものたまわず

風知

復活祭みどり児独り裏返る

欣香

大会は、内田暁香氏司会で、とどこおりなく進められ、披講の
声もさわやかに、和氣堂に満ち、俳句三昧を楽しんだ。

マリリアには、現在、長谷川清水主宰の「スバル文芸会」、「遠山
颯子主宰の「縁先吟社」がある。また隣市ガルサには寺尾蒲城主
宰の「自鷺吟社」があるが、いずれも天狼系で、句作に励んでい
る。

旧作・再録・その六

転蓬（てんぼう）

古野 菊雄

「転蓬」は、昭和三三年発行「文芸首都」六月号に掲載された作品である。古野氏の作品としては、「オロシヤの見える午後」などよく知られている。「転蓬」を知る人は少ないと思い、紹介した。（編）

半開きにしたドアから、顔をのぞかせて、

―雪！（ネーヴエ）海も甲板もいっぱい。雪（ネーヴエ）！ はやく来なさい、秋田さん！

いつもはまるで感動というものを知らないジュオンが、息をはずませている。

―秋田さん、氷菓子、エ？

白い兎の襟巻をしたジュオンの八歳になる妹のルイザが秋田の腕にぶら下って来た。

―抱っこしてやろう、ルイちゃん！

三人は一塊りになって後甲板に出た。ジュオンの報告はまったくだ。一面の雪であった。極地の白夜とはこうした感じのものであろうか、明け方とも夕暮ともつかない不気味なまでに静まり返った薄明であった。

その薄明の中に、海上とは思えないひそかな雪である。午後は雪かも知れませんが、気圧が低くなっていますから、お久しぶりでしような、雪も——。今朝、無電局で会った二等運転（セカンド・メイト）士がそういった時、秋田は、何となく胸の疼くのを感じた。

学生であった頃、下谷の鶯谷近くの下宿していた彼は、その陸橋に立って、東北の方からの汽車が、東京には未だ見ない雪を、車蓋の上に乗つけて、橋の下を通過するのをよく眺めたものであった。

新たに巡って来る季節を待ち侘びる気持を味わうことがなくなってもう幾年だろう。

∴ Oh, neve, COMO a saudade,
Caes leve, caes leve, ∴

（雪はふる、追憶（おもいで）に似て

　　かろやかに　かろやかに……）

という詩、知っているかい、ジュオン、と秋田は、水平線の横たわっているらしいあたりを雪の中に凝視しながら、つぶやくように訊ねた。

——俺　知らん（ノンセイ）。

すると、黙って抱かれていたルイザが、秋田の髪の毛をひっぱって、

——追憶（サウダーデ）って、なあに？

——どうも、こいつは難しいや。ジュオン、お前、兄さんだから教えてやってくれ。

——サウダーデちや、ほーら、うんそうだ、ブラジルに居った時分、夕方になると、俺（ヨ）ら豚小屋（シケイロ）にミーリヨもつてやったろ、じゃけん夕方になると、俺（ヨ）ら、豚小屋（シケイロ）想い出す。あれたい（アケレ・メズモ）ねえ、秋田さん。

秋田は思わず苦笑した。

——まあね、わかったかいルイザ？

するとルイザは、肩をすくめ、外国人のように眉をあげて、ノンと答えた。

——馬鹿たれ！

と言って、ジュオンも笑った。

鼻の先を赤くして、兄妹は甲板の上を走り廻り、雪をけちらしてみたり、両手でまるめて頬にあてがったり、嚙ってみたりし、何か突飛なブラジル語で興じ合ったりした。

雪というのは、いわば氷菓子のようなものだ、と何時か父親に聞かされていたこのおませの小さな「ブラジル娘」のルイザが、最初に味わった幻滅は、雪がただ冷たいばかりでちつとも甘くないことであつたに違いない。もしかしたら、十七歳のジュオンも同感だったかも知れない。

——冷たい（ケ・フリア）なあ、糞！

ジュオンが、持っていた雪の塊りを甲板に投げ捨てようとする

のをルイザがもぎとり、

——あ(ヨ)たい 母(ママイ)さんに見せる。

そう言って、船室の方へ走って行った。

静かなのも、僅かの間であった。低気圧圏内深く船は入ったらしい。アリウシャン群島のすぐ南を、日本海流に逆らって、船は一晩中、悲鳴に似た軋みを響かせ、ひっきりなく身震いしながら吹雪を衝いて疾走した。

秋田はその夜、とぎれとぎれに夢を見た。どれもブラジルの夢であった。一つの夢は、ソロカバナの田舎道らしかった。視神経のしびれるほど濃い蒼空が、大円蓋のように頭上にあった。花のひらきかけた木綿(バイネイラ)の大樹があり、その蔭に、秋田は母と坐っていた。耕地を出て、リオ・デ・ジャネイロに行く日に似ていた。

秋田は空を仰ぎ、水の中に青空ありて……という聖書の中の文句を考えていた。母は靴を脱いで脚を草の上のぼした。雑草の上のぼした。雑草に混ってきんぽうげの花もある。砂蚤(ビッシヨ)をとってあげまっしょ、そう九州弁で言って、秋田は母の足の指に手をのぼした。すると、あたりが急に朝焼けのようになくなった。木綿の花が満開となって花びらが落ち、仰ぐと高い梢に耕地の混血の娘たちが、未熟な果実の房のようについて、秋田の方に向かって何か叫んだ。

ポツンと、夢はそこで切れて、目がさめた。秋田は寢床から起

き、よろめきながら船窓の、二重に締めた鉄製の窓蓋をはずして、硝子越しに外をのぞいた。波は窓を叩き、雪も降りつづけている。キリキリキリ……と、今にも船体が裂け砕けるかと思えるような軋みに混って、海燕の啼き声がした。

秋田は寢床に戻り、潮とかび臭い毛布を頭からかぶって、ブラジル！ ブラジル！ と声に出して言った。

水面をはげしく板か何かで叩くような音がつづいて二つした。ま、そないしやはらんかてええだっしやる、なあ、あんたはん、あてからもお詫びしまっさかい……ねばっこい大阪弁が、その弾力のある音につづいて、特三食堂に近い売店のあたりで渦巻いた。

船酔いで昼食を摂らない者が多く、それでも食堂には十五、六人の船客があった。一斉に、音のした方に注いで怪訝な視線の中に、秋田が若林という同年配の青年になだめられながら姿を見せた。そのかげに隠れるようにして、真紅の外套（カザツコ）を着たルイザが船の動揺によるめきながら、ついて来るのが見えた。

——どうしたんだい？

いつも秋田と食卓を同じにする青年たちが蒼白な顔をした秋田の、席につくのを待ちかねて訊ねた。

——一等の給仕なんだ、殴っちまった。

食卓につくと、ゆっくり茶碗に茶をついだが、口にもって行く手はまだ興奮にふるえていた。

——ミイになぜ知らせません、ミスタ秋田。

ミイも十日間、運動不足です。ハハハ……。

隣席から、カリフォルニアの大学生の谷がぎこちない日本語で、やじった。

——ルイザが泣いて上から帰って来たんだ。どうしたって訊くと、あいつが上の社交室の一等船客たちの中へルイザを連れていったらしいんだ。

——元来、気障な野郎だよ、アス。パラガスみたいな面（カーラ）しやがってさ、ムーチョ・ビエン！

ブエノス・アイレスで洗濯屋をやっていたという青年が、腕組みしながらおだてるような口調で口を添えた。

——始めは、そんなつもりじゃなかったのかも知れない。が、ルイザに、雪のまるめたのを持って来て、こう言ったというんだ。これは冷たい球（ボール）だけれど、大切にしとけばこのまま日本に持って行けるからポケットにしまつときなさい……。

誰も苦笑するばかりであった。

——……そして、こっちへ来てストーヴにあたってらっしゃい。この子も、始めは喜んでいたらしいんだね。が、そのうちポケットからぽたりぽたりしずくが落ちて来た。球がなくなった。そして今まで喜んでいたこの子が泣き出したのが面白いというので、そこにいた外国人も日本人も大笑いした、というんだ。

——そこで、その幫間ボーイ奴、大いに面目を施した、という次第かい、チエツ！ プータ・メルダ！ 向かい側から、充血した

眼を剥いて秋田をまるでその給仕でもあるかのように睨みつけたのは、リオ・デ・ジャネイロのある富豪の家の庭番だった男である。毎晩一人でランプを弄び、火酒（ピング）を呷り、果ては秋田の部屋に時間も構わず押しかけて来て、

——慶応四年、アメリカ公使フアルケンボルグが唱導した局外中立なるものの真意を秋田君、貴公どう解釈する？

などと突飛な質問を発しては、幾時間もねばる男である。

秋田は、度の強い近眼鏡を光らせて、黙々としている若林に、
——考えてみれば、何も殴るほどのことはなかったんだ。しかし、僕は、ただ、むしろ腹が立ったんだ。僕自身、白状すると移民であることにひきめを感じている故か何かこうブラジル移民全体を愚弄されたような気がしたんだ。

秋田は、ルイザから事情を訊くと、その一等船室付の給仕を下の方に呼び、軍隊風の平手打ちを給仕の左右の頬に与えたのであった。きめの細かな、女性的な頬の上に、掌の跡のつくほど強い打ち方であった。給仕は泣き笑いに似た表情を浮かべたまま反撃一つしようとしなかった。それがまた秋田の感情を一そう亢（たかぶ）らせた。三等の給仕たちが秋田をとりしずめた。

——秋田君、あとで僕の部屋に来んか。

と若林が、黙りこくって茶をすすっている彼の肩をかるく叩き、席を立って行った。

——とにかく、大人気ない振舞だったよ。

やっと平静をとり戻した秋田がこうつぶやき、ふと三、四人へだてた横手を見ると、ジュオンが、人を憚るように、右手で食器を覆いかくし、危なっかしい手付で箸をあやつっていた。日本船に乗ってから、生まれて始めて、箸というものを握ったのである。

ブラジルの生活とは、日本船に乗った日にすでに橋梁は破壊されていた。周囲はことごとく日本であった。この十七歳の二重国籍者に注がれる眼には微塵のハンディキャップもなかった。茫洋とした大陸の自然児が、けわしい日本の社会で受ける無限の試練は、はやくも、楽しいはずの海の旅で行なわれていた。箸も使えない。日常の日本語もあやつれない、薄馬鹿！ 彼に注がれる白い冷たい眼差が彼を盗人のように食卓におびえさせ、訛りの多い両親の故郷の言葉を舌たらずに、おずおずとしゃべらすようになったのである。ルイザも兄の蔭にいた。

——ジュオンもルイザも胸をうんと張れ。箸なんか捨てて大威張りでフォークを使って食べるのだ。

お前達が生まれた国のブラジルの言葉で、誰憚からず大声でしゃべるのだ。そんなにちぢこまってるよ、日本に行つて、毎日、雪の球（ボール）をポケットに入れられるぞ！ 秋田は、出がらしの茶を、船会社のマークの入った、菓罐から、ついでは飲み、ついでは飲みしながら、人いきれで曇った舷窓の向こうに上下する、北太平洋の冬の、歪んだ水平線を見つめた。

ブ ジ ゴ キチヨウヲシユクス コヤマホテル 早くも横浜の未知のホテルから、船客の誰彼に宛てた電報が打つてよこされた。

——せち幸いのね、日本。何だか気が許せない感じだわ、母国へ帰るというのに。

若林の妻の牧子が、秋田の読んでいる電文をのぞきこんで、つぶやいた。

——牧子、あまりとんがらないで、まあサンキストでも出せや。

弾いていたギターを寝台の上に投げて、若林は秋田と並んで腰を下した。

蜜柑箱からとり出したサンキストに、牧子が器用な手つきでナイフを入れると、花束でもばらまいたように、狭い船室いっぱい、甘美な香が漂った。豊饒な大地に育った果実の色にも香にも、若々しい奔放さがあつた。

一片を口に入れると、甘い中に柔かな、舌を刺す冴えた味わいがあつた。味はブラジルのラランジャに似てはいる。しかし、ラランジャのそれは、たよりない甘さでしかなく、かつてフランスの消費市場で、柑橘としての風味を欠く、というので不評判を招いた、とあつた経済記事を秋田は記憶に浮かべた。

ブラジルで風味に乏しいのは、果実ばかりだろうか。

——カリフォルニアの果樹園の中でも、日本人が いろいろと悩んでいるだろうな。

若林は、一つのサンキストを、掌にのせ、目と水平の高さに挙

げて、誰へともなく言った。と、ドアにノックの音がして、谷が長身を曲げて入って来た。

派手な緑色のジャケツを着ている。秋田が、見上げて、

——何だ、基督一代記の中の、気違いの役でも演るみたいなやつを着用に及んでき。

——シューア！ 緑（グリーン）は希望のいろ。夢（ドリーム）見よ、緑（グリーン）の！ ですよ。

——ま、おかけなさいな、谷さん。

——カリフォルニアの若い衆、懐しのサンキストを 喫し、而して汝のロマンスを物語れ、だ。

若林が腰かけに余地をつくりながら、谷をからかうと、谷は仰山な身振りで、——ロマンス？ 僕のですか？

——シューア！ 牧子が、谷の口調を真似たので、当の谷までが一緒に、どつと笑った。

が、谷は、やがてケロリとした顔付に戻り一瞬黙っていたが、急に思い出して、

——おおゴツデム！ 大切な通知の役（インフォメイション）を忘れてたっけ。今夜特三食堂でキネマがあるんですって。午後七時かつきり。そいじや、また来ます。やれやれメツセンジャ・ボーイは忙しい！ バイバイ！ 谷は一気にそう言い、軽業師のような投キッスをして、廊下を走って行った。

——ヤンキーの中で育ったのは、派手だなあ。

と若林は、秋田と牧子の顔を見ながら言い、三人は苦笑した。

——あの谷さんを見ると、つくづくブラジルの子は、みんな憂鬱だと思うわ。早熟てるからでしょうか 秋田さん？

——僕、何かの本で読んだんです。ある世界旅行者が、こう言っただんですって。自分は世界を歩いたが、ブラジルほど子供が憂鬱（メランコリック）なところは何処にもない、って。この本の著者はブラジル人ですが、

その旅行者の印象をとにかく肯定して、その主な理由は、ブラジルの子供が、他の国よりも早く生活戦線に動員されるからだ、と言ってますね。十二歳にもなれば、もう一家の大切な「臨時収入」を負担するし、十八歳にもなれば一家経済の欠くべからざる要員となる、と言っています。

——奥地なんか、ひどいですわね、早くから立派な一人役をさせられていますものね。

——僕が日本人の植民地に入ってから、一番先に驚ろかされたのは、実生活の方面で子供たちがひどく早熟なことでしたね。どうかすると、大人が子供の声で話している、というような気持のしたことがあります。

——そうなんですよ。女の子なんか殊更ね。東京の場末の子どもよりか細かくって。

船全体が小刻みに縦震動（ピッチング）し、汽笛がつづいて鳴る。

低く垂れた雪雲と、疫畜の皮膚の色をした海面との間の、狭い空隙を辿って、始めの音がまだ水平線にとどかないうちに、次の汽笛がこれを追って行った。

牧子が起って行って、船窓から海面を眺めた。

——船かい？

若林は腰かけたまま、牧子の背へ訊ねた。

——いいえ。

——！島？

——昨日も今日も波と雲か。まるでサンタ・マリア号航海日誌だよ。

若林は手をのばし、ギターをとりよせて線を二、三度鳴らしたが、

——船も、こう涯しない大洋を航海していると、たまには腹いっぱい叫びたくなるだろうからね、秋田君もそんな衝動をブラジルで感じなかったかい？

——あつたね。

秋田はパラナとの州境に近い珈琲園の夕暮を想った。樹海という言葉は、正しく、その珈琲園から幾十軒と、地平線の彼方にまで目路はるかに連亘する珈琲園の巨大な起伏に与うべきであった。珈琲園からの帰途、牧場の柵に疲れた体をもたせて、その樹海に眺め入るのが、秋田の楽しい口課の一つであった。斜めの陽光が秋田の影を香の強いゴルゾーラ草の上に長々と映した。牧草の中に、ほうずきに似た野生のトマトの実が熟れていたりした。どこ

を見ても自分以外には人影一つない。自分自身もまたその中に没し去っている樹海の中で、秋田は、咽喉のはり裂けるほど大きな声で叫びたい気持ちに駆られることが屢々であった。しかし、おそらくその叫びも、無限の静寂にのまれ、一人の人間の感傷や咏歎のためには、牧草の小粒の実一つ揺れはしなかつたろう。

熱帯の海を通るとき、秋田は、この樹海を想い起した。海は正しい楕円形を描いて止まることを知らない。船をめぐり、その折々の調子で、海の色が、花の咲く前の珈琲園そっくりの色に見えることがあった。遠い涯から船めがけて来る驟雨（スコール）は、パラナ州境から樹海を渡って来る驟雨そのままだった。州境のあたりに、その雨を含んだ雲が陽に翳りはじめそれから半時間もすると、驟雨は、いくつかの銀の簾となって、秋田たちの働く珈琲園を包みに来る。

南京袋を頭からかぶった半黒や、イベリア半島民の血をひいた娘たちの、栗いろや小麦色の脚が、若鹿のそのようにすすきりと伸びて、濡れた赭土の道を雨と競って走るかと思うと、すぐ後の珈琲樹の茂みから、低くおさえつけた笑声がしのびやかに洩れ、——ここへ（ヴェンニヤ）お出よ、アキタ！ などと、彼女たちの、いたずらっぽい声がしたりする。

——アーヴィングの言草だったかに、航海は人生の空白（フランク）だ、とあったように思うけど、僕らには全くよくあてはまる言葉だ。これが秋田君の場合だと、ブラジルと日本の生活とをつ

なぐ力強いハイフンなんだがね。

と、若林は、とり外した眼鏡をハンケチで拭きながら言うのであった。

——僕、最近読んだアナトール・フランスのものの中に、こういう意味の文句があったよ。すべての変化は、よしんばそれが、最も祝福せらるべきものであるうとも、なお憂鬱をもっているものだ。というのは、我々が離れんとするものは、我々自身の一部分であるからだ。一の生涯に入るために、人は、他の生涯において死ななければならぬ、とあるんだ。失礼な言い方だけど、若林君が、ブラジルを引揚げるのに、何か敗北感を抱いているのを、どうかと思う。それはフランスのいわゆる、他の生涯で死ぬための憂鬱に過ぎんのじゃないか、と思うな。とにかく、君も牧子さんも充分斗ったんだものね。まあ賜暇帰朝みたいなもんで……

——賜暇帰朝にしちや貧弱ね！ と、牧子は、編物の手を止めて言い、三人は軽く笑うのだった。

若林夫妻は、ブラジルで五年半ばかり、奥地の植民地の生活を送ったのであった。が、若林の健康は、そこで鍼をとることを許さなかった。彼がマラリアで臥している間に、牧子は、男の子を産んだ。

ブラジルは、その歴史で何度目かの革命の最中だった。隣州の軍隊が、新鋭の機関銃をもって州境の大河を渡渉して襲って来た……そんな噂が拡まり、屈強な壮丁達のある者は鍼を捨て、響尾

蛇のいる原始林の中へ逃げこんだりした。その騒ぎの中で、男の子は急性肺炎で死んだ。

夜であった。山焼きの火焰が、闇の中に、遠い地平線の一角に小さく半弧を描いて紅かった。若林も牧子も、生きる日の限り、この遠景は忘れることは出来まい、と思った。

アルファの青々とよく生い繁った丘の共同墓地に、死んだ子を葬った。たくさんな十字架の中に、パラナ松を削った日本式の墓標を建てた。黒や白や半黒の植民地の子供たちが手に手にもって来た、コッポ・デ・レイチやいろんな野の花で、小さな墓標が埋まった。

——僕たちは、ブラジルの上になるんだ。

丘の道を下りるとき、若林は、牧子と自分自らに誓うように、そう言った。

三年つづけて綿を作ったが、害虫にやられたり、ひどく値が廉かったりした。マラリアの全治していなかった体に無理が重なって、健康は極度に損なわれてしまった。

その頃、北海道にいる若林の兄から手紙があつて、若しこちらに来て店の仕事に力を籍してもらえると非常に好都合だが、と書いてよこした。若林はその手紙を、雨洩りのする茅葺きの家の病床で読んだ。

家裏の沼地で鳴く蛙の音が、いつもより高く騒がしい晩であった。彼は殆んど夜明け近くまで、帰国のことを考えあぐんだ。考えは丘の小さな墓標と、アジア大陸の東方の、弓形をした列島の

間を振子のように左右した。

——日本へ帰ろう。そして俺達はもう一度人生へ挑むのだ。

若林は、腹の底からの大きな呼気でカンテラの灯を吹き消した。一瞬、闇の中に芯の匂いが、強くした。

船の動揺は少しも収まらぬまま夜に入った。特三食堂で映画が始まった。船暈で起きれない者もかなりあろうが、それでも食堂は満員だった。

映画は二種類で、最初のものなどは、もう十四・五年は経った代物であった。極く平凡な喜劇ではあったが、多分、切れたフィルムを継ぐ時、でたらめであった故か、幾百かの齧が逆であったり、表裏入り混っていたり、筋におかまいなしに前後入替えになつていたりして、船暈で調子の変になった気分と交錯して、まるで奇怪な夢魔の一卷であった。

——秋用さんも来とらしたばいの。

火酒（ピンガ）の強い匂いが襟元の方にして、振りかえると、テラ・ロッシャ（紫褐色土）の色と酒灼けとで、擬装を施した戦車の胴体のような、しかし、艶やかなジュオンの父親の機嫌のよい顔があった。

——あ、今晚は。おばさんは？

——ばあさんなあた、船に弱うしてどんこんなりまっしえん。留守番なしとります。

ジュオン達の母親は、夫より十幾つか年若かなのに、まるでこ

の男の母親ほどにも老けて見えた。油気のないばさばさの髪をひっくるめて、泥だらけのはだしで、齒の脱けた口を一文字に結び、夜明けから夜中まで働きづくめの主婦。まるで感情というものを喪失した役畜のように、原始林と棉畑と茅屋とを唯一つの世界として十幾年を働きつづけた女。彼女もそうした女の一人であつた。

男達は収穫期ごとに、原始林を抜け、棉畑を越えて、酒と売笑婦とサイコロのある町へ貨物自動車を疾走させた。日本人の集団地を多く控えた市街には日本人の安料理屋が幾つも出来た。不潔な皮膚が化膿すすのに似ていた。

殺虫薬に灼けた、骨張った大きな掌をした酌婦と声を合わせて、男達は十幾年も前に流行った日本の唄をうたつた。ジュオン達の父親もその一人である

母親は夜になると、カンテラの芯に火を移し、子供達を手製の寝台にねかしつけてから厨に行つて明日のためのフェイジョン豆を煮る。頭の光る大きな蛍が幾つも窓から入つて来る。蛍を見て、日本の村のことが想われたのはそれはもう遠い昔のことである。想い出もない、希望もない。山のようにのしかかつて来る仕事ばかりだ。故郷のことどころではない、しみじみと空を仰ぐことさえない女―母親。

ブラジルの農村では、日本人の女には中年という時期がない。が、男は何時までも若く艶つやしい。

例え僅かでも、とにかく金を獲て日本へ帰ることが「幸福」であるといえるならば、ジュオンの母親もまた「幸福」であるに違いない。しかし、船が夕方のサントスを出て、真珠の首飾を並べたようにまだ港の灯が水平線上に臨まれているのに、もう船暈で、三等の「蚕棚」に寝ているジュオンの母親の表情の何処にも、十幾年の海外での斗いをたたかい終えて、故国へ帰って行こうとする人の嬉しき、満足のかげも見られなかった。サツペ茸の小屋で、ろくにはだしの足も洗わないで臥っている時と少しも変りはない。

ジュオンにしても、そして恐らくルイザにしても、船はただ狭く、固苦しく、不自由なばかりであつたらう。帰って行こうとする日本は全く未知の国である。夢でブラジルを見れば、そこへ戻りたい、と太平洋の真中で駄々をこねるルイザでさえあつた。始めて貨物自動車に乗って停車場に汽車を見に連れて行ってもらつた時の方が、どれだけ楽しかったか知れやしない。……父親だけが一人、はしゃいでいた。

彼が日本を出て来た大正初年ごろの大どかな故郷が待っているのだ。金を掴んで帰る！ と誓つた言葉は、今はとにかく成就されたのである。子供らは日本の子らに較べれば少しは「鷹揚」かも知れぬ。がなあに金がある。金！ 日本でうまく行かなければまたブラジルへ舞戻って行くまでさ。彼は火酒（ピング）をあおつては、あたかも大成功者のように二等船室に振る舞つた。

その金は、極く僅かの額で、袋に包んだのを母親が後生大事にあずかっている。船暈というのは、あれは嘘っぱちで、父親が金

の番に彼女を寢床から離れさせないのだ、などと噂する者もある。とにかく、父親一人が楽しく嬉しげだった。

次の映写が始まった。これも十幾年前の代物で、筋は、アメリカ・インヂアンである一人の農村青年が、発奮して都会に出、苦学して大学を卒え作家となる。ある白人の娘と恋愛したが、社交界で、インヂアンであることを嘲笑され、一冊の小説を著して失意のまま、また元のインヂアンの部落に戻る、といった風のものであった。単調な上に、旧時代のあくどい手法の映画で、秋田は終りまで見つづける根気がなかった。

人いきれのひどい映写場から出ると、船の動揺はすっかり収まっているようだった。後甲板の扉を、何気なしに開いた。と、目の光が激湍のようにほとばしり流れ込んだ。甲板は一面の白雪で被われていた。舷側へ歩み寄ろうとして、秋田は足を停めた。彼から少し離れた通風筒（ヴエンチレイダ）が傍に、三等船客の一人の老人が、掌にのせた白雪を、まるで砂金でもあるように月光にすかしみながら凝然として佇んでいた。

——ハロー！ ミスタ・秋田。起床々々！ 水平線にサクラとムスメサンが見えてますよ。

元気に扉をノックして、カリフォルニアの大学生がふれ廻る。

海の涯には朝雲が見えるばかりであった。雲は薄紫の藤の花の色をしていた。その藤の花房の蔭には、はやくも国土の一端が双

手をさしのべているのかも知れない。

よく欧州帰りの人が、懐郷病を昂じさせて、日本の姿の見える近くまで来ると、海に飛びこんで自殺する、という話を思い出した。が、この淡々とした気持はどうしたことだろう。それはすでに心をブラジルの土になろうと定めた自分であるからであろうか、それとも、僅か数年の南米大陸の生活から来た感性の耗弱の故であらうか。

秋田は、ぼんやりと、舷窓に劃られた円形の空を見た。浅春らしく、触れば陶器の感触のしそうな淡青の空である。生まれるときから見なれた、そしてこの数年来、絶えて仰ぐことの出来なかった日本の空である。この国には四季があるが、自分がこれから死ぬまで住まおうと心に決めたところは季節のない国である。四時は夏（シジコレナツ）一雨便秋（イチウスナワチアキ）、海南島に流離の時、蘇東坡がうたった詩の一節のとおりの国土である。窓を開けた。波の音が室の中へどつと躍り込んだ。

首を突き出すと、高い潮の匂がした。飛沫をまじえた風が快い。鷗の群れも陸地の間近さを想わせた。

——お早よう、と、何時もながら落ちついた若林の声がした。隣室の舷窓から、やはり彼も首を突き出して微笑んでいる。

——やはりブラジルに落ちつくことに決めちゃったよ。故郷の方の整理は一ヶ月で済む。済み次第、すぐブラジルへかえるよ。若林君。

秋田は強いて快活な口調で声高に言った。

——そうか、決めたかい。

若林は、秋田の方を見て何度もコックリしてうなずいた。ラジ
オが朝の体操の前奏をはじめた。

——幾十日も船の中でとやかく思いあぐんで決心がつかず、いよ
いよ日本の土の匂いのするところまで来て、とたんにブラジル永住
の気になっちまうなんて、妙な話だけど……。

——じゃ、やっぱりソロカバナの奥に行くんだね？

——そう、パラナ河の流域さ。河向うはマツト・グロツソ州なん
だ。ブラジルの牛飼になると決めてしまうと、爽やかな心境だよ。

——と言って、秋田は、頬にかかった飛沫を右手で拭いながら

——などというのと、何だか負け惜しみみたいだなあ。

——秋田君が僕は羨ましいよ。僕ら夫婦は結局 *V a V i c t i*
s (敗れたる者は悲し) さ。北海道に行ったって、いい生活があ
ろうとは考えられないしね。

——だけど、ねえ若林君、僕のブラジル永住だって、いや僕だけ
じゃない、ブラジルの第一世の永住の決意なんてものは、結局生
活探求に疲れた者の、悲しい終着駅じゃないかと思うのだ。悲壯
な諦めなしに、永住を決意することは出来ないんじゃないかと思
うんだ。……

船腹の吃水線のあたりを見つめて、二人とも顔をあげなかった。
速度が落ちた。船は日本領海へ入ったのだ。

(終)

コロニア新刊紹介(2)

句集「雪達磨」 山田空外著

山田空外氏は、現在サンパウロ市在住、八十八才の高齢ながら、なお健在、風月を友として閑居を楽しんでいる。本書は、著者の米寿を祝し、石川芳園、寺尾蒲城両氏の支援を得て空外氏長女山田春子さんが出版され、父に贈られたものである。

本書は、四六判、本文八十ページ、一ページ七句組み、パウリスタ印刷株式会社印刷、一九六七年十二月発行となっている。

巻頭に著者肖像と筆跡を掲げ、寺尾蒲城、山田春子両氏が序文を寄せ、巻末に石川芳園氏のあとがきがつけてある。

この句集の特色は、前半が空外氏作品で、後半は、「空外家庭俳句会」作品となっていることである。山田一家は俳句家族で、故出づ子夫人、長男実氏、長女春千、故富洋氏夫妻、こぞって俳句に親しみ、俳句と伴に生活している。

年譜が載せてないので、出身、経歴は余りはつきりわからないが、寺尾、石川両氏の文章から想像するに、空外氏は、幼少の頃から句作したようである。渡伯後は主として、マリリア方面に住み、子弟教育に携っていた如くである。「その性格は、無欲でんたん、古典俳句研究ではブラジル随一」と芳園氏が紹介している。

昇る陽に涙ぼろぼろ雪達磨

この句集の題「雪達磨」はこの句よりとったものである。十才

頃の作とか。老境に入つての作品として、次のようなのである。

ゆるやかに指組み合せ菊に佇つ

切り過ぎし桜をうらむ暑さかな

花鋏置く膝丸し冬そらうび

マリリア時代には、「あけぼの吟社」「春山吟社」「白鷺吟社」などの選句を担当し、後進の指導にも当たっていた。

(黄)

「コロニア文学」第六号

「詩」合評記

スザノ詩話会は、五月十九日モジ市ソツコーロの、レストランテ・カンペストレ、蒸風呂「サウナ」で、ピクニックを兼ね詩の合評会を行なった。酒井、米沢二兄が武本編集長と共にプ・プルデンテへ出張して不参、芳賀兄は詩吟会へ、不二山兄も不参で、結局可児、田畑、八巻、大浦、藤田、大日方、横田の七人だけが集った。しかし能弁の連中が揃ったので、相当の論戦が交わされた。

大日方兄が録音器をもち込んで、大浦兄の詩集「スザノ」の中から選んだ三篇の朗吟を披露したのはよかった。大体どこの詩話

会でも詩の朗吟はつきものなのだが、スザノ詩話会では、ただ一度石橋稔兄の島崎藤村の詩の朗詠を聞いただけである。この朗詠は非常に感銘を与えたことを記憶している。今後の詩話会には、詩の朗吟は欠かさぬことにしたいと思う。

「文学」の詩も、寄稿者が多くなり、いろいろのスタイルが見出されるようになった。このたびは特に、狩海、水野、藤田三兄の作品が問題になったようである。可児、永田二兄の詩も、特異の作風として、「文学」には欠かせぬものとの評があった。

「文学」六号の女性の作詩は、いずれも低調との評であった。真木、小野両氏共、すでにいい作品をものしている人たちなので、次号を期待したい。

八巻兄からは、歌壇の最近の風潮について、手厳しい批判があった。文芸人としての兄の視野の広さに敬服する次第である。詩は文学の主流をなすもの、小説を書くにも、詩の手法は知っていないければならない今日、詩を書く人、詩をよむ人の人口増加を図るために、おたがいに努力することを申し合せて散会した。

《横田》

特集 私の終戦

勝ち組になりそこねた男の終戦記録

悪夢に似た苦しい、不快な思い出、それは六十年の私の人生で最も苦痛に満ちた深刻な体験であった。

松村 俊明

昭和二十年八月十五日以後、何年間にもわたる、悪夢にも似た、苦しい、不快な思い出も、いつとはなしに、十数年の歳月の塵に埋れて忘れていたが、一度、思い出の糸を手繰りはじめると、あまりにも鮮烈な記憶が、生々しく切れ目なく、整ってくるのに驚いた。

それは六十年の私の人生で、最も、苦痛にみちた深刻な体験であった。私は、大分以前から、私自身、身ぢかに見聞した、宮腰千葉太氏を首脳とした認識運動の指導者達の、命を賭けた苦労や、その間の色々の事情、又、私が、地方の指導者として、啓蒙運動に挺身した体験記などを、是非、書きのこしておきたいと、念願していた。

幸い、最近、当コロナ文学が、戦記録として、多くの人の体験を集録する企画を立て、それに賛同して、寄稿された、色々の人の記録を読んでゆく中に、私の体験を通した角度から書けば、未だ、いくつかの、未知の新しい面が、発表出来ることに気付い

た。

昨年末、宮腰氏が日本政府から昇叙の光栄に浴した時、日伯毎日はその記事の中に、『私達コロニアの人間は、終戦後の混乱のことで宮腰氏には負い目がある。今回、同氏が叙勲の光栄に浴して、ほっとした。』と書いたが、あの時、時局收拾のため、非難の矢面に立って、敢然、悪戦苦闘した宮腰氏はじめ、今は亡き下元健吉氏、山本喜誉司氏、野村忠三郎氏の為にも、是非、書きのこして置かねばならぬと決心を新たにした。

はじめは、小説体の、裏面史めいたものを、書く積りでいたが、克明につけてあった終戦前後、数年間の日誌を読んでゆく中に、生の事実そのままの方が、小説以上、アトラクティブであることに気付いた。登場人物も、コロニア衆知の人物が多いので、差しさわりのない限り、本名を使わして貰って、ドキュメンタリー式の、終戦記録として、発表することにした。

まず、終戦後の、私の思想、行動について、読者の理解を助けるため、少し、溯って、戦争中のことから、書き方こすことにする。というのは、認識派の特攻隊と、よばれた私の特異な思想、行動は、常識的な、第三者には奇矯、誇張と思われるかも知れないからである。

大東亜戦勃発の前年、私は、宮腰氏と、相談して、南聖海岸地帯レジストロのリベイラ河畔の、元海外興業の牧場だった、平坦地五十アルケールを購入して、かねてからの理想だった、農村塾の建設にふみきっていた。

経営者は宮腰氏、塾長は私、建設初期手伝ってくれた七人の侍は、キロンボ植民地時代から、小学校、童夢クラブ、健児の社と、私の理想通り育ててきた、純情であり、意志強固な青年達だった。文字通り、晴耕雨読の生活で農牧の仕事に励み、余暇を見て、スポーツ、音楽、読書など楽しみ、協同生活を通じて、人間多業に専念した。

一方、土、日曜は各部落に、音楽、日本語の、出張教授に、出かけていた。戦争が始まるまでは、順調に、予定通り進捗した。一九四一年十二月七日、日本が真珠湾攻撃の火蓋をきってから二三週間の中に、枢軸国民に対する監視が厳しくなりはじめ、私の名も警察のブラックリストにのっているから気をつけるようにと、町の同志から連絡があった。

塾には大型カノアを改造して作った桜丸と称するボートがあった。町へ買物に出かけるにも、三軒近いオール六本で掛声勇ましく、六キロの水路を往復したり、塾生達は、毎朝、暗い河へ跳びこんで水音高く泳いだりしていたし、一方、私は土日曜、植民地へ出かけて男女青年の指導をやっていたから、当時の緊迫した情勢からいって睨まれるのは当然だった。ブラジルへ渡航する時、京都の警察で、徴兵忌避の疑いで厭味を言われた私が、戦時中は、予備少佐などと噂されて、苦笑した。一九四二年八月、バイア沖で、連合国商船五隻が、独潜水艦に撃沈されてから、圧迫、監視が、急に、嚴重になった。

私達には、勿論第五部隊的要素は何もなかったが、度々、臨検に

くる、法大出たての、若い署長は、「若しリベイラ河を、日本の潜水艦が溯行してきたら、お前達は、手伝うだろう。」などと、言っていた。事実、あの時の、切迫した情勢の中で、第五部隊に急変する可能性あり、と断定されて、予防措置をとられたら、追放されることは、必然だった。

八月二十日。宮腰氏がコロニアの最高指導者とみなされて、逮捕されたと、連絡があり、以後、三十日ぐらい消息不明で心配した。レジストロ植民地内のE牧師が、高原地帯へ退去を命ぜられたり、散発的に、植民地内の日本人の家が、家宅搜索された。公共の場所での日本語会話禁止の布告もきた。

私は、最悪の場合の覚悟はきめていたが、折角、やりはじめた仕事だから、切りぬけるだけ、切りぬけて見ようと決心した。

まず、私達が、農牧を主業として、生活していることを示すために、ニアルケールの水田造成、五アルケールの、バストフォルマ、など懸命にやった。

或日、臨検にきた署長が、「貴方は、百姓じゃない。手を見せてくれ。」というから、まめだらけの、ザラザラした手の平を見せたら、彼、一寸、考えてから、「この豆は、鉄棒で出来たのだろう。」と、皮肉った。青年達は、皆、農村出身だから、生え抜きの農民で通った。一キロ、山奥の原始林の真中に、分宿寮を作り、六名ずつ、毎週、交代で分宿、歩合作の形式をとった。日本語は昼夜、交代でやったり、朝、未明に起きてやった。圧迫が加われば加わる程、青年の意気は旺んになり、血の言葉としての日本語への執着、愛情

が深まっていった。私と、十年近く音楽修業をやった青年達が、塾生の主体だったから、マンドリンとギターの習得は、塾生の義務になっていた。塾生全員で合奏できることが、ほんとうに「芸は身を助く。」の言葉通り、私達の塾を救ってくれた。

それでも、はじめの頃は、「いくら、上手にブラジル国歌を演奏しても、胡魔化されはしない。」と、署長が、町へ帰って、言っていたから、気を付けろ、と、町の広田君から注意があった。

臨検回数は、植民地で、一番多かったが、家宅搜索は一回もされず、終りまで、礼儀正しく扱われたことに対して、あの青年署長、ルーリバル・フランサ・フィーリョ氏に、感謝している。(二)三年前、聖市中央警察の殺人犯課長として、新聞に出ていたのを見て、なつかしかった。(皇軍の戦果が、拡大して、南方の、熱帯、亜熱帯圏が、日本の手中に入ってから、熱帯、亜熱帯農業の指導者として、コロニアの、農業技師が、次々と、召集されて、交換船で、帰国した。レジストロの溝口技師、チエテ移住地支配人の古関徳弥氏、聖市総領事館の勧業部の技師たちだった。あとで聞いた話では、彼等の大部分、台湾海峡で、潜水艦にやられ船と運命を共にしたらしい。祖国の戦果が拡大されてゆくにつれ圧迫も強化されてきた。それに反撥して私達の民族意識が強烈になった。私達は末だ子孫をブラジル国民にする確固たる決心の出来た移民は僅かしかいなかったし、大東亜圏建設の話をきいて祖国の勢力圏へ再移住する夢が生れた。身近かから、技術者が次々と召集されてゆくを見て、この頃は、我我、熱帯、亜熱帯農業者が召集

される番だ、我々の体験を祖国のために役立てよう、と情熱をもやした。

圧迫されればされるほど、私達は、夢に希望をかけ、使命感を抱き、それを信念化することによって一切の不安をぶっとばした。

枢軸国民の資産没収令も出たが、もう、何の未練もなかった。私達の夢は、南太平洋にとんでいた。ボルネオでもポルトガル領チモールでもいい、ブラジル帰りが大挙、集団移住する。エンシヤードも、フォイセも、もってゆく。

そこでは、ポルトゲースも、方言のようになって残る。となりの島には、アメリカ帰り、その先には、チリー、ペルー帰りといった風に、世界の各地に散在していた日本人が、まるで、現在、世界中のユダヤ人が、イズラエルを目指して帰るように、各々が、血と汗で、獲得した、生活様式とか、農法などを活かして、日本の国家性格に、世界性を賦与することになる。私達は、率先

して、その大移住運動の中核になろうと、決心した。私のそうした心境の変化について、入獄中の宮腰氏は何も知らなかった。収容所の中で、元日本新聞を経営していた、翁長氏と、南洋再移住問題で、大激論した話もきいたから、相談すれば、反対の意見だったと思う。仲良しになった署長から、もらったサルボ・コンツツトで、北パラナ、バストスの同志を歴訪して歩いた。それ等の地方で、多くの賛同者を得て、私の決心は、確固たるものになった。

ツパンで会った、教え子の青年が、

「先生、パラナの原始林から、ボルネオの原始林へ移るのは、何も、

臆劫じゃありませんよ。」といって、私を勇気づけてくれた。

原始林との格闘をつづけていた、あの時代の日本移民には、物すごい、闘志があつたし、原始林の中の社会性は、全く、白紙で、彼等が、いたる所に、日本村を築いて歩いた時代だった。

開戦二、三年目の頃、政府の、枢軸国民に対する圧迫政策をいいことにして、下っぱの警察のものが、些細なことに、こじつけて、日本人をいじめたり、カマラーダが、反抗したり、無根のことを密告したりするので、植民者は不安におののいた。しかし、物のわかる、上層部のものは、まじめに生産に従事するものには、保護的態度をとってくれた。

一九四二年八月二十日の日記に、「聖州警視総監、オ rint ・デ・フランサ少佐の報告中に、「枢軸側三国人に、不法の暴行を加えることを禁じ、ブラジルの原動力である、我がサンパウロ州のために、絶対必要な、これ等、三国人の生産力を保護するために、万全の策を講じた。」とある。

日本軍のグワダルカナル島敗退を峠として、敗報がつづき、ラジオも、日本語の新聞も禁じられ、ブラジルの新聞も読めない、大多数の日本人の不安は、益々、つのる一方だった。私は、ブラジルの新聞や、ライフ、タイムなどの英文の雑誌の中から、いささかでも、日本に有利なことを見つけると、すぐ、翻訳して、コッピを作って、植民地の同志の所へ廻したり、私自身、話して歩いて、激励した。

宮腰氏は、戦争初期、数ヶ月の獄中生活を送ったが、私は、終戦間近かになって、警察署長が代り、奥地から転任してきた、射撃のうまい、カッサ好きな、バルバンチ署長になって、レジストロと、イグアツペの留置所へ、一晩ずつ入った。まあ、一応、獄中生活らしきものを味わって、一人前になった。

イグアツペの獄は独房だった。直線距離にして三キロほどしか離れていない、イーリヤ・コンプリーダの、何十キロもつづく長い浜に、打寄せる大西洋の荒波の音が、ごうーと、連続して、まるで音の壁のように聞えていた。

その真夜中、突然、隣りの獄房から、女の唄声が聞えてきた。きいている中に、それが、日本語で、子守唄や、君が代を歌うのをきいて驚いた。私は、私の耳を疑った。歌声は、一時間位できこえなくなったが、ほとんど、私の知っている歌だった。獄卒にきいてわかった事は、その女の人は、一、二か目前、レジストロで野菜作りしていて、悪い巡査に、おどかさされたのが原因で、突然、発狂し、自分の手で、子供二人絞殺した人だった。その上、元、私のいた植民地にいた人だった。戦時中、異国の獄屋で、深夜、知人の狂女が、まじめに唄う君が代をきいた時の、異様な感動は、一生忘れられない。

翌日、私は釈放されたが、何時の間にか、起訴されていた。知人の励めで、弁護士を依頼した。弁護士は、負けて、四コントス。無罪になること保証付といってくれた。終戦二か目前の六月六日、ブラジルが対日宣戦布告したため、日本人の州内旅行は、一切、禁

止、町の日本人は、大騒ぎしていた。丁度、その日の伯字紙に、私
が、第五部隊の嫌疑で起訴されたことが、仰々しく出ていた。

イタリアの降伏について、ドイツの降服、米軍沖縄上陸と、戦
局は、日に日に、日本に不利になり、私は、日本の勝利について、
益々信仰的になっていった。

「ソ連を見るがいい。ナポレオンの時も、モスクーまで攻めこま
れたのに、捲き返したではないか。今回も、スターリンググラー
ドの勝利から、奇蹟的に形勢を逆転さし、遂に、勝利を得たではな
いか。未だ、日本は、本土に一步も上陸させていない。日本は、最
後には、必ず勝つ。」と、塾生、同志を激励しつづけた。硫黄島が
落ちて、沖繩に敵が上陸しても、何糞と言ひ、日本近海で、頻
繁に、輸送船が撃沈されたり、釜石などの、本土海岸が、艦砲射
撃されても、「何、日本の潜水艦だつてアメリカ本土の港を、砲撃
したことがあるじゃないか。」と、いささかも、必勝の信念をゆる
がさなかった。

私の机の上には、常時、日支事変中、日本軍が使用したと思わ
れる、小型砲弾の菓莢に、弾頭の形をしたものをつけ、忠魂碑と、
ほりこんだものが、おいてあった。

それは、サンパウロ市で、鉄工場を経営していた、親友の池森
春三氏が、支那から輸入されたスクラップの中で見つけ、私のた
めに、作ってくれたものだった。裏側には、「泥にふし、水に浸り
て、戦いし、友の忠魂、吾を鞭つ。」と、私の句が刻んであった。
日々、二の句を朗読しては、使命感を意識し、己れを叱咤、激励

しつづけてきた私だった。

八月八日、広島へ原爆投下。

八月九日、ソ連、対日宣戦布告。

つづいて、長崎へ原爆投下。

私は、息づまる気持で、口々の伯字紙の報道を、むさぼり読んだ。原爆についての、日々詳細になってゆく記事をよんでゆく中に、これは容易ならぬものであることが、わかってきた。ソ連の宣戦布告の中で、スターリンが、『四十年前の、日露戦争の敗北の恨みを、今こそ晴らすのだ』と、いつているのを読んで、民族的執念、復讐心の露骨なのに、驚いた。

八月十一日の午後四時すぎだった。助教の、辻マリオ君（現在、サンミゲル・パウリスタで、開業医）が、バストスの親許から、帰ってきた。塾生達が、マリオ君を囲んで、賑かに話している時、食卓の上に、無雑作に、おかれていた新聞を、ふと、覗きこんだ私は愕然とした。容易ならぬ見出しを見つけたからだ。

第一面に、大活字で、天皇ヒロヒトの決意により、日本は、天皇の特権を傷けないことを条件として、ポーツダム、無条件降服勧告の最後通牒を、受諾すると、提案し、それに対する、連合国側の答弁を求めている。

それをスイス、スエーデンの二中立国を介して、申出たという、東京ラジオの、全文が出ていた。スイスとスエーデンは、日本の通告を受理したといっている。英国では、知らぬといい、米国は、

受理したとっている。兎に角、今までのデマニュースとちがって、充分、根拠があるように思われ、心配になった。晩食の折、余り、私が考えこんでいるので、塾生一同も心配そうにしている。私は、思いきって、その新聞記事のことを、全部話し、現実がどんなに厳しくても、男らしく直面せねばならぬ。と、言いきかせた。

前々日の新聞に、日支事変の時、観戦武官として、日本へいつていた、リマ・フイゲレード中佐が、日本は、敗北すると、断言している。親日、知日的な人の言葉だけに、気にかかる。

翌十二日、町へ出て、情報をきいてみても、要領を得ない。丁度、その日、サンパウロから、赤間みちへ女史が来植したときいたから探したけど、その日は会えず、次の日、ジュキア線、ペードロ・デ・トレード市まで、追っかけて行って、十一日のボーツダム宣言受理のニュースの件をききただしたけど、要領を得ず、かえって、女史から、「貴方は、指導者ではありませんか、しっかりして下さい、そんな弱気では駄目です。」と、叱られた。私は強気の自覚こそあれ、自分を弱気だと思ったことはなかった。生れてはじめて、弱気だと、それも、女の人から言われて、妙な気持ちになった。側にいた二世の青年も、私は二世ですが、日本が、負けたとは思いませんと、力強く、言いきった。

まだ、その日の新聞の片隅に、シンガポール電として、阿南陸相が、日本陸軍は、最後の勝利を得るまで、聖戦を継続すると、声明したといい、又、南方派遣軍は、最後の一兵になるまで戦う決意、などと、報道されていた。

しかし、十一日の、エスタード紙の、一面一杯の記事の内容は、私の理性を、呼びさましてしまった。私は、行きより、もっと、重苦しい思いをいだいて、帰路についた。

祖国不敗の信念は、脆くも崩れたが、私にはどうしても解せない疑問があり、それを懸命にとこうとして、焦った。

今まで、玉碎に玉碎を重ねて、勇猛果敢に戦ってきた皇軍が、何百万もそろって、一斉に降服。武装解除という、軍人精神からいつて最も恥辱とすることを、何故、素直に、受入れたのか。

英国の一司令官が、「世界中の軍隊の司令官は、自分の部下に、最後の兵となるまで戦え、と、号令するが、文字通り、最後の兵まで戦うのは、日本兵だけだ。」と、感嘆している話が、この新聞にのっていた。それを、私達は、誇りにしていたのだ。終戦の、最後の日まで、アメリカ兵の心胆を寒からしめた、あの神風特攻隊は、本土上陸作戦に備えて、準備されていたのではないか。そうした疑問が、八月十五日の終戦の詔勅を読むまで、とけないで、私は苦しんだ。しかし、詔勅の中の、原爆の個所を読んだ時一切の疑問が氷解し、目の前が、明るくなった思いがした。

惨虐極まる、非人道的を原爆を使用して、非戦闘員も何も、無差別に、大量殺傷するようになったら、戦争をつづけるのは、無益である。これ以上、国民を犠牲にするに忍びないとの大御心から、悲壮、崇高きわまりない、偉大なる大決断をなされたのだと、わかった時私の心は、安定を取戻した。

それから二週間後、八月三十日の新聞に、英首相、チャーチルの『連合国が、広島、長崎に原爆を授下して、何十万の非戦闘員を殺傷したことを、非難する英国々民に対する、弁論がのつていた。それは、全く、私の考えを、裏書してくれるようで、全く嬉しかった。(この演説のことは、戦後日本で発行された本にもものっていないし、殆んどの人が知らない。)

チャーチルの演説の要旨。

『我が連合軍が、広島、長崎に、原爆を投下したことを、非人道的であるといって非難する者が、我が英国民の中に、多数いることは全く遺憾である。私は、トルーマン大統領と対日戦の見通しについて、会談、討議の結論として、“日本々土攻略を完遂するためには、未だ、蘭印、仏印、マレー半島、支那大陸などの、大上陸作戦を決行しなければならない。しかし、現在迄の、日本軍の頑強なる抵抗を想起する時、前記の上陸作戦を実行するためには、我が連合軍は、何十万の兵を犠牲にしなければならないかかわらない。又、多大の物量の犠牲も必要だが、何より、我々に不利なことは、それが何年かかるかわからない、という事である。”それで、我々は、原爆使用という、思いきった決断にふみきったのである。日本も、本土は保全することが出来たし、何百万の犠牲も払わずにすんだのだから、よかったではないか。我々が、原爆を使用したことの是非の判断は、後世の史家にまかせよ。」と結んでいた。

これを読んだ時、私の心の中に又、ぱっと、明りが、差しこんだ

思いがした。英国民の中に、原爆の使用を、フェア・プレイでない、騎士道精神に反する、と行って、抗議したり、教会の戸をとざした者が沢山いたことは、大きい慰めだった。英国民は、矢張り、大国民の襟度がある。えらい。と思った。

第一次世界大戦直後、ハーグの平和会議で、ダムダム弾と、毒ガスの使用を、非人道的である、と行って禁止した。それは勿論、戦闘員に対してである。戦争中の、非戦闘員の殺傷は、非人道、卑怯とされて、非難される行為であった。原爆は、それら二つの武器より遥かに残酷であり、広島、長崎の犠牲者の大部分が、非戦闘員だったから、問題だ。(現在、ヴェトナム戦で、アメリカは、戦闘部隊に対しても、世界の与論を恐れて、核兵器を、使う決断にふみ切れないのを見てもわかる。)後で、日本病院の、武田ドクターから、直接聞いた話だが、看護婦としてつとめていた尼さん達が、ここの新聞で、終戦の詔勅を、読んで感激し、武田ドクターに、『こんな、崇高な心の持主の天皇を、元首と仰ぐ、貴方達日本人は、幸福だ。日本の天皇は、サントだ。』といった話をきいた。皮肉な事に、大多数の日本人は、尼さん達から神に近い言葉とまで、賞揚された、有難い詔勅を、ボルトゲースがわからないために、読むことが出来なかった。せめて、大意だけでも知らせねばならぬと思った。私は、詔勅を何十回も読み、謹んで、それを翻訳。コッピーを何校もとって、同志の所へ廻した。

八月二十八日、この日、私は、日本語と、音楽の指導のため、ある植民者のところに、泊っていた。私が、その家の家族の人とお

茶をのんでいたら、突然、入口から、慌てて、入ってきた、近所の、Tという、日本人がいた。彼は、カミニオンで、サンパウロと植民地の間を往復して、運搬業をやっていた。

彼は、興奮のあまり、どもりながら、叫びはじめた。『皆、喜んでくれ。日本大勝利だ。敵の太平洋艦隊四百隻全滅、浦塩、八時間攻略。英、米、ソ、蘭、四カ国、即時、無条件降服。大勝利、大勝利。サンパウロから帰る途中、道でみつけた日本人は、皆、車にのせて、ニュースをきかせてきた。イビウーナ、タピライ、ピエダーデ、皆、知っている。皆、飛びあがって喜んだぞ。今晚、うちで祝いをやるのに、生きのいい魚も買ってきた。万才、万才、じゃ、さようなら。』

彼が、カミニオンをふつとぼして帰った後、私も、そのうちの人も、狐につままれたような気がした。私自身、二週間前まで、そうした奇蹟が起ることを祈っていたので、危く、その興奮にまきこまれそうになった。私は、複雑な気持で、私のポケットの中にある、終戦の詔勅の翻訳文のコピーのことを、思い出した。詔勅の内容とか、横の連絡も、縦の系統も、秩序だっている、外字新聞の記事を想起することによって、私は、自分の心の動揺を、最少限度に抑えることが出来た。

それでも、念のためと思って、毎日、ラジオをきいているという、岡本茶園へ寄って見たが、何も入らぬという。帰り、レジストロの町できいても、何も入らぬという。

勝った話を信じたい心が、私の中にある。それが強く動く。一

カ月前の新聞に出ていた、前連合艦隊司令長官、高橋三吉海軍大將が、『敵の上陸作戦に備えて、我に充分の用意あり。太平洋は、敵侵入軍の墓場となる可し。我には、敵侵入艦船を襲撃する特別任務を持つ、水上、水中、両面よりの、特別攻撃艦隊あり。』軸といった言葉とか、同じ七月二十四日内閣技術本部長発表の、『我が秘密兵器は、独特のものにて、本土攻撃の決戦の最後の幕が切つて下される日に、それは、日本の能力と、実力を敵に知らしめるであろう。』日本軍独特の、決死の技術と相俟って、それ等の新兵器は、完全に、敵を殲滅するであろう。』といった言葉が、勢よく、甦ってくる。理性が懸命にそれを抑える。

（高橋三吉大將の言葉も、技術本部長の発表も単なるおどしであつたわけでない事は、最近の日伯毎日紙連載の「昭和史の天皇」の決号決戦の所で、第一線第十二方面軍高級参謀不破博（現防衛庁防衛研究所戦史室勤務）の話の中に『当時、日本には、海軍が三千七百機、陸軍が第一総軍として一千百機を保有、全部集めれば一万機近い特攻機を用意してい、本土上陸作戦に備えていた。その外、海軍は魚雷、爆雷を持った特攻兵器、震洋、二千八百五十隻、人間魚雷、海龍、回天、三百六十一隻など用意して決号作戦として備えていた。』と言っているのをみてもわかる。若し、連合軍が、原爆ぬきの通常兵器だけで戦ったら、現在のベトナム戦でもわかるが、日本上陸作戦となつた場合、地の理に詳しい上、自分の郷土を守る必死の日本軍の抵抗には、連合軍も現在のベトナム以上手を焼いたことと思う。英首相チャーチルが、長期戦の苦

戦を懸念したのは当然である。

だから、戦勝ニュースは起りそうな、否、断然起るべき出来事であったのだ。

その日から、凡てが、私のまわりで狂いはじめた。助教の中田武男君が、町から帰つての話によると、O氏が、「先生は、ブラジルの新聞を信じすぎて困る。日本の軍人精神がわからぬかな。」といったと言う。二三日前、私に、「希望も、力もぬけました。この二週間で二キロ半もやせました。」と、書いてきていたO氏は、戦時中、塾と心中する位、精神、経済両面で援助してくれ、私が、留置場に入れば、差入れ、裁判事件の時は、弁護士代まで肩代りしてくれた、力強い同志だった。在郷軍人で、銃剣術の猛者だったとは、想像も出来ぬ、溫柔しい、まじめな人だった。そうした人の言葉だけに、私は、頭を叩きのめされたように感じた。この頃の日記をよみ返して見ると、日本のラジオニュースの翻訳が、詳しく書いてある。原爆についての後報、八十八議会開催、天皇臨御、米艦ミズリー艦上で降服調印、米軍日本へ進駐開始、切符制度廃止、学校再開、等々。

それと並べて、対照的に、戦勝デマニュースの全文の写しがのせてあったり、教え子の娘の恋愛沙汰の後始末とか、結婚の媒酌をやったことなども書いてある。娑婆の行事は、戦争の勝敗とは別に、煩雑なことが、結構、毎日のように起きている。

こうした事態の中での、塾の指導は、一体、どうすればいいのか。全く、百八十度、急転回だ。大東亜共栄圏へ帰る夢も崩れた。

同胞の頭も狂いはじめた。新しい指導理念が、見出せる筈もなかった。毎日、塾生の顔を見るのが、苦痛だった。一日一杯、広い田畑の中で、力一杯、労働出来ることと、河畔の美しい自然の中に住んでいることは、何よりの救いだった。どんなに努力しても、自然、気が滅入ってきて、明るい話題が出ない。気力も弱る。敗戦の話ばかりしていると、益々、意気消沈する。こいつはいけない。まず、こいつから、ふつとばせ、という訳で、近所の父兄の寄附を仰いで、柔道の畳十枚、購入することにした。金が出来るとすぐ、助教の辻君が、塾生一人つれて、十四キロ、河上のセツテ・バラスまで、カノアを漕いで溯航、昼過ぎには、持ってきてくれた。青畳の香り、感触は、なつかしい祖国を思い出させた。早速、気合も勇ましく、稽古をはじめた。これは、沈滞しがちな塾の雰囲気、新しい活力を生み出した。混沌とした状態がはつきりするまで、理屈抜きで、肉体を激しく闘わすことによって、気分転換と、闘志の盛返しを計ったのだ。これは成功だった。

私は、こうした時局に直面して、指導者としての責任の重大さを、痛感した。何より、自分自身の心を責め、正し、冷静且明確な、判断力を養うと、同時に旺盛な精神力を持たねばならぬと反省した。塾生と朝の禊をやり、日一杯野に出て働き、夜は勉強、といった、一分のすき間もない生活を心掛けた。助教の中田君が河下の日本人のところへ、気合術を習いにいったのも、その頃だった。或日、リベイラ河の上流に住んでいた、ドイツ人の青年が訪ねてきた。彼の父親は、ガゾゼーニオのモーターを発明して、カ

ノアにつけて走らせたり、ツングの油で潤活油を作る研究をしたり、一切、自給自足の生活をしていたことで有名な男だった。剛健な、典型的な、ゲルマン族だった。開戦と同時に逮捕され、終戦後、釈放されて帰ってすぐ、死んだ。息子達は、獄中で、毒をのまされたのだと、恨んでいた。その長男が訪ねてきたから、色々話して見ると、彼等は、ドイツの敗戦も、降服も何も信じていない。一切、デマだという。ドイツ大勝利とは言わないが、降服などしていない、と頑張るから、サンパウロへ行って、信用出来るまじめなドイツ人を探して、ききなさい。残念乍ら、ドイツの敗戦も、日本の敗戦も事実だといって、私の知っている限りのニュースを話してきかせたら、悲しそうにして帰っていった。彼等の周囲にはドイツ人は一家族もいなかった。

戦勝デマも、冷静な頭で読めば、矛盾があり馬鹿臭いものだが、信仰的になると、宗教と同様、批判力を失うものだ。馬鹿げているといつて、放置する訳にもいかぬので、色々、研究して見た。結局、誰かが、故意に、ブラジル新聞のニュースを、逆にしたりして改作したものだ。しかし、それが、私達、日本人が、つい、二三週間前まで祈りつづけてきた希いや、大本営がうたいつづけてきた文句と一致しているから始末が悪い。

英、米、ソ、蘭、四ヶ国は、日本に無条件降服（ソ連は、他の三カ国より四十五分おくれる。）仲々、芸が細かい。

日本は、原子爆弾より、遥かに強力なる、高周波爆弾を使用、沖縄における米兵、島民共に爆死。

バイカル湖附近にて、ソ連兵、百五十万捕虜。

こんな景気のいいニュースが、河下のおとなりから、読んだら、河上のおとなりへ廻送してくれと行って、届けてくる。

翌日、町へいったら、Mという店で、すごく景気のいいのを見せられた。

有田前外相を主班とする二百名の委員が、今月中旬、超重爆機にのって、着伯の予定。三千名の委員が、全世界へ派遣され、二百五十台の飛行機に分乗してゆく。

日本が、戦争中に、撃破した敵艦船は、五千有余隻。

ミズリー号は、みどり号と改称、帝国海軍に編入された。

又、我が新領土に徹底的に、日本語を普及させるため、大蔵省に予算提出せれり。

今から考えると、出鱈目もはなはだしいが、あの時の大衆からは、待つてましたとばかり受入れられる、快ニュースだった。

九月九日の日誌に、サンパウロからやってきた、この植民地出身の、バガブンドとして一般に名の通っていた男マーリオの喋ったことが、全文のっている。それは、あの時の混沌たる状態の中で、無責任に、あたりさわりなく、上手に、遊泳するタイプの人間の心理が、よく現れている。

『何、戦争の結末がどうなったかって。そりゃね、サンパウロには、色々のニュースがあるよ。しかし、一々、詮索してゆくと、悲観説になるから、ニュースの出先など、詮索しないことにしている。ある時日待てば、何もかもはっきりするんだから、黙って、

待ってればいいんだよ。ラジオでこう言った。新聞に、こう書いてあったというのは好いが自分のオピニオンを、何やかとはつきり、言うのは、避けないといけね。そりや、君、僕だつて日本人だから、勿論、勝つたと信じたいがね。』

この男は、敗戦の事実を知っている。しかし戦勝派の人たちの前で言う、無理のない、言い方を心得ている。この男の様に、無責任なバガブンドはそれでいいが、私の場合は、ぬらりくらり、レロレロは許されない。

山本勝造君からも、信じ難きものの多い事、全く、根拠がつかめない、など、言ってきている。

九月十日の日記、今日、○氏の所で、アルモツソをよばれていた時、○氏が、勢よく、やりはじめた。

『東京湾へ入って調印したという、敵艦ミズリー号が、みどり号と改名、日本艦隊に編入されたというではないか。又、いよいよ、有田さんが全権で、ブラジルへ来られることになったというのに、先生、貴方はまだ、日本の勝利が信じられないかな。これが信じられないという事は、矢張り、敗戦を信ずるということになり、結局、日本精神欠如、という結論になる。』云々、とまで、極論した。私をきめつけた。

私は、戦争の話以外は、満点の人だと知っているから、終始、黙々として、相手にならず有田さんが、今月中旬、こられるかどうか、待つて見ましよう、と、返事し、砂を噛む思いで食事をすました。側で、女中の娘さんが、日の丸の旗をぬっていた。有田氏

出迎えの時サントスへ持ってゆくためだそうだ。

好人物のO氏の昂然たる姿勢が、がくつと崩れる日が、遠からず、来る事が、わかっているだけに、堪らなく、淋しい気持で、店を出ようとした時、O氏と同県人のY氏が、入ってきた。

『ラジオをきいていると、腹が立つ。しかし、ラジオを叩き叩きでも、きかないと気がすまぬ。』といった。すると店に坐っていた茶業者のA氏も、九球のラジオを買ったが、敗戦デマばかり入って、戦勝のニュースは入らん。英米が、妨害電波を出しているに違いない。といっていた。O氏の店を出て、少しいったら、頑固オヤジで有名なM氏に呼びとめられた。彼は、孫子の兵法から説きはじめ、『欧州大戦後の世界の何とか』という題の古い本を振りまわし、これを読んで見ると、世界の、デリケート極まる外交戦の秘がわかる。君は、軍人精神がわからないらしいが、『斃れて後止む』と書いて見ろといってきた。私が、終戦の詔勅の内容を話したら、『ふーん、成程、うまい、それなら、だまされる。』と言った。

これも、相手にしないで別れた。帰り、ポルトの側のB氏の店へ寄ったら、戦争がはじまるとすぐ地帯から追放された、E牧師に会った。驚いたことに、この人も断然、戦勝を信じていた。大出のインテリだが、戦時中、警察にいじめられたための反動か、日本には、鋼固液爆弾、高周波爆弾があることや、犬吠崎の、敵第三艦隊撃滅まで、日本艦隊は、太平洋の真中に潜んでいた、旗艦には、恐れ多くも、天皇陛下が、御坐乗あそばされていた。戦

闘は四十二分で片付いた、など、頬を紅潮させて、勢よく話していた。

しかし、調子よく、相槌を打たない私を、不審そうに眺めていた。翌日、偶然、私と、サンパウロ行のオニブスで一緒になり、私
が、新聞を読んで、重要な個所を、赤鉛筆で、チェックしてゆく
のを、不安そうに見つめる目が、印象的だった。この人もあとで
苦しむなと思うと、気の毒になった。(この人は後に、牧師をやめ、
塾などやったが、又、牧師にあともどりしたという噂をきいた。)
私は、そうしたデマ、ニュースも、記念のため写しとる一方、エ
スタードデ・サンパウロ紙も、丹念に読んでいった。同じ日の、電
報記事の横の連絡の中に何か矛盾がないか、又、一日一日経過す
るにつれ、集積されてゆく記事を整理して、一カ月間、縦に通し
ての関連に、何か矛盾がないか、慎重に調べた。しかし、十日、二
十日、一カ月と経っても、いささかの矛盾、撞着もないとわかっ
た時、これは、どんな創作力を持った人間でも、どんな権力のあ
る国家でも、これだけ尠大なスケールの記事を捏造出来るもので
ない、という、悲しい結論に達した。私は、敗戦という苦しい現
実をはっきりみつめ、真正面から、男らしく取組む決心を固めた。

終戦と同時に、警察の監視も圧迫も、なくなったが、敗戦で打
ちのめされ、その上、予測もしない同胞間の相剋という、混乱に
直面している中に、いつの間にか、虚脱、放心から脱け出て、苦
しいけれど、新しい緊張の生活が、はじまっていた。

九月十六日、原子爆弾後報、ウラニウムの原子分解によって

生じたガンマー線の放射が一秒、二十五キロの速さで、人体中を通過すると、皮膚の組織、毛根、血液の補充の機能を持つ骨髄などが破壊され、頭髮の脱落、白血球の破壊、不足の症状が起きる。三十六日経った現在、尚、放射がある。連合国側は、広島、長崎に、十二噸の、医療材料を送った。九月十四日、東条大将、自殺に失敗。アメリカ人の看護婦二名に看護されている。

杉山元帥、自殺。マックアーサー、黒龍会に解散命令、とあると思うと一方、米國務省が「マックアーサーが、朝鮮統治を、従来通り、日本人の軍人総督に任せようとする計画がある」と指摘し、「軍人には、高速な政治や、外交はわからぬ。マックアーサーの計画は、訂正を必要とする云々。」と出ていた。

ポーツダム最後通牒によれば、日本は、朝鮮の統治権を失った筈なのに、このニュースは不思議だ、と思った。戦勝ニュースの製造元は、こんなニュースを利用するかも知れぬ。

九月十五日、新塾生一名、パラナより到着。その便で、宮腰氏から「祖国についての情勢判断」と題したもの到着。読んで見ると、私の想像と残念乍ら一致。宮腰氏も、「アメリカが、原爆のような非人道的なもので、非戦闘員の婦女子多数殺傷したことを非難し、この怨みは必ず報いずにはおかない。」と、結んであった。今となつては、死んだ子の年を数える愚痴はやめて、一意、祖国再建のため、献身、努力しよう、と決心する。

九月十七日、サンパウロ行。その折、終戦後はじめて、モジ・ダス・クルーゼス在住の舅の角田氏のところを訪ねた。

薬店の店先を通りぬけて、奥のサーラへ入ると見知らぬ、いかつい顔付の老人が、四五人、坐っていた。私が、目礼して、食堂へ入ろうとしたら、舅が、私を呼びとめて、『いい所へきて呉れた。まあ、坐りなさい。』と、椅子を勧めた。私は、その雰囲気の中に、何か異様なものを感じたので、又、あとで、と断って、食堂へ入った。久々振りの挨拶も、そこそこに、家内の母に、今日は、一体、何があるのですが、と、きいたら、軍人会の発会式だという。私の想像通り、舅は、日本大勝利と喜んで、古い軍服を染め直せとか、戦前の家の光をひっぱり出して、国民服を縫え、とか大騒ぎ。矢張り、レジストロと同じで、戦勝ニュースが、毎日のように廻ってくるという。長男が、ブラジルの新聞を読んで、親爺が、有頂天になって喋ることを、一々、嘲弄的に批判するので、癪に障るらしい。

私は、困ったことになった、と思った。私は舅の事を、ブラジル式に、パパイと呼んで、心から好きだった。人間として、百点をやってもいいと思う人が、私と、正反対の立場に立っている。家内の母や、長男には、敗戦後の日本の現状を細々、話した。

表の間では、皆、声高に、元気よく話し合っていたが、やがて、舅が、小柄の赤ら顔の老人と、食堂へ入ってきた。

入るとすぐ、「おお、松村さん、いい所へきてくれた。貴方も知っている通りのコロニアの混乱状態を收拾するには、どうしても、我々元軍人が出なければならぬ、という結論に達したので、今日、Y大尉、O中尉、それから、ここに居られる酒井中尉に集つ

でもらって、元将校を幹部とする、軍人会を結成した所だ。」

そこまで、一息にいったが、私の沈痛な表情に気付いたのか、「今日、こないいニュースが入ったところだ。まあ、読んでごらん。」といって、数枚の紙片を差出した。見ると、二通になっていて、各々に、横文字の、原文らしきものがついている。興味を持って読んでゆくと、一つは、ミズリー艦上の降服調印のもので、原文は英語。原文は正しいけれど、日本語訳の方は、『日本の天皇陛下は、連合国軍に対し、直ちに、戦闘行為を中止する様命令された。』と内容を逆に変改している。今一つの、原文は、伯字紙の切抜で、これには、B二十九が、アラスカを経由して、アメリカへ帰ったという記事、それが、日本語になると、帝国海軍空軍機は、本日、アラスカ経由、アメリカ占領のため、飛行した、と、勇ましい文句に化けている。

私は、二人の老人に、率直に言った。

『これは、とんでもないインチキです。大体B二十九というのは、アメリカの爆撃機です。又、英文の方も、こういう風に、故意に改作されている。』と、詳しく説明した。

二人は、困惑しきった表情で、黙りこんでいる。突然、その場の白けきった空気を破って酒井氏が、話しかけてきた。それは、好感の持てる、穏かで、落着いた、真摯、そのものといった調子だった。

『松村さん、私は馬鹿です。馬鹿だという事を前提として申し上げます。何故、馬鹿かと申しますと、昔、士官学校で勉強した英語

も、フランス語も、皆、忘れしました。二十年、住んでいるこの国の言葉も解りません。ですから、今、折角、貴方が、御説明下さったことの、真偽の判断も出来ません。だから、私は馬鹿だと申し上げたのです。そこで、貴方に、御願ひしたいのは、この私の馬鹿な頭で、日本が負けたことが、ほんとうに、はつきり、わかる日まで、私に、神国不敗の夢を持たせて下さい。』

酒井氏の、穏かな言葉、静かな口調、真摯な態度に、私は打たれた。それは、今まで、私の接した。戦勝派の人に共通な、気負いたった、挑戦的態度はまるでなかった。

私は、即答した。『解りました。しかし、酒井さん、貴方の心の中だけで、神国不敗の夢を持ちつづけて下さることはいいでしょう。しかし、日本が敗れたとわかった時は、潔くあきらめてくれますか。』

『はい、あきらめます。』酒井氏は、又、静かに、頭を下げた。

私は、好印象、深い感銘の外に、何か、私がうっかり、気付いていなかったものを、示唆されたように感じた。

私は、それから以後、数年間に、何百人という、戦勝派の人々と、接触したが、酒井氏と同じことを言った、まじめな老人が、二人いた。

男の店を出て、駅へゆく途中で、元、キロンボ植民地にいた光瀬という老人に会った。

この人も、全くの好人物で、私の好きな人だった。八年振りだった。おろおろ声で、涙ぐんで、再会を喜び、私の教え子だった娘

さんや、息子さんの話をしはじめた。私は、戦争の話に極力、触れないようにして別れようとしたら、突然、私の手を強く握って、『先生、戦争が大勝利でよかったですね。私は、今日角田さんの所へ行って、軍人会に入会さして貰いました。私は、これでも、歩兵一等兵です。若い時は、元気もんでしたよ。』と、如何にも嬉しそうに言う顔を見て、私は、つい先刻、酒井氏の話を書いたばかりだったし、路上の立話でもあったから、「よかったですね。」と、相槌を打って、別れた。

あの人の好きな人達が、又、前よりもっと激しく打ちのめされる日が来ると思うと、暗い気持ちになった。

モジからの帰り、サンパウロで、山本勝造君の店へ寄った。同君の所でも、日本から、戦前、呼寄せた叔父さんだけが、戦勝派で、若い人達と、意見の確執があって困る、といていた。もう一つ、不思議だと思ったのは、連合軍の、ノルマンジー上陸作戦の折、潮の干満まで調べて、上陸の日を予言して、ぴったり適中させた、と、大威張りだった中西周甫氏が、あの戦勝デマの魔術にひっかかり、二、三日、日本大勝利を信じていたということだ。勿論、すぐ、デマとわかって、しょげてしまったが、すっかり、今までの自信をなくしたという話だった。

宮腰氏の所でも色々、話をきいたが、私が、新聞で読んで得た知識以上のものは、あまりなかった。宮腰氏は、一日も早く、日本政府からの公報が入りそうなものだ。公報がこないことには、どうも出来ない、といていた。待ちに待った、日本政府の公報

が、宮腰氏の手許に届いたのは、私が植民地へ帰って、十日目だった。それから一か月たって、日本の権益代表国であった、スエーデン領事館へも、同じ、東郷外相のメッセージが、とどいた。赤十字社を通じた、宮腰氏の入手したものが、第一報だった。その公報の中に、一刻も早く、海外同胞に知らせて貰いたい。

早く知らせないと、大混乱が起るおそれがある。と書いてあったので、主だったコロニアの指導者が集って相談し、宮腰氏の翻訳した公報と、終戦の詔勅を謄写版ずりして、コロニア全体に通達したのだが、それがかえって、火に油をそそいだ様に、より大きい混乱を招く原因になってしまった。これは誰も予想しないことだった。

結果論としては、何でも言えるが、日本人自体、歴史的に未経験な出来事であったため、あの時の処置としては、あの方法が、急を要する場合、唯一であり、又、最も、効果的であると、思われたのだ。

私は、ここまで、終戦後、二か月間の、戦勝派の心理を、意識的に、くどい位、練りかえし書いた。それは、公報が通達されるまでにどの程度、戦勝ニュースに、スポイルされ、それが、信仰にまで、昇華していったかということと言いたかったのである。

幻の大本営発表を書いた人間は、最も、重罪に服すべき人間である。それが、手持の円を売ろうとしたユダヤ人の策謀とも言われたが、私には、草加次郎式の、異常性格者の行為と思われる。混乱が大きくなるにつれて、作者が、複数化してきたことも、想像

される。敗戦、日本無条件降服の報は、信じかね、納得出来ないままではあったが、コロニア日本人を一度は絶望、不安のどん底に叩きこんだ。そうした絶望、不安から彼等を救い、歓喜を与えたのが、偽りの戦勝ニュースだった。

鎮静剤をのんで痛みから救われた者が、元の痛みに戻ることを恐れるように、彼等も今一度、敗戦の絶望感を味わうことを、本能的に拒否したとも、考えられる。戦勝派が、最初、絶対多数であったことも、彼等に安心感と、正道感を持たせたとも思われる。しかし、終戦についての日本政府の公報は、戦勝デマニュースのため、効果半減したが、一方、祖国の敗戦を認識した人達には、力強い、心のより所となった。

錦の御旗を奉じた気持になった。

ここで、私は、世間一般の人が、ほとんど知らない公報入手の経路、公報の内容、翻訳文による通告までの事情を詳述したい。それは戦勝ニュースに惑わされて、公報を受取っても、宮腰の作った勅語と非難し、あんなものを何故廻すと怒った人々に現在の冷静な頭で今一度、是非、読んで貰いたいと思う。

終戦後、二か月目の或日、当時、聖市サンフランシスコ学園々長であった、ギード・デル・トーロ神父（アマゾンのベレンで去る三月八日逝去）が、通訳の日本人青年と、バンブローナ街の宮腰邸を訪れた。ギード神父が、『実は、ブラジル赤十字代表から依頼されたのですが。』と言って差出した電文は、宮腰氏が、今日か

明日かと待ちに待った公報だった。スイスの赤十字本部から、アルゼンチン経由ブラジル赤十字代表に送られてきた、終戦に関する、海外日本人宛のメッセージだった。何故、そんな廻りくどい経路を通ってきたかという点、終戦時の日本政府として、依然として、国交断絶状態の国々の在留同胞に連絡する二つの手段を持っていた。一つは、万国赤十字本部を通じること、今一つは、日本の権益代表国、スエーデン政府に依頼することであった。日本政府は、終戦の詔勅伝達に両方の手段を使った。日本政府の依頼を受けたジュネーブの赤十字本部は、先づ、中南米における代表アルゼンチンへ送った。アルゼンチンはその電文を、中南米各国赤十字代表向け転送した。

それを受取ったブラジルの赤十字代表は、日本の外交官は、開戦直後、交換船で全部、本国へ引上げて誰もいないので、誰に渡していいかわからないので困った。

重要な公報だから、絶対信用出来るものでないと渡せない。そこで、各方面へ照会した結果、サンフランシスコ学園のギード神父なら日本人社会と接触があるから、あの人に依頼すれば、何とかしてくれるだろう、という話になり、電文がギード神父の許へ届けられた。ところが、そうした重大事を依頼されたギード神父も困った。日本人の大部分がカトリック信者なら、責任を持ってもいいが、カトリック信者は少数だ。

どうしても、日本人コロニアの代表的人物に依頼せねばならぬと、学園関係の日本人の人達と相談の結果、大使がここを引上げ

てゆく時、後始末を委嘱された、海興の宮腰氏が、適任だろうという話になり、今日、参上した、という訳だった。

日本政府の公報は、東郷外相から、中南米各国政府宛（これは、国各が列記してありブラジルは、何番目か、真中辺にあった様に記憶する。）各々の国に居住する日本人に対し、一刻も早く、終戦の詔勅を伝達してほしい、といった、依頼の言葉が、フランス語で前文に書かれていた。そして、本文の詔勅だけが、英語だった。宮腰氏は、至急、サンパウロ在住のコロニアの指導階級の人々を招集し、協議の結果、大至急、詔勅を翻訳、印刷して、コロニア全体に通告することに決定した。

詔勅の翻訳は、宮腰氏が担当した。新聞社は発禁になったままで印刷機は使えないから、謄写版ずりでやることになった。何しろ、戦勝デマが、益々、横行していたから、大至急各日本大会宛公報のコッピ―が送られた。そのコッピ―には、責任者として宮腰氏の外、当時のコチア組合理事長、下元健吉氏（故人）東山農場支配人・山本喜誉司氏（故人）元アルゼンチン公使・古谷重綱氏（故人）元陸軍大佐・脇山甚作氏（故人）、（臣道連盟特攻隊暗殺）ブラ拓支配人・加藤好之（故人）、蜂谷商会・蜂谷専一氏（現サンパウロ東京銀行頭取）。

以上の七氏が終戦の詔勅伝達の責任者として連署した。

終戦の詔勅にある大御心を、コロニアに伝える事によって、戦勝デマに惑わされ、大混乱におちいりかけている同胞を啓蒙し、一日も早く、コロニアの与論を統一し、祖国復興に協力しよう、と

思つてやったことが、却つて逆効果になり、反動勢力は、臣道連盟の名の下に組織化され、その中の急進派が、特攻隊と称する暗殺団となり、何隊にもわかれて、認識運動の指導者と目される人々を次々と、襲撃するといった事態が、公報伝達後五カ月後に突発した。

十月三十日。日本語の通信が許され、中林敏彦君（現日伯毎日社長）から第一番目の手紙がきた。ブリグイの山奥も、勝った、負けたで五月蠅いらしい。

日本の公報がきてから、大義名分がはっきりしたため、堂々と、認識運動が出来る。一方戦勝派との接触が、段段、むつかしくなってきた。その頃作った、私の拙ない歌がある。

涙もて、祖国と書きし 砂の字を

子等は 無心に 踏みて通りぬ

十一月九日、私の裁判は、弁護士の保証通り無罪の判決。モジの田畑三郎君からの手紙によると、戦勝組の行動は、益々、激しくなり、敗戦を唱える者は逆賊なり。といつて、サンパウロ郊外を遊説して歩いているとのこと。

モジの奨学舎々監、坪内女史も、宮腰氏等の連署した公報を、全面的に信ずると、父兄会の席上で声明したため、戦勝派父兄達の吊しあげを受けたらしい。宮腰氏については、敗戦の親玉の彼は、罪科弥天と、大袈裟に、誹謗しているとのこと。

最近、出廻っている、イタペチニンガ経由の戦勝ニュースは、伯字新聞からニュース源をとり、巧妙に、変改した式のニュースで、

前回のような突拍子もないものに較べると、遥かに地味で、真実らしい感じを出すのに苦心している。智能犯の製造元も、戦闘が終ってからでは、デマニュースを作るのも、骨が折れるだろう。この頃は、敗戦、敗戦論者、敗戦カタル、などの色々のレツテルをばられた私には、戦勝ニュースを、誰も、見せなくなった。

奥地にいるある塾生の親から、「私達は、日本の勝敗に関して、三十万の中の誰が、何と言おうと、日本から、信ずるに足る人がきて、一切の事情を話してくれるまで、絶対に、信用しない。」とやってきた。この人も、人間的には仏様みたいがいい人だし、最初、日本敗戦ときいた時、テレーロへ出て、天を仰いで、号泣した、ときいているだけに、只、胸が痛む。若い者も考えこんでいるが、仕方がない。

家内が、夕食の折、原子爆弾や、日本人同志の勝った負けたの話などきくと、人間の世の中に、何の希望も持てない。早く死んだものが勝だ。などいつていた。

十一月二十四日、町のM氏の所で、子供の日本語の勉強をはじめてやる。ところが、カフェーの時、じいさん、ばあさんは、わかるとしても、ここ生れの嫁さんまでが、公報のことを、「今更、あんなことをしなくてもいいのに。」と、憤慨するから、詳しく、事情を説明して置いた。

エスタード紙に、面白い記事が出ていた。

米国の一通信員の報道として、「日本人は、敗戦という事実について、日本人独特の解釈をしている。」といている。敗戦という

言葉をさけて、終戦といっていることを指すのかも知れない。

十一月二十八日、奥地の一父兄から来信、それには、最近、同地の一父兄の所で、私の手紙を見て、私が、敗戦認識派であることを知って驚いた。何とか、日本の勝利を信じて下さい。日本の勝利の証拠になるものを見ていないから、負けたと思っっているに違いない。といって、マックアーサーが、丸腰で、お辞儀をしている写真とか、ミズリー艦上に、掲揚された日章旗とかの写真など、送ってきて、これでも、どうしても、敗戦を信ずる、と言われるなら、仕方がない、息子を帰して欲しい。と、かいてあった。私は、日本人として、天皇の出された詔勅を絶対だと思い、大御心を、皆に伝える運動は、あくまで続ける決心でいるから、残念乍ら、息子さんをお返しする。と、いって青年を帰した。(その青年は、臣道連盟の暗殺隊に加入して、植民地の有識者を狙撃した犯人として投獄された。これは、親の責任である。)

十一月三十日、モジへゆく。舅が、軍人会副会長と、戦勝派日本人会の会長に、まつりあげられたらしい。私に軍人会趣意書を見せ、非合法は、極力、避けるというから、軍人会自体が、既に、非合法であり、必ず、当局の忌緯にふれる危険がある。一刻も早く、辞任するよう、忠告しておいた。舅は、日露戦争と、シベリア出兵と、二回、出征している。凱旋した折の写真を見せてくれたが、一つは、昔の、肋骨のついた軍服をきた、若い、きかぬ気の顔の青年将校が、軍刀に仕込んで持っていった、伝家の名刀を、刃こぼれしているかどうか、父親の前で調べている、仲々、男ら

しい写真だった。過去に、そういう体験があると、仲々、負けたとは信じられないものかな、と、思ったが、と行って、放っておくわけにも、ゆかないので、誠心、誠意、諫めておいた。私がゆくと、親爺は、平清盛が、重盛がくると慌てて、鎧の上に法衣をきたように、急に、穏かになるが、法衣の下から鎧がちらちら見えるから可笑しい。人間的に大好きな人だけに、何とか、早く、わかって欲しいと思った。その頃の町の噂では、あんな、宮腰が作った詔勅など信ずるものか、とっている、という。教育勅語以来、私達日本人は、勅語の前で、最敬礼させられている。勅語というもの、まるで我々と縁のないような、むつかしい言葉が、羅列してあって、いかめしい表情で、我々臣民を、威圧するもの、と行った、感じがぬけていない。普通の用語で、又、口語体などに翻訳したら、勅語の感じが、まるで出ない。私も、八月十六日の新聞に出たのを、すぐ翻訳したが、後で終戦の詔勅の日本語の原文と比較した時、用語の相違は勿論のこと、威厳というか、貫禄というか、断然、問題にならぬ。しかし、東郷外相は、英訳した詔勅を送ってきたのだから、翻訳する以外、仕方がなかった訳だ。ここで、私は、ふっと、思い出したことがある。

それは、大東亜戦がはじまって、対米宣戦布告の詔勅が、サンパウロ総領事館から、矢張り、謄写版ずりで、廻ってきた時のことだ。私は、気が付かなかったが、レジストロ五部で、日語教師をやっていた、元陸軍大尉の仁井田という先生が、詔勅の中に、誤字を六つ、見つけたと言っていた。一般大衆の期待と一致するも

のなら、文章がどうだろうが、誤字が、いくつあろうが、何の文句も言わない。しかし、今回は、皆のいやがることを信じさせようというところに、むつかしいところがある。

一九四六年正月、『奥地の植民地では、戦勝組が、九割を占めて圧倒的。敗戦派は、村八分にされている。

今まで、戦死した、何百万の英霊に対しても相済まぬから、はっきりした事情がわかるまで、勝利を信じてゆく。

先生も敗戦論では、塾生の指導に力も入るまい。』といってきたと思つたら、次々と、塾生をつれにきた。ところが、一方で認識派の方の子供の入塾希望者が増えてきた。

新聞は、近衛自殺、山下奉文將軍絞首刑宣告を報じているのに、町では、日本全勝派と自称する、奇妙な、サムライ共が、戦勝祝いの芝居をやる、というから、やりきれない。頭が妙になる。

二月二十一日、今日、町の出利葉氏の所で、火野葦平の「悲しき兵隊」の話をきく。早く読みたい。

三日十六日、出張教授先の田中氏の所で、はじめて、戦勝派のパンフレット、耀号を読む。日支事変のはじめの永井柳太郎の演説なんか、のせている。天皇陛下を階下とかいたり、誤字が多い。全く、つまらない内容だが、戦勝派の人は、有難いと思つて読んでいる。

此頃の私は、野尻抱影の星座巡礼をよんで星の勉強。何十億光年の彼方の星に想いを馳せ、無限、悠久の中に、自分の魂を、伸々、散歩させてやる。

三月九日、モジの田畑君より受信。自分は、今まで、敗戦について、一言もいった事がないのに、敗戦の烙印を押されて排斥されている。と知らせてきた。

この頃は、戦勝派も、認識派も、対立感が、尖鋭化して、お互い、敏感に、敵味方を、一寸した表情、態度、言葉つきなどで、識別する様になっていた、田畑君は、私達の様子に、公然と、敗戦の話をして啓蒙運動に、たずさわっていなくても、勝ち組の話をきいている時の態度に、何か、熱がないとか、同調しない、とか、敗戦派の家へ出入りするとか、いった事で、選別されて仕舞ったのだろう。

今日、レジストロの町角で、Nという男が、写真を拵げて、皆にみせていた。何かと思つて覗きこむと、ミズリー号詞印の写真だ。

Nが、私に、噛みつかんばかりの真剣な顔でマストに掲揚されている旗は、日本の軍艦旗であり、絶対に、アメリカの星条旗ではない。この旗が、日本の旗に見えぬ者は、日本人じゃない。という。私は、写真を見て、「私には、日章旗と見えない。日本の勝利が、それほど歴然としているなら、そんな写真を、アメリカが、発表する筈ないじゃないか。」と言つたら、ふつと、怒つて、「敗戦にや、何言つても駄目だ。」と言つた。

英米が、最近、戦時中、枢軸に好意的だったアルゼンチンとスペインを、庄迫しているのを見てもわかる。新聞記事など、信じようとしなくせに、そこらの新聞か、雑誌に出ていたあんな写

真の切抜きを持ち廻るようでは、戦勝組も頼りないものだ、と思った。(これは、私の計算違いだった。インチキにしる、何にしる彼等が、戦勝の論拠を失った時、一切の、理性から離脱して、信仰的になっていった。集団性の信仰は、熱気を帯びて昂まり、遂に殺気となって、暗殺団が生まれたのだ。)同じ日に、サンパウロの池森君から、時局柄養正塾の使命、益々、重大、頑張つて下さい。と激励の手紙がきた。心友は有り難い。大いに勇気づけられる。

パラナの一父兄から、「運動会の開会の辞の中に、高周波爆弾、日本大勝利がとび出してくるのですから、お察し下さい。」と書いてきた。認識派が、隅の方で、小さくなっている様子が、目に見えるようだ。

聖市、パンプローナ街の宮腰邸は、マタラーズ伯の大邸宅と向いあった、閑静な、高級住宅街にあった。アペニータ・パウリスタから、百歩ばかりの距離で、便利もよかった。公報発表以来、宮腰邸は、認識運動の、参謀本部となり、コロニアの指導階級の人々が、絶えず出入した。ポロンで、認識運動のパンフレットを編集、印刷した。記事は、北米のコロラド時報、羅府新報の記事の転載、ラジオニュース、外字新聞の翻訳記事などに頼った。印刷は、元総領事館にいた加藤君が、邦文タイプした。パンフレットによる啓蒙運動は、日語新聞が発刊されるまで続いた。

終戦直後、進駐軍の厳格な監督下におかれ、厳密な検閲を経て発行される新聞、雑誌は、編集スタッフが、軍国主義者は追放さ

れて、戦時中圧迫されていた、自由主義的人達と人替ったため、その用語、表現法の中には、敗戦の現実を充分認識している筈の私でさえどきつと、するような、又、反撥を覚えるようなものがあつた。あの時点では、アメリカ軍の厳しい検閲、発禁、追放を意識して書かれたのだから、無理はないが、戦勝派を啓蒙するパンフレットにのせるには、穏かな、徒らに相手を刺激しない表現に変えて掲載する必要があると感じた。早速、それを宮腰氏に、進言したこともあつた。

一方、戦勝派は、認識派の陣営が強固になるにつれ、反動を増していった。益々、対抗的になり、戦勝ニュースが洞濁すると見ると、神国不敗、日本精神、軍人精神、などの護符だけを懸命に握りしめ、信仰的な集団になりその中から、彼等に反対する者に対する憎悪が生れ、それが、何千、何万という群集にもまれていくうちに、殺気をはらんできた。

それは、遂に、一九四六年三月、バストス植民地で起きた、溝部氏暗殺事件で、暴発の火蓋が切られた。

四月一日。当時、コロニアの何百という日本語学校の総元締をやっていた、文教普及会事務長・野村忠三郎氏が、自宅で暗殺された。

こうした一連の暗殺事件から、これは、組織的、計画的な犯罪だと、気付いた私達は、急に、戦時中の何倍か、急迫した緊張感につつまれた。皆、護身用の拳銃を、肌身離さず、持つようになった。宮腰邸に入ってくる者が腰から拳銃を外して、メーザの上に、

どきつと、置いて、やれやれといった表情をしていたことや、森田君が、マツピンのシヨウウインドにうつる自分が右肩を下げているのに気付いた。よく

(S.P.G 抜けている)

したものだ。あの元気があるから、神風が生れたり、ブラジルの原始林が開けるのだ。』といった話もきいた。直接、何の影響もない、ブラジル人は、呑気な観察をして、感心しているが、私達日本人は、そんな呑気な事は、いつて居られなかった。啓蒙運動も、命がけになった。暗殺事件が頻発しはじめてから、私達のファイトも、湧いてきた。戦勝派は、現実と逆であろうと一向、平気で、信念をふりまわし、意気軒昂。一方、私達は、それまで、こちらの新聞の翻訳文、アメリカ版の日本新聞、などの借物の寄せあつめで、おまけに、負けた話は、どんなに一生懸命やっても、沈痛になり、陰気臭い。私のような、陽性の性格には、全く、苦手だった。

終戦一年後の九月頃、日本新聞の発行も許され、十一月には、赤十字社を通じて、日本の肉親からの手紙が着きはじめた。

十一月十一日、宮腰夫人から、新宿の家は焼けたが、家族一同無事、との便りがあつた。コチア組合レジストロ主任の安藤氏から、敗戦真相記を借りて、貪るように、読んだ。祖国の肉親から便りがきたり、邦字新聞が発行されたりして、戦勝派の中からの脱落が、増えてきた。ところが、それは、戦勝派の氣勢をそぐ所

か、反対に、彼等の信念は狂熱化し、態度は、益々、硬化して、それから、一年以上も、未だ暗殺事件が、続いた。

終戦翌年の五月、塾建設以来、塾母として、六名の自分の子供の外、十数名の塾生の面倒を見て、今まで、お産の時以外、寝たことのなかった丈夫な家内が、突然、発病、二カ月の治療ののち、不帰の客となるという思いがけない不幸が起った。アクチノミコーゼ（放射状線菌）という、病気だった。宮腰氏のおかげで、最後の一週間、日本病院で、十分な治療、塾生達の献血による輸血、など、思いのこりない看護が出来たことは、せめてもの慰めだった。

家内が、死ぬ二日前の真夜中のことだった。私は、モジから看護にきていてくれた舅と、寝台の上に乗って、無言で、向いあっていた。舅が、突然、沈痛な調子で、『もう、注射を打っても、徒らに、苦しめるばかりだから、止めたらどうかしら。』と言った。輸血すると、鼻血になって出るし、静脈注射も、血管が、いたんで、針が、仲々、入らないので、病人が苦しむ。一方、病態は、益々悪化、という状態だった。何もかもよく知っていた私だったが、舅の提案に対して、即座に、『私は、家内が、最後の息を引取るまで助かる、と信じてゆきます。最後まで、注射をつづけたいと思います。』と言いきった。

舅が、何とも言えぬ、悲しそうな顔をしたのを見て、私は、はつと、気付いて、言った。『パパイ、これは、戦争の話と逆になりましたね。医学の事では、貴方は、今まで、何十年も、医局や薬局

の仕事をやってきたから私より、遙かに、大きい知識をもっている。家内に対する愛情は、実の娘だから、私に、まさるとも、決して、劣る筈はない。その貴方が、注射を打つても、無駄だと、冷静に、判断するのです。一方、私は、愛情だけにすがって「息を引取るのを、この目で確かめるまで、死ぬと思わない、どうしても、それまで、注射を続けたい」と反対しています。ところが、戦争の話になると、逆です。私は貴方より、多少なりとも、余計、外国語が、わかる所から、祖国に対する愛情は、貴方と同様、持っている自信はあるが、理性的には何としても、祖国の敗戦を認めざるを得ないのです。

舅は、黙って、私の話をきき終ってから、うつむいた。私も、懸命に、自分の感情を抑えた。となりの寝台にねていた家内は、発病以来、耳がきこえなくなっていたので、私達の深刻な、会話の内容は、わからなかった。只、うつろな目を、天井にむけていた。

次の日、武田ドクターに、注射をやめて下さい、と頼む。と実は、私も、そう思っていたのですが、医者としては、言い出せなかったと言う。それから、鎮静剤だけ打った。それから二日後に家内は、「レジストロへ帰ろうよ。」の一言を最後に、息を引取った。埋葬は、アラサ墓地だった。渡辺マルガリーダ夫人、石原氏が一切の世話をして下さった。何百人の会葬者の中には、刑事に護衛された宮腰氏はじめ、護身用の拳銃を身につけた認識派の人が沢山いたし、一方、私の昔の知人で、戦勝派の人達も、この日だけは、日頃の相剋を忘れて、多く、集ってくれた。脇山大佐暗

殺事件後、数日後だったので、緊張した雰囲気だった。私の家内の死という、小さい一個人の悲劇を中心に集った人々も、この墓場から出ると、又、元通、二つの相争う集団になって仕舞うと、思うと、情けなくなった。

十二才を頭に、六人の子をのこされた私は、祖国の引揚者のみじめな人達の事を思えば、何でもないと自分に言いきかせて頑張った。家内がなくなってから、入塾希望者も増え、外部出張も、今まで以上、忙しくなった。

一九四七年一月四日、日本の両親から、待望の手紙到着。海軍々人だった父から、祖国は刀折れ、矢尽き敗戦。マックアーサー將軍の温かい援助で、食糧問題、その他の難問題も、漸次、解決し、国民は、再建の希望を持って進んでいる。私は、聊も、外聞もかまわず、店の下働きをしている。嬉しい便りを待つ。といってきた。私の父は、退役海軍々人だったが、開戦と同時に召集を受け、呉軍港の近くの小倉の航空廠の工員寄宿舎で、六千名近い工員の総舎監をやっていた。私の家は、呉軍港が、一目に見下せる、灰ヶ峯山麓の上平原の高台にあったが、東洋一を誇った軍港も工廠も、連合艦隊の偉容も、一切、消え失せ、一面の焼野原の町を、毎日、眺めてる、老父の心境を思うと、堪らなくなった。嬉しい便りを待つ、とこちらの便りを、唯一の希望にしているのに、家内の死の通知が、第一信となるとは、余りにも、むごい事だ。しかし、家も無事、家族一同、無事は何より幸福だと思わなければいけない。自分より、もっと、不幸な人の事を考えろ、自分に言い

きかせた。

翌日、町のある店先で、両親からきた手紙の話をしていたら、側にいた、一人の男が、『軍人だなんていったって、禄でなしもいるからな。会って見なければ、そんな手紙、ほん物か、偽物か、わからないよ。』といった。私は、それまで、人と殴り合いの喧嘩など、一度もしたことのない男だったが、この時ばかりはほんとうに、腹が立った。親を侮辱された事は、自分自身、顔に唾をかけられた以上、腹が立った。何、今一度、言ってみろ、と、拳を握ってつめよったら、相手は、私の氣勢にのまれたか、こそこそ立去った。

一月十日、森田君の令弟が、森田君と間違えられて、特攻隊の青年に殺される。白昼、町の真中での犯行。単独犯らしい。

終戦二年目の七月、宮腰氏が、サンパウロを引揚げて、塾に移転することにきまった。

はじめ、北パラナのウライ農場へゆく話だったが、支配人の二宮君が、州道路が、すぐ、農場の側を通っているから、危険だ。私の死ぬのは仕方ないとしても、宮腰氏まで、守る自信がない。と、いつてきたので、レジストロへくることに変更されたのだ。

私は、責任上、暗殺隊の襲撃に備えて、万全の準備を心掛けた。遠方からの狙撃については、充分、配慮した。塾生も、青年組と、少年組にわけ、青年組も、童夢クラブの、聖市演奏会以来の宮腰氏との縁故に、恩義を自覚して自発的に、護衛役を申出た者だけが、万一の場合、私と一緒に防戦する。外の者は、一切、手出し

をしてはいけない、と注意を与えた。その時、森田君からもらった、特攻隊の殺人事件に関する、警察の調書を見ている中に、面白い事を見つけ出した。それは、彼等の襲撃の全部が、相手の油断、無防備につけこんで行われているという事だった。

個人の家庭へ、四、五人党を組んで、押入ったり、夜、便所へゆくところを、遠くから狙撃したり、後を向いている所を射ったりした例ばかりだった。「さあ、来い。」と、手ぐすねひいて待っている所へ、殴りこみをかけた勇ましい例は一つもなかった。ピストルという飛道具のおかげで、度胸のない者でも、人が殺せるんだな、と思った。短刀しか使えなかったら、殺人事件なんか起きなかったかも知れない。結局自分の命を捨てる気でやった者がいないと、言う事だ。これは、多寡が知れていると思った。私は、町へいって、わざと、塾の防備態勢の事を話した。カービン銃一挺、ピストル五挺、若い者は十何人いる。こちらも。やられるかも知れないが、来る連中も、全滅だ。

ところが、それから、一、二カ月後の、某邦字新聞に、面白い記事が出た。

『最近、コロニアの中心人物だった人が、特攻隊襲撃を恐れて、都落ち。農場の家の廻りに鉄条網をめぐらし、カービン銃、その他、銃器多数、用意して、防備おさおさ怠りなし、とのこと。さて、面妖な。』とあった。

私は、戦勝派に言われるのなら、当然だと思ったが、コロニアの啓蒙に任ずべき邦字新聞がそうした皮肉な記事を書いた事には、

むかつとしたが、私の企図したことは、達したわけだから、まあいいと、思った。ところが、あの記事を見て、まあ、いい、と思わない、純情で、気の短い男がいた。それは、中林君だった。丁度、その日、あの記事をのせた新聞の記者であり、彼の友人である男と、一杯、のんでいた。話が、記事のことにふれ、中林君が誰が書いたかときいたら、相手が、「俺が書いた。」といった。中林君が、間髪を入れず、相手を殴りつけたという訳だ。あとで、調べたら、彼は冗談に言ったことがわかり、又、一杯のんで仲直りしたという、面白い話もあった。

一九四七年、日本救援会を、植民地の、山崎良作氏を会長として、結成した。力強い同志が多く集り、心強かった。

今でも思い出深いのは、終戦三年目の七月に、第一回の救援金募集のための演芸会をやった時の事だ。私は、開会の幕を切って下す時の趣向を懸命に考えた揚句、日支事変当時、キロンボ植民地のフェスタでやって、大喝采を拍した、忠魂碑的一幕からはじめようと思った。戦勝派の人々は、とかく、敗戦認識派の私達を、非国民と呼び、日本精神欠如と、非難するから、忠勇なる陣歿将士の英霊に、黙禱を捧げることから、はじめようという事にきめた。ところが、まだ、ブラジルは、日本と国交を回復していないから、敵国のままだった。忠魂碑は、ちと工合が悪いから、招魂碑にしよう、皆の智恵で変更した。

黒地の自然石を模したものに、招魂碑と、銀紙で筆太に書いた碑が、暗くした、舞台の中央に置かれている。観客は、幕があい

でも舞台が暗いから、何があるかわからない。荘重な、君が代ラツパ曲が、静かに奏せられ、楽の音に合わせて、客席の後の照明係が、懐中電燈の焦点を、小刻みにひらいてゆくと、招魂碑が、暗い舞台の中に、浮上ってくる。声なき凱旋の合唱が始まると、白衣の少女が碑前に、花環を捧げて黙祷する。これがすむと、突然、パツと、舞台が明るくなり、楽団全員の力強い愛国行進曲の合奏、合唱につれて、十数名の少女が、華やかに、踊って出るといった趣向で、絶讃を拍した。感激して、涙ぐんでいた人が沢山いたそう
だ。

郡役所の後援、伯人有志の寄附など沢山あつて、千人近い入場者で、超満員の盛況だった。終戦後、はじめての試みであつたし、戦勝派の中傷、妨害もあつたので、心配していたが、大成功だった。その感激に満ちたフェスタの中に、とんでもない、異質な、飛入りがあつた。丁度、プログラムが、半分位、順調に進んだ時、サンパウロの岸本某という人が、今晚のフェスタの祝辞をのべさしてくれ、と申込んできている。と、世話役のM君が、いつてきた。何だか、きいたような名だと思つたが舞台の準備で、忙しかつたし、幕間を利用してやらせろ。といった。

ところが、話が、はじまつて見て、皆、驚いた。『日本は負けているどころか、大勝利です。その証拠に、私は日本の敵国になつて
いる当ブラジルの戦艦、ミナス・ジェライス号が、武装解除されているのを、この目で、確かめてきたのです。』などと喋りはじめた。「フェスタをぶちこわす積りでやってきたか。引ずり下せ。」な

どの意見も出たが、折角、これまで、上々の成績で盛上ってきている。フェスタの雰囲気がおかれるのを心配して、袖をひいて下りて貰った。郡長や、若い二世の連中は、デレガードに、逮捕させて、カディアにぶちこめ、といていたが、まあまあと穏便にすませた。非常識というか、まるで、気狂い沙汰としか思えなかった。本人は、いたってまじめだった。

救援会第一回フェスタは、大成功だった。つづいて、レジストロ二部、ジュキア線セードロ駅でもやった。どこでも何の邪魔も入らず大成功だった。

八月二十五日、広島原爆体験者のドイツ人、ラザーロ神父の話をきく。静かな人で、深い感銘を受けた。

翌一九四八年一月、ドイツ人ポンセレット神父の話をきく。敗戦日本の実情を、実に、暖い言葉で話してくれた。驚く程、完全な日本語で、所々、わざと、東北の方言を入れたり、天皇様と呼んだりして、皆を、涙が出る程、嬉しがらせてくれた。悟りきった、そして円満福德のお坊さんといった感じ。

十月、戦勝組が戦前の、南京攻撃とかいう古い映画を、東亜の女性と改題して上映。大氣勢をあげたとのこと。勝った派の中の、A氏の息子は、ブラジル娘と逃げるし、B氏の娘は、ブラジル人の父なし子を生んで、どこかへ預けられているという。親爺達は、教育なんかそっちのけで、心理的に、子供から、全く、遊離して生きて居り、みんなが集って一杯のんでは、日本大勝利と
いっている。

十一月十五日、外電の報ずる所によると、東条大将外三名、絞首刑、外十二名、終身刑に決定とのこと。東条大将は、堂々たる態度で、勝者の裁判は当然、こうなるものと、予想していた。只、部下の閣僚にまで累を及ぼすことを、遺憾に思う。と述べている。

大東亜戦について、あくまで、正義感と誇りを持っている彼等被告達の態度は、毅然、優雅、且、恐るべきものがある、とほめてい

終戦後三年ほど経って、暗殺に参加した者は勿論、彼等、単純にして、純情な青年達を、指揮して暗殺行為に走らせた、背後関係の、臣道連盟の幹部連中は全部、逮捕され、裁判の結果、投獄された。私の舅も、軍人会関係で逮捕、未決にいれられた。藤平君の話では、国外追放になるかも知れぬといていた。

しかし、幸い、暗殺と関係ないものとわかって、無罪放免となった。

それからでも、コロニアに、偽宮様が現れて、結構、善良な人達を家来にしたり、ボルネオの土地売りなどのインチキが、横行したりした。

一九五〇年、古橋選手達がきた時の、パカエンブーの感激は、忘れられない。私は、塾生達十数名をつれていった。戦後、始めて、公開の場所で仰いだ日の丸の国旗、なつかしい君が代の演奏に、涙したのは、私一人ではなかったろう。それから、数年後、藤平君の依頼で、州議員に立候補した、パジャーリヤ体育局長の選挙

運動の世話をした時、一週間、一緒に歩いた。その時の、同氏の話によると、古橋達がきた時は、まだ、日伯両国間の国交が回復していなかった。それで、日本の国旗を掲揚したり、君が代を奏することが、連邦政府の忌緯にふれはしないかと、パジャーリヤ氏が心配して、時の州統領、アデマル氏に電話したら、『お前、きんたまあるか。約束したのならやれ。』と激励されたと話していた。あの古橋達をさえ、北米からの廻し者とか、偽者だなどと言って、家族の者を困らせた老人がいた。

勝組の人々は、同じ植民地の中に、別の日語校、日本人会、青年会を作った。そのため、途中で、敗戦を認識した人も、仲々、抜け出られなくて困ったらしい。戦勝派も此頃になると、今までと違った物の言い方をするようになった。

『終戦直後、すぐ敗戦がのみこめた奴等は、大和魂が足りない。それがわかるのに、抵抗があり、時間がかかる自分等のようなのがほんものの日本人だ。』など言っている。

此頃になると、私にも、戦勝派の気心が、大分、のみこめてきたから、人を見て法を説け式に、説得の方法も、大分、上手になった。論拠になる材料は日々増えてゆく一方だから、今迄のような弱い調子でなく、断乎とした態度で説得にあたった。

「敗戦派は、日本精神にかけている」と、戦勝派は非難するから、まず、私が、毎朝、東方遥拝して、祖国復興の日の一日も早くらんことを祈願し、君が代を朗誦し、川へとびこんで禊をやっていることを話して、私に、日本精神がないと言わさないようにする。

それから、原爆を使用したことは、スポーツで言うなら、大反則だ。公正な、人類の良心が、審判なら、アメリカの負だ。

又、日本は、全世界を相手に、死力を尽して、戦ったのだ。盟邦、独伊が敗れてから、孤立して、世界中の重圧が、全部、かかってきた。例えば、ここに、一人の柔道の黒帯の青年がいるとする。彼は、初心の者を相手にする場合、一人ずつやれば、十人でも、二十人でも投げる。しかし、二十人が、一度にどつと、かかったら、押えこまれるのは、当然だ。仮令、押えこまれても、その黒帯を、弱いとは言えない。

断然、強い。それと、同じで、日本も、仮令、敗れたりと言え、断然、強かったんだ。こういう論法で力強くやるのが、一番効果的だった。

認識派の中には、私の事を、両股膏藥だと、言う者がいるときいた事があるが、私のそうした論法が、誤解を生んだのだろう。

戦勝派の中にも、齒の浮くような、戦勝デマニュースは、信じてないが、一方、新聞の報ずる敗戦記事も、そのまま信ずるわけにいかぬという、穏健型の、まじめな人が、沢山いた。そうした人に、私の話をきいた後、『貴方は敗戦論者じゃ、ありません。』と、言われて、私自身、まごついたことが、あった。そういう人は、きまって、私の話を、終りまで溫柔しく、きいてくれた。

東京裁判の、印度のパール判事の、日本無罪論も、興味深く、読んだ。パール氏の、公正な考えに、心から、感謝した。

又、東京裁判の行われていた頃、日本に駐在していたことのある

る、英国武官が、『戦争直前日本が、追いこまれていた状態を考えると、キンタマを持った男なら、戦争に突入する決心をするのが、当然だ。』といているのを、この国の新聞で読んだが、日本人として反省を促がされた。同じ認識陣営の仲間でも、敗戦の現実を前に、日本人の誇りを失って、日本の負けるのは当たり前だとか、日本語なんかもう不要だ、日本人廃業だ、などと、公言する自暴自棄の者もいた。(最近、アスナロ楽団の指揮者であり、創立者である、海兵出身の異色の牧師、宗像基氏が、彼の教会の機関紙『一粒の麦』の中で、『私は、クリスチャンでありながら、米国のベトナム戦介入を支持する人間より、仮令、その人が、異教徒であろうと、ベトナム戦における米国の非人道的行為に、反対する人の方を、尊敬する。』といているのを読んで、深い感銘を受けたが、あの頃の私が、だらしない、認識派の仲間より、例え、戦勝派にぞくしていようと、まじめな、処世信念を持って生きぬく人達を尊敬した気特と、相通じている。)

戦後三、四年目頃から、塾生の質が、ころっと、変ってしまった。創立の時は、日本生れの者が、大部分だったが、五、六年目頃は、塾生の殆どが、ブラジル生れで、日本語の会話の出来ないもののが、何人も入ってきた。その中、不良化しかけた子を、一年で矯正したのが、評判になって、州内、州外からも、不良化した子が送りこまれ、気の付かぬ間に塾生の半分を占めるようになりはじめた。私も、自分の学生時代のことを反省して、「昔の自分ほどやんちゃな奴はいないぞ。」と自分に言きかせて、自分の過去

の贖罪の積りで、頑張っただけを見たが、元々、感化院の組織ではないし、溫柔しい、善い子は、不良児達に、庄迫されていじける。その中に、私の子供まで、その影響をうける、という始末になった。塾母として献身してくれた家内を失っていたし、片腕、もがれた私には、どうも出来なくなった。

そういう事情で、終戦十年目に塾を閉鎖して外部の出張教授だけにした。

その頃、日本から、宮腰氏も、家族を呼びよせられ、長男の巴夫君は、私のところで、一緒に、牧場経営をやった。巴夫君は、戦後、人気投票で、日本一になった、ジャズ・バンド『シックス・ジョウス』の、創立メンバーの一人で中村八大氏、河口ジョウなどと同じ仲間だった。素晴らしい協力者を得て、植民地の各地に、明るい音楽運動が拡がりはじめた。

その頃、近所の、Dという、戦勝派のおやじさんが、訪ねてきた。これに署名してくれないか。といって、私に差出したものを見ると、臣連暗殺事件に関連した罪で、アンシエタ島に、監禁されている人々のための、釈放嘆願書だった。それまでの署名を見ると、区の人々が皆、署名している。私は、これは、デリケートな問題だと、思った。彼等は、私の署名は期待して居らず、あの敗戦組の大将が、どういうか、反応を見てやれ、ぐらいのところだったに、違くない。釈放嘆願書を見るまで、正直な所、その頃の私は、暗殺の不安もなくなり、潜在的な対立はあっても、以前のような、激しい抗争がなく、大勢が決してしまったから、裁判

の結果、島送りになった話も、それが何年になるかも知らなかった。戦勝派に、親しい者が、数多くいたため、彼等の心理をよく知っていたので、敵という気持は、毛頭なかったし、怨などのこっている筈もなかった。(しかし、あの事件で、意味もない、馬鹿げた理由で、肉親を、目の前で、射殺された人などは、別である。)

その時、私の脳裡に浮んだのは、前日、パウリスタ新聞にのっていた記事だった。

それは、戦後、日本へ、親善使節になっていった、一人の、フリッピンの、女子大生の話で、彼女は、戦争中、日本の兵士に、右腕を切られて失った。兄弟も、殺された。

しかし、クリスチャンである彼女は、大きい愛で、一切を赦し、自分の右腕を切り、兄弟を殺した兵士への恨みも忘れた。只、戦争は憎む。一切、水に流して、平和な世界を築くために協力しよう。』といった内容だった。

私は、思わず、うーん、とうなった程、感激した。その話が、咄嗟に私の頭に甦ってきた。片腕のない、フリッピンの女性が、やさしく、私を見つめている気持がした。

外国人でさえ、大きい愛の精神で、赦している。私達は、同じ日本人だ。又、彼等の犯罪の動機も、政治犯的なもので、破廉恥罪ではない。ああいう、どさくさの際だから、充分な、弁護も、弁明も許されず、放りこまれた者も、いるかも知れない。と思った私は、突然、「署名しましょう。」と、はつきり言った。私が、署

名し終ると、「宮腰さんの息子さんもお願いしたい。」という。私は、それは、巴夫君の意志だからきいて見る、と行って、奥へ入り、巴夫君に、事情をかいつまんで話し、私が署名した心境も話したら、同君も、著名する決心をした。D氏は、相好を崩して、大喜びで帰っていった。私達が、署名したことは、彼等の間で、大きい話題になったそうだ。それから、少し経って、邦字新聞に、釈放運動を非難し、刑期を終えるまで、投獄しておけ、といった投書が出ていたが、私は、いたって自然な気持で署名したので、何の後悔もしなかった。

私が、政治的な理由で、人を殺した者、そうした行動のシンパ的存在となった人達について、多分に同情的であるのは、私自身が、彼等と同じ素質の人間であるからである。

ここで私は、私自身、ブラジルにきてから十年間に、二回、政治的理由で、邦人社会の指導者に、殺意をいただいたことがあることを、告白しなければならない。第一回は、私が、キロンボ植民地で、音楽村を育てると同時に、健児の社を興して、日本人の血の誇りを育てる教育に、全生命を賭けることに生甲斐を感じていた頃のこと、日伯新聞社々長・三浦鑿氏が、日本から帰って訪日土産話として、日本の欠点、短所ばかり書きたてた。私は、それまで、一回も、三浦氏に会ったこともなかったが、日本だって、欠点のあるのはわかるが、何も、恥部ばかりクローズアップして、毎回、繰りかえして、日本人としての誇りを失わせる必要があるか。社会の木鐸をもって任ずべき新聞社長にあるまじき言動だ。と、

彼を憎み、憎しみは昂じて、三浦、誅すべし。の殺意まで燃え上った。しかし、孤立した殺意は、穏かな、周囲の社会の中で自然、消えてしまった。しかし、あの時、私の周囲に、臣連特攻隊を暗殺に駆りたてた様な、異常考秀囲気があつたら、血の気の多かつた、あの頃の私は、三浦氏を刺殺していたかも知れない。皮肉なことに、その三浦氏が宮腰氏の後援で、私が村の楽団をひきいて、土聖、聖市演奏会を、何か所かでやって、幸い、好評を拍した時、日伯紙上で、激賞してくれた。その上、彼が直接宮腰氏に、『いい事をしてくれた。有難い。』と、礼をいった、という話をきいて、人間というものは、よくつきあつて見ないと、わからないものだということを反省し、自分の軽率を悔いた。

今一回は、ブラジルに、国粹の嵐が、吹きあれて、全州の、日本語学校閉鎖命令が出て、私達は、生徒を少数ずつ、植民地の数か所に集めて、巡回教授をやっていた、必死の時期だった。聖州新報に、「Z信号旗」と題して、一面一杯、二日にわたる長文を書いた頃だった。その頃、教育普及会主事の葛岡氏の、打出した、スローガン、和魂伯才のことで、リオ大使館の中西武官から、横槍が入った。サンパウロの総領事館は、葛岡氏を支持していた。そのうち、中西武官から、葛岡氏に、リオ大使館へ出頭命令がきた。丁度、コチア小学校で教員講習会のあつた時、葛岡氏から話をきき、リオへ行き渋る葛岡氏に、私を代りにやってくれ、と頼んだ。あの時も、場合によっては、中西武官と刺違えて死んでもいい。と決意していた。葛岡氏が、自分で、いったから、私の興奮もおさ

まっつてしまった。私は、人と喧嘩をしたことのない人間だが、社会的な問題とか、政治、思想といった事になると、簡単に興奮する傾向がある。

私自身が、そうした素質を持っているだけに臣連特攻隊の中にも、私に似た青年がいるだろうと思うと、自分の命を狙われていることを知っていても憎む気持は起きなかった。

終戦三年目の七月の日本救援会のフェスタの時、奇妙な飛入りをやった岸本某は、それから数年後、鶴見祐輔氏を、日本から招聘して、サンパウロ州各地で、講演会を開いて歩いた。戦勝派の会が主催だったので、聴衆の大部分は、戦勝派の人だった。私は、岸本某の同行する鶴見氏がどんな話をするかに、興味があつたので、ききに行った。戦前、高名だった鶴見氏の話だから、満員の盛況だった。岸本某がまず開会の辞をやって、演壇の上に椅子をおいて、監視役のように、いかめしい顔で坐っていた。私は、壁ぎわの通路に立って、講演の要旨を筆記した。ところが、戦後の日本を語っている筈の彼の話の中に、敗戦、原爆、アメリカ進駐軍といった言葉は、一回も使われないことに気付いた。

戦争の結末とは無関係な話で、聴衆を、時折笑わせるが、私には、彼が、道化役者のように見え、哀れを覚えた。

戦前の雑誌に、彼の事を、政界のチンドン屋と批評してあつたのを思い出した。「父」「母」「英雄待望論」その他、多くの伝記物を書いて、私達青年の血を躍らし、感激させた鶴見氏と同一人とは信じられなかった。講演がすむまで、私は、石の様に固い表情で

壁によりかかっていた。鶴見氏は、ブラジルから、招待状がきた時、主催者である、戦勝派の会の性質もわからなかっただろうし、勿論、岸本という人物も知る筈がなかったに違いない。こちらへきて、彼等の話をきき、徒らに人心を刺激しないという口実で、前記の敗戦日本を特徴づける言葉を、タブーにされたのだ。壇上で、弱々しく話す鶴見氏と、側で監督官のように、厳しい表情で坐っている岸本某とは、実に、印象的な対照だった。私は、講演会場から出て、戦勝派の人達が、戦勝の夢が、シヤボン玉の様に儚なく消えてからは、何とかして、自分達が、今まで、頑固に歩んできた道を正当化し、何時とはなしに、皆に、仰々しく気付かれぬ様に、認識派と合流出来る日がくるまでの時間をかせぐのに苦労してるな、と思った。

終戦後、十年つづいた対立も静まって、私達が忘れかけた頃、サントアンドレの桜組事件が突発して、嘗ての、認識派の者は勿論、戦勝派だった人達も驚いた。両者の驚き方は勿論ちがっていた。前者は、単純な驚きだったが、後者は、複雑だった。その頃は、国交も回復され、勝った派の指導者だった人達も、はじめは、便所に入ってかくれて読んだというパウリスタ新聞を、堂々、客間においている時節だった。

桜組の説諭役を引受けたのは、私の昔の知人で、或る時点迄、戦勝派の、強硬論の人だった。私は、適任だと思った。通じる言葉を持っているからである。

桜組事件がすんで二年目、私は、旧知の、山之内氏を、セツテ

バラスに訪ねて、すごい、話をきいた。山之内氏は、高等農林卒業後、モスコウに、三年、自費留学した変った経歴のインテリで、静かな口調で話されたが、私はその話の内容をきいて全く、あきれて、一寸、信じられなかった。或日、海岸山脈の山麓にすんでいる、某日本人の所へ、奥地から、土地買いにきた日本人が三人、立寄ったら、中から、四十過ぎの女が出てきて、突然、叫んだ。『貴方等は、日本が勝ったと思うか、負けたと思うか。』

突然の、意外な詰問に驚いた彼等の中の一人が、そりや、日本は負けたさ。といったら、女は、血相変えて奥へとびこみ、鉄砲をもってかけ出してきて、『敗戦の奴等、動くな。皆、撃ちころしてやる。』と、叫んだので、皆、おったまげて、走って逃げた。という話だった。その娘の父親は、不動明王を信じていて、何時も、菅笠をかぶって歩いていたので、私達は、不動様とよんでいた。キロンボ植民地のはずれにすんでいた。

まじめな人だった。父娘、二人暮しで、山脈の裾に住んで、毎年、二、三百俵の粃を作って日本の軍隊が来る日に備えていると、言っている話も、山之内氏がしていた。これが、私のきいた、勝ち組の最後の話である。

桜組の人々と言ひ、又、最後の父娘といい、いずれも、気の毒な人達である。今となつては、戦勝の信念も色あせて、孤独感にさいなまれ、小さな物音にも驚く、森林の中に潜む敗残兵にも似たみじめさを感じさせる。運命の磯に打上げられ、遠い水平線を、見つめて、来る筈のない船の姿を、来る日も、来る日も、探し求

めて、待っている人達にも似た彼等の事を思うと、暗い気持ちになった。

こんな風にして、コロニアの戦後の混乱が、ほんとうに、おさまるには、十年以上の年月を必要とした。

それは、丁度先年、佐藤首相が「沖縄の問題が片付かない中は、戦後はつづいている。」といったように、私達のコロニアでも、勝った、負けたが、片付かない中は、戦後はつづいていたのである。

憶えば、戦時中、祖国の勝利をひたすら念じ、全く、一心同体となって、庄迫にも耐え、お互い、今にみろと、目くばせし合つて、頑張りぬいた日本人同志が、祖国敗戦という、思いもかけぬ現実に直面し、心の安定も、張りも、一瞬に失い、全く、虚脱状態になってしまった。ところが、終戦後一カ月も経たぬ中に、心なき者の捏造した、他愛もをい、戦勝デマニュースに、大多数の同胞は、あつけなく欺かれ、コロニアは、脆くも、二つにわれてしまった。

これは、戦後の朝鮮、ドイツ、ベトナムなどのように、地域的に、はつきり、境界を画したものでなく、親子、兄弟、親族、友人などの間で、四離滅裂といった、分裂を起しただけに、始末が悪かった。終戦後、二カ月目に赤十字社を通じた、終戦に関する、日本政府公報と、詔勅が、とどいた時は、戦勝デマの毒が、充分、廻った後だったので、ごく、一部分の人達だけにしか、受入れられなかった。しかし、受入れた人々にとっては、詔勅の精神は、揺

ぎのない行動信念の核となった。

宮腰氏を中心とした、コロナ指導層の人々としては、日本政府からの公報伝達の委嘱を受けた以上、日本人としての、当然の責任感から、一般に通告したものであり、容易に、理解されないとわかった時、戦勝派の誹謗、脅迫、暗殺の危険におびやかされても、敢然啓蒙運動に挺身したことは、ただ、コロナという、共同運命体の平和と幸福をねがう、一念からの献身、犠牲であったことを忘れてはならない。

何しろ、私達日本人にとって、有史以来未曾有の出来事だけに、戦勝ニュースの毒が、コロナ大衆の頭をどの程度麻痺させていたかなど、誰も見当つかなかった。まして、あれほど、頑強な反動が起ることや、やがて、それが、組織化されて、臣道連盟が生まれ、集団の狂熱的信念はやがて暴力化し、十年近い、執拗、頑固な、長期戦になろうなどは、誰一人、予測した者はいなかった。

周囲のブラジル人達が、戦争がすんだ、平和到来といって、喜び合っている中で、私達の仲間が、同じ日本人の手で、次々に、殺され、傷けられていった。敗戦の現実の認識の苦しみの上に、予想もしない苦痛が、重なってきた。非国民と罵られ、生命の危険におびやかされることより、私が一番、悲しく感じたことは、絶対の信頼感に結ばれていたと思いきんでいた、男同士の心の紐帯が、思いがけない外力のため、あつけなく、千切れ、何百という同志が、冷やかに、私に背をむけて、勝ち組に転じてしまったことである。

それ等の人々が、人間的に、正しい、まじめな、そして、心の暖かい人々であることを知っているだけに、何とも、堪えられない程、淋しかった。

昔の仲間から、逆かれ、誹謗され乍らも、祖国敗戦の悲しい事実を、しめやかに、悲痛な調子で語りつづけねばならなかった私達の仕事は、『日本大勝利』という麻薬をのまされて、恍惚境をさまよっている人達を、むりやり覚醒さし、今一度、敗戦の現実という、苦汁をのませた上、禁断状態にも似た、苦痛を強いることだった。

コロニアの『醒めた目』の人々は、迷える人々の反抗が如何に強くても、屈しなかった。祖国は、今一度、立ちあがらさねばならぬ。その祖国復興の悲願成就のためには、何としても、敗戦の実情を認識さすことよっての与論の統一ということが、先決問題である。そのためには、如何なる苦痛にも堪え、啓蒙運動をやりぬかねばならぬ、と使命観に燃えて団結したのだ。

今では、遠い過去になり、直接の記憶を持つ中年過ぎの人々の記憶も薄れ、認識派、戦勝派共に、多くの人が、故人になった。私のお話の中に出てくる人物の、半数近くが、故人になっているのに気付いて、時の流れの早いのに驚いた。しかし、精神的な苦痛ぐらいで、すんだ人達は、簡単に忘れさることが出来るかも知れぬが、あの時の事件で、親兄弟、夫などを、無意味に殺された人々は、一生、暗い思い出を、脳裡から拭いきれないだろう。

又、一方、殺人罪を犯した、戦勝派の青年達にしても、終戦直

後の、極度に興奮した、異常な雰囲気に捲きこまれ、神国不敗に絶対信仰的な親達の名指す敗戦派指導者達こそ、皇軍の無条件降服などと、信じがたき不吉の事を宣伝し、同胞を惑わせる、非国民、不達の輩であると、単純に信じこみ、彼等に天誅を加えることこそ正義であり、祖国への忠誠である、との信念の下に、行動を起したものに違いない。

何故なら、お互い殺し合う、戦場の雰囲気ならいざ知らず、平和なブラジル社会の中で、計画的、集团的、且、長期的にわたって継続的に暗殺を実行したということは、全く、異常のことである。

目指す暗殺の相手は、彼等にとって、一面識もない、個人的には、何の恨みもない人達である。その上、彼等に対して、何の害意もなく、無防備な人達を、苛責なく殺傷することが出来たという事は、彼等が、間違っていたにしろ、正義感を持っていたからである。

それは、彼等も、今の時点で反省すれば、全く、歪められた信念、正義感であったと、気付く筈だが、あの時、彼等の周囲に沸き立っていた狂熱的興奮の渦巻く、勝ち組の環境の中で、指導者の、煽動、指喉の外に、「俺達は、日本の勝利は信ずるが、殺人などはしない。」と言いながら、認識派の人が殺される毎に、「あんな非国民は、殺されるのが、あたりまえだ。」などという類の、共産党のシンパに似たものではあるまい。何万の群集の力強い歓呼、支持、肯定を意識し、勇躍して、自分の村を出発し、暗殺目的地

に潜行したにちがいない。

彼等も長い間、アンシエタ島に監禁され、あたら、尊い青春を空費し、苦しんだことと思うが、それも、何の罪もない人を殺傷し、世の中を騒がした当然の償いとして、仕方のない事である。彼等が、純情一途でやったと言う程の人なら、自分達の犯した罪のため、必ず自責の念に苦しめられている筈だと思う。

もし、彼等の中に、あの時、彼等の凶弾のために倒れた人々の霊に謝罪し、冥福を祈っている人があれば、尊敬に値する立派な人だと思う。

私は、私自身が、彼等と同じ素質の人間であるし、戦勝派の中に、私の肉親をふくめて、あまりにも親しかった人が多くいて、彼等の内幕、心理を知りすぎているため、戦勝派の言動を、狂信とか、無知とかいった、嘲弄的な言葉で、簡単に、片付けられない。もっと深く、人間性の本質に触れた問題があると、思っている。私の知っている、狭い範囲でも牧師、大学出の農業技師、医師、北米の大学を出た人などが、戦勝派の中に数えられていた。途中で、転向声明した潔い人もいた。

そのインテリの人達が、どの時点まで、戦勝を信じたかはわからないが、とにかく、はじめは、戦勝ニュースにだまされたことは確かである。

同じ問題が、ハワイでも起っている。『教会なども小さな町に、勝った派のと、負けた派のと、二つあるので、驚いた。』という話を戦後、ハワイに布教にいった「生長の家」の講師の著書の中で

読んだことがある。現在も私達のまわりで、宗教とか、イデオロギ―の争いなど、同じ事が起っているし、これからも、人間の社会には、絶えず、起り得る問題である。現に、平和日本の中で、去年の、三池炭坑の、第一組合と、第二組合の闘争、安保デモ、羽田空港デモなど、情けない事件が頻発している。丁度、人間の一生が、本人は頑張った積りでも、究極的には、生れながら持ってきた、血の中の遺伝子と、育てられた環境という、二つの、先天的、後天的の運命的因子に、強く支配されてしまうように、戦勝派の人も、彼等に共通した運命的因子に、強く作用されて、激しい潮流に捲きこまれてしまった。それからは、集団意志の命ずるまま進む以外方法がなかった。ただ流されたのだ。

戦勝の信念が崩れかけて、集団のたがが、ゆるんでも、過去の言動の墮性のために、軌道から脱けきれず、個々が、自然に、解放されるのに十年近い年月が必要だった。

戦勝派の中には、敬神の念あつく、処世態度のまじめな人が多数いたし、認識派の方にもまじめを人が沢山いた。しかし、双方の側に不まじめな人間がいて、双方の、まじめを人達の間、色々な噂をまいて、距離を遠ざけてしまった。戦勝派の、ごろつきの様な、ボスが、まじめな人達の集団の前に立ちふさがって、私達の話に邪魔したりしたこともあった。戦勝の信念を捨てて、敗戦を認識する人々を、観察していて、私は、ふつと、宗教と似ていると思つた。

神仏へ通ずる幾多の道のどれを選ぶかという問題とか、病気の

時、信仰にすがって、祈りだけで治そうとしていた人が、どの時点で、祈りを捨てて、医学に頼るか。又は、最後まで、神の加護を絶対、懐疑せず、祈りつづけるか。といった、信仰上の問題とも似ていると思った。

この稿を終わる頃、私は、自分自身について、面白いことを発見した。それは、私の宗教に対する態度についてである。

日本でもブラジルでも、プロテスタントの学校で勉強したが、プロテスタントになり切れなかった。仲のよかった、ローゼン坊さんに「理屈言わないで、カトリコになりなさい。世界一、正しい宗教だから。」とすすめられてもカトリコにもならなかった。私の家には、白井牧師、宗像牧師もくるし、親類に生長の家の熱心な人もいる。知人に、創価学会の人もいる。皆、私を各々の信仰に誘おうとするが、私は、私の家に来て、布教することだけは断わっている。しかし、皆、親切に、パンフレット類を置いたり、送ってきたりしてくれるので、自由に、よませて貰っている。

宗教に対する、そうした私の態度を反省して見ると、二昔前、戦勝派の勇ましいサムライ達が、「負けた、負けた、と来る度に言ってくれるな。負けた話は、一回きけば結構。俺は、泣く時にや、布団かぶって泣くんだ。」などと言って、私を締め出した頑固さと同じだ、と気付いて、思わず、苦笑した。

どうも、私と言う男は、勝組に入る筈の男だった様だ。

この手記も、「勝組になりそこねた男の終戦記録」という、読後感を頂いても、結構と思っている。

(終り)

特集

コロノ時代の思い出

義務農年

勝山 呉泉

昭和八年一月——移民船アフリカ丸でやって来た二百五十家族の中の吾作達十四家族は三角ミナス、コンキスタ駅ラゼアード耕地に配耕されることになり、通訳の河本氏に連れられてサントス港からそのまゝ移民列車に乗せられた。

薪を焚いて走る汽車がもの珍らしかった。汽車の窓からは絶えず火の粉が飛び込んで着物を焼き、顔や手を火傷したりした。のろのろと果てしなき広野を走る汽車の窓から、逞ましい牛が闘っているのを見たり、たまたま渡る河の水が血を流した様な真赤な色であったりして、なんとなく不気味なものを思わせた。

純農であるべき筈の吾作達の仲間に純農といえる者は二、三家族しかいなかった。あとは、呉服屋、建具屋、教師、外交員、魚屋、宿屋、楽器屋、菓子屋、そんな集りであった。汽車の旅にだんだん心細くなってきた人々の口から「海興との移民契約はサンパウロ州内となっているが、我々ばかり他州に配耕されるということは、若しや “ドレイ” のごとく売られて行くのではあるまいか。』そんな話が力なく跡切れ跡切れに取りかわされるのであった。汽車は途中、リベロンプレット市に一宿、そこで汽車を乗り替え、其の日の中に“ラゼアード”耕地内の“シャーベ”に

着くことが出来た。吾作達は家一つない牧場の中に降されたが、そこに計らずも懐かしい同胞の一団がいて、日の丸の旗を打ち振って出迎えて呉れた。移民達は一昼夜の汽車の不安が一度に吹きとんだ思いで狂喜した。ことに女達の喜びは言語に絶するもので、頬を伝わる涙で挨拶も言葉にならなかつた。出迎えてくれた同胞は日焼顔にラシヤの鍰広の帽子を被り皮の脚絆をはいて、その逞ましい姿は新移民達を信頼させるに充分であつた。

黒人を身近にみるのも、もとよりそのときが始めてであつた。その黒人達は錫杖を槍の如く突立てゝいた。これが牛車というものであろうか。竹で編んだ籠をつけた車には角から角を綱でくゞられた牛が二列に五頭ずつ並んでいた。これに乗るのだと聞かされて新移民達は度肝を抜かされる。怖がつて泣き叫ぶ子供等をなだめ、婦女子に手を貸して、どうやらそれぞれの牛車に分乗した。牛車は黒人の振る錫杖の音にギイーと重い音をたてて動き出した。ギイーギイーと軋む牛車の音が谿に響いて、人々の哀愁をそそるのであつた。通りがかりのコーヒー園は荒れに荒れて、一米余りの雑草に覆われていた。

牛車に付き添ってゆく馬上の旧移民がこれから君達がこのコーヒー園で働くのだと教えてくれた。コロニアは遙かの谿底に見えた。やがて牛車はコロニアの中央旧日本語学校というひと棟に着いた。通訳の話ではまだコロニアが空いていないのでこの学校で一週間合宿するということであつた。校舎の土間には旧移民達の手で一パイに藁が敷かれ、其の上に赤土汚れの真赤なパンノが敷

かれてあつた。十四家族百人余りの人々はそれぞれ手荷物をかたづけ適当に陣取ることにした。この一週間は監督の源田氏のところで炊き出しをしてくれた。源田氏は “ 酢を作ったり、餅を搗いたり ” して、六十余日の航海を慰めてくれ、はるばるやって来た新移民を心から歓迎して呉れた。漸くコロニアが空き、各々家の分配も決つて引越すことになつた。コロニアは二軒ひと棟の煉瓦建ではあつたが、荒壁のところどころ壁の落ちた廢墟というにふさわしい建物であつた。それでも移民達は一週間の合宿から解放されてわが家に移ることになつてみんなの顔に喜色が蘇えていた。吾作は市川氏と隣り合せに住むことになつた。前住者の残したものであるろう。コロニアの前には二十米角の竹囲いの菜園が作つてあつた。裏は五米の空地を残してすぐに牧場になつていた。この牧場の中が共同便所になるのだと旧移民から聞かされた。日本でいう野雪隠のことであるそして野雪隠は放れ豚がきてすぐリンパして仕舞うよと笑つていた。一月という中途半ばな時期に着耕した新移民は新農年の九月迄を耕地のカマラーダで働くことになつた。

このとき、吾作は二十八才、妻二十四才、長男四つ、次男一つの家族であつた。コーヒーの樹齡六十一年という耕地には切株一つ残つていなかった。

吾作達は旧移民に連れられて再生林に柱を取りに行った。竹藪に竹を伐りに行った。そして、竹の寝台が出来、竹の物置き棚がで

き、竹のメーザが出来た。竹を並べた寝台には裏のパストの「コロニヨン」を刈って来て敷いた。

そして、その上に移民行李を包んできたゴザを敷いた。

こうして一応世帯が持てることになり、いよいよ耕地のカマラーダに出て働くことになった。賃金は「三ミル五百レース」日本金にして八十銭位であつたらうか、その当時日本の労働賃金は五十銭位であつたと思う。

最初の仕事は米田の除草であつた。

百人位の人が一列に並んで一人で二筋位を除草して進むのであるが、流石に日本で百姓した人達は達者なもので、こんな仕事は鼻唄で楽しげにさえ見えた。しかし生れて初めての吾作にはうまく鍬が引ける訳はなかった。鍬の楔が抜けてばかりいて、そのつど旧移民の手を煩らわした。それでも吾作は齒を喰いしばって頑張った。だが、なんぼ頑張つても向うへ着くのはいつも吾作がどん尻であつた。カマラーダ達は当着順に最後が着く迄は腰を下して休むのであつたが、吾作が着くと皆一勢に立ちあがるので、吾作は休む間もなく廻れ右をしてみんなの後を追つた。

でも、運よく旧移民の人や日本で百姓した人と隣り合せると、その人達は吾作の分まで除草してくれるので、そんなときはみんなと一様に休むことが出来た。長い一日も終つて、ふらふらに疲れて帰つて来る吾作にはそれでも可愛い妻や子供が待っていてくれた。

妻が沸した空缶半分ほどの熱いお湯を、長男が生れたときに本家

で造ってくれた “ 榧 ” の盥にあけて湯浴みした。

砂糖煮のフエジョン、塩煮の南瓜、干肉、そんな佗しい夕食であつても親子四人結構に楽しいものであつた。それは恐らく吾作の胸の中に四、五年心棒すれば一万円位は残る。そうしたら故郷に帰ってひと旗上げて見せるぞ、という大きな夢がふくらんでいたので、たからに違いない。

吾作達が着いてから一船遅れて又新移民が着耕した。福岡県出身の十三家族でその中に炭坑出身者が五、六家族いた。この炭坑出身者の中に “ 松山 ” “ 前川 ” “ 高山 ” という自称三羽鳥がいた。この三人は夜ともなると、日本衣の着流しに半纏を引掛けてコロニアを闊歩した。ピンガは着いたその日から平気で飲める様であつたが、“ 焼酎 ” で鍛えた彼等には当然のことであつたろう。

新移民が着いたというので耕地には日曜日ごとに近隣の同胞が訊ねて来た。中ではその辺の川で獲れたという “ ドラード ” や “ クリンバタ ” を持って来てくれたりした。訊ねて来る人達の目的はほとんど息子の嫁探しであつたが、又日本品を欲しがる人や故郷の話聞きに来る人もあつた。吾作も無理やりに三つ組の布団を二組 “ 五十ミル ” で売った。一組は妻の嫁入布団であつたが――。ある日、家内は博多の昼夜帯と子連れ鶏を、監督の奥さんと交換したと、その鶏を大事そうに抱えていそいそと帰つて来た。家内が鶏を飼うなどということもまた初めての出来ごとで大変楽しい風であつた。

稲の収穫が済み、コーヒの採取が終ると、コロノ達に新農年

がやって来る。八カ月のカマラーダで吾作達新移民もブラジルの農業に大分馴れて来た。

新農年のコーヒーの割当ても済み、いよいよコロノの契約も出来た。こうして善作のコロノ生活が始まったのであるが、現実の耕地は、吾作が郷里の海興代理人のところで写真でみた、公園を思わせる整然たるコーヒー園、体を埋めるほどの黄金の稲波、一米もあるバナナの房、馬上豊かな移民の勇姿、そんな世界とは全くかけ離れた佻しいものであった。

吾作達の耕主は“コンキスタ”都を半分も持っているという大地主で、一家の中に連邦議員も出たという由緒あるものであった。ラゼアード耕地は本耕地分耕地よりなり、木耕地二四十家族分耕地に三十家族の日本人が就働していた。

吾作達は分耕地に配耕になった。この耕地は有名な石山で、耕地の中にはかつて旧移民が名付けたという“サイノ磧” “ヒョドリ越え” “涙山”などの嶮があった。吾作も三千本のコーヒーを請負つていよいよコロノ第一年が始まった。コーヒーと丈競べをする雑草にはどこから手をつけてよいやら見当もつかなかった。ことに石山の難所は呉服屋あがりの吾作の手にどうなるものでもなかった。吾作はこの難所の千本は自分の責任でカマラーダを入れて除草することにした。

野良の子供はコーヒーの木蔭に日本から持って来た枕蚊帳を置き、その中に小布団を敷いて寝かした。丙除けの火縄も置いた。そして四つになる長男が守りをするのであったが、ある日長男が泣

きさわぐので飛んで来て見ると、蚊帳に火縄の火が移って燃えていたりした。またあるときは「ハンモック」に寝かして置いた次男がいないので慌ててそこから中さがすと、母恋しさのあまり、ハンモックから落ちて、そのまま雑草の中を這い廻り三十米ばかり先に泣き寝入っていた。着ていた「メリンス」の着物に「カラビショ」が一パイ喰い込んで、餅のような柔らかかな頬に血がにじんでいた。あまりの有様に逆上した妻は顔面蒼白になって、身を振るわせ、日本へ帰せ、日本へ帰せと訴えて咽び泣いた。

三千本の請負といっても実際は二千本の収入しかなかった。これではどんなに節約しても食ってはゆけなかった。だが、吾作は配耕されたときに旧移民から云われた「貴男達は決して耕地に借金をこさえては駄目だ、耕地の借金は女郎の借金と同じで払わぬ限り体は自由にならぬ。動くとすれば前借を払って貰ったの鞍替えじゃ。これでは段段深みに落ち込むばかりじゃ。この耕地にも吾々の仲間でもう七、八年只食うだけで働いている者が何家族とある。毛唐はほとんど身動き出来んものばかりじゃ。貴男達はそんなことにならんように今から心掛けなされや、石に噛じりついてもなあ。そして良いところがあつたらいつでも自由に出て行かれる様になあ。」

この言葉はいつも吾作の頭から離れることはなかった。吾作は借金をつくらぬため少しばかり持っていた虎の子は勿論、金をつくるために旧移民に頼んでコンキスタの街の伯人に家内の日本衣を売って貰ったりした。吾作達の仲間みんなそんなにして借金

を怖れ必死になって努力した。時折りコンキスタの住宅街を通るとベランダに真赤な花模様の長襦袢など着た伯人の女を見ることがあったが、それらは皆吾作達新移民の手を離れたものであった。吾作達の耕地からコンキスタの町へは牧場の丘を越えて四キロほどであった。日曜日になると家長達はピंगा買いに、青年達はソルベツテ食べに、一三二五五と連れ立って出掛けた。勿論耕地の中にも売店があつて、日曜日には肉を始め一通りの日用品や農具類迄売っていた。だが、値段が町とくらべて三割も四割も高いので現金のある者は皆町で買物をするのであった。

それがいつ頃から始まったのか知らぬが、誰いうともなく炭坑の三羽鳥がピंगा代を稼ぐのに町の買物をコロニア迄運んで呉れるということであつた。

ある日吾作も “メイアアロース” を一俵買って、例の擔ぎ屋ならぬ三羽鳥に運んで貰ったことがあつた。運賃は “ニミル” 半日分のカマラーダ賃でピंगाが二リットル買えた。それから暫くして、もうそんなことはすっかり忘れていた日曜日の晩のこと、寝ているところを三羽鳥に叩き起された。その時三人は大分ピंगाに酔っていた。「オイ、吾作、起きろ、少しばかり綺麗をおつかあを待ったからって、この宵の口から寝くさって……………」

善作は喫驚して飛び起きた。

「何んでしようか……………」

「何んでしようかって、白ばくれるな、貴さまは一寸ばかり小金を持っているからって生意気だぞ、青二才のくせに」

——この間、俺達を馬車替りにしたじゃあないか、この始末をどうしてくれるんだ——。」研ぎ澄ました小刀をひらひらさせながら縄煙草をけづる者、鉄の木でつくった木剣をついている者、ホイセをついて突立っている者、それは実に怖い光景であった。吾作は突差に布団を膝の上に抱いて盾とした。彼が若し小刀で突いてきたとしても、この布団を通して刺さる心配はない。突いてきたら彼に布団を頭からぶつかぶせて逃がれようと身構えた。

そして、慇懃に「貴男方が荷物があつたら持つて行ってあげよ。とおっしゃったからお願ひしたんです。決して、貴男方を馬車替りなどと、そんな不遜意気持は毛頭ございません。若しどうしても私が悪いとおっしゃるなら仕方ありません、只今から監督さんのところへ行つて事情を聞いて頂きましょう。」

「貴さま、これほど恥をかかせてまだその上に監督のところへ行つて恥をかかせるっていうのか。」

こんな問答をしている中に吾作の妻はピンガにマモンの塩漬を持つて来た。

「まあ、何か存じませんが、主人が大変失礼なことをいたしましたして申訳もありません。主人も決して悪気ではございません。どうぞかんにんして仲直りをして下さい。」

そういつてグラスになみなみとピンガを注いで差出した。

「うん、親父は生意気だが、おつかあは中々気がきくね。それじゃあ頂くよ」

三羽鳥はかわるがわる注ぎ合つて忽ちリットル瓶は半分ほどに

なった。彼等の態度も大分柔らかくなってきた。

「なあ、おっかあ、お前は中々話がわかるぞ、我々も決して悪い人間じゃあない。これからは一つ仲良く付合ってくれ……」

そんなことをぶつぶつ云いながら茫然としている吾作を尻目にこのこと出て行った。そんな出来ごともあったが、とにかく配耕になって、八か月のカマラーダと一か年の義務農年が無事にすんだ。

吾作夫婦もどうやら病気もせず、借金も出来ず、自分の意志のままにどこへでも自由に転耕が出来ることになった。

耕地で特別に可愛がって貰った旧移民の“谷田” “小島” “梶原” の諸氏が当時開拓の始まった北パラナ国際植民地の第三区に土地を買って入植することになった。吾作も新開地にゆこうとすすめられた。資金のない、労働力のない、自分達がそんな山奥にはいつて病気にでもなったらどうしようか。などと大きな不安もあったが、とにかくその人達に連れられてパラナ入りをすることになった。そしてロンドリーナ近郊の荒義雄氏の耕地に三アルケールの借地農として入植した。

当時——パラナ鉄道はジャタイ駅まで、ロンドリーナ市街に家が百戸もあったであろうか、アベニードラの商店が、“石油ランプ” “や” ローソク” の灯で商っていた。一九三四年のことである。

課題・短文

クリチーバ文章会

「魚」

まや・あきら

いこま 正

真木 研一

四本 久子

クリチーバ在住の文芸人たちのうち、北原寒三、いこま正、真木研一、まやあきら、四本光男、森建介、山崎南泥、四本久子らによって、クリチーバ文章会が始められたのは、六六年十月である。初めは隔月に、三十〜五十枚の創作、五六枚の随筆のたぐいを持ちよって、相互に鑑賞、批評し合っている。

第六回までに提出されたもの二十一篇のうち、鑑賞のための既発表作も含めて十七篇が、各自、思い思いの新聞雑誌などに発表掲載されている。殊に、いこま正の『露』（三十枚）、『馬鈴薯地背』（五十枚）。真木研一の『霧の中』（九枚）、『果樹園を夢みて』（五枚）、北原寒三の『歲月。』（二十枚）。まやあきらの『この子の光を求めて』（五十枚）、『水郷の旅』（十二枚）、などは粒揃いの秀作で、水準の高いものと自負しており、他の四篇も、充分鑑賞に耐

えうる佳作であった。第七回からは、月例会とし、短詩型の席題のように課題を出し、時間枚数に制限を設けて、綴方教室を試みて、好成绩をあげている。何しろ、清書時間を除いて、約三時間以内に、五枚と規制された作品で、完成度が低いのは止むを得ないし、この枚数では発表の機関もないまま、二十五篇の作品がストックされている。こういう制約のもとに、ものされた作品であるという注釈なしには、独り歩きできる作品ではないが、創作習練の上で、参考になるかとも思われるので、各自自選のものだけを、『コロナア文学』に投稿することにしたものである。

邂逅

まや・あきら

女学生に付け文をしたというので、三年A組が、生徒監に油をしばられた。大体、お前らの嫁さんに来るのは、まだ幼い小学生なんだ。女学生など相手にするのが間違っていると退役大尉は、笑って説教を終わった。少年は、顔が赧くなるのを感じた。それは、時々出逢、小学生の少女に惹かれている心を見透かされたような気がしたからであった。

彼女は、〇退役少将の別荘に住む少女であった。別荘の私道は、小川があり、麦畑では、雲雀のさえずりが聞え、道端には、ぐみやきいちごが熟れていた。登校の折、小学校へ通う美少女と、す

れ違ふ可能性があるのは、この道を通る、僅か五分ばかりの間だったから、週に一回、月に二三回でも違えれば、幸連であった。水泡のように軽やかな白ラシヤの外套を着、赤いベレー帽に赤い靴の少女が、生垣の蔭から、雪の道へ、ひよつと出てくる時、十五才の少年の胸は高鳴った。ほんの瞬時にして往きすぎてしまふ、はかない出逢いだったが、その日一日、少年の胸に、ほのぼのとした温かいものが流れて、誰にも親切にふるまうほどであった。笑顔や挨拶を交すでもなかったが、いつか、少女が少将の孫娘で、深雪という名であることを知っていた。そしていつか、少女の姿を、再び見る事がなくなってしまった。少年は、本街道を自転車で通うようになった。それは、初恋というには、余りにも淡く、はかないものではあったが、少年の胸に、純白の外套と赤い帽子の少女の姿は、強烈に灼きつけられていた。

あれから四十年たった。少年はブラジルに渡り、いつか、白髪の老人になっていた。

大劇場の裏通りの、ひっそりした住宅街に、新しい花屋が一軒あった。ショウ・ウインドウの飾付けに、洗練されたセンスがあった。他の花屋が、ある限りの色とりどりの花々を、絢爛と飾って人目をひくのととは違って、或時は、淡青の薄い絹地をバックに垂れて、一個の切子十細工の果物鉢に、赤いバラを盛り花にして置かれ、或日は、青磁の壺に、吾亦紅と青麦が無造作に挿してあった。母の日には、真紅のビロードを、ゆつたりとバックに垂れ、白

磁の壺に、紅白ただ二輪のカーネーションが飾ってあった。飾窓の反対側の壁には、黒御影石をはって、熱帯魚の水槽が嵌めこまれてあった。サジタリヤ・ナタンズやウオター・フアンの緑が、ゆらゆらと揺れている間を、ブルー・グラミイがすいすいと、急速で、一直線に突進しては、真珠をつけた貴婦人のようなパール・ゲラミイや、金と黒の縞模様の騎士バンブル・ビイを驚かしていた。碧色の背部で赤い腹部のネオン・テトラやブラック・テトラが、きらめくネオンサインのように、きらびやかを列をなして遊泳していて、槽底には、真黒なプレコストマスが、置物のように沈んでいた。純白のボディで、頭部と尾鰭の先端だけが紅色の、グッピー改良種は、美少女のような軽快さで、お茶目らしく、酸素泡を追いかけたりした。

或る朝、老人は、新しい飾付けを期待しながら、花屋の前を通りかかると、店の前で、日系の少女が、仔細らしく小首をかしけて、飾窓をのぞいていた。老人は、その姿に見覚えがあった。ずっと昔の、頭脳の襷の片隅に置き忘れられたような記憶であることが、感じとれる程度の記憶であった。飾窓を見た一瞬、あつと声をのむ程であった。

やはり、このセンスは日本人のものだったのだ。それは、金一色のバックで、床面には、銹朱無地のつづれ帯を、りの字なりに流し、その上に、宣徳赤絵の鉢が、ポツンと置かれていた。鉢には挿さず、一輪の水仙が、何気なく、鉢の傍に転がしてあった。飾窓の中では、中老の日本婦人が、手に持った李朝の白磁の壺と、赤

絵の鉢をおき換えては眺めていた。廳で、外に出て少女の傍にそっと立って、飾付けを検討する様子であった。それは、優雅な品のある物腰で、まだ瑞々しささえ残っている。ふつくらとした面もちの婦人で、昔の節句雛にみるような、古風を一重瞼は、少女と母子であることが、一日でわかるほどであった。

老人は、水槽の中の、純白な体で、頭と尾鰭の紅い熱帯魚を、じっと見つめていた。老人は、電撃をうけたような、ひらめくものを感じた。あの雪の道に、こぼれでたように、ひよいと出てきた、雪より白い外套と真紅のベレー帽を、はつきりと想い出していた。あの時の少女が、そのまま、そこに、老人の前に立っていた。老人は、呆然と立ちすくんだ。婦人は、そんな老人が、日本人であったことに、ちよつと愕いて、その張りのある美しい眼に笑みを浮べ目札して、娘の手をとって、店に入ってしまった。老人が見上げたイルミネーションは、FLORES・MIYUKIと、昼では判読し難い文字を浮かしていた。

魚

いこま 正

其の道は、どこまでも、霖雨が降りつづいて居た。町を出はざれると、ところどころユーカリツプト林の切れ間に、貧しい田舎家が見えて居て、垣には、仏桑華の花が、濡れて、からみ付いて

居た。どこかで、アリマツリの、淡い花を見た、と思ったのは、何かの印象であろうか…。

「此の道、まっ直ぐにやっして下さいね…」

女はそう言っつて、車の扉を開け、提げた籠から、先きに入つて来た時、私は、反射的に、女の顔を見上げて居た。

黒いバンロンの、コンジュントに、同じ黒の短いサイア、女の顔色は、抜けるように白かった。少し寸のつまつた、唇の隅々まで、真白い歯を覗かせて、幼い笑顔を見せて居た。

…左の手に指輪がなければ…。

人妻と見るには、痛々しい程、若く清楚な身じまいで、後方のクツションに、深く身を沈めて、ゆっくりと瞳をつむつた。

私は、メートルを起しながら、前方の鏡の中に、澄み切つた、寂しさに包れた、女の顔を見て居た。

「…あのね…」

振り返ると女は、やはりあの、幼い笑顔で、繰り返す言う。

「此のまま、まっ直ぐに行つて…ね、降りる地点、私言うわ…」

黒く、大きな瞳の縁から、何かこぼれたような、瞳の動きを見たのは、私の錯覚であろうけれど、視線はそれを追つて、跳ねた籠の柄を見た。女の提げて来た、底の浅い籠には、青い草の葉を敷いて、中に横たえた一匹の魚、縦に通つた黒い縞が、櫛のように見えた。酸素に溺れても、魚は、苦悶の跡を見せない。ぴたりと閉じた鰓が、今にも真赤な色を覗かせて、跳ね上るのではないかと、思われる程、目元には、鮮かな、濃淡の色が、いぶし銀の

輪を緑ちどつて、丸で、生きて居るように、私には見えた。

一文字にしまった口、怒りのように張った鯨、…こんな、生のよい魚を提げて、此んな草深い田舎に、殊に霧雨の深い、此の道を、すべて不釣合な程、清楚な此の女は、いったい何者であろう…

メートルの跳る音がして、車は、一キロ余り来て居たり…まだまだ、遠いのですか？…

訊ねようとして振り返ると、女は、クッションの隅に身を沈めて、固く瞳を閉じて居た。其れは、真直ぐな比の道とも、外の霧雨とも、籠の中の魚とも、全く係り合いのない、寂しい雰囲気を、自分一人の周囲りに引き寄せて、深い深い物想に更って居る様子であった。

きらりとした、魚を繞る此の女のもつ、未知の深さが、怖くさえ思われる。

毀れ物に障るような思いで、二度目に鏡の奥を見やった時、貝のように閉じた、両の眼尻から頬にかけて、糸のように、濡れた色が走った。急に、切ないものが、私の胸内に、伝播して行くのを、どうする事も、出来なかった。高貴を宝玉を、不透明な器の外から、見極めようとする、あの、もどかしい身近かさが、私の胸を苛立たせ、真暗い中へ、車ごと落ちて行くような、不安と悲愁に包まれて、霧雨のぬかるみに、思わず、車の速度を落してしまった。

「…あら…止めて頂戴…」

「…」

女の声は、電流のように、私の不安を押えた。幽玄な世界に、ひとり居た女の、声は余りにも、現実的で、美しかった。

私は、救われたようなときめきを覚え、女は、華奢な両手で、静かに顔を拭うと、声を沈めて言う。

「此の辺りで、よろしいのよ……」

其処は、ユーカーリップトの林の切れた、草深い野原である。女は、細い腰を挟ませながら立ち上り、二キロ米の料金を支払うと、乗る時と同じ笑顔を見せて、静かに降りた。

籠の魚は跳ねたように耀った。

女は、草の中の細途に、淋しい後ろ姿を、いよいよ濃くなった霧雨に、薄らせながら、映画の一場面のように、遠ざかって行った。…あれば、雨の日の私の見た夢であった、かも知れない…。

痣

真木研一

大塚魚吉の左手の、親指の付け根に、長さ二糎ほどの魚の形をした痣がある。

五才のとき、東京で大震災に遇った。

震れているのが何であるか判らなかったが、縁先においてあるガラスの円い金魚鉢の水が、大きく震れるたびに溢れて、敷石の上

に流れだしたので、幼い彼は、金魚が逃げてしまおう、と咄嗟に考え、大声で母を呼んだ。

幸い、倒れる家の下敷きになることなく、火の粉と煙の渦の中をくぐって西に東に逃がれたあげく、僅かな空地の竹藪の蔭で、親子三人が抱き合って、非常な夜となった。延々と燃えひろがり、黒煙が空を覆い、熱気と異臭と無気味を静寂の中で、日本の首都が灰燼に帰して行く凄じい光景を、戦のき乍ら心に刻みつけ、眠りにおちて行く魚吉の眼さきに、水がこぼれて傾く金魚鉢がちらつき、アツ金魚が一匹残らず死んでしまおう、と切ない思いがするのだった。

一夜にして、廢墟と化した瓦礫の都に、白々しい朝が訪れ、親子は、路傍の水道管から湧き出る水で、手や顔を洗った。その時、魚吉の手の甲に、金魚の形をした赤い痣が、浮き出ているのを見つけて訝（いぶ）かった。火傷（やけど）をしたのかと、思われたが痛みはなく、日がたつにつれて、その痣は消えてしまった。

魚屋が家業であった父は、震災後、親戚を頼って大阪に移り、そのまま大阪の下町で鮮魚店を開いて落ついた。

母に伴われて初登校した魚吉は、両親の愛を独占して育ったひとり息子の無邪気さで、身に合った小倉の服が可愛らしく、擔任の若い女教師は眼を細めて、優しく背をなでるのだった。息子自慢の母が「いつまでも、ネンネで困りますのよ、」と謙遜して云う。ネンネだなんて、時々、寢床を濡らす不始末を、今に、母が云い

だすのではないか、と魚吉は腹立たしくなる。

紫の袴がよく似合う、色の白い面長な、その女教師の姿体から、馥郁とした芳香が漂よい、優美な笑みを湛えた眸で、見つめられていることの幸福感と満足で、魚吉は、身うちがわくわくとするのである。まともに正視できない耻しさともどかしさ、その秘かな幸せが、フツと消えてしまうような不安にかられ、母の着物を振っている左手をふと見ると、うつすらと赤い魚の痣が浮き出ている。アツ、につづいて、（金魚ッ）は声にならなかったが、軽い叫びに、母と女教師は魚吉に注目したが、何のことか気付かなかった。後年、彼は、女教師との邂逅と、その時の自分に起った感情を、「初恋」として、なつかしむのだった。

世の中が不況になり、倒産する店の名が人の話題に登るころ魚吉の父の鮮魚店も行き詰る。毎晩、扉をおろしてから、父と母は帳簿と算盤をはさんで、低声で話合っていたが、その後、ブラジル渡航が決まり、神戸出帆は二月末。魚吉が小学校卒業を目前にしての退学で、担当の教師が学友四名を連れて、神戸埠頭まで見送りに来た。

晩冬の港の夕暮れは、曇った沖から吹く寒風に、埠頭の人々は襟巻や外套の冬着姿だった。農家の次男、商売の失敗者、停年退職の勤め人、ETC。

日本での生活に希望の持てない人々が、三三五五と全国から集って来たのを、ここから船に積んで海外に運び出す、その中味は、う

らぶれた思いと不安の淀むものであっても、歓送の樂が賑やかに鳴り響き、日の丸の手旗が、ちぎれるばかり打ちふられ、五色のテープが飛び交う光景は、生涯とり返しのつかない運命の岐路に立つ者の、動揺する感情を、何か祭りめいた浮立ったものに、すり替えるのだった。

船が動きはじめ、掴んだテープが次々と切れだすと、阻国との一切の絆(きずな)が今切れてしまうのだ、という悲痛な思いが、ワツと、魚吉の全身を包み、鉄の冷たい手摺りに顔伏せて、ううーん、ううーんと声を殺して泣きつづけるのだった。手の甲を濡らした涙の中に“金魚”が泳いでいるのを、気づかないほど感傷的になって小た魚吾は、いささか早熟だったのかも知れない。

そして、彼の主情的(ロマン)な資質は、ブラジルの荒寥たる環境におかれて、文学趣味に埋没し、類は友を呼び、俳句の同人雑誌だのと熱をあげているうちに、頭髮も白髪まじりに薄くなり、変らないのは貧乏暮しだけで、四十年の移り変りを、独り寝の夜半覚めて想いなつかしむのであるが、喜怒哀樂も淡々と色褪せたものになっている。とつくに父母も逝き、共白髪誓った糟糠の妻をも野辺に送り、残された二人の息子を抱いて泣いたのも、昨日のようだったが、今では二人とも結婚している。魚吉の手の金魚も、幸福の刹那に、転落への瞬間に、出ては消えていたが、今は赤銅色の皺だつ皮膚に、古銭のように黒ずんだ色で無表情に、はりついているのである。

道具

四本久子

「おういおうい。」と、部屋の方から、夫の呼ぶ声が聞えて来た。手に一ぱいについて居る石けん泡を洗い落とし、妻は大急ぎで行って見た。机の上から、床から、よくもこんなに引張り出したものだと思われる程、釣の道具で一ぱい、足の踏み場もないとは全く此の事だ。あきれ顔で立って居ると、「その糸の先を、メーザの下から引ばって見てくれ。」と言うので、つまみ上げた。夫は、向う隅みの方に居て、カレチーリヤに糸を巻き込んで居る。釣好きな夫が、前から、カレチーリヤを欲しがって居たのを知って居るMさんが、此の前、自分のを買った時、同じものを、夫に買って下さったのであった。海に行かなくては使えないので、それをためして居るのだ。糸巻に巻き込んだ糸も計つてある。糸の先には針が二本ついて居る。「その針を持って、向うの隅の方から、恰度、魚がアンゾールにかゝった時位の力を入れて、引っぱってくれ。」ずい分おかしな注文だけど、仕方がない。糸のついた針を持って、部屋の隅にしゃがんだ。

夫はカレチーリヤを持ち、真剣な顔をして、本当に釣気分を出して居る。ふきだしたくなるのをがまんして、妻は、針をグイグイと引っぱった。「そんなに強く引っぱっちゃいかん、もう少し静かに引くんだ。かすかな糸の手応えをためして居るんだから。」今

度はそつと引いて見た。「うん、もう一度。」又、引いた。「もう一度。」夫の一心な気持が、此の細いナイロンの糸を通じて、妻にも移って来たみたい。二人共、真面目な顔をして糸を引っぱり、竿の先に気持を集中して居る。「今度は、もう少し力を入れて引いてくれ。」前より少し強めに引いて見た。竿の先は、どんな些細な力にも敏感によくしなう。「うん、調子は上々だ。もうはなしても良い」と言つて、さも満足した様な顔をして、糸を巻き始めた。カレチーリヤをすっかりはづし、袋にしまつてしまふと、今度は、針をメーザの上にごそつとこぼした。大中小、あらゆる針がごちゃごちゃにからみ合つて、こんもりと盛り上つて居る。

それに糸をつけ始めた。見て居ると何だか簡単な様だ。妻も、針と糸を持ってしばつてみたが、なかなか思う様にいかない。今度こそよくしばれたと思つても、手をはなすと、ナイロンの糸は、すぐ、元にもどつて緩んでしまふ。針に穴があいて居るわけでもない頭の方が一寸、つぶしてあるだけなのに、よくあんな事でぬけないものだと思う程、しつかりして居る。糸をしばりつけた針は、からみ合わない様に、きちんと並べてキルクにさしてある。手際の良さに感心して見て居ると、あれ程、部屋一ぱいに散らしてあつた道具が何時の間にか、道具箱の中にすつかり納まつてしまつた。釣場によつて、持つて行く物も違ふらしい。今度の土曜日から泊りがけで、何時ものメンバーと、釣りに行く様になつて居る。釣袋には、入用の道具が皆しまわれ、いらぬ物は、道具箱に片附けられた。

行く迄に、まだ一週間はある。その間に、何回、此の袋と箱が、ひっぱり出されるか知らと思うと、髭面の四十男が、なんと無邪気に可愛らしい事よと、独りでに妻の頬に微笑みがあふれて来るのであった。

お 勸 め

「クリチーバ文章会」から、習作が沢山送られた。いずれも、真剣に文章と取り組んだ作品で、その努力に心を打たれた。順々に掲載し、味わってみたいと思う。

各地方の会員方も、こうした試みに手を染めてみてはいかが。波瀾万丈をきわめる一大ロマンの構想を練るのも立派だが、また、こうした地味な土台構築にも似た習練に精進するのも、大切なことである。いや、創作は、実はここから始まるのかも知れない。

随筆

文学と生活

三瀬喜代志

「文学が飯の足しになりますか」

実に多くの人から、私は斯う言われる。これに対して私は、返答をしないことにしている。こうした質問には答える方法が無いからである。生活というものを人生の唯一の目的としてガメツク働くことにのみ熱中している人に生活の説明を試してみた所で、しよせん糟に釘で、理解などしてくれないからである。食うという事、それは、それで重要なことである。人間、食うが為に働くという単純な考え方からすれば、文学なんか余分の事になるだろう。

「飯の足しになるか」等と、私にとって無神経なこんな質問が、何故発することが出来るのだろうか、と或る目考えた。その結果、これは意地の悪い皮肉であるという事に気が附いた。それは、私が貧乏であるからである。若し私が、人並みの金持ちであったとしたら、そんな皮肉は口から出ない筈だと。

「やんぬる哉」である。

私の文学は、下手の横好きである。秀才に生れつかなかった事は、幾ら悔んでも処置なしだが、その好きな文学に、私は私なりの限界があることをよく承知した上で溺れ込んでいる。存外こう

した仲間が多いのではなからうか。
仲間があると思うだけでも楽しい。

判りもしないのに、此の齢になっても、時々哲学書を開いて見る。此の癖は、私の青年時代から続いている。青年時代には、何とかして理解しようという気持ちだったが、今はそんな意欲はない。世俗に煩わされて、此の方面にも弱い私は、労れを医すために、不可解ではあるが、何か知ら光り輝く哲学のジャンルを覗いて見たくなるものらしい。実利主義者には話しも出来ない事である。

人間の世界から文学を取り除いたら、或る種の人達は本気でそんな事を考えているのを知っているが、その人でも、通俗小説は読んでいるが、それは独りで居る時の退屈凌ぎで、誰かが見えると直ぐ将棋に乗り替えて了う種類の興味しかないのである。此の世に文学なんか要らないと思っている人の理想とする所は、金を儲けて、車を持って、ぜい沢をして「ああ、これで人並みになった」という安堵が欲しいだけのものであろう。だが、文学は人間から離れ去ることは無いのである。「考える葦」である人間は、文学の中に於てのみ、人間性を把握出来るからである。
金銭の持つ力ではその肩替りが出来ないのである。

「考える葦」と言えば、こんな事を言った人がある。「私も無い頭を絞って夜に日に考えていますよ。何うすればもつと儲かるが」
「ああ、何をか言わんや」である。

すべての文芸、小説、詩、俳句、川柳、みな人間性把握の手近

かな手段である。然も、面白いことには、磨けば磨く程、苦しめば苦しむ程、展望と透視が利いて、深い喜びに陶醉出来るのである。

文学入門には、宗教と同じく試験はない。だが、宗教と違って
いる点は、智を磨かねばならない事である。興味を押え付け、壁
に頭を打ちつけて己れを苛み、視野を広めることに努力しなければ
ならない。そうしない事には文学の姿に接することが出来ない
からで、然し、それは苦しく見えて楽しいものなのである。創作
の苦しみと愉しさは、経験してみても始めて判るのである。これは
宗教で味わうことの出来ないものである。従って、即身成仏なん
て文学には存在しない。文学は宗教でないからである。絶讃があ
るかと思えば自虐が襲って来る。マンネリに泣いている時、ピカ
リと曙光の訪れがある。のた打つ己が姿に愛憎をつかさかと思え
ば、生命の炎にも触れるといった調子で。

人間は、文学以外の場所では、救いのない苦しみに曝されている
のである。宗教の眼はそこに注がれる。それは、救いではなく麻
酔である。それだけで助かる人も数多くあることは確かである。
医者が良薬と言って蒸溜水を注射して、直つたと患者が信ずる類
である。宗教も有つて悪いものではない。
心理学的な効果を疑うことは出来ないからである。

文学者は大昔から人間の殺りくを嫌い、現代でも戦争には真向
から反対する。戦争は損害もあるが、一部の人間にとっては金儲
けの手段でもあった。文学は、生物の生命を最も尊重する。宗教

の現世利益に対して、文学は真実と、純粹なる永遠を見つめて追究する。

文学は人間の生活の上に展開される美にして麗なる真実である。これは虹の如く安易に消え去るものではない。文学は、貪しきも富をも超越して人間精神の近しさを讃え続けるのである。

ハンモック

長田三千枝

三米ほどたかさの滝に体を打たす。倒れそうになるのをちっと頑張つて打たす。水しぶきが真白に散る。一月の真昼の太陽がそれをきらきら照らす。

次ぎ次ぎ滝に打たれに来る人達がそこへ下りて来るので、私達は場所をゆずつて、細い小径をよちのぼり雑木林の中へ山る。木々の枝々が交叉して陰になった小径の落葉を素足のまゝで踏んで行く。水着一枚で歩いて行く。

自然林の中へぽっかり作った此の、CLUBE FISCAL DO BRASILは私達の住む所から、リオ街道を車で小半時間もかゝらずに来れる。自然の樹々をみんな残して、その中へ、プールや池や、フットボールのキャンプや子供達の遊戯場を作っている。

此の小高い山道から見下ろすと、未だ出来上っておらないそれらを、ふち取る新樹と芝生の縁が目にも痛い程あおい。

私達と違って朝早くから来ているらしい、此のいろいろの系統の人達は、山の中のそここゝに陣取っている。そここゝに煙が上って何かを煮ている人、肉を焼いている人、木陰々々におかれた木のメーザを取りかこんで、もう盛んに食事をしている人達で一杯である。

都会の騒音に終日疲れて暮らす人達が、たまの日曜日を此の山の中へ来て、心ゆくまで静かな自然を愛している。

満腹の心地よさを、そのまゝ顔にハンカチを乗せて、青草の上にごろりと眠り込んでいる人もいる。木陰々々にハンモックが吊られて、その中にまどろんでいる人達――木洩れ陽がちらちらハンモックの中の顔に落ちる。その人柄の縞のハンモックがかすかに揺れている。

私は奥地で使っていた自分のハンモックを思い出した。持って来ていたら、今此の山の中に吊れるのにとしようと、急において来たことが惜しくなり始めて来た。あのハンモックはノルテから来た私達の使用人の妻が、手づから織ったもので、しぶい色合いの縞模様の丈夫に出来たものであった。十年程まえのあの時分、たしか三百クルゼイロスかで分けて貰ったように思う。

夫がそれを買った時に、そんな物をどうするのかしらと思ったのだけれど、収穫時には倉庫の役目もする、広いサーラの片すみにそれを吊り、ちよこちよことした暇に疲れた体をその中へ投げ

込むと仲々心地よいのであった。日曜日など暇になった昼下がりに、ひとりひっそりとその中で書物など読みながら、何時の間にか眠った。

あのハンモックで思い出すのは、十二月、一月のひどい暑さの夜、眠れぬま、にそつと床をぬけ出て、よくあの中へころげていたことである。

眠いの眠れぬだるい体をやさしく揺ってくれるあのハンモックの味は、なかなか捨てがたい――。

壁もぬっていない椰子の木造りの家は、すきまさきまから星が一杯見えたものである。時には月があつて昼のように家の中が明るかったりした。

その後、聖市に移転するようになった時に、要らない物を皆処分した中に、私の大好きになっていたあのハンモックも入っていた。

街住いにハンモックはどうしてもいらな思つたのであった。あのハンモックは分けて貰った人の手に又かえしたように思う。

過ぎて見れば、なつかしいあの頃の地味な生活を思い出す――。

又どこかで、ハンモックを買って来なければ――。

鹿の山の中で、ハンモックを吊って、その中でひっそり書物を読みたい。心よいまどろみに落ちてみたい――。

心の底にのこる唄

さわ・たけお

「私の心の中のたった一つの歌、」と題して婦人公論の頁にこんなところがあつた。私にはたった一つと言う程でもないが、やはり忘れられない、まざまざと其の時の事が思い出される唄がある。

ブラジルに来たばかりの頃だから三十二、三年も前になるだろう。

日本にいたころは何一つ労働らしい仕事はした事がなく、手なども女の子の様な手をしていた私、ブラジルに来てから朝から晩までエンシヤーダをひき、一年もたゝない中に昼なお暗い山を伐ると言うまったくの変り様だつた。その頃、どうも体の調子が悪かつた夜なども眠れず、何するにも根気なく、ひとり悩んだ。町に住んでいる叔母は心配のあまり、私の住んでいる荒山までやって来て、「どうしたい。体が悪いとか、話にきいたのでやって来たのだが、どうだい、」 「うん、あんまりよくないんだよ、」 「そうかい、草などもあんまり大草にしない中にカルピをすれば後も楽だが、病気もおんなじ事だよ。あんまり悪くならない中にお医者さんに診てもらうんだな。」私のひとりだまっているのをみて叔母は氣をもんで、「そうだ今晚にでもサンパウロに行くんだな、そしてよいお医者さんに診てもらうんだな、」うんサンパウロ、私はずい分遠いところに行かねばならないのかと思つた。

このブラジルに来て始めて通って来た、大きい街、私は末だブラジル語もまったくわからずボンヂアとオブリガード位しか知らなかった。

「なに一人でも心配はいらないよ叔父さんの服をきて、ボチナをはいて、シヤペウをかぶって、サンパウロに住んでいるKさんに紹介状をかいてやるから、一人で行っておいで。」

私は叔母に勇気づけられて、その夜、早速R町の駅よりサンパウロに向った。

叔母は駅まで送って来て又、「なんにも心配いらないよ向うの駅についたら駅の前に朝日に脚光のさしているマルカのある旅館があるから、どこも向かないで、そこへ真直ぐに行きなよ、そしてここにとまって、朝、宿の人にたのんで、Kさんのところに送ってもらうんだよ。」

ガタガタとゆれる夜汽車の中で叔母の言葉を思いかえした。

ソロカバナの駅についたのは次の日の陽もとつぷり暮れて西も東もわからなく街には赤い灯青い灯がともっていた。私は只々わき目もふらず旭の印のある旅館を見つけて、ほっとした。旅館の人は見しらぬ私にとっても親切にしてくれた。

翌朝宿の人に車をたのんでもらい薬局を経営されているKさんの店に無事につく事が出来た。Kさんに叔父よりの紹介状を出す時、Kさんは言葉少なく受けとって、「君はS君の甥か、うんわかった。今日の午後にも診察してもらおう。」Kさんの親切でその日診察をしてもらう事が出来た。「まあ何んでもないよ、肋膜炎が

一寸弱い程度だ、家に帰ったら仕事なんかするより少しぶらぶらしているんだな、それにサンパウロなんかめったに来られないよ、二三日ゆつくりしてゆけよ。」

そんなふうにはKさんにすゝめられて、それではそうするかなんて思いKさんの知人、コンセレーロの〇旅館にとまる事にした。然し私には言葉もわからず街もわからず思う様にあるく事も出来なかった。

次の日、窓を開けてみると重い灰色の空より細かい雨がしきりに降っていた。

ここはサンパウロの街と言うのに……そんな細々と降る淋しい風景。目の前の道路を越えて真向うの壁の古い二階建の二階の部屋より、この雨の中を渡ってくるこの曲この唄が私の胸にしみた。そして私は妙にどんな人があの二階にすんで居るのだろうかと思った。

“千鳥なぜ鳴く下田の沖でヨー”

あゝ、唐人お吉、下田の港か、私が日本に居たころはなかった唄、あれからもう二年もたったのか、細々と雨の降る異境の街で、病のため一人はるばる七百キロの旅をして……、私は淋しかった。この細かい雨の中に城ヶ島の雨を想いお吉の黒船を思った。そして故郷恋しさと共に言いしれない孤独をしみじみと感じた。

今になってあの時、コンセレーロ・フルタードの細く降る雨の中にきいた下田夜曲は私の心の奥底にのこっている。あの唄は雨にけぶるあの街のあの窓で何回も何回もくりかえされていた。

あの時旅装を貸してくれた叔父は已に亡くサンパウロ行きをすゝめてくれた叔母も大分年をとり、私もいい年になってしまった。

まったく夢の様だ。

春浅し

鹿毛至

動物園の森のアスファルト道路が涼しい。すでに芽をふきはじめた大樹の枝の間から、あたたかい陽ざしがもれてくる。朝のすがすがしい大気が、かんそうしきった園内に満ちていた。人出はまだまれで、あたりはひっそりとしている。バールの若い男がいそがしそうに表を掃いていた。

私は姪の由美と、セツテカペーラへのぼる道をゆっくり歩いていった。だんだん行くほど、高い樹上に小鳥がたのしそうに囀りはじめた。やつとのぼりきった丘に立つと、木立ちの間からR市の中心街のビルの林が雄大に絵のようにひろがり朝日に映えていた。「まあ、きれいなこと、……………」

由美はふりむいて、思わず感たんの声をもらしてにっこりした。

十八才という若さがあふれ、青春の夢多き彼女の健康を姿に接

して、ほのぼのとしたうれしさがこみ上げてきた。

前方の大きな、神学校や、セツテカペラの堂が、ながい片影をおとしてしづかであった。

ころころと小石をころがして小径をのぼり、はっきりと、全市の風景を見おろすところにきて、大きな岩の上に私たちは腰をおろした。街の雑とうをさけて、この静かな丘の上に来ていこうひととき、そこは、すべてを忘れさせてくれるあたたかい自然のふところであった。

さつきから、複雑な視線を向けてもぢもぢしている、それはいぢらしいまでに私の心に電流の如くつたわってくるのであった。とうとう笑いだして、「由美ちゃん、何だね、云ってごらん、相だんにのってあげるよ。」私の言葉に一しゅん、彼女の表情がくもつた。ふさふさした黒髪が朝風にゆれて、ひきしまった顔がいく分青ざめてみえた。

「叔父さん、おこらないでね、わたし、ブラジル人青年とナモーラしているのよ、心から好きになって愛しています。でも、すぐに結婚するというわけぢゃないわ、清らかな交際によって青春をたのしんでいるわけよ。」いく分落ちつきをとりもどして一気に云つたが、その中には、私からきついおしかりでもあるのかと、少なからぬおびえが感じられた。

彼女の恋愛については、両親をはじめ、家人の強い反対にあつて、家庭的に甚だおもしろくないことはすでに耳にしていた。今朝、彼女を散歩にさそつたねらいもそこにあつたわけであるが、

自分から進んでついて来たのも、実は私にすべてをうちあげたいという気持ちがあったものと思われる。いつもまだネンネだとかかり思っていた彼女の成長におどろき、うれしい複雑な気持ちかわいたのもいつわらぬ私の感情であった。結局、叔父というよりも、人間的にまず彼女の立場をみとめ、尊重することによって、いかに自分の立場が重大にして責任あるかを強く感じた。実際、彼女の意志がこれほど強く、真実の愛を求めているようとは、全く意外であった。

彼女の疑問は、自分の相手がブラジル人であることを、両親はどういう理由で反対するのであるのか、というにあった。ついては、私の意見をききたいというすこぶる真剣なたい度でせまってきた。しかも、私が十才で渡伯したいいわゆる準二世という立場も考慮に入れているらしかった。

しばらくの沈黙の中に、彼女はうつむいていたが、かるくかたをたゝかれてから顔を上げてにっこりした。あふれていたしづくが白いほおをぬらしていた。

「由美ちゃん、何と美しい景色ぢやないか、こうして見渡す街の発てんの中にも、どんな人だってそれぞれことなるなやみを背負って、きびしい現実に生きているのだよ。お前だって、その恋のためには悩んでいるだろうなあ、わかるよ。それゆえに、責任をもつて自分の信ずる道を進むことが大切だよ。叔父さんは、お前の相手が伯人であることに反対するものではない。お前も三世ぢやないか、ブラジル人としての自覚をもつべきである。人間的にたよ

りになる人、自分の一生をたくして信らいできる健康で誠実な人であつたらよいと思う。

問題は、よく相手をみて知ることだ よ。まあ、もつと明るい気持ちになって、勇氣と希望をもつことだな。」

由美はしづかにうなづいて、ふたゝび街の方へひとみを向けた。そのよこ顔になおいとしさがまして、そつと抱きしめてやりたい気持ちになった。

あたたかい陽ざしが、いつのまにかうしろの林の上にのぼっていた。神学校の門があいて、一だいの白ぬりの小型自動車が出て去つたあとに、二人の僧がしづかにこちらをみていた。

私は由美の手をとり、ゆっくり立ち上ると、小石をころがしながら小径をおりてきた。彼女の手があたたかく力がこもっていた。

終

創作

残り香

伊那宏

朝起きたら妻のとし子がいなかった。

私はいつもの習慣で五時に眼を覚ます。平日なら、そのまま起床してカフェーをわかし、そそくさと仕事に出かけるのだが、今朝も就寝前からゆっくり起きようと予定していたのであったが、やはり、日頃の習慣どおり、五時に眼が覚めた。

五時といってもまだらくらく、森閑とした中から、時計の音と、鶏の叫び声が響いてくるばかりで、昨日迄の朝と少しも違いはなかった。

——便所へ行ったのかな、と私は軽く決めて、枕元にある煙草をとった。

昨日まで独身生活を送っていた私は、実際今朝になっても、そのままの気分を継続していて、人生に一つのピリオッドを打ったという重大な感慨は、寝覚めの中から湧いて来なかった。だが、ビシッとマッチをすって、一瞬辺りの光景が光りの中に浮き上がった時、私は、初めて、室内の様子が変わっていることに気がついたのだ。その光りの中から、新しい家具が嫌応無く私の視野を被った。洋服ダンスも、ミシンも、鏡台も、全て泥壁の室内に不調和な存在であった。

——そうだ。俺は今日から一人ではないんだな…

迂濶にも思い出して、私は苦笑した。

呆気といえば呆気なものであるが、長い独身生活から、急に妻帯者になった自分を実感することが出来なかったのだ。

——妻帯者……と呟やきながら、私は煙りを吐いた。何とも意味の無い笑らいが煩に浮かび上がって来る。

煙草を吸うたび、小さな火の塊りが辺りをぼうつと明るく照らす。

何やら香ぐわしい嗅いが漂っている。それが昨夜妻が使った化粧品香りだと気がついて、またしても、私の頬に笑みが湧き上がってくる。

ぎこちない手で、私は、昨夜とし子を愛撫した。

初めてではなかったが、やはり私の心は緊張していたらしい。手が少し震えていたようだ。妻は嫌やがりもせず、すでにその行為があるものと覚悟していたように。私の不器用な動きに黙って応じてくれた。

「静かだわ……」

私の荒らい息使いの中から、するつと抜け出るように、冷たいとし子の呟やきが流れ出た。

急激に強い疲労が私を襲って来た。それから、それが、まるで自分の意志でないように、私はとし子から離れ、そのまま眠りに陥ってしまったのだ。

妻を迎えるに当り、その夜の行為を、私は全然想像しなかった

わけではなかった。文通によって結ばれた私達のような夫婦に、初めから真の愛情が介在しているわけはなく、従って、二人の結合が愛の昂じたものでなく、長い生活を送るための極く儀礼的な結合なのであるから……という気持を、私は持っていた。せめて、愛情の片鱗を示すことによって、私は、妻を自分のものにしていく、そんな計算じみた想像をしていたのであったが、それにしても、昨夜の腐甲斐無い短兵急な自分はどうしたということだろう。

煙草をくゆらせながら、夢の中を辿るように、私は昨夜の出来事を思い出していた。

「静かだわ……」、と一言ったとし子の言葉が、妙に生々しく甦ってくる。欲情が昂じていた私の耳に、その言葉は何の意味もなく、すつと通り過ぎて行った。

が、今思い出せば、その場にそぐわない一種の空々しさがあつたようだ。妻の心が私の身ぢかになく、どこか遠いところにあつたような、そんな焦点のない空々しさである。

煙草の火をもみ消すと、私はしばらく宙に眼を据えた。戸外からほの白く朝の光りが浸入して来ても、妻はもどって来ない。便所にしては少々遅過ぎるようだが——と私は思った。多分、昨夜食事をしながら、朝のパンは畑の向こうの道を、暗らいうちにパン屋の車が通るから、そこまで行って買わねばならないんだ——と、私が言ったことを忘れずに、妻は道まで出かけているに違いないとも思った。

いずれにしても、そう心配したことではないだろうという安易な気持になるのは、私の生来の呆気さと、在伯七年の過程が単調なこの国の日々に溶け込み過ぎたところから来るものであろう。十八才というまだ少年臭の抜け切らない若さで単独渡伯した私は、一カ月もすると、何の抵抗もなく異同の生活に慣れ、故国のこともさほど恋しく思うこともなく、無事に過ぎて来た。

過去、妻を迎えるまで、私は一度として切羽詰まったという状態に、自分が置れたことがなかった。四年の契約もさして長いとも思わず、パトロンの援助ばかりで独立した時も、それが、極く自然の過程であったように思える。独立した当初、二、三結婚話しもあったが、私は断った。自分に全くその意志がなかったからである。そんな時、私の「男性」ということで妙な噂さを流した人が居たが、私は少しだつて意に介さなかった。多少の不自由さはあったが、呆気な私には、全て耐えていける問題であった。

郷里から妻を紹介して来たのは、私の母であった。

未成年で渡伯した私を、母は事の他心配し、この二年の間に届いた母からの手紙には、必らず結婚の催促が記されていた。はじめのうちは少々煩わしくもあったが、それが度重なるうちに、次第に私の内部に結婚の意志が湧き上がり、といつても、母のために、といういささか無責任な気持があったにはあったが、とにかく結婚をしてもかまわないという意志が、私を動かしはじめていた。あやふやな気持ではあったが、一応その旨母に返事を送ると、直

ぐに手紙と、同封された一葉の写真が送られて来た。容姿端麗だとか、頭脳明晰だとかということ、私は迎える妻に対して、別に希望を持っていたわけではないが、母からの手紙には、そんな仲人的文章でもって写真の女性の説明が加えられていた。母の言を信ずるならば、彼女が、男性にとって稀れに見る理想的な女性ということになるのだが、私はそのことを別に喜びとするでもなく、といつて、不満と思うこともなかったので、その女性を妻に迎えることを承諾したのである。

私達の文通による交際は、一カ月に一通のペースでもって一年近く進んだ。といつても、これは主として私の方のペースになるのだが、彼女からは、一カ月二回は平均送られて来た。二回に対して一回しか返事をしない私を、彼女はどう察したか知らないが、とにかく、私達の間は極く自然にまとまってしまったのである。これは、私の母の尽力が多分にあつたからで、実をいうと、私は、母になかば結びつけられたような形で結婚する結果になつたようなものであつた。

船中からも、各寄港地ごとから妻は便りを寄こした。港々の風景の素晴らしさがその都度喜びを交えて書いてあつた。まだ見ぬ貴方を、きつとこの大海のような包容性のある方だと毎日想像しておりますなどと、私にとって冷や汗をかくような文章が時々書かれていたりした。又、同船に同郷出身者がいて、何くれと世話をしてくれるので少しの淋しさも感じないとも書いて来た。

呆気者の私は「妻が乗船するまで、自分が結婚するということ

が実感出来なかった。一度として会ったこともなく、たゞ手紙によるのみで相手を想像するということは、小説の中の主人公を空想すると同じようなもので、そこには迫られた現実感がなかった。そして、時には、そのような交際によって実際夫婦の成立が有り得ることだろうか、などと手紙を書きながら思ったりしたものだ。

だが、妻が乗船し、その模様を詳細に記録した妻からの手紙を読んだ時、私には、あの慌しい過去の出航風景が鮮明に甦って、そして今、妻がたった一人で私のものになるためにやって来るのだと思うと、俄かに生々しい現実が私の胸中に忍び込んで来た。

それは喜びではなかった。何か私の身の上に重大な責務がのしかかって来るような感じのものであった。だが、それも緊迫したものとも違う。その時から、自分が今までの自分でなく、新しく生れ変わった人間の持つような、多分に希望を学んだ責務であったろうと思う。

白々とした朝の光りが室内に入り込んで、辺りを明るくしはじめた。

いつもなら、とうに仕事に出かけているはずであったが、今朝にかぎって仕事のことは全く念頭になかった。夢の中を彷徨している時のように、私は、恍惚とした気分を味わっていた。

時計は六時を過ぎていた。

近くの道を馬車の走る音が過ぎて行く。ジツトが薪を運びに行くのだろう。彼はこの近辺では私の次ぎに早起きの男だ。体格は

隆々として浅黒い肌を自慢にしている。

私とジットは、或る日まったくの仲良しになった。二人で話しをしている時、背の高い中年の白人が通りかかり、実に鷹揚に、相手を蔑すむような視線で、私とジットに挨拶をした時からだ。その時ジットは言ったものだ。「ジャポネースの肌は陽焼けしたら俺に近くなるからいいが、けつ、白んぼのぶよぶよした肌は人間様のものじゃねえ」

馬を叱咤するジットの叫びが、朝の静けさを劈くように聞えはじめると、私は反射的に身を起した。

その声は、恍惚感に酔っていた私を出し抜けに覺し、嫌応なく現実の中へ引き込ませるものであった。

——それにしても、とし子はどこへ行ったのかな、

朝早くから、しかも夫である私に黙って妻が姿を消したことに、私は胸の騒ぐ思いを感じはじめていた。

台所から抜ける裏口は、門がはずされて外から閉っていた。明らかに妻が出て行ったことを物語っている。

裏口を抜け出ると、私は便所へ入ってみた。妻は居なかった。ついでに小用をすませた、それから家の周辺を見回した。妻の姿はどこにも見当らない。

初めての土地を散歩でもしているのだろう。私は呆気にそんな結論をして家の中へもどった。

フォゴンに火をつけ、湯をわかしておき、洗顔をすませた。それは長い独身生活で身についた私の習慣であったが、無意識に機

械的にやっていたそんな所作が、今朝になって何とも不自然なものに感ずる。

ぐらぐらと、フォゴンの上で湯が煮えたぎっている音を聞いた時、私は、初めて、妻が居ないということに重大な意味があるのではないかと思った。一緒に寝ていたはずの妻が一夜にして消えた。それがどういうことであるか、私は皆目見当がつかない。まさか怪談でも去るまい。

私の胸は異常に昂ぶって来た。

とにかく、もう少し待ってみよう。

騒ぐ胸を強いて抑えて、私は、カフェーを濾した。そして、新調した食卓に二つのシーカラを並べた。

ふと時計を見るともう七時を過ぎている。カチカチという金属性の乾いた音が、妙に人を小馬鹿にしたように響いてくる。

私は、その時、この時計が何もかも知っているに違いないと、愚にもつかないことを考えた。そう思ってみると、確かに時計が生き物のような錯覚を与える。秒針の刻む音が嘲笑らいに似ている。デンと柵に座って、お前は何も知っちゃあいねえ、とでも言いたげにいやに落ち着いて私を見下ろしているのだ。

無性に腹立たしくなってきた私は、いきなり立ち上がってその時計に布を被せた。

「馬鹿野郎！」

時計を面罵するその声は、自分でもびっくりするほど高かった。苛々しながら、私は、シーカラにカフェーを一杯入れて一息に

飲んだ。たちまち私の顔は苦渋に歪んだ。砂糖を入れ忘れたのだ。こんなことは、かつてないことだ。

初めて異国の土を踏んだ妻が、翌朝行方をくらましたという事実を、私は、もう、安易に考えることが出来なくなっていた。

散歩しているにしては遅過ぎる。誰か知人をたよって行ったのかも知れぬ

——誰を？

そこまで考えた時、私の脳裏に俄かにサントス港で妻を出迎えた時の光景が浮び上がって来た。

無言のうちに握手を交し、含羞む妻の表情を多少戸惑いながら見守っていた私の視線が妻の後方に移された時、かすかに微笑しながら二人の対面をじっと見つめていた一人の青年を認めた。瞬間ではあったが、私の視線を感じると、確かにその青年は狼狽し、反射的に頭を下げた。

私達の対面がそれほど珍らしいものなのか——と私は考えながら、その青年の立ち去るのを待った。

だが、青年はその場を動こうとしない。野次馬にしては悪どい、妻の知人かも知れぬと思った私は、煩わしいその存在を強いて無視し、「退屈しただろうね、船の旅は」と妻に話しかけた。

「いいえ、ちっとも」と妻は明るく笑いながら言っ、急に思い出したように後方の青年を振り返えり、「同県の田所さんですの。船中ではいろいろお世話になりましたのよ」と何の躊躇もな

く紹介した。

同郷出身者が居て、何くれと世話をしてくれるので、少しも淋しさを感じません。と書いてあった妻からの便りを思い出して私は納得した。

「そうでしたか。ほんとにありがとうございます」と礼を言いながら、しかし、その時、私は心のどこかでその青年に対する敵意を覚えていた。

不思議なことである。そんな経験をかっつけたことのない私は、その時の自分の感情を説明することが出来ない。一人の男が己れの妻に好意を寄せているのではないか、という直感は私を惨めにした。

田所は私の家からさほど遠くないR耕地へ入るらしかった。

「遠いところですよ」と心細気に妻は私にきいた。

「いや」と曖昧に答えた私の言葉にかぶせるように、「どのくらい？」、と妻が言った。十キロくらいと浮かぬ気持で私が言うのと、「まあ、よかったこと。時々遊びに来れるわね」と、喜色を表わして妻が田所に言った。

何でもないことであつたかも知れない。事実、生来猜疑心がありまらない私は、出所が気をきかし、極く好意的に微笑と言葉を残してその場を去ったあと、まったくその時感じた不快感と、田所に対する敵意を忘れていたのだ。

この国に、私達のような結婚の形式を経た男性は幾多も存在す

るが、翌朝、新妻が二時間も三時間も行方をくらました例は、私の知るかぎりではまったくなかった。ましてや、隣家まで何百米離れ、しかも一人として知人の居るはずのない草深いこのような田舎においてをやである。

私はすでに、妻が失踪したということを確認しはじめていた。原因といっても、田所との関係以外思い当ることがなかった。だが、田所の入植したR耕地を妻は知るはずがないのだ。船中で話し合っていたとしても未知な土地に上陸して直ぐに訪ねることは困難なことである。そんな思いが私の猜疑心を多少緩和させたが、やはり、私はそれ以外の原因を思いつくことが出来なかった。

失踪の形跡を見定めようと、私は寝室を調べた。

しかし、私の期待した書き置きは、どこにも発見出来なかった。下船した時はいていた靴と、ハンドバッグはあった。女が外出する時、ハンドバッグを忘れることがあるだろうか、と思ったが、それも決してないことではない。私の確信はそんなことでは揺がなるところまで来ていた。田所に寄せる思慕の高揚が、ハンドバッグを忘れさせ、その上、一夜を共にしたのみで未だ夜の明けきらぬうちに脱出をさせたほど、妻の心を駆りたてたのだ。そんな想像が、私の内部に絶対的なものとして占め入って来た。

だが、しかし、私はその時、「失踪」というさしあたって最も現実的な言葉が、ただ無意味に私の脳裏を去来するだけで、これから講じなければならぬ手段を、少しだって考えてもいなかったのだ。私はただ気を苛立たせ、落ち着かない気持で家の中をあつ

ちへ行ったり、こつちへ行ったり、時々思い出したように窓外に苛立った眼を向けるばかりであった。

母が悪いのだ。私に結姉を強いた母が悪いのだ。とし子が、私の妻として適した女性であるかどうかぐらい、息子を愛し、心配する母親にとって判断出来ないはずはなかったはずだ。苛立ちの中で、私は一途に母を恨んでみた。だが不思議に母に対する怒りは感じない。私の怒りは自然にとし子と田所に移されて行った。私という夫が居りながら、とし子はすでに田所と一線を越えた関係を結んでいたに違いない——という想像が、何の憚りもなく私には出来た。

今頃、妻は田所に会っているだろう。それが私に対して如何なる行為であるかを、妻は理解してはいまい。

言い様のない憤怒と、未だかつて経験したことのない強い嫉妬が、胸の中で煮えたぎっているのを私は感じていた。

やり場のない気持で、私は体を寝台の上に放り出した。寝具に残されている妻の化粧の臭いが、ますます私を苛立たせ、意地悪く感情を刺戟する。

——牝犬！ 売女！ 裏切り者！

あらゆる罵倒放言が、烈火のように私の口から飛び出してくる。私の身体中は、狂ったように波打つ。最早や情状酌量の余地は塵ほどもない。まるで、野獣の猛りのように、私は思慮を失っていた。

「何のための結婚だったのだ、畜生！」

やがて、私の怒りは呻吟に変わり、そして、泣き声に変わった。俺が泣くなんて久しいことだと思いつながら、惨めな気持ちの中でどめなく溢れる涙を拭いもしなかった。

あれほど高揚した感情が、いつしか炎の衰えのように消えて、その時、私の胸中に忍び入って来たのは、孤独と生活に対する絶望であった。今朝から始まるべき希望に燃えた生活が、まったく想像もつかぬ急激さでもって逆回転してしまった。私の抱いていた計画の全ては、一夜にして空しく崩壊され、打ちのめされた気持ちの中からは、一条の欲望すら湧き上がって来なかった。

どうともなれ、という捨て鉢な気持ちで、私は寝台の上に横たわったまま、身じろぎ一つしなかった。

もう全てが大儀であった、死ぬことさえ。ここにこうして何もせず過ごすことが出来たらと私は無気力に考えた。

「静かだわ……」

と冷たく呟やいた昨夜のとし子の言葉が、何の刺戟もなく、流れ星のように私の脳裏を通り過ぎた。その言葉の意味を、私にはもう考える気力すらない。

化粧の残り香を、私は、遠いところから漂よって来るもののように空ろに嗅いだ。

「静かです、お母さん。とし子も居ないんですよ。」

絶望の中で、私は呟やくように母に語りかけてみた。

畑の向こうの道から、ジツトの馬車がもどって来る音がきこえ

る。薪を満載した車の音は消えて行くようにいやに重たい。

「静かですよ、お母さん。とし子も居ないんです。」

私は、もう一度母に語りかけた。

車の音が地に吸い込まれたように消えた。

「たかし。どこへ行ったの」

私を探がしている母の声がきこえる。

「どこへも行きませんよ、お母さん」

悪戯らっぽく私は母に答えた。

「どこなの。いけない子ね」

「ここです。お母さん」

「悪いことをしてはだめですよ」

「悪いことって何ですか。教えて下さい」

「お母さんをこんなふうに焦らすのは、悪いことの一つですよ」

「山の中に居るんです。花の香りがして静かですよ、お母さん」

「どこから行ったの」

「そこに糸のような細い道があるでしょう」

「こんな細い道を一人で歩いて行ったの」

「ええ、一人で」

「お母さんも行くわね」

「いらっしやい。静かですよ。とし子も居ないんです」

「何日かかるかしら」

「そうですね、四十日はかかるでしょう」

「まあ、そんなに？」

「でも気をつけなければいけません。田所という男がいますからね」

「平気よ。私にはただしさんがおるもの」

「僕を信じられるの？」

「信じますとも、私の夫ですもの、フフ」

「でも、危険だな。冒険ですよ」

「私を信じてほしいわ」

「信じてます。僕達の仲間は誰だって信じているんです。」

「そちらへ行ったら、私を愛してくれるかしら」

「勿論。誓います。でも、田所という男だけは注意して下さいよ。」

「あいつは悪い男ですからね」

「大丈夫よ、絶対」

「信じましょう。それが迎える者に与えられた任務かも知れない」

「そんな言い方、いやよ」

「君は、田所という男がどんな男かを知っているんだろうね」

「知ってますわ、いろいろお世話下さっているんですもの」

「もう近づいてはいけないな。赤信号だ」

「だって」

「僕に対する侮辱とは思わないのかい」

「……………」

「それが、僕をどんな気持にするか……………」

「ごめんなさい。そんなふう考えたことなかったの」

「解ってくれればいいんだ」

「ほんとにごめんなさい。もう近づきませんわ」

「もう謝まらなくなつていいさ」

「ごめんなさい」

「いいんだよ、もう。許してるんだから」

「ごめんなさい。起きたらあまり静かで、ちよつと 散歩に出かけたら……」

「もう気にしなくつたっていいんだ、ほんとに」

「道端の燈色の花が美しくて、それを見ながら歩いていくうちに、道に迷つてしまつて……」

身を揺ぶられて眼を覚ましたら、妻の困惑した表情が私を見下ろしていた。

私はいつしか寝入っていたらしい。夢の中の言葉と現実の妻の言葉が混同しているのさえ気がつかなかったのだ。

「ごめんなさい。初めてで道がわからなかったの。気がついたらひどい山の中を歩いていたわ。ほら、こんなに足にかすり傷をしまつて……」

スカート裾から見える足が、いやに白く私の眼の中に入って来た。

「ご心配なさつたでしょう」

戸惑つたようにちよつと笑つた顔が、まるで花のようだなと、私は思つていた。そして、その顔が、母の顔であり妻の顔にも見え、区別がつかなかった。

「どこへ行っても同じような地形で、目印しになるようなものがないから、わたし……」

「……」

「怒ってらっしゃるの」

「……いや」

「もうこんなことしませんわ」

「便所へ行ったのかと思ってたさ」

私の心は不思議なほど平常にもどされていた。あれほど感情を昂ぶらせ、切磋商しい疑心暗鬼にかられていた自分が信じられなかった。きつと夢を見ていたのだ。そうでなければこんな和やかな気分が、自分のところに戻ってくるはずがないのだと思った。

よつと声をかけ、私は寝台の上に身を起した。妻の顔を見るのも照れ臭い。

私は寝台の上から妻の手を引き寄せた。何の不自然さもなく、妻の身体が私に崩れた。意外な散歩で疲れているのか、顔が上気している。迷い道で味った不安と昂奮が、思いがけない私の抱擁によって妻の欲情をかりたてたようだ。妻の息使いが次第に乱れてくる。

化粧の臭いに接しながら、妻と田所との関係が、その時、他愛なく私の脳裏から掻き消されていった。

又、引き返えして来たジツトの馬を叱咤する声が、いきなり身ぢかにきこえた。

妻の動きが止って、私の表情を窺がう。私はかすかに首を振って、腕に力をこめる。だが、やはり私の愛撫はぎこちない。

(終り)

会員にお願い

文学的土壌の豊かでないコロニアで、このような仕事を継続しようとするのは、困難なことです。率先して参加くださった会員皆様には、給付に見合わない物質的犠牲を払って頂いていることは、よく承知しています。しかし、そうした犠牲なくしては、文学誌一つ持てないコロニアの精神的貧困の克服されるまで、熱意と愛情をもって、本誌を育てて頂きたいと思います。その意味で、未納会費はできるだけ早目に御納入くださるようお願い致します。

私の好きな作中人物

「芦刈」のふたり

妹尾三郎

その頃、私は谷崎潤一郎の作品に傾倒していたようだ。

歌舞伎座で新派の「芦刈」を見たとき、鍛帳のあがった舞台は、照明のあてられた一隅に、ひと叢の葦と、舳つた川舟があり、静かな琴の音が遠く奏でられているばかりであった。固唾をのんで見まもっていた私は、ただそれだけで、身振りするほどの興奮を覚えたものだった。

——みれば左の手に瓢箪を持ち右の手にちいさな塗り物の盃を持ってわたしに突きつけているのである——。

小説「芦刈」では、水無瀬の宮址あたりから目を求め、橋本へ渡る淀川の川洲で、めぐりあった見知らぬ人と月見の酒を交すところから、物語りが始まるのである。

私は小説を読むとき、その作品の内容よりも、背景に心ひかれる癖があった。

いつか、そのような感傷めいた、風流の場所に自分を置いてみたいと願っていた私は、入隊する友人の送別を兼ねて月見の宴をやることを計画した。

澱の入った合成酒ではあったが、当時としては手に入れ難い一升の酒を工面して来た。

「芦刈」と同じ山崎あたりまで出あけるのは億劫だったので、手ぢかな大和川の河原を選んだ。

風流に不精だった私達は、端から間違っていたのかもしれない。川堤から眺めると、月の光に照らし出されて、川洲のみが白く浮き上って見え、用瀬に青白いものが砕けていた。

河原に降り立つ路も見極め難い程丈高く伸びた雑草が、しつとり夜露に濡れていた。

麦と葱の区別もつかない町育ちの友人は、

「ここからだって結構、月は見えるよ」

と言って、堤の切株に腰を下して動かない。体をこわして、医者から酒を禁じられていた彼は、既にこの日の計画に興味を

失っていたのである。

入隊をひかえて、心はやっていたいま一人の友人も、

「俺も今夜は酒をつつしもう」
などと言ひ出す始末。

良心的な私が、——澱の入った合成酒だが——と言ったのが、
彼等を臆させたようであった。

すっかり腹をたてた私ひとり、ヤケになって酒をあふり、果は
一升瓶の喇叭飲み、それからあとの記憶はさっぱり無く、泥んこ
になってそこいらをぬたくったらしい。

あの「芦刈」の泌み入るような風流さと似てもつかない無慙さ
であった。二十才にもならない頃の話である。

この間、私は古本屋の書棚に、文庫本の「芦刈」を見つけ、そ
の頃のことを懐しく買い求めた。

いま、「芦刈」を読んでも、その頃のような興奮を覚えるような
ことはない。歳月が私の好みを変えたのであろうか。

しかし、いまなお、川洲の葦の中で瓢を傾ける、ふたりの姿が、
私の脳裡に焼きついたまま消えさりはしないのである。

創作

禁煙（18枚）

蓼科 冴智雄

それは細かく計算された巧みな演出ではないだろうか。兎に角私は再教育の必要を痛感せずにはいらなかった。

結婚後、僅か二年で斯くも見事に変貌を遂げた妻——（変貌）と言うより（豹変）と言いたい。私は今、吸いかけの煙草を中途で机の上の部厚い安物の灰皿の上に揉み消しながら、従順で優しかった産前の妻を思い出していた。

（女は弱く、母は強し）と誰かから聞いたことがあった。でも私にとって我慢できないことは、彼女が公然と男の領域に踏み込んでくることであった。

それは甚く私の自尊心を傷付けずには置かなかった。

（ハイッ！ 肺ガン促進剤）——こう言いながら煙草を私に渡すようになったのだ。たしか最初聞いたのは産後二カ月位の頃だったと思う。始めてそれを言われた時、私はそこに何の悪意も感情の刺激も感じなかった。妻はその言葉を極めて明るくにこやかに言つてのけた。今もその演技に変わりはないのだがこの頃は妙に刺々しく、苛立ち、腹立しくなる感情をどうする事もできなくなつてきていた。（私はこの頃、計画的な極めて悪質な演技と思う

ようになった。)この感情は肺ガンに対する恐怖の潜在意識と、妻に対する支配権の減少意識に基因するものであるかも知れない。

(ハイッ！ 肺ガン促進剤)——この言葉は私に対し、効果を上げつつあると妻は確信し始めたに違いない。そうだ、負けてはいけない。それにしても女性の総てが子を持つと(嫌がらせの世代)に突入するものなのだろうか……………。

一般に女性は計算に弱いことになっているが私の妻は全く例外かも知れない。彼女の一日は計算から始まり、又計算することによって一日が終るのであった。

私の仕事が養鶏であることが尚一層妻をして計算に熱を上げさせる結果になった。妻の一日はまず私に特別の仕事があるかどうか尋ねることから始った。

「あなた、今日は特別の仕事あつて？」

「ああ、鶏舎のユーカリを切るよ。」

「何時間位掛るの？」

「そんなこと分るもんか！」

「まあ、無責任な返答ですわ。若し八時間やるとすれば三千五百カロリー位にしなくちゃいけないわ。蛋白質は最低百十グラム、だつて伐採は重労働の部類に入りますから。その内動物性蛋白質は三十グラム位とらなきやいけないわ。だから聞いてるのよ。」

「ちえっ、嫌になつちやうな。まるで機械に対する補給じゃないか！」

「あら、あら、妙なこと言わないでよ。機械じゃないからこそ心配してるじゃないの。いいわね、今日の動物性蛋白質は卵で採ることにしとくわ。」

「おいっ！又今日も卵かい。あの例の(ばっかり食)ていう奴か。昨日もオーボ、今日もオーボ、そして明日もオーボ……」

「まあー、あなた！何言うのよ。卵は完全食品の一つですわ。」
「知ってるよ。でもさあ、(ばっかり食)はもう食傷気味だよ。」
「でもあなた！家計の上から老えても、又、オーボケブラードの処理法の一つとしていいじゃない。合理的よ、本当に。私は飼料に更に〇・三%オストラを混ぜてるのにケブラードやトリンカードや軟卵が出るんですもの、一体どう言う訳かしら？」

「ああ、もういいよ、もういいよ。」

ざっとこんな調子で一日が始るのであった。

彼女は鶏舎の温湿度を三回記帳した。その結果から風具合を加味して不快指数だの、鶏体温の変化だの、給食量、飲水量の推定等を計算するのだった。

食卓の上にはいつも紙と鉛筆と計算尺と算盤が置かれていた。夕食が済むと産卵率や生存率を計算し、更にフランゴの体重測定や飼料効率の計算迄やるのだった。私の様にしかめつつらで計算するのではなく喜々として、丁度算数の得意な小学生のような態度だった。産後、育児と言う煩わしく重要な仕事が出来たにも拘らず、計算量は以前と少しも変らなかつた。私は感心すると言うよ

りは寧ろ呆れていた。

労働人数は以前のカメララーダが一人にその妹のメニーナが一人増えただけであった。

日本での妻の仕事は栄養士であったとのことだった。

（あなた、今日のアルモツソ、必須アミノ酸のメチオニンが足りないの、だから鶏のちよつと失敬して入れといたわよ。）

（あなたっ！ この魚安かったのよ、蛋白質百グラム当り二百クルゼイロスの計算になるだけなの。 それにカルシウムも含むでしよ、文句ないわ！

（まあ、あなた、何故リモン残すの？これで今日のビタミンCを全部とる計算なのよ。）

こんな会話を毎日聞いていると私はふと（機械ではないか）などと思ったりして妙な気持になるのだった。

《一四九二年以来の（コロンブス米大陸発見以来の）悪習》——ついで一カ月前から妻は私の喫煙に対する攻撃に新にこの言葉を使用し始めた。（肺ガン促進剤）（一四九二年以来の悪習）——妻は明らかに私に挑戦しているのだ。私は何か対策を立てねばならぬと思つた。兎に角、これ以上放置することは妻をますます増長させる結果になる。

私は妻に煙草の効用の説明を試みた。

「無我の境地って分るだろう？」

「何のことよ？」

「つまりだな、一服することによって総ての煩わしさから解放されるのさ！」

「まあ、うまい言い種ね。」

「それっ、言訳じゃないよ。本当だよ、又苛々した時なんか一服するといいかい、気持がすうつと落ち着いて来るんだ！」

「坐禅でも組めばいいわ！」

「分っちゃいない。何とも、分っちゃいない。」

「煙草なんて百害あって一利なしよ。健康に悪いだけじゃなくって、全く不経済だわ。マツチだけだって馬鹿にならないわ！ それにあなた知っていらして？ 世界の火事の何パーセントが煙草が原因で起きるが。これだけじゃないわ、煙草を吸うあの無駄な時間―何を考えてるもんですか、中毒症状の緩和、いいえ、麻薬みたいなものだわ。」

「君、君、そうむきになるもんじゃない。昔から言うじゃないか（盗人にも三分の理）ってさ。」

「あら、まあー、変な言訳けねえー」

「変じゃないさ！」

「あなた知ってるでしょ、費用対効果方式って？」

「ああ、マクナマラのか、奴はねえー、鶏飼いに貴適の男さ、ヴエトナム戦にや不向だねえーどうみたってさあ。」

「何言ってるの！ あなたが毎日一コントの費用を掛けてこれから五年後に肺ガンになるとする。利子も考えてよ、そうすれば……」

「おい、おい縁起でもないこと言うなよ。」

「あらっ？ どうして？ 真面目な話よ。それにあなた考えたことあって、煙草系数ってこと。」

「タバコ系数？」

「エンゲル系数知ってるでしょ、それに私が習ったのよ。つまり生計費中に占める煙草の割合のことなの。」

「ちえっ、全く嫌になっちゃうな。」

「それは私の言いたい言葉だわ」

「これじゃ六十年連続の凶年だね。君は僕みたいなロマンチストの妻にや向かんね。君は執達吏の妻君になるべきだった。」

「まーあー、ひどいこと言うわねえー！！ 嫌がらせ言ってるんじゃないの！ 冗談じゃないわ、養鶏だって不景気でしょ。私の計算じゃここ五カ月は 好転しそうもないのよー。」

「分ってるよ。分っちゃあいるけどってんだ。」

妻はこれ等の会話中にこりともせずしゃあしやあと言っただけ。その大きな瞳は明らかに挑戦的で反感に満ちていた。彼女は今、私に対する闘争目的をはっきりと宣言したのである。

私は反撃に出た。

「ブラジルの納税者数は総人口に比較したらほんの僅かなんだぞ。煙草の税金は価格の半分以上だぜ、僕はねえー、いいかい、ブラジルの財政を支えている重要な一分子なんだぜ。」

「まあ！ 本当に御都合のよい論法で恐れ入りますわ。我田引水もその位徹底するとまあ何と申しませうか……、煙草なんて男

のエゴイズムのシンボルよ。」

「ちよつと待ってくれ、最近はね、誠に失礼ですけど女性の喫煙者も大分居りましてねえーはい。」

「嫌味な言い方ね。でも数の上から見れば絶対男性の方が多いわよ。」

「君は喫煙をいやに攻撃するけど、一体女性の化粧代だの装身具つてのはどうなんだい、あれこそ全く不必要の標本みたいなもんだぜ。あの費用を低開発国へでも廻したら勲章を貰えるぜ。そして南北の対立もなくなるうってんだ。どうだ誠に急所を衝いてるだろう。」

「あなたって卑怯だわ。話題を摩り替えようとしてるわ。今は煙草について話してるのに。」

「分ってるよ。僕はね、女だって随分無駄使いをしていると言う例を上げたに過ぎん。」

妻は形勢不利を予測したのか急に数字を上げて説明し始めた。例の煙草系数だった。妻の説明によると煙草系数は二五、つまり生活費の四分の一に当ると言った。私は瞬間どきりとした。そして、そんな筈はないと思った。しかし事実だった。妻は家計簿を持ち出して来て説明し始めた。我家の一カ月の家計費は百二十コントス位で私の煙草代は月と三十コントス内外だったのである。

余りにも理路整然とし、相手に少しも反撃の切掛をも与えぬ態度は却って強い感情的な反感を相手に持たせるものである。私の場合が丁度それだった。

私は何も今更、妻から煙草の害について親切的な講議を聞かなくても分り過ぎる程分っていた。唯どうしてもあの紫煙の誘惑に負けてしまふのだ。それにしても残念で癪なのは妻が一服によるあの無我の境地を理解してくれず、煙草系数なる不愉快を数字迄持ち出し私を攻撃したことだった。私はイギリスの俚諺だと言う（妻は夫にとって最善若しくは最悪の家財なり）——を思い出して一人苦笑した。

私は却って少し意地になり、妻の言い分を馬耳東風と聞き流し、減らしもせず、増しもせずいつもの量を悠々と吸い続けた。

私は若し、あの事件が起きなかつたら妻の（嫌がらせ）に屈することなく、強引に無視し、喫煙を続けたに違いない。育雛の大失敗が私を禁煙と言う殊勝な気持に追い込んだのであった。

入雛後五日目であった。二千羽のアメリカ系採卵用雛は順調に生育していた。

四月だと言うのに風は六、七月頃のように冷めたかった。私は南風を避けるために育雛舎の南側のビニールの窓の外側に広い白布を張った。私は低下する温度を上昇させるのに懸命になっていた。その為に温源である石油コンロの芯を前より余計出し、炎をより大きくした。私は夕食直後も四台の育雛器を見て廻った。それから十一時に最後の見廻りをした。温度は予定通り上つていて雛達は密集せずに散らばり、丁度餅を千切って叩き付けたような状態で眠っていた。

私はほっと安堵しながら眠りに就いた。翌朝私の眠りは妻の甲

高い叫び声で破られた。

「あなたっ！ 大変よ！ ヒヨコが！ あなた昨夜石油足さなかつたでしょ！」

私ははっとなった。慌てて飛び起きると寝間着のまま育離合に駆け込んだ。四つの石油コンロのどれにも炎はなかつた。いつも就寝前に必ず石油を補給することにしていたのに、昨夜はそれを忘れたのだった。しかも肝心の寒い夜に選りにも選って忘れるとは。私は雛達の無邪気で何の屈託もない寝姿にすっかり安心してしまい、石油を補充することを忘れたのであった。

雛達は温度の低下と共に密集し、その為、庄死したり窒息死した。生き残ったのは四割近くしか居なかつた。しかし、それで治（おさま）った訳ではなかつた。その後食滞を起したり、ド痢をしたりで結局残ったのは三割近くになってしまった。今迄成績の悪い時でも九五パーセントを下らぬ育雛率でいつも妻に自慢していたのだが今度はまさにぺしやんこだった。今私は二言の抗弁もなくすっかり苦り切っていた。今度の育雛は雛代だけでも二千コントスに上っていた。

それを半金丈の入金で残額は三カ月後に払い込む約束で購入した雛であった。

私にとって辛かつたのは妻が一口も文句を言わぬことだった。あの口喧しくて計算高い彼女が何も言わぬのである。更に辛いのは以前に増して黙々と働くことであつた。私は妻から非難され、罵られ、厳しく叱責されたならば気持はもつと軽くなつていたに

違くない。そしてなおも辛いことは煙草を渡す時あの例の二つの言葉——（肺ガン促進剤）（一四九二年以来の悪習）を言わぬことであった。私は妙に惨めでやるせない気持になった。それは妻の無抵抗の抵抗であったかも知れない。

そして私は遂に十四の春から始めた煙草との付き合いに終止符を打つ決意をしたのであった。

一日が長く感じられて仕方なかった。仕事をするにも何か物足らず張り合いがなかった。頭の様子がいつもと違いちよつと眩暈を感ずることがあった。仕事は上の空で茫然として煙草を挟んで黄色く色の変った右手の人差し指と中指の接する部分を眺めたり臭いを嗅いでみたりして落ち着かなかつた。そして頭に浮んでくるのは食後の一服や寝る前の満ち足りた一服をしている自己の姿であった。特に空服になると一層何か物足りなくなつて時々右手で喉元を摩たりした。

決意を打ち明けた時の妻の態度が予期に反し全くあつけなかつたのも何となく物足りなかつた。以前あれ程執拗なまでに禁煙を主張した影すらも見せず、唯一言ぽつんと言つたのである。

——無理しなくつたつていいのよ。——

それは鶏舎の前の叢の中にあつた。私は無意識の内に拾い上げていた。少し前、確か禁煙宣言の二、三日前に棄てた煙草の吸い殻であつた。それは半分程吸つて投げ棄てたものだった。私のその動作は鉄が磁石に吸い寄せられる状態によく似ていた。抗し難い或る種の力が私を支配し始めた。私はいつもの習慣通りズボン

の四つのポケットをそれぞれ両手で叩きながら、無意識の内にマッチの有無を確認していた。マッチはなかった。次の瞬間、私ははっとなった。私の胸の内で良心が禁煙の扉を叩き始めていた。私はその辺りを野良犬のようにうろろと歩き廻った。でも煙草は未だ右手の人差し指と中指の間にあった。私は落ち着かなかつた。私はいらいらしていた。私は煙草を夕日にかざしてみたり、臭いを嗅いでみたり、女の子の御手玉の様に空中に投げ上げては受け止めたりした。私は未だうろろと歩き廻っていた。そしてマッチを育雛舎に持ちに行こうかそれとも台所にしようか等と考えて家と育雛舎の間を歩きつ、戻りつした。夕日は没しようとしていた。

西空には鮮明で落ち着いた夕焼雲が薄く広がっていた。ユーカリ林が鳴り始めた。冷めたい南風が又吹き始めていた。そしてこの冷え切った風は遂に私の自制心を呼び起した。私は齒を喰いしぼりながら両手で煙草をもみくちやにした。それから風の中へ少しつつ飛ばした。

私は妻がその行為をずっと見ていたことにも気付かぬ程、この一片の吸い殻に悩まされた。でも、兎に角打ちかったのであった。次の日のアルモツソ後だった。私は夢にも思わなかった妻の行為に唯々、ぽかーんとしていた。食後、妻は十箱一包の煙草を机の上に無造作に投げだすと包を破り、中の一箱を手を取った。そしてその箱から一本取り出すとマッチで火を付けた。それから黙って私の口の前に差し出した。私は唯、じっと妻を見詰め続け

た。全く信じられぬと言った表情で凝視し続ける私に妻は本当にあどけない笑を顔全体に浮べ静かに言った。

「私の負けだわ。さあ、どうぞ。」

私にはまだ彼女の真意が分らなかった。妻はそれを察したのか続けて言った。

「毒入りじゃないわ。吸ったらどお？私昨日の夕方あなたのしたのと全部みていたの。何だかいじらしくなっちゃって……………」

私は煙草を口にくわえた。それから一気に吸った。美味しかった。私はこの時煙草の最高の味を感じた。妻は私をその大きな瞳で見据えながらちよつと力むように言った。

「夫婦って√3みたいで、いくら計算しても割切れないわね。」

私は黙ってそれを聞きながら静かに決意していた。

(この十箱が終ったら、今度こそ本当に禁煙しよう。)

(終)

創作

梔子(くちなし)の花 (35枚)

福村 琳

一章

寒い日であった。長椅子にじって坐っていると、身体の芯までが冷え込んで来るのだ。日本の雪の降る頃は、もっともっと寒かったものだ。菊は思った。小降りに降りつづいていた六月の雨は、いつの間にか激しい雨あしになりその故か部屋の中が妙に白々として見える。

なんだか窓の外に雪が積っているような錯覚がしてならないのだ。菊は東北のM県生れであった。顔を上げて窓を見上げていると、少女時代まで過ぎたI市の小さな漁港の雪景色がありありと浮かんで来る。

空から際限もなく降ってくる、雪のひとひらひとひらを、天を仰いで大きく口を開けて、喜々として戯れた子供の頃がひどくなくなしく思えてならないのである。そんな雪の日、灰色の湾内にはぎつしりと漁船が碇泊して、元気の良い漁師達も何処かに姿を消し、I市の町はただ白い雪が降るばかりであった。往来には三々五々ゴム長靴をはいて雪橇を引いた子供達のかしましい声々が響いた。夕方になると白い屋根々々の下は何処にも一斉に電燈が灯

り、「御飯だよう」と家の中から、子供達を呼ぶ母親の声があった。かく巻を着て活動にでも行くらしい娘達が往来を通る頃は、その辺は何処も彼処もあたたかい味噌汁の匂いが満ちて、子供達は思ひ出したようにフウフウ掌を口であつたためながら家に戻って行くのであつた。

菊はI市の市立女学校を卒えて間もなく一家と共にブラジルに移住してきたのではあるけれども、四十年も経つた今になつてもあの頃の東北の故郷が昨日のことのようになつかしく思い出されてならない。気候の変化の乏しいブラジルの一年々々は正月も盆も、しめくくりのないままに流れて、茫漠と長い年月のみが過去つて行つたように思う。日曜日なので息子のマリオは嫁のカタリーナと赤ん坊をつれて、車を飛ばして嫁の実家に行つているし、末娘のマリア・クリスチーナは雨の中を友達と映画に出掛けている。久々に家の中に赤ん坊の泣声のしないのが、頼りなくさびしく思えたが、菊は糸の短い靴下を履き長年も着古した茶色の毛の上衣を着て先程からサーラの長椅子に坐つたまま白い糸でレース編みを續けていた。四、五年前から菊の頭髪はめつきり白髪がふえて、うつむいて編棒を動かしている彼女の両手も、今はすっかり土色に干からびている。老眼鏡をかけている顔を時々ケイレンでも起すように左右に動かしているのは頭が悪くなって以来のことであつた。昨夜は嫁いでいる次女のアンナが新しい薬を持ってきたのを服用した故か、菊の頭の中は今日は混乱が無い。薬が跡絶えると彼女の妄想がひどくなるのを知っている娘達は菊の様

子を絶えず警戒しなければならなかった。「ねえママエ、この薬を飲むのよ」と末娘のマリア・クリスチーナに言われることがあっても発作のひどい日は、家中にコツピン虫が羽ばたいて飛んでいくような幻覚を感じて、菊は大急ぎで窓を片っぱしから閉めて歩き廻るのである。

「誰か知らない人が色々な病気をこの家に持って来て困る」と愚痴をこぼし、アルコールでせつせと自分の手を拭いたりしている。病院勤めのアンナが知り合いの医者から紹介して貰った大学の精神科の病院へ、週一度母親を連れて行くのであるが菊の病状は悪化することは当分無いにしても、今はヒビの入った陶器のようなものであった。アンナが医者への勧めに従って菊にレースの編物道具を買い整えて与えたのは最近のことである。このような病状の菊には編物が一番いらしく、菊は殆ど一日中レース編みをしながらサーラの長椅子に坐っているものであった。

最初は極く簡単な花瓶敷のようなものを編み出していたが、それは作品としても幼稚なものであった。四、五枚出来の悪いものを作ってから、菊は次第にレース編に熱心になり今では半年ぐらいかかって見事な寝台の被いカバーを作るようになっていた。それは誰が見ても驚くような美しいもので家主のドーナ・ソーニアなどは大仰な身振りで讃歎しながらそれが彼女の最も自慢の香港製のテーブル掛けにも決して劣らないものであるとくり返して言うのであった。菊はレース編みをしながら時々少女時代を懐しいと

思った。菊の学んだI市の市立学校の頃の思い出が脳裡にしきりと浮んでくるのである。女学校の裁縫室の畳の上に坐っていた頃はなんだか昨日のことのように思えたりした。あの頃よく歌っていた「庭の千草」とか「檀生の宿」の歌が、自然と菊の重い口の中から流れてくる。日本の歌を知らない末娘のマリア・クリスチーナは「ママエそれはなんの歌なの」と菊に聞いているが「この歌はなあ、エウの女学校時代の歌だでば」と尚もくり返して菊は歌うのであった。あの頃は、菊は容姿の美しい娘であった。真黒い髪を後になぜつけて小さく丸く結び、着物は銘仙に臙脂色の袴をはいていた。従兄の作次が菊の家の下宿していてI市の商業学校に通っていたのもその頃であった。柔道着を持って毎朝登校して行く作次に恋心を持った頃は、菊の生涯で最も夢のように美しい時期であったと、今になって彼女はあの頃のことをひどく思い出してならなかった。人の一生を通じては苦悩の日々のそれよりも、消え去って行った青春の火花の美しさのみが永劫の暗闇の中に、妖しく幻のように浮かんでいる。

あの頃、女学校の級友達には菊と作次は許嫁同志のように思われていて、菊はよく冷かされては顔を赤らめていたものであったが、二人の間に実際に何事も起きていなかったことは、そのまま今になって美しい思い出になっている。菊が家族達と一緒に、ブラジルに来てパラナ州の奥地に住むようになってからも作次からは時々便りがあったがその頃の菊には辛い悲しい思い出ばかりが

残っている。農事などに慣れていない菊が家族達とカフエー耕地に働いた三年は骨身にしみる悲しい才月であった。朝は暗い未明から起され、夕方すっかり陽が沈むまで働きつづけた日々の苦しみは言語に絶するものがあつた。自分の身体が自分のものでないような無我の労働に溶け込むことは、それまで送つて来た娘時代の延長としては苛酷なものであつた。菊の父も母もそして二才違ひの弟も、齒を食いしばつてその労苦に堪えたものであつた。今に見ろ、きつと成功して一旗上げて日本に帰つて見せるぞと、菊の父は母に言い、そして菊や弟には辛棒してくれと頭を下げて頼むのであつた。このまま逃出してみたところで一体何処に行けると言うものであろう。あてどもない忍苦の日々の労働が続いて東北生れの雪肌がジリジリと昭りつける太陽の下にさらされると菊のような娘でも少しづつほ逞しくなりカボクロの娘のように土色の皮膚になつて行つた。その頃、世話する人があつて菊は近くの農園で働いていたN県出身の青年相沢寅蔵と結婚するようになり、あの頃の初恋の思い出もそれなりに消えた。寅蔵と世帯を持つてから菊は家族達とも別れてリオ州のR町の近くにやつて来た。

それから約四十年近い年月が過ぎ去つてゐる。寅蔵と世帯を持つて三年目に長女のローザが生れた。働き者の寅蔵はその頃六アルケールの耕地を持つようになり、トマトを主に栽培するようになっていた。

次女のアンナが生れ、マリオが生れる頃は寅蔵の土地は三倍ぐらゐにふえて、粗末な泥土の家から練瓦作りの家に住めるように

なっていた。カボクロも十人近く使うようになり菊の労働は以前よりは激しいものではなかったにしても朝未明に起きて大人数の食卓を整え、昼食の同意から夕食の世話まで一日中は休みもない忙しい明け暮れであった。子供達がそれぞれに大きくなり、ローザも小学校を卒えると菊の家事を手伝ってくれるようになり始めた。マリア・クリスチーナがヨチヨチと家の前を仔豚を追って歩いていった。結婚してこの方、菊は因習的な日本人の生活以外は何も知らなかった。家庭生活はまず良人の命令に服従し、子供達を育てることに精一杯であった。良人の寅蔵は過に一度位馬車で町に出掛けては買物をしてくるので菊は結婚以来自分で買物など一度もしたことがなかった。菊や子供達の衣服も、みんな寅蔵が自分で適当に見立てて買い与えるのを、それぞれにやりくりするばかりだったし、女の子の一人々々の個性に合うような洋服を作つてやるなどとは思いがけないことでもあった。一度など寅蔵が紫色の木綿地を沢山安く買って来たことがあった。

菊が子供達に皆同じ手縫いの服を作ると何処も彼処も紫色が氾濫した。パラナの奥地で別れたなりの菊の両親が相次いで死亡した報せがあった時、菊はしばらく放心したような日々を送っていたか両親にも会いたいと、ひそかに念っていたのであったが遠く離れている身には、すべてに無理なことが多くて山のような家事を見捨てて出掛けられるものではなかった。たった一人の菊の弟が両親の死後に菊を訪ねて来たが、この青年は長い奥地の生活で

すつかりやくざ者になっていて、真面目に菊達の家に着くものではなかった。菊がたった一人の肉親であることに傾いて、寅蔵の持っている現金の一部をこっそりこの弟にやったことから寅蔵の怒りが爆発した。

その上、この弟が姿を消しても寅蔵は事毎に菊に辛く当ることが多くなり、菊はそれから一層に無口な女になって行った。長女のローザが二十才になった時いつの間にかR市で知り合ったイタリア人の若者とねんごろになり、母親の眼をかすめては媾曳をしていたことも留守を預る菊の怠慢と言うことになり寅蔵は憤りに駆られて菊とローザを激しく打擲した。

ローザは寅蔵を横暴だと言い、独断的で少しも子供に対する理解が無いと父を罵って泣いた。暫くしてイタリア人の男と行方をくらまして二度とは家に戻って来なかった。あんな奴がなんだ。あんな毛唐と逃げた奴はもうおれの娘ではないと寅蔵は真赤になって怒り、尚一層妻に辛く当り散らした。ローザが家を出てから五年近い才月が経っていて、今でも幼ない頃のローザを菊は時々思い出すことがあるのだ。あれからあの子はほんとうに幸せに送っているものであろうかと娘の身の上を想いながら、菊の眼に涙が溢れてくるのであった。生きていればローザはもう二十半ばであった。子供も二人ぐらいいはいるだろうか、菊はローザやローザの子供達に会いたいものだと思ふのである。

雨あしは小降りになって来たようだった。菊はレース編みの手

を止めて食器棚の上の置時計を見やった。もう五時半であった。ぼつぼつ家の中が暗くなり始めている。菊は長椅子から下りると部屋靴をひっかけて、ゆつくりと歩いて台所に入って行った。

「パチン」と電燈のスイッチを入れると、いつもは嫁のカタリーナや末娘のマリア・クリスチーナが、うろろうしている台所は今日は何んともなく広く感じられて物足りないような気持にさえなるのであった。昨日アンナが持つて来てくれた白菜が四株ばかり、今朝のうちに一枚々々ていねいに葉を洗ってからプラスチックのバケツに漬けて置いたのが気にかかって、菊は台所の隅のバケツを覗いてみた。大きな四角のコンクリートの重し石は息子のマリオに作つて貰つたものであったが二十キロぐらいの重さがあつて漬物石には上等なものであった。もうすっかり漬物の水が上つて重石の下の方をひたひたに濡している。菊は満足気な表情を浮かべて今度はガス台の前に立つて今朝の残りのカフェをあたためるのであった。

カフェが良いかげんにあたたまると戸棚からフチの欠けた古いシーカラを取出してカフェを注ぎ、又、戸棚の上から大きなビスケットの罐を「よいしょっ」と声をかけて下した。彼女は今はすっかり歯を無くして総入歯になっているのだ、入歯の具合が又悪くなつて近頃は殆ど入歯無しに食事をするので歯ぐきが丈夫になり、ビスケットなどは平気で喰べられるのである。菊がビスケットを喰べていると洗濯場の傍に飼っているパパガイオがばたばたと羽ばたきをしている。菊は「ロオロ、ロオロ」と呼びながらパパガ

イオにもビスケットを持って行ってやった。それから菊は喰べかけのビスケットを持ってサーラの長椅子に戻って来た。メーザの上にビスケットを置いたまま、ゴロリと身を横にしてじつと眼を閉じている。頭の具合が良くて又昔のことがしきりと思ひ出されてくるのである。

次女のアンナがどうしても高等教育を受けたいと言ひ始めた時、「女のくせになんだつ。女はな嫁に行けばそれでいいんだぞ」と真向うから反対する寅蔵の態度になんとしても腹が立って来たのは菊であった。私を見るがいい、こんなに長い間、慣れもしなかつた耕地生活に追われて、朝から晩まで炊事場と洗濯場を往き来している間に、十年が二十年になり、二十年が三十年になってしまったのではないか、自分の娘だけには母親のような惨めな生活は送らせたくはないと、そう決心したものだつた。その頃からブラジルにも農場に働くコロノ達に八時間別労働と最低労働賃銀の政令が廻って来て、寅蔵の耕地も以前のような収益は見られなくなつて来ていた。ラランジャ島の向うに並んだコロノの小屋からは一人一人と使用人がリオの街に出て行くようになっていた。耕地にいれば家賃も払う必要のない家に住み、寅蔵がコロノ達に開放している土地を利用して彼等は労働八時間以外にも彼等だけの農作物の収益を上げることが出来る筈であつたがどのコロノも申し合せたように文化水準の高いリオの街にあこがれて逃げ去つて行くとはどうしたものであらうと、寅蔵の不満はやるせなかつ

た。コロノ達の多くはノルチスタであった。水飢饉と食料難に追われて南下してきた彼等は一時的にどのような農場にも入り込んで、その日その日の労働にありついてはいたもののやがて少しばかり金が出来ると都会へと走り去ってしまったのである。

農場経営者が昔のようなコロノ制度の利益に乏しくなると寅蔵は農場をすっかり果樹園計画にして余った土地にはユーカリプトの苗木を植え始めていた。少ない労働で可成りの収穫を狙う計算であるが、その頃の寅蔵は実際に子供達への教育費など仲々思うように捻出も出来ない生活であったと、菊は今頃になって思い出してみるのだが、この時丈は強情を通してアンナを庇い、娘をリオの街に出してやったものであった。アンナはイタリア人と一緒になって行方をくらましたローザのような容姿の美しさはなかったが、小さい時から学業成績の秀れた子供であった。昔から知り合いのシリア人の家庭に預けられるとアンナはその家の子供達に家庭教師の役目を果しながら高等教育を終え、やがて国立看護婦学校に合格して寄宿舎生活に入って行った。菊の頭が悪くなり始めたのはこの頃ではなかったろうか、子供達がそれぞれ大きくなって学校に通い始めるようになり、たった一人鶏舎や炊事場の仕事をしていると、菊は何かしら不安な心が募ってくるのであった。良人も子供達もみんな菊を置いてきぼりにして、遠い遠い所に行ってしまうような恐怖が毎日のように彼女を襲ったり、そうかと思うと向うのユーカリプトの林一帯から大群を成したコツピン虫が白い羽をチラチラ光らせて飛んで来るのが見えて、菊は大

声を上げて家の中に駆け込んでしまうのであった。コツピン虫は菊の最も嫌いな虫であった。娘の頃ブラジルに来て間もなく、彼女が大切に日本から持って来た押絵の羽子板を喰い荒し、木造の家のそちこちを荒し廻っていた虫だった。「もうブラジルに行ってしまうんだね。菊ちゃんに会えなくなってしまうと思うときみしいよ」と従兄の作次が餞別にくれた押絵の羽子板は竹久夢二の大きな瞳の少女が泣いているように見えた。作次に手を握られて悲しい気持であるまま別れてしまったものの、父母や弟がそこにいなかったら汽車から飛び降りてしまいたい気持だった。

大事にしていた羽子板が数年してコツピン虫に喰い荒されてロボロになっていたのを発見した時の、驚きと悲嘆を、菊は今もありありと思い出すのだ。

アンナが学校を了えて州立病院に勤務するようになった頃、菊の妄想はひどくなっていた。夕方寅蔵が家に戻ってくると、家の扉は内側から鍵がかかっている、大声を上げて菊の名を呼ぶとフアツカを持った菊が家の中から飛び出して、寅蔵に斬掛って来た。寅蔵は真青になり、菊のフアツカを奪い取り、泣きわめく菊を一室に監禁してしまっただが、妹の報せを聞いて大急ぎでやって来たアンナは寅蔵に断って、菊を早速リオに連れて来て、精神病医の診察を受けさせたのである。菊の容態は発作的な精神異常であった。もう菊は昔の菊ではなくなったと寅蔵は思った。「ほんとうの菊は死んでしまった」と寅蔵は子供達に言った。以前菊はよく小豆を煮て、手まめに餡を練っては、日曜毎にまんじゅうを作って

いたものだったが、その頃から菊は斑気の多い気質になってしまった。気が向かないとなんにもしたまらない女になってしまっていた。寅蔵が柿の木に登っていて梯子から落ちたのはそれから間もなくであった。菊はその時鶏舎小屋の前の井戸端で洗濯をしている最中であつたが、けたたましい寅蔵の悲鳴を聞いてマリオと一緒に駆けつけると、寅蔵は梯子と一緒に地べたにぶざまに倒れて気を失っていたのである。「寅蔵が死んだ。パイが死んだ」と菊は声をはり上げて逆上し、オイオイと人声で泣きくずれた。寅蔵は右腕を骨折しただけですんだが、菊の病気はその時に又ひどく悪化して、寅蔵が病院から帰ってくると、「幽霊が来た。幽霊が来た。」と言って逃げまどつた。

大学の工科へ入学したマリオはアンナと一緒にリオに住むようになり、アンナは母の為に毎週、精神病医の診察を受ける手続きを取って菊をリオのアパートに引取ることにした。末娘のマリア・クリスチーナだけが寅蔵と一緒に農場に残っていたがその後マリオが大学を了えて就職口を得てエンジニアエイロとしての高給に恵まれてくると、マリオも又マリア・クリスチーナに学費を出して上の学校に通わせるようになったので、農場は今では寅蔵一人だけになってしまった。

寅蔵は一人になって自分で食事を作り、洗濯をし、鶏舎に入つて鶏の面倒を見た。ガランとなつた家の中に、時々小屋を離れた鶏が入つて来てココロとないている時もある。何年か前、農場に

みんながいた頃に挿木をして移植をした梔子の木が、ようやく白い花を咲かせるようになっていた。

二 章

コパカバナの華麗な大通りは夕方四時過ぎになると人通りが一層に激しくなる。日中の暑さから開放された人々がこの時刻になると、林立したアパートからはき出されて、着飾った女達が買物などに出るのもこの時刻である。海岸通りは人がすっかりまばらになって、白い砂浜の向うに犬をつれた男が歩いているくらいなものであった。見栄坊で気取り屋の多いコパカバナの街の住人達は全部が他処からの移住者であるにも拘らず、それが貧乏人であるにしろ金持であるにしろ自分達がこの街に住んでいるという或種の矜持を持っている。高層ビルの並んだコパカバナは表面如何にも近代的であり文化的な陰翳を見せていたが、住人達は成上り者が多かつたり金も無いのに如何にも金持らしく見せかけている人々もいた。昨日まで旧市街の汚ないペンソンに住んでいた青年も、小金を持った情婦などが出来ると忽ちコパカバナの小綺麗なアパートに移って、そこに、長年住み慣れたような顔をして颯爽とショウツ一枚の裸で海岸の方に歩いて行くのであった。又無理をして居住費の高いこの街に住み慣れずに落伍して行く人々も多かった。豪華なアパートが沢山あると共に、古ぼけた貧乏人達の住むアパートも数多かつた。年中水道の水が出なかつたり、エレ

ベーターの故障しているアパートもあった。小さな部屋に三人も五人も住んでいるところや、夫婦が三組も、一部屋に住んでいるなどという噂さのあるアパートもあった。

その部屋には寝台が一つしかないそうであった。どの人も着飾って大通りを歩いてきたからここでは貧乏人と金持の見分けがつかないのである。流行の先端に行くモードが街に溢れ、驚く程に肌の白い人々が歩いてきた。休暇を利用してコパカバナに来て、海水浴をしている人達とは別な人達をのかも知れなかったが、陽に灼けた人達は夕方のコパカバナの大通りでは如何にも野暮ったく見え、田舎者に見えるのである。ローザは食料品を買いに大通りを歩いてきた。もうすぐナタールであった。どの店も美しく華やかに飾りたてられていた。ケバケバしい化粧をしたミニ・サイアの女達が立止っている衣裳店の前などを通るのはローザには苦手であった。着古したローザの外出着を蔑むような女達の眼がそそぐからである。行き慣れたメルカードに入って、ローザはそそくさと買物をするのであるけれども、この頃のようにウイルソンの収入が乏しいと何を買うにしても一々財布と相談をしなければならなかった。ナタールにはどうしても新しい服を作りたいと彼女は思っていたので大衆的な布地を売っている大きな店に入って、手頃な布地を見ることにした。フストンの藤色の布地を二メートル半買い、裏地も一緒に買足してみると彼女の財布はもう底をついた。そのまま真直にアパートに戻って来ると、同居しているウイルソンの弟のジョージはもう出勤時間だというのにショーツ一

枚の姿で飼猫を相手にじゃれ合っている。

ジョージはこのアパートの裏側の通りのボアツテで働いているのだったが、狭いアパートなのでサーラを洋服ダンスで仕切って窓際の方をジョージに提供してからもう半年にもなるのであった。下宿代も払ったり払わなかったりで、どうにも始末が悪かった。給料も安いのに衣服はいつも新品を揃えていて、何処へ出掛けるにも爪のマニキアと髪の毛の手入れに時間をかける男であった。もう三十才近くにもなるが結婚する様子もなく、夜間労働者などで、朝帰って来て夕方までアパートの中でゴロゴロしているのである。ローザはウイルソンと同棲する前にイタリア人の男と八年も一緒に暮した。子供は出来なかったけれどもリオの街に住むようになって狭苦しい部屋住いばかり続けて来たものであった。なんとかして金を儲けてやると男は言いながら八年も経ってうだつが上らなかつたのだった。自動車修理工ではどうにもならないと男は言い、サンパウロに行つていい仕事を見つけて来ると、ローザを残して去つたままその男はもう帰っては来なかつた。新聞広告を頼りに仕事を探して自活の道をたてたのがローザの二十九才の時であった。コパカバナのボアツテの皿洗い女になった。その時に知り合つたのがウイスキーの闇商人をしていたポルトガル人のウイルソンであった。イタリア人の男より容貌は悪かったが、如何にも人の良さそうなウイルソンであった。背が低くて、チマチマと小肥りであった。誘われて関係を持つようになり、彼と世帯を持って六年になっている。イタリア人の男はローザを最初は

よく愛してくれたものだった。嫉妬深く、ローザを外に出すことが嫌いな男であった。一日中部屋の中でぼんやりしていたり寝ころんでいたりして退屈ばかりしていた。昼寝をしていると、いきなり男が戻って来て、そのまま寝台で抱かれて、ローザは幾度も顔を赤らめたものである。しかしイタリア人の男には他にも女が幾人もいたようであった。サンパウロに行ったのも金持の女と出来ていたからだ、男の友人に、後になって教えて貰った。毛深くて身体のほっそりしていたイタリア人の男とは反対にウイルソンの肌はすべすべとしてまるで女の肌のようにであった。性慾もあつさりしていて月に算える程の淡白さであった。そんなものであろうか、男にも色々あるものだと思っていた。万事が鷹揚なウイルソンであったからローザは割合のびのびした生活を送って来たが経済的にはイタリア人の男の時と似たようなものであった。子供にはどうしても恵まれなかったので猫を飼っていた。雌猫であった。雌猫はこの頃発情期に入って妙な姿態で床の上で動いていた。恥しい思いがして、シートと声を荒げて追出すと、猫はそのままジョージの部屋に行ってしまったようである。

ジョージの猫を呼ぶ声がした。浴室に入ってローザは鏡に向つてみた。たった今見た恥しい猫の姿態が、ローザの忘れていたものを甦らせていた。大急ぎで顔を洗っていると、閉め忘れた浴室の扉からジョージが入って来た。汗くさい男の体臭であった。燃えるような眼で、ジョージはローザを見つめている。ローザはあわてて浴室を出て来たが、ジョージに心の乱れを見すかされたよ

うな気がしてならなかった。昨日もジョージに頼まれていて夕方近くになって、昼寝をしているジョージを起しに入って行くと、暑い日で睡っているジョージはショーツ一枚の姿で仰向けになっていたが、前ボタンの前がひどく大きく隆起しているのであった。ウイルソンの下着などと一緒にジョージのものを洗濯する時など、ローザはシミのひろがっているジョージの汚れた下着を見て心ざとときめき、息苦しくさえなってくるのであった。

ジョージを下宿に置く以前は、ローザは内職に昼食だけのペンソンをしていた。この近所の商店などに働いている若者達が十二、三人やって来ていたが物価がこの頃のように高くなってくると手間代も浮かばないようになって一年ばかりで止めてしまったが、ローザが何をしようと愚痴一つ言わないウイルソンが彼女には物足りない男に思えて仕方がないのである。朝はゆっくりと九時過ぎに起きて、カフェだけを飲んで出掛けて行き、ウイルソンは毎夜十時近くに帰って来るのだ。月々ローザに渡してくれる金にしても食料を買うだけのギリギリの金額である。アパート代はウイルソンが自分で支払いに行くが、六年も一緒にいて新しい服一つ買って貰ったこともないのであった。これでは内縁の妻というよりも女中の生活ではないかと、今になってしみじみ思えてくるのであるが三十半ばになって今更この男と別れて何処に行くというアテもない。考えてみて、それ程愛着のあるウイルソンでもなく、ずるずるとお互いに利用し合って生きているようなものであった。二十才の時に家を飛び出して好きな男と一緒にになったものの相手

に棄てられた時は何一つ無かったから、拾ってくれたウイルソンのような男にでもそのまま六年も一緒に住むようになる、自分でも、けじめのつかない気持が慣性のように稠っていて、ローザは自分でもその気持が齒がゆかった。ブラジル人の女はもつと物質的で打算的である筈だった。日本人の娘に生れたローザは自分の知らない間に、母親の日本的な気質をそのまま受嗣いで、血統の違う男に自分を捧げつくしているかのようであった。相手の男も又ローザのそのような献身の美德を、知っていて素知らぬ振りをしてしているようを校滑さがあった。ローザが思っている程ウイルソンは人の良い男でもなく、人の良いのは寧ろローザ自身であるのかも知れなかった。六年も一緒に暮して来て、ローザが個人として持っているのは、ペンソン時代買ったミシンだけであり、彼女は頼まれてはミシンを踏んで子供服などを縫い、安い貸銀を得ていたが、時にはウイルソンに金を都合してやることすらあるのだった。ローザ達の住んでいるアパートの前は金持だけが住んでいる立派なアパートであった。そこには最近引越して来た若い日本人の女がいた。如何にも美しい女で、着飾った女は大抵いつも、ひどくハンサムな背の高いアメリカ人らしい男と腕を組んで歩いていた。時たま買物などに出たローザと若い女が顔を見合わせるようなことがあっても若い女は意識的に顔をそむけているようであった。ローザはいつも苦々しい思いをした。

そして十五年前の自分を思い出してみるのである。何か知らないが自分だけ不運な籤を引いているような思いがしてならないの

であった。若さと美貌に溢れた日本人の女は如何にも幸福そうに見えた。ナタールの日はウイルソンも一日家にいてくれた。御馳走らしいものは何も無かったが、ローザは久振りに化粧をして手作りの新しい藤色の服を着た。古ぼけた時代遅れの家具の前に立つとローザは昔の娘の頃のように華やいで見えるのであった。その夜は珍しくもウイルソンが友人を一人招待していた。やって来たのはローザには始めての人であった。ロベルトと云う男はやせていて身体つきがその昔のイタリア人の男にそっくりのタイプをしていた。赤みがかかった頬には青い髭剃跡が見え、握手をした手は大きくて力があつた。妻君が妊娠八カ月目で外出を嫌い、一緒に来られなかったと言いつつ訳をしていたがローザはロベルトを一眼見た時から身体中が熱くなつて胸が強くときめくのを感じていた。その夜はウイルソンも大はしゃぎをして葡萄酒を飲み、ローザもすすめられてみんなと一緒に飲んだ。ジョージは宵の口から仕事に出掛けていた。日頃ウイスキーの闇商人をしていてもアルコール類の好きでないウイルソンが酔いつぶれて長椅子にひっくり返ってしまうとローザはロベルトに手伝って貰つて隣室にウイルソンを運んで行った。大いびきをかいて寝穢く睡っているウイルソンを寝室に置いてサーラの長椅子に戻ると、ロベルトはいきなりローザを両腕に強く抱いて接吻をした。そのまま崩れるように並んで坐ると、ローザはされるがままにロベルトに身を任かしてしまつていた。男の喘ぎの息の向うに雌猫のなく声をうつつに聴いた。ロベルトの身体を抱いていると、しびれるような陶酔がわ

き上って、ローザは昔のイタリア人の男を又思い出していた。

イタリア人と暮していた頃はローザはよく農場の母や妹達に会いたいと思っていた。男に棄てられた当時も無性に母が恋しくてならなかった。独りになってみると尚一層に農場に帰りたい気持ちに駆られて仕方がなかったが頑固で我侷な寅蔵の性格を考えると今更農場には行けず、母を思い出しては泣いた。好き勝手に男と飛出したことが悔まれて来た。男を怨んで殺してやりたい気持ちだった。裏切られたことは大きな心の痛手となった。農場にいた頃は母親の菊のように、何かから何まで良人の言うままに服従して自分の意志一つ持てない古い日本の女の姿にローザは何時も軽蔑の眼を向けていた。自分だけは母のような女にはなりたくないと思っていたし、父のような日本人も嫌いであった。母は若い頃に好きな人がいて一緒になれなかったと、ローザに話したこともある。ローザが農場を逃げ出してイタリア人の男と一緒にになったのも彼女にはそれなりの自由な結婚がしたかったからであった。日本生れの寅蔵は何かにつけて毛唐、毛唐奴と言い、日本人の娘は受唐と結婚してほならぬと言うのがローザには不服であった。R町の附近には日本人の家族は数える程しかいなかったし、そういう日本人の陽に灼けて土色をした二世青年よりも、街に住んでいる金髪の桃色の肌をしたブラジルの方が、ローザには魅力的に見えたのである。寅蔵の一方的な思想に若いローザが反撥をして、父や母を裏切り、イタリア人の男と行方を暗まし、その才月の果には、ローザ自身が因果として受取る報復が彼女に訪れて来たの

であった。それは一つに、ローザに男運が無かったと言えよう。又、若い彼女に異性を扱ふ力が無かったのも事実であった。ローザはイタリア人の男にもウイルソンにも尽せることは何んでも尽して来た。しかし、ローザが男に捨身になればなる程相手の男は横着になり、或いは怠惰になって行くようであった。皮膚の色の違うイタリアの男もウイルソンもその皮膚の下には根強いラテン民族の異質の血が流れていた。ロベルトはナタールの夜からそれつきりローザの家には姿を見せなかった。今更ロベルトを求める気持にもなれなかったが、あの夜の逞しいロベルトの肉体や荒しい男の息づかいを何度も思い出すことがあった。狭いアパートの生活の中では不貞な思惑のみが延びひろがって行くのである。小肥りの女の肌のようなウイルソンと一緒に寝ていても、ローザは暗闇の中でザラザラと毛深い身体をしたロベルトの愛撫を思い浮かべていた。ロベルトの顔が闇の中でその昔のイタリア人の男の顔と重なって一つになって行くのであった。あの頃は殺してやりたい程、男を憎悪したものであったが、才月が経った今になってみると過去の凡てはうすいヴェールに包まれて懐しい気持のみが残っている。ローザは自分を悲しく思った。男に尽す程に報いの伴わない自分の現実であった。それを考えると、つき刺されるような孤独がひしひしと感じられて来るのである。

ジョージが急に引越しをすることになって、ローザに新しい引越先を紙片に書いて渡すと、トランク一つを持って引払って行く

た。ウイルソンは別に驚いた様子も無かったが洗濯物などの置き
忘れたものを一包みにして数日してからローザはジョージのア
パートを探しに行った。彼がどのような伝手でそのアパートに住
めるようになったものかよく解らなかったが、古ぼけたローザ達
の住んでいるアパートとはひどく相違してジョージの住んでいる
アパートはすべてが近代的に美しい建物であった。青い絨氈の敷
いてあるエレベーターに乗ってローザがやっとジョージの住んで
いる部屋のブザーを鳴らすと、扉を開けたのは見知らない金髪の
若い男であった。身体がシナシナとして香水の匂いがした。女の
ような声を出してジョージの名を呼んでいるのを、その俣にして
ローザはあわててそのアパートを出た。不快な思いがこみ上げて
来るのであった。ジョージが引越をして間もなくウイルソンがバ
イアに商用で出掛けて行った。二週間の予定であった。ローザは
たった一人になって男達の居ないアパートのサーラにぼつねんと
坐っていた。窓の向うには青空があった。雲を浮かべていた。そ
の雲を見ると、ふっとR町の父や母や妹達を思い出した。雌
猫が音もなくローザの足許に寄ってきている。

歌集「白き州道」 瀬崎涛声著

本書は、一九六五年に刊行されたもので、新刊とは言えないが、この程、著者より本会に寄贈されたので、ここに紹介しておく。

本書は、著者の第一歌集で、四六判、活版、東京の新星書房印刷、「まひる野叢書一七」として出版されている。本文は二二六頁、一頁三首組み五百八首が収められ、巻頭に歌誌「まひる野」主宰窪田章一郎氏の序文、巻末に著者の後記が載せてある。

瀬崎氏は、長崎県出身、昭和八年渡伯、終戦前後モジ・ダス・クルーゼス駅カツペーラ街道筋に落ちつき果樹園を経営して今日に至っている。著者は、大正一〇年、二九才にして作歌に志し、若山牧水の門をたたいた。次いで、前田夕暮主宰「詩歌」の同人として活躍した。移住後更に熱心し、椰子樹、まひる野会員として作歌を継続する傍、椰子樹、南米時事歌壇選者として、後進の指導に当たった。

その作風は、穏健な写実に根ざし、生活によく密着しており、しかもさわやかな風韻を蔵している。窪田氏は序文の中で「ブラジルの風土、動物や植物が、愛情をもって歌われている。」と書いている。又著者も後記の中に「自然と人間の心との撓み合いの中に詩を求め」と書いている。農大瀬崎氏の大地自然への愛情が、つつましく、しかも濃く深く詠まれていて、読者に深い感銘を与える。

あふのけに胸に掌をくみ寝て居りて思い描ける我の死の像

いでて来し我が門庭はつゆけくて其処にも此処にも椎なをめぐち
いつとなく我が家裏のユーカリより剥れて落つる雲形の皮

本書希望者は、本会に照会されたい。 (緑)

地方文学動静

モジアナ・グワイラ地方

文学界の歩み

八幡 与 三

モジアナのグワイラ地方が、本格的な発展を遂げたのは邦人の力に依るものであり、コロンビアに珍しい現象ではない。変っているのは棉作の夢を追って、モジアナの各地から押し寄せた借地農に依る一点である。この現象はあらゆる方面で、他の地方といささか異なる文化形態の道をたどりつつ今日に至っている。従って、文学的な動静もこの例外を出るものではない。即ち、邦人の入耕した借地があつて、植民地のなかつた事が、本地方における文学的の活動を十数年おくらせた結果をもたらしている。

長い間コーヒー移民の苦難の道を辿りつつあつた多くのモジアナ邦人に、土地の購入などは夢の夢であり、借地に依る独立農がギリギリの状

態であった。加うるに地味豊かな土地がいくらでもあり、三年か四年作った後には古地を捨てて新しい土地を開拓すれば事が足りたのであるから夢中になって、働きまくったと云っても過言ではない。こうした時代に全くコントラストを文学を思う余裕のあった人など数える程しか居らなかった事は想像に難くない。母国の雑誌及び口語新聞の購読者など他地方に比較して、問題にならないくらい少なかった事が偲ばれる。

従って、これだけ悪条件の中にいて文学を愛し、敢然とこの道一途に生き抜いた先輩こそ特筆に値する事と思う。川柳の故佐竹万丈火氏がまさにその人である。かつて、日伯毎日新聞の社長中林氏が佐竹氏を訪れた折「流石の俺も思わず頭が下った。あれだけ真剣に川柳と取りくんでいる人は始めてだ。どうだ、これを読んでみる！ まさに血を吹かんばかりの生きたコロニアの川柳だ」と、筆談のおり佐竹氏が書いたものを僕に見せて彼程後世に残る大作をものにした柳人は今後コロエアに望むことはむつかしいのだ。ああ、いい人に会えて良かった」と話した事を思い出す。私が氏を知り、初めて訪れたのは今から約十年前で、時既におそく貧困と戦い乍ら中風に倒れ、病床に寝たままの氏とは筆談に依る方法しか残されて居らなかったのも、多くを語りえなかったのはくれぐれも残念である。

当時の吾々は文学の何たるかも知らず、目伯毎日の中林氏が「お前達で何とかしてやれ。可哀そうで見居られないじゃないか」とあれだけ云われたのに何もしてやる事が出来ず、孤独のままに逝かしめたのは一大痛恨事と云わざるを得ない。

俳句の方にはのちに聖市へ移転された故柳田月耕氏やスザノ方

面に移転された国松杉里氏等が居て新聞紙上で活躍して居られた事は皆さんの知っている通りである。

変った存在は川柳の佐竹氏と同耕地に戯曲を書く持永勸治氏が居た事である。小生の依頼で、若い女性向きの歌劇「伯馬戦中のバレットス市民」と「飛行中尉」の二曲をものにし、卒業式の余興として実演までしたのにそれっきりになってしまった。

何と云っても、転々と住居を変えねばならなかった借地農の人達であって見れば、植民地に見られるようなバック・ボンがなかったため、文学をする先輩達の中に充分なつながりはなく、活動は個々の領域を出る事がないままになっていたのが惜しまれる。だが借地農から土地購入の第二段階に入ってから当地方の文学的活動は、おそまき乍ら新しい面を以って動き始めた。

まず俳句の方では国松杉里氏の骨おりで、聖市より石川芳園氏等が来られ紺野幸水、杉本千代、鹿毛正護、同至氏等が中心になって盛大な句会が開かれた。後に佐藤念腹先生が来られるようになり本格的な文学活動が始まった。始めたと言ってもハッキリとした組織がない上に俳句をサロンのものから一步も出ようとしな人達が多数で、勢いマンネリズムの傾向に陥入っていたようである。事の正否はどうであろうとも、当地方に初めてホトトギスやその他の文学専門雑誌が見受けられるようになったのもこの時代からであり、吾々には忘れる事の出来ないものを多く残してくれたのである。

以上の如く全く恵まれない状況におかれていたグワイラ地方の

文学的活動も、当地に根を下した邦人の地盤がかたまると同時に、更に新しい方向に動き始めた。

今より三年半前カンポスで歌作の初歩を習った加藤操兄が、酒井繁一先生を当市に連れて来られたのがその初まりである。誰一人として予想だになし得なかった「グワイラ短歌会」が即座に創立され、先生の堂に入った指導により会員の熱心な勉強が始まったので

ある。以後毎月欠かさぬ例会には作品に対する痛烈な批判がビシビシとなされる上、全会員の月々の作品一首一首に対する先生の批評が声高々と読み上げられるので、誰も彼も安閑としては居られない組織の中に取り籠められてしまったのである。はじめ七、八名の会員であったものが現在は二十二名にふくれ上り、みんなトリツカレタもののような精進振りを示しているので心強い限りである。

文学を従来のサロンのふん囲気から人生と直結した重大なエレメントの一つである、と、会員の一人々々の胸に植えつける事に成功した酒井繁一先生の存在は現在のグワイラ方面の文学動静を語る上に切り離す事は出来ないのである。

文学する人の心構えの一部もオボロゲ乍らつかみ、移民発祥のモジアナをテーマにした血みどろな作品を残す事に吾々は一種の義務感のようなものを持っている。然し始める時期を失し、吾々文学人グループの平均年齢があまりにも年を重ね過ぎているのが痛恨事の一つである。然し

幸な事に、最近聖市の中央文学人との交流の道も開け、色々な励ましと指導をして戴けるので心強く思っている。五、六月頃には老弱の身にムチ打ち乍ら、この道一途に情熱を燃し続けて来た杉本千代氏が、当地方最初の歌集「縁」を刊行される事になり、文学運動に無言の拍車をかけてくれるものと期待されている。外に当市でイロハから習い始めた鹿毛至氏が、詩と短歌の上に、最近創作に迄手を出し始めたのが頼もしい。

文学はつながりを求め得る事の出来る反面、終局は孤独の宿命を負わされるものとも聞くが、現在の我等の文学グループはお互いに助け合つて、一人でも多くの人材を養成せねばならないと悲願にも似た意欲的な方面に向って動きつつある。以上が現在の赤裸々なグワイラ地方文学界の動静である。

アリアンサ文学界の活動

堀 江 一 声

アリアンサの文学活動は佐藤念腹（俳人） 武本由夫（歌人） 故岩波菊治（歌人） 行方正治郎（歌人）の最高峯をいただきながらその大勢は聖市に集中して地元は僅かに余命を保っている次第に過ぎません。散文学は文章念と称して毎月最終土曜日の晩に例会を開き各自の作品を批評する事を発足以来三ヶ年有余を重ねたもので皆目素人文学をここまで続けた事は一重に清水ト齊の推進力の賜と特筆致します。

又彼も聖市に移転となりましたが、ラビンニヤ市より相野夫妻

(コロニア文学会員)その他文学老年二名計囲名の入会を得て新たな活動を期待致します。この様に少しでも伸びる事は奥地では珍しいものであります。

「ドラセーナ吟社」

おしどり柳人が、ぞくぞく

坪井柳念坊

開拓前線酣のコーヒ樹海の真只中に突如として打ち建てられた驚異の街ドラセーナ、パウリスタ線最大の農産物集散地を誇る我が第二の郷上、ともすれば新開地通弊の無味乾燥荒涼を予想される中に都市建設の息吹きに呼応して同志七人相集い過ぐる一九六七年十一月十九日待望久しきドラセーナ川柳吟社の誕生を見た。

柳歴の古きも新しきも一心団体となって人間詩、社会詩の何物かを掴まんとする意欲將に旺盛なる事論を俟ない

新人の養成増加に悲願をかける柳念坊、俳句分野より転出して人間詩川柳に魅力を感じたと云う正南、風刺、批判の痛烈さが生き甲斐だのたまう劍磨、生活の矛盾撞着を巧みに詠う明星、一騎当千の強豪？ 口も八丁手も八丁と云いたい峻嶮峨々たる川柳はやつと山麓に辿りついたと云う処だ、まだまだ足ごしらえをせねばなるまい。

祖国劍花坊直門の栄光花師の流れを汲む新興川柳の旗印に共鳴して句作精進に余念のない吟社同人月下総勢二十五人だ。老若男女を問わぬ詩

の集いに喜々として学ぶ美しさはなんとも、たとえようがない。コロニア柳界名物の白頭わかめ御夫妻にあやかるとおしどり柳人も続々誕生、夢岳と光女、振風と輝女、天流とちどりの名コンビは会員羨望の的である。今日も果てし無き川柳未開の曠野に送しき歩を進める同志の健脚を祈って吟社の縮図を意に紹介する。

第一回・コロニア文学賞

受賞 「移植」 川原奈美・作

「コロニア文学賞」は、サンパウロ日本文化協会が、コロニア文学の発展を待望して、本年より設定したものである。全伯の文学関係者中より、作品推薦委員と選考委員を推挙しその選者に俟つて、年間に現われたコロニア優秀作品に賞（正賞記念品、副賞五百新クルゼイロス）を授与するという制度である。

本年第一回コロニア文学賞は、「コロニア文学」第二号から第四号まで連載された、川原奈美氏の力作「移植」に授与された。

川原氏（本名河島静乃）は、プ・プルデンテ市在住、河島学園を経営して、長く子弟教育に携っている。同氏はコロニア文学界の十年選手で、余技として文筆に親しみ、これまで何度か、パウリスタ文学賞、農協文学賞にも応募している。しかし、いつも、入

賞すれすれ選外佳作の線を彷徨して来た。このたび、永年積み重ねて来た努力と修練がはじめてむくいられたわけである。

「移植」第一回が、コロニア文学に掲載されて間もなく、所用で出聖した川原氏は編集部を訪れ、作品掲載の喜びを語った。

「今度こそ、今度こそと、書いて来たが、いつも落選でがっかりしていました。今度、コロニア文学に投稿して、それも落選なら、もう、筆を折る積りでした。ところが、載せて頂いたので、やっと元気を取り戻しました。」

捲土重来、二回、三回と書き進め、完結に漕ぎつけた。それを待っていたかのように、今度は、コロニア最高の文学賞が、その上を飾ったのである。

六月十八日、コロニア六十年を記念する移民の日に、文化センター大サロンで挙行された移民祭式典の一部として授与式は盛大に行なわれた。コロニア各界首脳者をはじめ満堂の出席者から祝福の拍手をうけ、川原氏は感激に頬を紅潮させながら、受賞した。

その後、編集部を訪れた川原氏は、文学会々員諸氏への感謝のことばを述べ、

「このたびは、諸先輩をさしおいて、拙い私の作品が賞をうけ、恐縮しております。まるで夢のようです。文協事務局から電話で受賞の通知を受けた時は、信じられない気持で、何度も問い直したくらいでした。」

と、その喜びを素直に語った。そして今後益々努力して、文学と取り組む決意をあらたにし、帰省の途についた。

第13回

パウリスタ文学賞

作品募集

- 一、短篇、四百字詰原稿用紙三十枚以内。
- 一、素材をブラジルに求めたもの。
- 一、締切り〓一九六八年八月末日。
- 一、筆名は自由だが、本名、住所を明記、(別紙に略歴を添えること)。
- 一、賞金〓追って発表。
- 一、選者〓古野菊生、尾関興之助、武本由夫、木村義臣。
- 一、発表〓一九六九年、パウリスタ年鑑。

以上の規定上より、文学賞作品を募ります。ふるって、応募ください。

パウリスタ新聞社

『コロナ文学』

作品募集

左によつて、本会々員より作品を募集します。

一、小説①百枚内外、

②三十枚内外、

③翻訳物、三十枚内外、

二、評論 文学、美術、学術、社会、三十枚内外、

三、随筆、紀行、二十枚内外、

四、韻文 ①詩（訳詩）一人二篇以内、

②短歌、十首以内、③俳句、

十句以内、④川柳、十句以内、

五、短文（生活文、地方通信）五枚内外、

六、特別募集 ①私の終戦、二十枚内外、②コロノ時代の思い出、二十

枚内外、③わがムダンサ物語、二十枚内外、④わが住む町（村）を語る、二十枚内外、

規定

一、必ず原稿用紙（20×20）を使用。

二、筆名を用いるのはさしつかえないが、原稿末尾に、本名、連絡先を明記してください。

三、掲載作品には、本会々計の許す範囲内で稿料を出します。

四、保留小説作品には、原稿用紙一綴り（百枚）をさしあげます。

五、第八号の選考委員、島木史生、清谷益次、増田恒河
六、原稿不切、

第九号、一九六八年八月末日

七、投稿宛先、

Colonia Bungaku Kai

Rua Saõ Joaquim, 381

Saõ Paulo.

「コロニア文学会」

新入会員名簿（ABC順）

一九六八年四月～六月

A…安倍昇、会田尚一、網野弥太郎

E…江藤政太

H…原田竹之助、星野典子

I…石川芳園、井川李子、飯田益功、

石山白頭、池田鉄市、池田昌司、

岩渕静子、伊東満智子

K…紺野幸水、加藤綱夫、国兼たつ子、黒田貞徳

M…宮本邦弘、丸藤義成、丸木清太、宮島靖彦、松本勇

N…西功

O…大沢道生、小野ふき子、大石武司、荻野一巳

S…桜井正巳、未岡芳三、斉藤武雄、佐藤三郎、未藤弥寿太、塩沢

潔、山藤伝、鈴木里子、清水そとえ、春原武毅

T…寺尾豊

W…和田周一郎

後記

◆五月、会費滞納会員に、納入をお急ぎくださるよう、お願いの手紙をさしあげました。積極的に御納入くださる方も段々に在って、何とかやりくりしています。まだ、お納めになっていない会員方は是非お急ぎくださるようお願いします。

◆原稿の集まりは好調で、第八号発行準備にすぐ取り掛かってもいいくらいです。原稿と資金、この均衡がとれた時、本誌は一段と飛躍を示し得ると思います。

◆本号掲載作品選考委員の選后感が載せてありません。今回から、選考会での各委員発言を座談会風に掲載する筈でした。ところが、その選考会の速記録を紛失してしまい、残念ながら掲載できません。紛失と言っても、第七号応募の某作者が六月はじめ速記録ノートの借覧を申し込まれ、編集部としても、秘密にする必要もない内容なので、短期日の約束でお借ししたところ、未だに御返還がなく(当方より連絡不可能の方)このような不始末とは

なったわけ。お貸ししたのが、今となっては、当方の手落ちとなったのでした。会員諸氏に深くおわびします。

◆本誌の発行については、コロナ識者の有形無形の応援を頂いており、感謝しております。会員の一致協力により、一人歩きのできるころまで育てたいと思います。

◆コロナ有数の商社から広告を頂いております。未だ発行は広告費に恃むところも大きいので、その御厚意に深く感謝しております。今後ともよろしくお願い致します。（武本生）

コロナア文学第七号

発行一九六八年七月（会員へ無料配布）

編集人 コロナア文学会編集委員会 代表 鈴木 悌一

発行所 サンパウロ市 サンジョアキン街三八一番 日本文化センター内コロナア文学会 Gremio Literario【Clonionia】Rua Sao Joaquim, 381. S. Paulo Tel. 36-5212

印刷所 パウリスタ印刷株式会社 オスカル・シントラ・ゴルジーニョ街四六番